47477
付百

板付周辺遺跡調査報告書

(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

1975
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集

1975
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書(12) 正誤表

ページ	行	誤	正
7	下から8	松田孝之	松田孝之,川畑淳二,千葉胤
37	6	研磨ある	研磨がある
45	6	II期	2期
〃	〃	ナイフ石器	ナイフ形石器
48	4	第4号墓穴(第10図,PL. V-6)	(PL. V-6を除く)
66	10	弥生時代中期	弥生時代後期
76	19	大型	大形
85	10	右橈骨	右橈骨
86	20	橈骨	橈骨
95	1	(第53図)	(第53図, PL.V-6)
101	下から4	(第57図)	(第57図, PL.IV-3)
105	7	(第58図,第59図)	(第58図,第59図, PL.IV-2)
107	23	(第60図)	(第60図, PL.IV-2)
109	8	(第61図)	(第61図, PL.IV-4)
111	第8表12	大字本村	大字本村
〃	〃 13/14	備考欄に「西合志町教育委員会調査」を入れる	
PL.V	タイトル	4:17号, 6:4号(以上弥生時代), 5:38号, 7:23号	4:17号(以上弥生時代), 6:4号, 5:38号, 7:23号

NO.47477

序　　文

近年、福岡市における土地開発の急速な進行は、板付遺跡周辺においても例外ではあり得ません。

福岡市教育委員会では、昭和48年度から国庫補助事業により、板付遺跡周辺の土地開発に伴う緊急調査を実施し、記録保存に努めております。

本年度は、先土器時代から弥生時代さらに中世に至る生活址・墓地の調査を実施し、朝鮮無文土器・貝輪の検出等多くの成果をあげることができました。これも、関係者各位の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものと考え、深甚の敬意を表するものであります。

本報告書がより多くの方々にご活用いただけることを願ってやみません。

昭和50年３月

福岡市教育委員会

教育長　　古村澄一

本　文　目　次

序　本年度調査地と調査経過……（後藤　直）……7
第1章　F－9a　地点……（山口譲治）……8
　I　調査概要……8
　II　遺構と遺物……9
　III　まとめ……20
第2章　D・E－9地点……（横山邦継）……21
　I　調査概要……21
　II　遺構と遺物……21
　III　まとめ……37
第3章　諸岡遺跡……39
　I　調査概要……（横山）……39
　II　先土器時代……（山口）……39
　III　縄文時代の遺物……（沢皇臣）……46
　IV　弥生時代の竪穴と出土遺物……（後藤）……46
　V　甕棺墓地……（横山）……72
　VI　甕棺墓出土の人骨と貝輪……（永井昌文）……82
　VII　古墳時代以後の竪穴と出土遺物……（後藤）……87
　VIII　地下式横穴……（横山）…101
　IX　表土層・表採の遺物……（後藤・沢・玉永光洋）…113
　X　まとめ……（横山・山口・後藤）…119
あとがき――周辺遺跡調査の成果と課題……（横山・山口・後藤）…119

図　版　目　次

PL. I　1　F－9a地点西側竪穴群（西から）
　　2　D・E－9地点発掘地全景（西から）
PL. II　F－9a地点、D・E－9地点出土土器
PL. III　1　諸岡遺跡全景航空写真（北から）
　　2　諸岡遺跡遠景（東から）
PL. IV　1　諸岡遺跡とC区全景（東から）
　　2　第3・4号地下式横穴
　　3　第2号地下式横穴
　　4　第5号地下式横穴
PL. V　諸岡遺跡竪穴
PL. VI　1　諸岡遺跡B区第10号甕棺墓出土状態
　　2　諸岡遺跡第3号竪穴無文土器出土状態
PL. VII　諸岡遺跡出土無文土器

PL. Ⅷ　1　諸岡遺跡出土無文土器口縁部破片
　　2　諸岡遺跡竪穴出土遺物
PL. Ⅸ　　諸岡遺跡出土先土器時代石器
PL. Ⅹ　1　諸岡遺跡B区第2号甕棺墓貝輪着装人骨出土状況（北東から）
　　2　第2号甕棺墓貝輪出土状況

挿　図　目　次

—序—
第1図　緊急調査地点と板付地区の遺跡……6

—第1章—
第1図　F－9a地点遺構分布図……8
第2図　第1号竪穴と出土石器実測図……10
第3図　第1号竪穴出土土器実測図……11
第4図　第2号竪穴と出土土器拓影……12
第5図　第3号竪穴と出土石器実測図……13
第6図　第3号竪穴出土土器実測図……14
第7図　第4号竪穴と出土遺物実測図……15
第8図　第5号竪穴と出土石器実測図……16
第9図　第5号竪穴出土土器実測図(1)……17
第10図　第5号竪穴出土土器実測図(2)……18
第11図　第6号竪穴と出土石器実測図……18
第12図　溝状遺構出土遺物実測図……19
第13図　表土層・表採遺物実測図……19
第14図　表土層出土瓦拓影……20

—第2章—
第1図　D・E－9地点南北土層断面図……21
第2図　D・E－9地点図……22
第3図　D・E－9地点遺構出土状況全測図……23
第4図　第1号竪穴実測図……24
第5図　第2号竪穴実測図……25
第6図　第1・2号竪穴出土土器実測図……26
第7図　木棺墓実測図……27
第8図　溝内出土遺物実測図……27
第9図　第2層出土弥生式土器拓影……29
第10図　第2層出土弥生式土器実測図(1)……30
第11図　第2層出土弥生式土器実測図(2)……31
第12図　第2層出土弥生式土器実測図(3)……32
第13図　第2層出土土師器実測図(1)……33
第14図　第2層出土土師器実測図(2)……34
第15図　第2層出土須恵器・土師質土器・磁器実測図……35
第16図　第2層出土石器・石製品実測図……36
第17図　第2層出土瓦拓影……37

—第3章—
第1図　諸岡遺跡地形実測図（別添）
第2図　諸岡遺跡1973年・74年調査地遺構・トレンチ配置図(別添)
第3図　先土器時代遺物分布図(別添)
第4図　先土器時代石器実測図……40
第5図　表面採集石器実測図……41
第6図　第40号竪穴出土細石核実測図……42
第7図　押型文土器片実測図……46
第8図　第1・2号竪穴実測図……47
第9図　第3号竪穴と出土遺物実測図……49
第10図　第4号竪穴と出土土器実測図……50
第11図　第5号竪穴と出土遺物実測図……51
第12図　第6・7号竪穴実測図……52
第13図　第6号・第7a号竪穴出土遺物実測図……53
第14図　第8号竪穴と出土遺物実測図……54
第15図　第10号・第11号・第13号竪穴と第13号竪穴出土遺物実測図……56
第16図　第14号竪穴実測図……57
第17図　第14号竪穴出土土器実測図……58
第18図　第17号竪穴実測図……60
第19図　第17号竪穴出土遺物実測図……61
第20図　第9号・第19号・第20号・第21号竪穴実測図……63
第21図　第11号・第20号・第21号竪穴出土遺物実測図……64
第22図　第40号竪穴実測図……65
第23図　第40号竪穴出土遺物実測図……66
第24図　第43・44号竪穴実測図……67

第25図　攪乱層・表土層出土無文土器実測図……67
第26図　南朝鮮地域の無文土器……68
第27図　諸岡遺跡B区甕棺墓出土状況実測図……72
第28図　第1・6・8号甕棺墓実測図……73
第29図　第2・3号甕棺墓実測図……74
第30図　第4・7号甕棺墓実測図……75
第31図　第9・10号甕棺墓実測図……76
第32図　第1・6・8号甕棺実測図……77
第33図　甕棺墓地内採集土器実測図……77
第34図　第2・3号甕棺実測図……78
第35図　第4・7号甕棺実測図……79
第36図　第9・10号甕棺実測図……80
第37図　第2号甕棺墓人骨出土状態……83
第38図　第2号甕棺墓No.2貝輪実測図……83
第39図　諸岡遺跡出土貝輪投影図……84
第40図　大形竪穴状遺構実測図……87
第41図　大形竪穴状遺構出土遺物実測図……87
第42図　第12・16・22・24・35・36号竪穴実測図……88
第43図　第16・22・35号竪穴出土遺物実測図……88
第44図　第32・34・38・39・42号竪穴実測図……89
第45図　第32・34・38号竪穴出土遺物実測図……90
第46図　第15・23号竪穴実測図……91
第47図　第18・31号竪穴実測図……92
第48図　第23・31号竪穴出土遺物実測図……93
第49図　第25・26・27号竪穴実測図……93
第50図　第7b・26号竪穴出土遺物実測図……94
第51図　第28・29・30・33・37号竪穴実測図……95
第52図　第28・30・33・37号竪穴出土遺物実測図……96
第53図　第41号竪穴実測図……97
第54図　第41号竪穴出土遺物実測図……98
第55図　柱穴出土遺物実測図……99
第56図　第1号地下式横穴実測図…… 102
第57図　第2号地下式横穴実測図…… 103
第58図　第3号地下式横穴実測図(1)… 104
第59図　第3号地下式横穴実測図(2)… 105
第60図　第4号地下式横穴実測図…… 106
第61図　第5号地下式横穴実測図…… 107
第62図　第6号地下式横穴実測図…… 108
第63図　地下式横穴出土遺物実測図…… 109
第64図　火葬墓と副葬遺物実測図…… 110
第65図　表土層・表採の弥生式土器・石器・把手実測図… 114
第66図　埴輪実測図(B区出土)…… 115
第67図　表土層・表採の須恵器実測図… 116
第68図　表土層・表採の磁器・滑石製品実測図…… 117
第69図　表土層・表採の瓦実測図…… 118

—表　目　次—

第1表　先土器時代出土石器一覧……43
第2表　北部九州主要先土器時代遺跡……44
第3表　弥生時代竪穴出土遺物一覧……70
第4表　B区出土甕棺一覧……80
第5表　諸岡出土貝輪の計測値……82
第6表　古墳時代以後の竪穴出土遺物一覧100
第7表　地下式横穴一覧…… 111
第8表　北部九州の地下式横穴一覧…… 111

—れいげん—

□　本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、1974年度に実施した福岡市博多区板付周辺地区の民間宅地造成・建築にともなう緊急調査報告である。

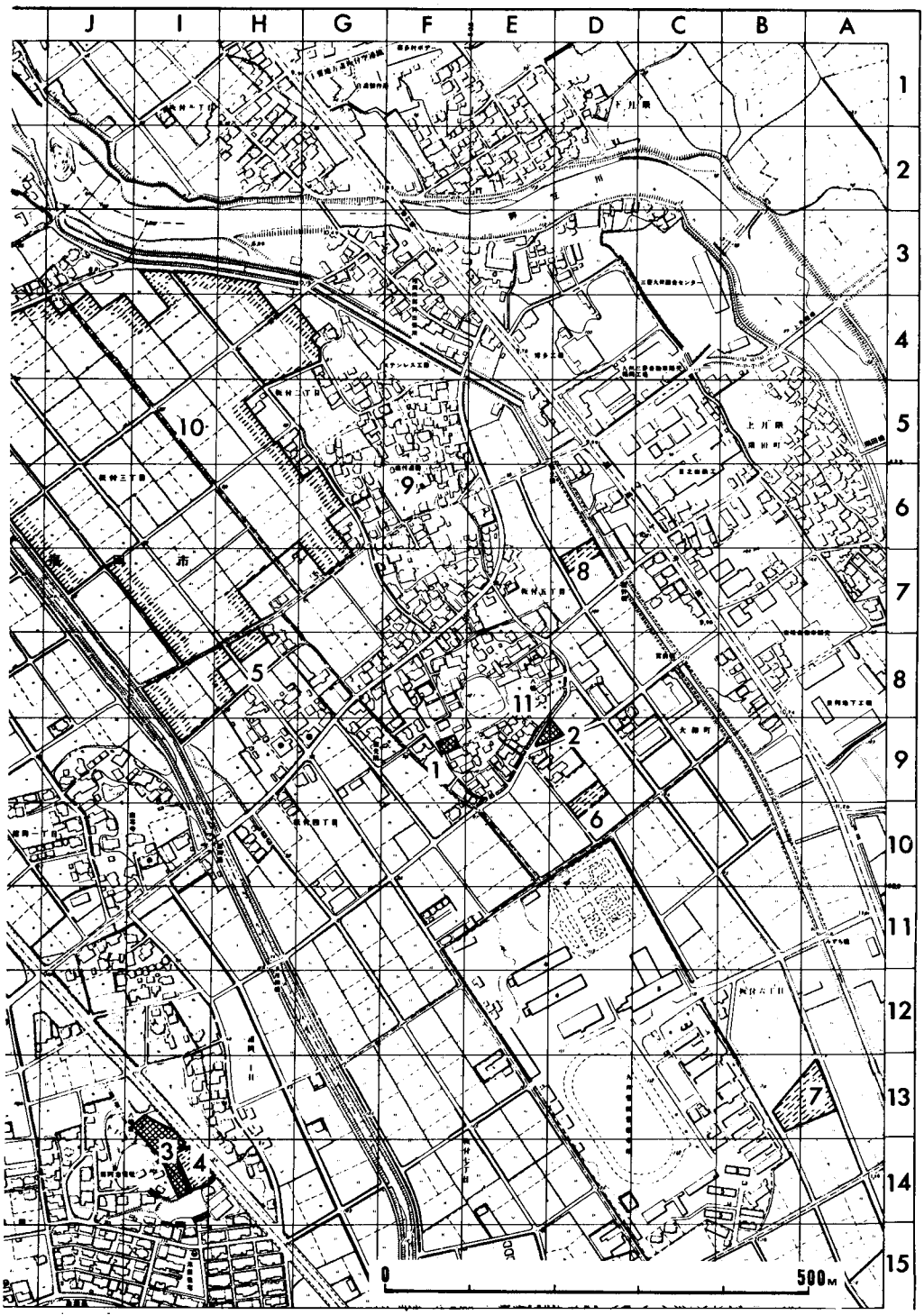
□　調査にあたっては九州産業大学森貞次郎教授、九州大学医学部永井昌文教授の指導助言を得、永井教授と医学部木村幾多郎助手には一部を執筆していただいた。

□　実測図は調査担当者・参加学生により、製図は主に各項目執筆者が当った。

□　写真は、遺構は横山、遺物は後藤が担当した。航空写真は下條信行（福岡市歴史資料館）と山崎純男（福岡市文化課）両氏による。

□　註は、第1・第2章は章末に、第3章は各節末に付す。

□　本報告の執筆分担は本文目次に示した。編集は横山・後藤が行った。



第1図　緊急調査地点と板付地区の遺跡

1. **F—9a地点**　2. **D·E—9地点**　3. **諸岡遺跡**(今年度調査)
4. 諸岡遺跡　5. H—8地点　6. D—9·10地点　7. A·B—13地点　8. D—6·7地点(以上前年度調査)
9. 板付遺跡　10. 板付水田遺跡　11. 板付八幡古墳

序　本年度調査地と調査経過

昨年度にひきつづき、国庫補助事業として、板付周辺地域の緊急調査を実施した。調査はいずれも宅地造成・住宅建設に伴なうもので、次の3ヶ所で行った。

1.F—9a 地点　福岡市博多区板付5丁目7－93·112。中牟田功氏、加峯伊六氏所有地469㎡。発掘面積約 150㎡。

2.D・E—9 地点　博多区板付5丁目10－5。中牟田松茂氏所有地443㎡。発掘面積約100㎡。

3. 諸岡遺跡　博多区諸岡岡ノ前 439・453。池平勝一氏、大和富江氏所有地1847㎡。ほぼ全掘。

F—9a 地点は板付遺跡のある丘陵（板付丘陵）の南端部西側にあたる。D・E－9地点は板付丘陵南端部と沖積層の接するところで、板付八幡古墳のすぐ南である。いずれも板付遺跡の範囲を知る上で重要な地点である。

諸岡遺跡は前年度調査地（A区）に接する西側と北側とで行った。甕棺墓地を予想していたが、それはなく、弥生時代・中世の竪穴が多数あった。また前年同様先土器時代の調査も行なった。この調査中に、丘陵頂部西側の塀造成工事で甕棺墓が出土し、これも調査した。

調査期間は、F－9a地点が5月20日～6月20日、D・E－9地点が6月1日～6月29日、諸岡遺跡が7月1日～9月30日である。

調査を担当したのは福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所で、現場作業は横山邦継・山口譲治が責任者となり、後藤直・沢皇臣が随時手伝った。事務は楢崎幸利・草場九男・安田正義が担当した。

諸岡遺跡の調査に際しては、森貞次郎先生（九州産業大学教授）に種々御指導いただき、永井昌文先生（九大医学部）に人骨・貝輪の取上げに当っていただいた。またD・E－9地点出土木棺材の鑑定は嶋倉巳三郎先生にお願いした。

調査に当っては下記の方々から多くの援助を受けた。記して感謝する（敬称略）。

中原志外顕、亀井勇（春日市中央公民館）、江浜明徳（博多工業高校教諭）

地主：中牟田松茂、中牟田功、加峯伊六、池平勝一、大和富江

調査作業員：大部茂久、屋山利久、広田熊雄、刈茅与八、副島三好、江浜喜久太郎、山浦幾久郎、舎川キチエ、舎川アキ子、野村シマ子、谷口きくの、梶原栄子、中道七々枝、半田フミカ、永松伊都子、岸原松枝、茅島幸子、松尾エミ、吉次トヨ子、中村愛子、松下信子、松田和博、松田要輔、松田孝之

参加学生：堀内真、稲富和裕(以上法政大学)、野尻雄三（東洋大学）、原俊一（福岡大学）、清水聖子（別府大学）、小林義彦、小田雅文、浜石哲也、横尾義明、斉藤裕司、川道寛、梅崎恵司、谷津洋子、松村明子（以上明治大学）、清家博（九大研究生）、東福岡高校史学部生徒

整理作業：木村良子、田辺郁代、島津昭子、山下美智枝、松田伴子、入江昭子、秋根邦子、筑紫敦子、椿智子、玉永光洋、杉本英俊、上村淳一（東洋大学生）、渡部明夫（九大院生）

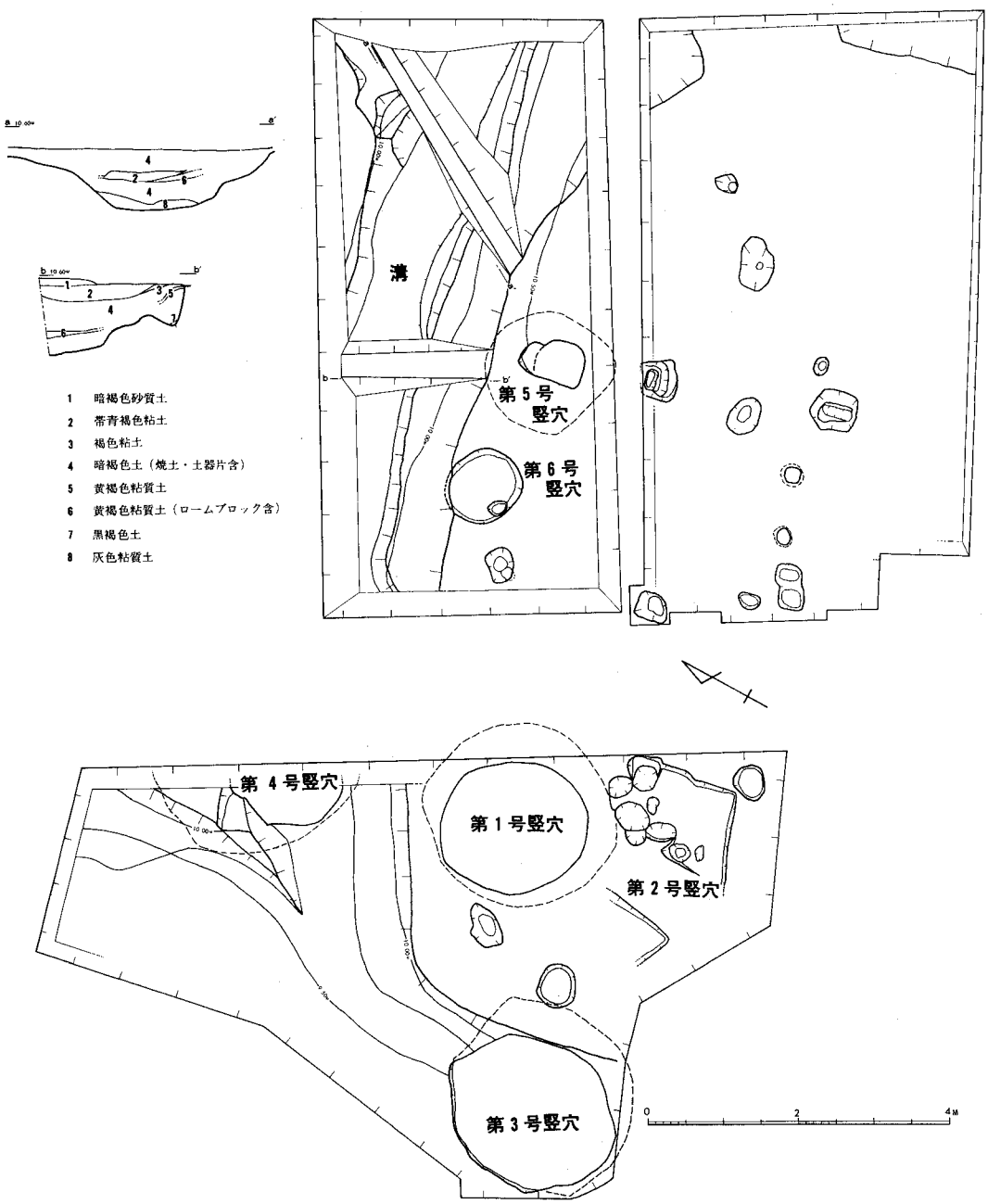
諸岡遺跡航空写真撮影：下條信行、山崎純男（PL. Ⅲ—1）。

矢野健太郎（永住建設）

第１章　F—9a地点

Ⅰ　調査概要

南北に長い板付丘陵は、板付遺跡南側で低くなり、さらに南側で再び高くなり、標高12ｍ強に



第１図　F—9a 地点遺構分布図

なる。　今回調査したのはこの南側高まりの西側である。

西側は、土取りが行なわれた上に、セメントブロック等によって埋められていたので、調査は旧地形が残っている部分を対象とした。また中央に約1.5m幅の道があったので、まず道の西側に台地の傾斜にそって4m、等高線にそって4mのトレンチを設定した。その結果第1号から第3号までの遺構が確認できたので、遺構を完堀するために北側・西側へ拡張した（第1図参照）。道の東側では8m×4mのトレンチを設定し、遺構確認のため南側へ拡張した。今回の調査では、弥生時代前期の袋状竪穴4基、竪穴遺構2基、中世の溝状遺構等が確認できた。遺構は標高10.3mから10.5m上の黄褐色ローム層を堀り込んで作られており、弥生時代の遺構の切り合い関係はないが、第3・4号袋状竪穴・第6号竪穴は溝状遺構に切られている。

その他、柱穴状のピットが確認されたが、住居址は確認できなかった。また表面採集資料中や袋状竪穴中に、弥生時代前期の大型甕の破片があるところから、同時代の墓地の存在も予想されたが、今回の調査では確認できなかった。

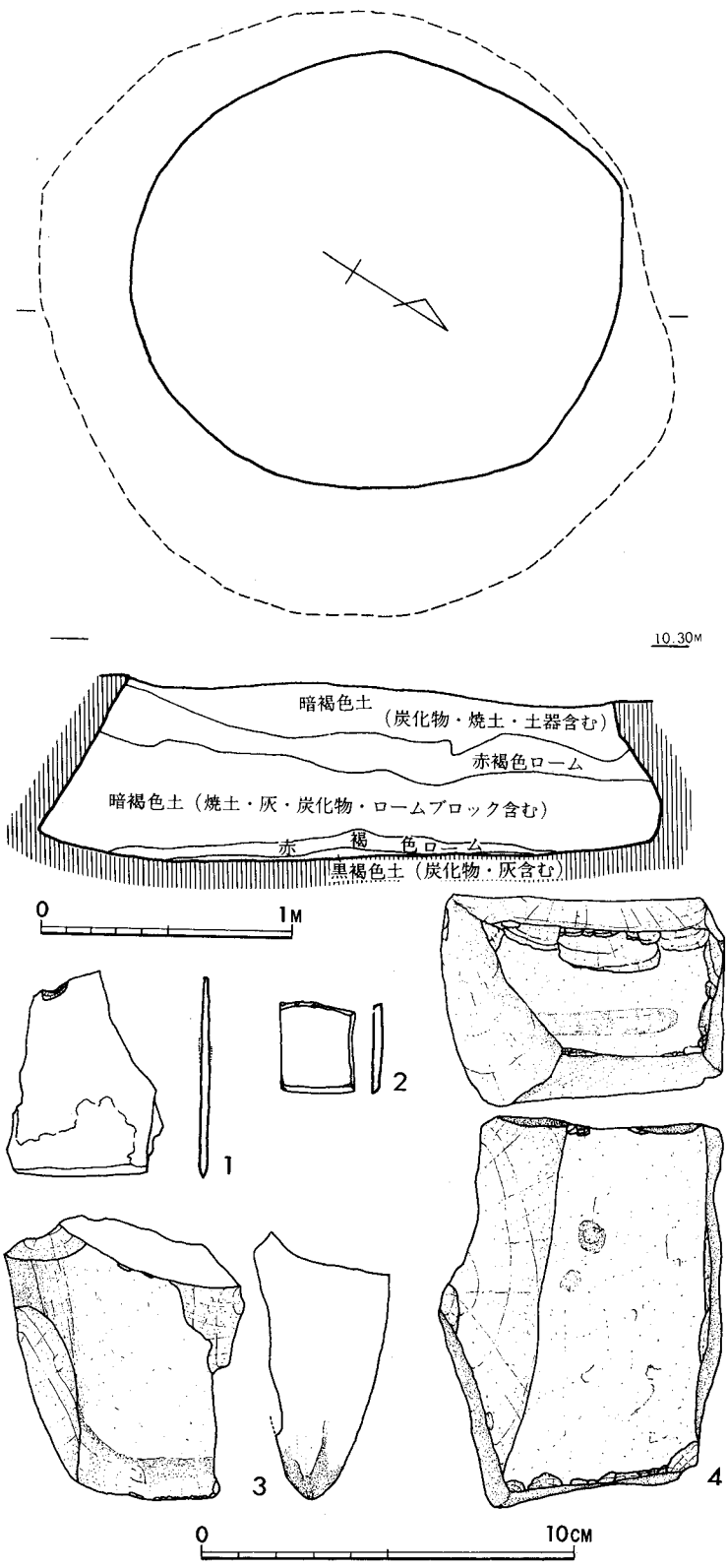
II　遺構と遺物（PL. I—1、PL. II）

1.第1号袋状竪穴（第2図）

底面円形の袋状竪穴で、底面がもっとも広く、上部にいくにしたがってすぼまってくる。入口は耕作などで削り取られているが、下部が残っている。最下部に約10cm、底面より約40cm上の約15cmの厚さをもつ赤褐色ロームのバンド以外から、弥生時代前期末の遺物が多量に出土した。上部の赤褐色ローム層は、同じ厚さをもち、竪穴全体に広がっているが、人為的なものか否かは確認できず、遺物も上下で時期差は認められなかった。2枚の暗褐色土層は、壁の剝落によるロームブロック・焼土塊・炭化物を多量に含んでいる。上部の暗褐色土層（1層）では土師器・須恵器も出土しているが、これは混入と考えられる。最下部褐色土層は灰・炭化物を多く含んでいた。ことに暗褐色土層（3層）・黒褐色土層（5層）からは板付II式の土器が多量に出土しており、この竪穴は、板付II式の時期のものである。

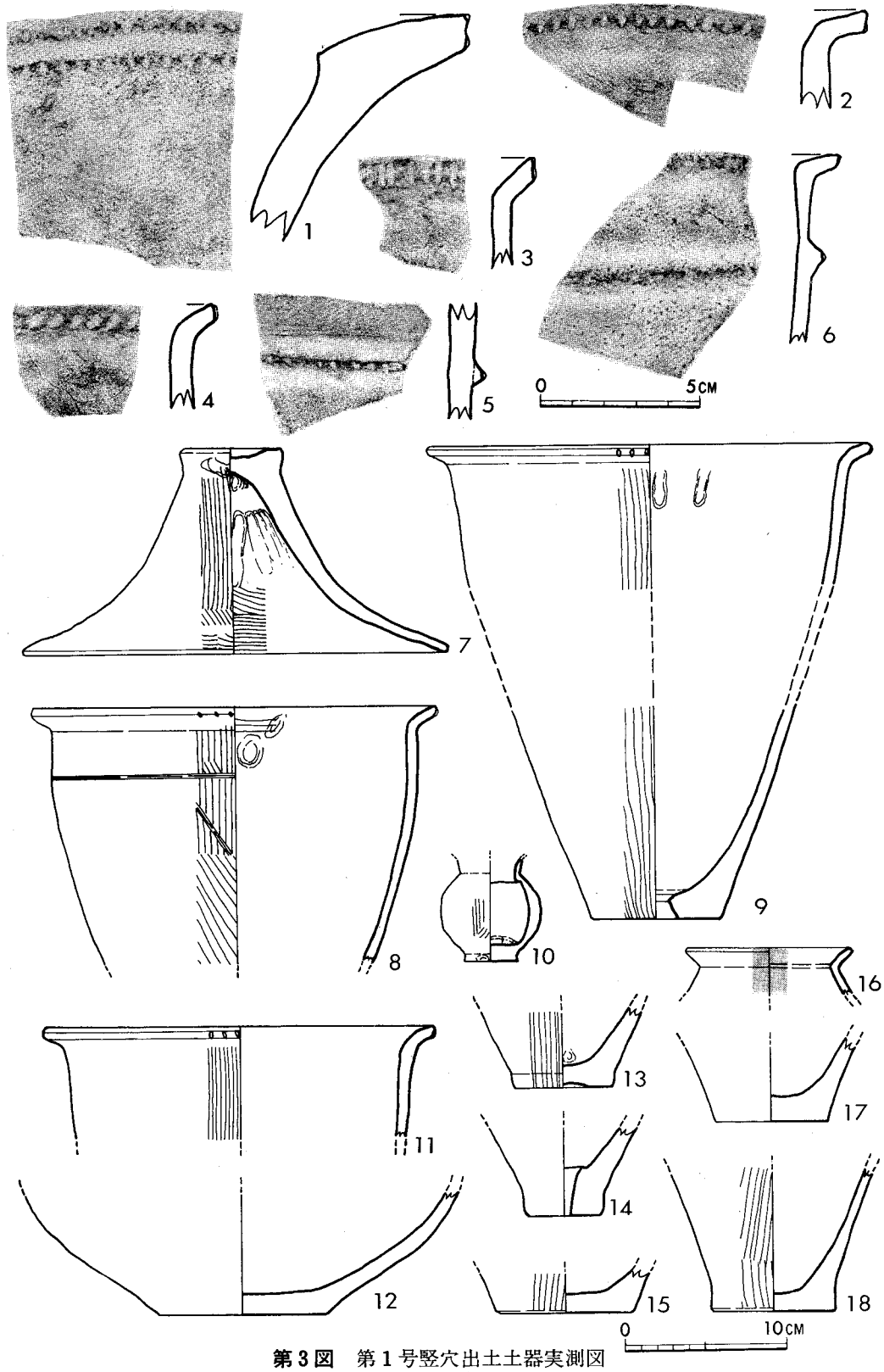
出土遺物　石器（第2図）　1は3層より出土した頁岩製の石庖丁の破片である。両刃であるが、研磨痕は不鮮明であり、紐孔・形態は分らない。石庖丁は同層より他に1個出土している。2は3層より出土した油質頁岩製の扁平片刃石斧である。横断面は長方形を呈しているが、非常に薄く、直線的で鋭い刃部をもっている。3は5層より出土した玄武岩製石斧であるが、今山産のものとは異なる。半分は欠損しているが、蛤刃の刃部をもっている。4は砂岩製の砥石である。この他黒耀石製の剝片石器なども出土している。

土器（第3図）　土器は板付II式の壺形土器が1層から1個体、5層から2個体、甑形土器が1層・5層で各々1個体、甕形土器が1層で2個体、3層で6個体、5層で4個体、蓋形土器が3層から1個体出土した。**壺形土器**（10・12・16）10は5層出土。淡赤褐色を呈し、表面には胴部に不規則な刷毛目が、底部附近には器表内面とも指の痕がみられる小型壺である。12は表面黒褐色を呈する大型壺の底部で、焼成は良好である。16は丹塗りの小型壺の口縁部で、焼成は非常によい。**甕形土器**（1～6・8・11・13・15・17・18）1は5層より出土した表面

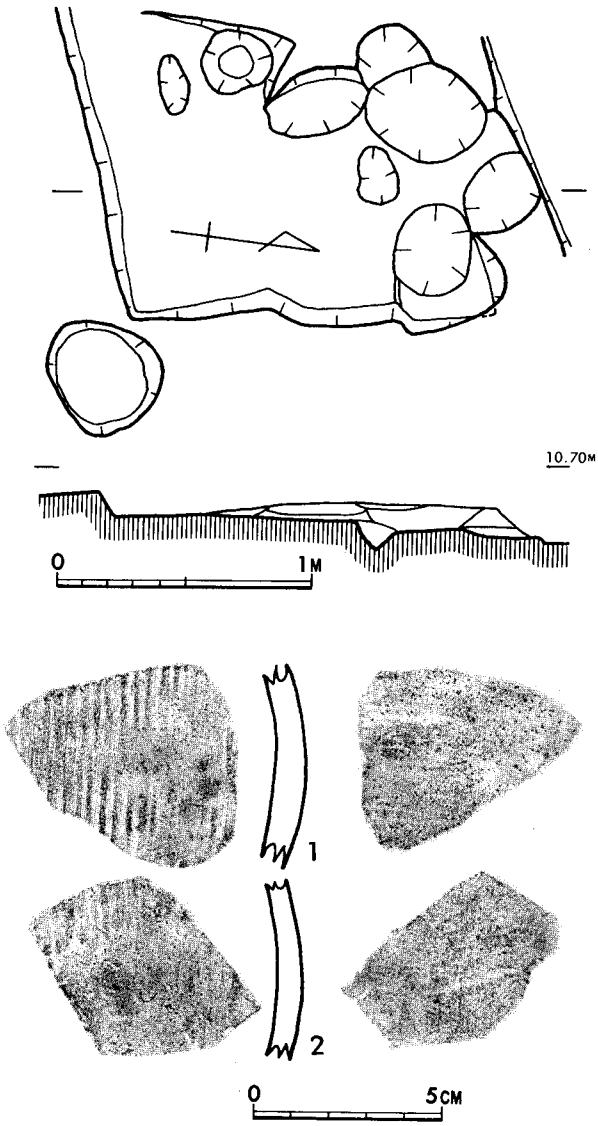


第2図　第1号竪穴と出土石器実測図

赤褐色を呈する大型甕の口縁部である。外反する口縁端には上下2段の刻目があり、胎土には多くの石英粒を含み、焼成はあまりよくない。またこの土器は、第4号袋状竪穴出土のものとは同一個体である。**8**は3層より出土し、表面は褐色から灰褐色を呈している。口縁部は外反し口縁下端には刻目がつけられている。口縁直下には沈線がめぐらされており、胴部には刷毛目が不規則に施されているが、所によっては縦の刷毛目が整然としている。この土器も第4号袋状竪穴出土のものと同一個体で、焼成のあまりよくない甕である。**6**は1層から、**2・5・11**は3層から、**3・4・13・15・17・18**は5層から出土した。**6**は褐色を呈し、外反する口縁端には刻目が施されて、口縁直下には刻目突帯がまわる。**2**は黒褐色は呈し、外反する口縁下端に刻目が施される。**11**は表面赤褐色ないし淡褐色を呈する口縁部で、口縁直下から細かい縦の刷毛目調整を施す。**3・4**は褐色を呈する口縁部である。**13・15・17・18**は底部で、13が若干上げ底である他は平底である。



第3図　第1号竪穴出土土器実測図



第4図　第2号竪穴と出土土器拓影

飯形土器（9・14）　5 層より出土し、表面は上部が暗灰色を、下部が褐色を呈する。口縁は外反し下端には刻目が施され、胴部は縦の刷毛目が整然と施されており、底部は焼成後穿孔している。**蓋形土器**（7）　3層出土。表面赤褐色を呈し、外面は刷毛目調整が縦・横に施され、内面には指調整がみられる。この土器も1・8と同様、第4号袋状竪穴出土のものと接合した。以上出土した土器は板付II式であり、袋状竪穴はその時期のものである。

2.第2号竪穴（第4図）

深さ約10cmで、削平されているがもともと浅い竪穴遺構である。床面には柱穴とは異なる多数の浅いピットがある。出土遺物としては、甕口縁部と胴部の細片が数点あるのみである。**1・2**とも黒褐色を呈し、叩き目が施され胎土には砂粒が含まれており、焼成はあまり良くない。同一個体と考えられる。この竪穴は住居址の可能性もあり、出土土器から弥生時代終末期のものといえる。

3.第3号袋状竪穴（第5図）

底面不正円形の袋状竪穴で、黄褐色ローム上面から白色粘土層まで切り込んでいる。形態はフラスコ状で、底面がもっとも広く、入口は耕作などによって削り取られ、さらに中世の溝状遺構によって西半分が削られ、西壁は底面より約15cm残っているのみである。遺物はロームブロック混りの褐色粘土をはさんで上・下の黒褐色土層（上は1層・下は3層）より出土した。

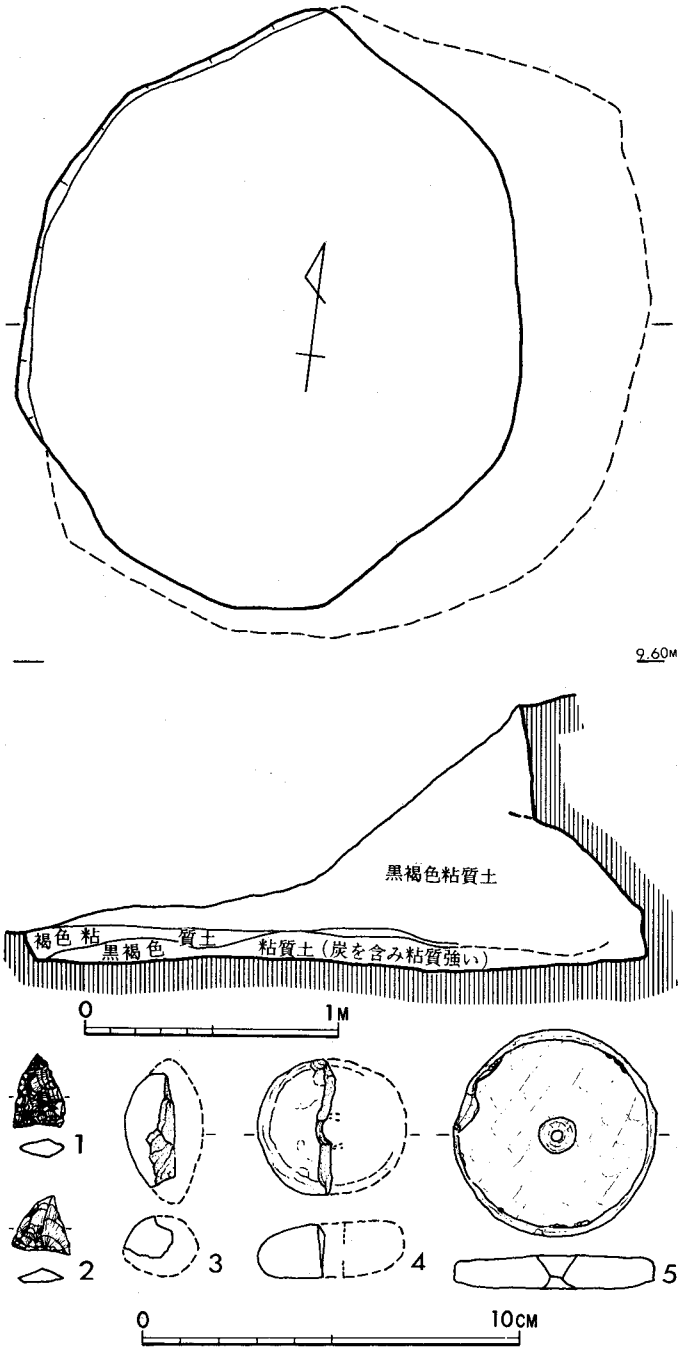
出土遺物（第5図）　**石器**　**1・2**とも黒耀石製の無茎石鏃である。**1**は表裏とも丹念に調整剝離が施され、基部はわずかに彎曲している。**2**は不定形剝片を利用し、基部のみを調整剝離によってつくり、先端は剝片の尖った先端をそのまま利用している。他に石斧破片や砂岩製砥石が出土している。**投弾**（同図**3**）横断面楕円形の土製品で、手ずくねによって砲弾状に形づくっているが、半分欠損している。**紡錘車**（同図**4・5**）**4**は土製で、半分欠損している。**5**は滑石製で穿孔は上下からおこなわれており、周縁は丹念に研磨されている。重量_53.8 g。

土器（**第6図**）壺形土器2個体、甕形土器9個体が出土した。**3**～**5**・**9**・**10**が1層から、他は3層から出土した。**3**・**5**とも壺の肩部に沈線が施されており、表面は黄褐色を呈している。**3**は胎土に石英粒などを多く含み、焼成はあまりよくない。

甕形土器（**1**・**2**・**4**・**6**～**10**）**7**は褐色を呈し、口縁端に刻目がつけられ横なでによって調整されている。口縁の下にも一条の刻目突帯をめぐらし、胴張りである。**8**～**10**はいずれも底部で、**8**・**10**はやや上げ底で、**9**は刷毛目が施されている。**10**は砂粒などを胎土に多く含み、焼成はあまりよくない。以上の出土土器は板付II式であり、この袋状竪穴の時期はその頃である。

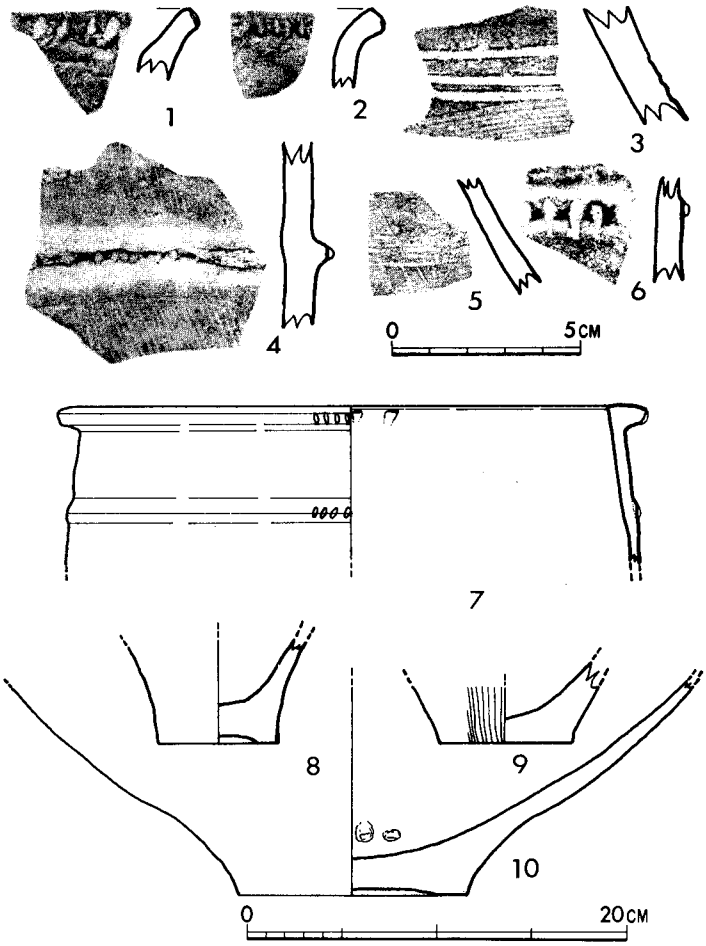
4.第4号袋状竪穴（第7図）

底面円形で、底がもっとも広いフラスコ状の袋状竪穴である。この遺構は黄褐色ロームに切り込んでいるが、南側大半が中世の溝状遺構によって切り取られており、さらに私道があるため西側半分だけを調査した。北側に黒褐色粘質土を覆土とする時期不詳の遺構があり、この遺構は中世の溝状遺構によって切られている。また遺構によって第4号袋状竪穴の入口は削りとられている。



第5図　第3号竪穴と出土石器実測図

出土遺物（第7図）　**石器**（同図**6**～**8**）**6**は硬質砂岩製の外彎刃半月形の石庖丁で、刃部には刃こぼれがみられる。紐孔は欠損している。**7**は黒耀石製の剝片石器で、縁辺には使用痕がみられる。このような石器は他の竪穴でも数点出土している。**8**は砂岩製の砥石と考えられ



第6図　第3号竪穴出土土器実測図

る。断面楕円形で、上下共欠損しているが、全面が研磨され、砥石以外の用途も考えられる。他に、石鏃未製品・石庖丁の破片などが出土している。

土製品（同図5）扁平土製品で、指で整形し、両縁辺より笛の孔のように穿口されているが、貫通している穴としてない穴をもっており、半分は欠損している。使途不明。

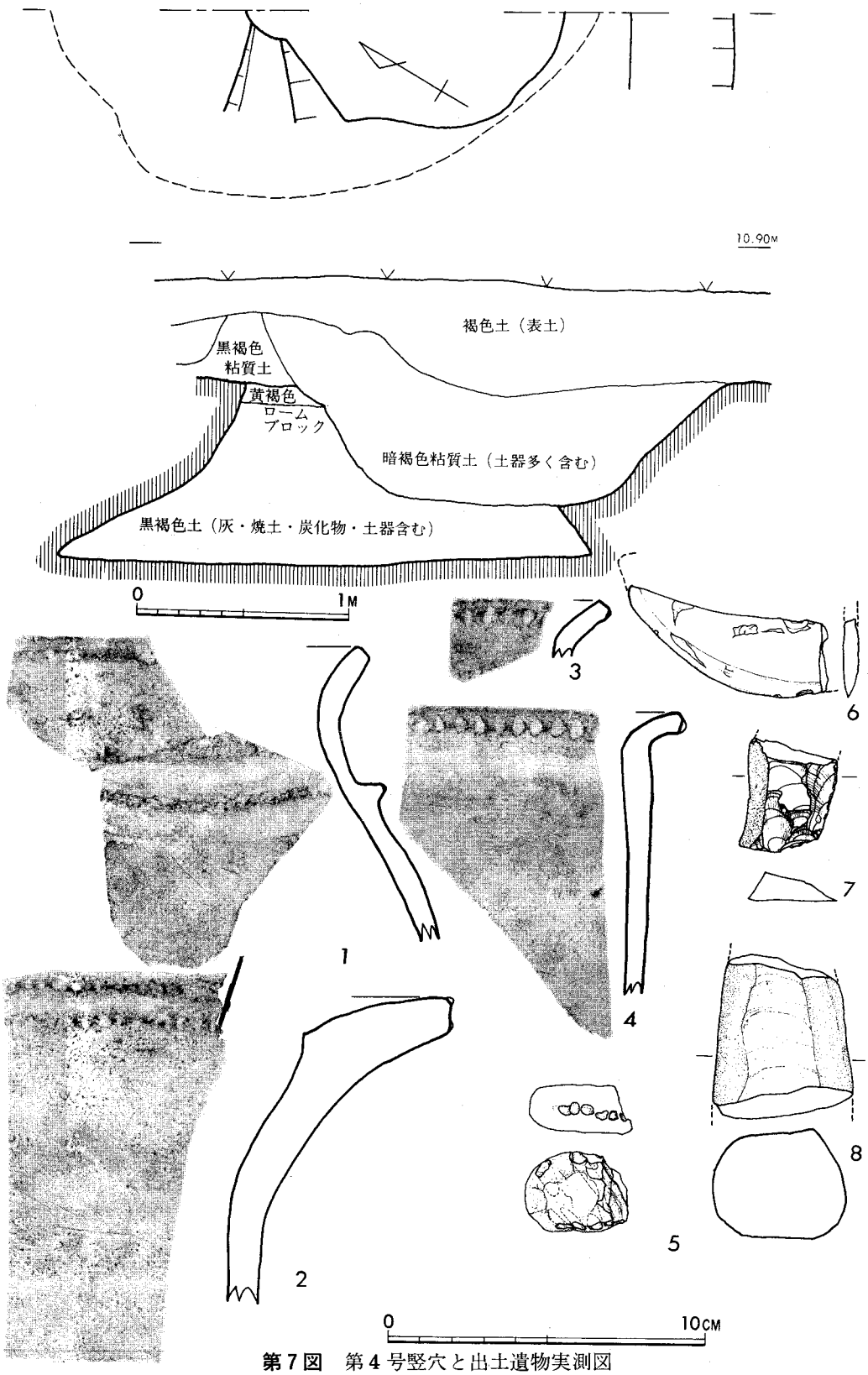
土器（同図1～4）壺形土器2個体、甕形土器4個体、蓋形土器1個体が出土している。**壺形土器**（1）褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまりよくない。外反する短い口縁をもち、頸部に刻目のある細い突帯をめぐらしている。**甕形土器**（2・3・4）2は大形甕の口縁部で、赤褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成もよくない。外反する口縁端には上下2段の刻目が施されている。この土器は第1号袋状竪穴出土土器片と同一個体である。3・4は共に口縁部で、黒褐色を呈し、口縁下端には刻目が施されている。

以上、出土土器は板付II式で、この袋状竪穴は弥生時代前期末のものである。

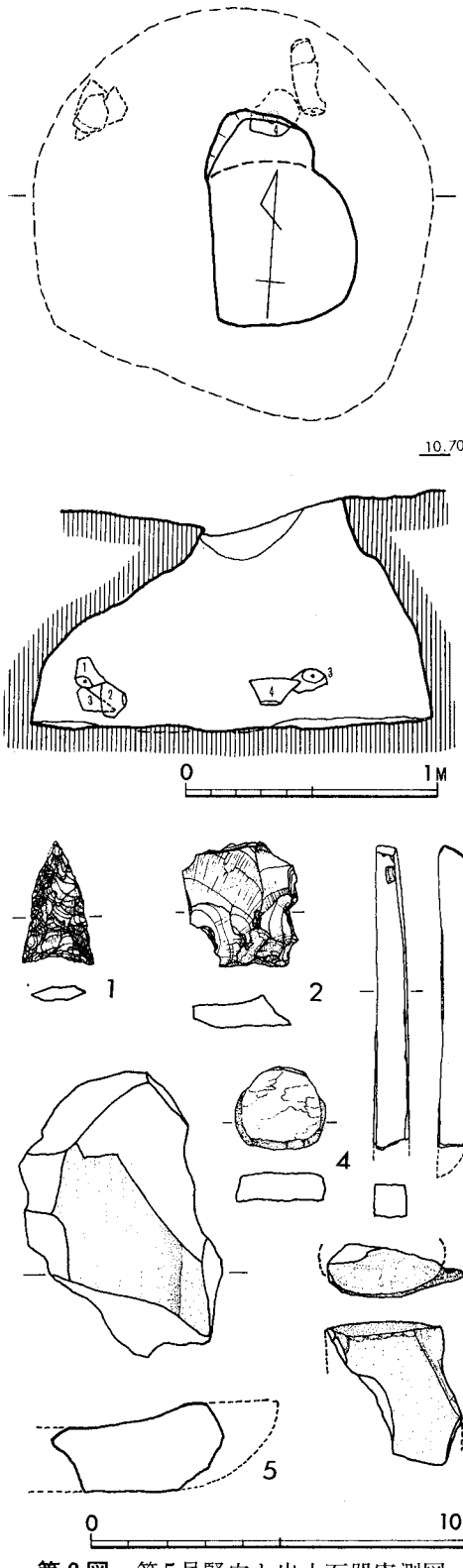
5.第5号袋状竪穴（第8図）

底面不正円形で、底面がもっとも広く、フラスコ状になっている袋状竪穴である。入口は東側にかたよっており、残りは良い。竪穴中には褐色の粘質土が堆積しており、多量の遺物が出土した。ことに底面では4個体の甕形土器がまとまった状態で出土している。

出土遺物　石器（第8図1～6）1は竪穴の上部より出土した黒耀石製の無茎石鏃である。先端部が一部破損しているが、表裏とも丹念に整形調整剝離が行なわれ、基部はわずかに彎曲している。2は黒耀石製の剝片石器で、鋭い縁辺には使用痕がみられる。3は上部で出土したノミ形石器で刃部は欠損している。横断面は方形を呈し丹念に研磨されており、石質は油質頁岩である。4は滑石製で、縁辺が丹念に研磨された扁平石製品である。5・6は砂岩製の砥石



第7図　第4号竪穴と出土遺物実測図

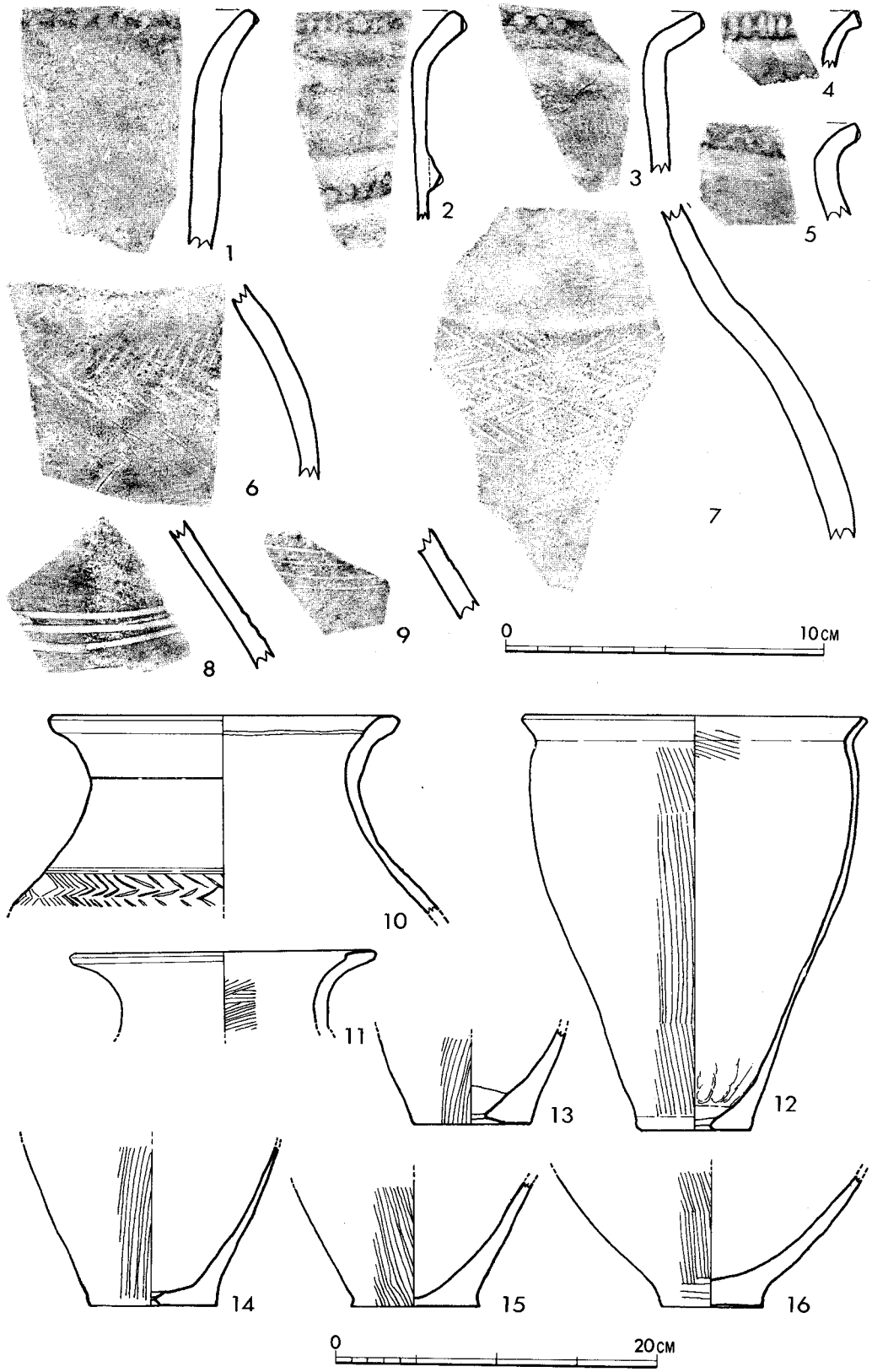


第8図　第5号竪穴と出土石器実測図

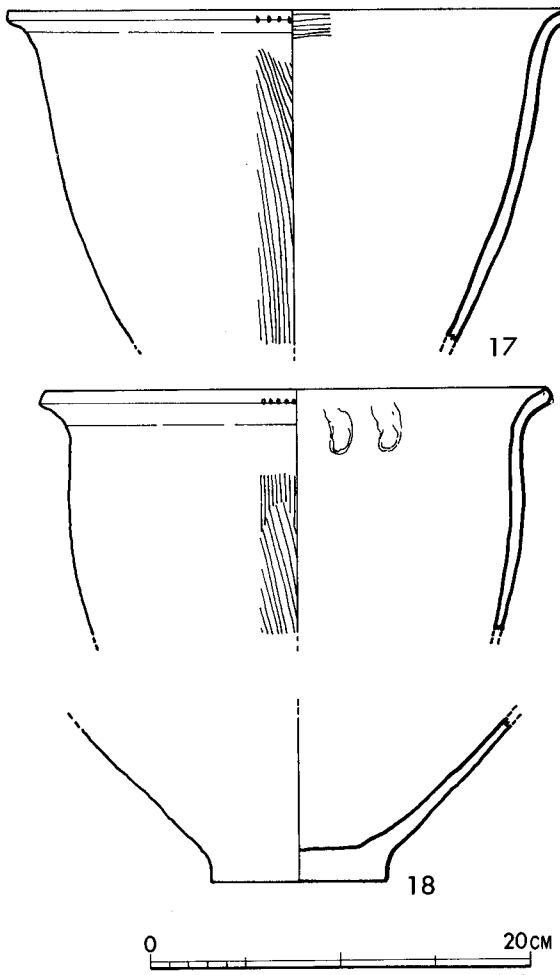
で、5は石皿状に、6は上部に研ぎ面がある。

土器（第9図、第10図）壺形土器6個体、甕形土器6個体、甑形土器3個体が出土した。**壺形土器**（6～11）6・7は上部より出土し、胴部に羽状文が施されている。また表面は各々灰色、黄褐色を呈し、胎土には石英粒を多く含み、焼成はよい。8・9は黄褐色、暗褐色を呈し、焼成はよく、横の沈線文が施されている。以上6～9はいずれも肩部の破片である。10は上部から出土した黄褐色を呈する口縁部である。口縁部は外反し、頸部まで横なでによって整形されており、肩部には羽状文が施されている。11は褐色を呈する口縁部である。

甕形土器（1～5・15～19）2～5・17・18が上部より、他は下部より出土した。16は暗灰色を呈する底部で、焼成はよく、表面には縦の刷毛目が施されており、12の胴部・14とかたまって出土した（第8図第5号袋状竪穴実測図：1は第9図14に、2は16に、3は12に、4は19にあたる）。19は12の底部のそばで出土した。灰色を呈し、焼成はあまりよくない。17は黒褐色を呈する焼成良好の口縁部である。外反する口縁下端には刻目がつけられ、表面は口縁部直下から細かい刷毛目が縦に施されている。18は褐色を呈する口縁部で、外反した口縁下端には刻目がつけられ、口縁直下から縦の細かい刷毛目が施されているが、口縁直下ではその上から横なでされている。さらに、胴下半部はやや粗い刷毛目が施されており、内面には指による器面整形痕がみられる。15は赤褐色を呈する底部で、縦の刷毛目が施されている。1～5の拓影はいずれも口縁部で、4を除いて外反した口縁下端には刻目がつけられており、褐色及び黒褐色を呈し、焼成は良好である。2は上部で出土したものであるが、約50cm下位より出土した4片の口縁部・胴部片と接合し、袋状竪穴のありかたを考える上で興味がもたれる。



第9図　第5号竪穴出土土器実測図(1)



第10図　第5号竪穴出土土器実測図(2)

飯形土器（12～14）13が上部から、他は底面に近いところで出土した。12は胴部が14・16の下から出土し、底部と離れた状態で出土した。黒褐色を呈し、口縁部は外反し、表面には縦の刷毛目が3段施されている。焼成はよいが、下部はややもろくなっており、底部は焼成後穿孔され、内面には指による整形痕がみられる。13～14も焼成後穿孔された底部である。14は12・16とともに出土した。13・14は赤褐色を呈し、縦の刷毛目が施されている。

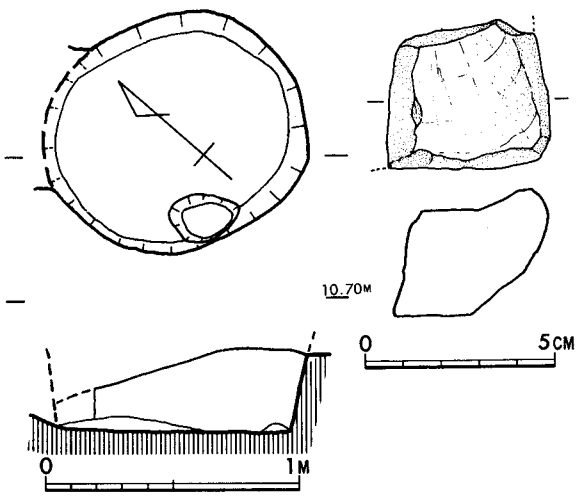
以上の土器はすべて板付II式であり、この袋状竪穴も、第1・3・4号袋状竪穴と同時期、弥生時代前期末のものといえる。

6.第6号竪穴（第11図）

黄褐色ロームを切り込む比較的浅い円形の竪穴である。北西は中世の溝状遺構によって削られ、南西では、柱穴状のピットが竪穴中に掘り込まれている。出土遺物としては、砥石のほか石庖丁の破片、甑の底部と考えられる土器片など数10点の弥生式土器の細片が出土している。この遺構は弥生時代の遺構と考えられる。

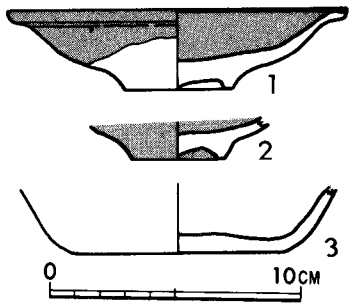
7.溝状遺構（第1図）

黄褐色ロームを掘り込み東西に走る溝で、西側では南へ折れて第3・4号袋状竪穴及び第6号竪穴を削りとっている。堆積土をみると、下から灰色粘質土、土器を多量に含む暗褐色粘質土となり、暗褐色粘質土の中にはロームブロックや青灰色粘土層などがレンズ状に堆積しており、流れ込みによる堆積状態を示している。遺物としては、弥



第11図　第6号竪穴と出土石器実測図

生式土器、中世土師器、磁器などが出土しており、中世の遺構と考えられる。またこの発掘地域は通称『オイ屋敷』と呼ばれており、この地域に屋敷跡があったとも考えられるが、建築遺構は確認できず、古文書も残っていないので、溝状遺構との関係はつかめなかった。



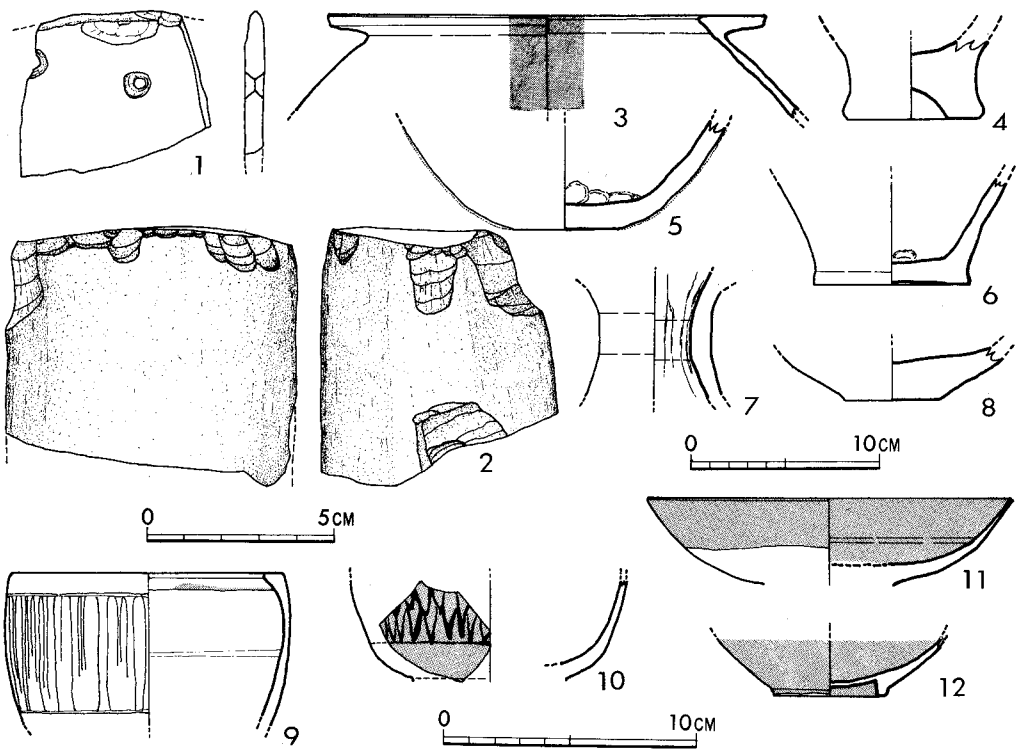
第12図　溝状遺構出土遺物実測図

出土遺物（第12図）　磁器（1・2）1は箆削りの上に、気泡の多い青灰色の釉薬がかけられている杯で、胎土は灰色で、腰より下には箆削りのあとがみられる。2は箆削りのあと暗灰色の釉が表裏ともかけられている塊の底部である。中世土師器（3）灰褐色を呈する杯（塊？）の糸切り底の底部である。

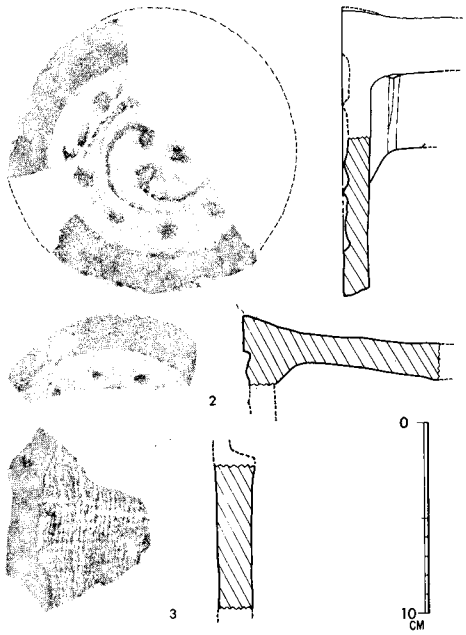
8.表土出土及び表面採集遺物（第13図）

石器（1・2）1は硬質砂岩製の石庖丁片で、表裏より穿孔した紐孔をもっている。刃部は破損しており、形態はわからない。2は今山産の玄武岩製の太形蛤刃石斧の頂部で、表面は打面を除き丹念に研磨されている。

土器（3～8）3は丹塗りの甕の口縁部で焼成は非常によく、弥生時代中期のものである。4は褐色を呈する上げ底の底部で、城ノ越式である。5は褐色を呈する底部で焼成はあまりよくない。第2号竪穴出土の土器と同時期と思われる。6は褐色を呈する甕の底部で焼成はよい。7は器台で明灰色を呈し、内面にはしぼりの跡がみられる。



第13図　表土層・表採遺物実測図



第14図　表土層出土瓦拓影

磁器（9～12）すべて埦で、9は箆削りのあと青白色の釉がかけられており、胎土は透明の白色で焼成はよい。裏面は口縁部に釉がかかっているのみで、すぐ下から箆削りのあとがみられる。10は灰白色の釉がかけられており、腰の上に暗青色で施文されている。胎土は白色で焼成はよい。11は箆削りのあと灰白色の釉が、表面は腰より上部に、内面は全面にかけられている。12は箆削りのあと濃青色の釉がかけられている高台をもつ底部である。

他に瓦頭などがある。**(第14図)**

以上のうち、磁器・瓦は溝状遺構の時期のものと考えられる。

III　まとめ

1　板付遺跡の調査は、今まで環溝を中心とする地域で行なわれていた[①]が、板付の南側の台地で弥生時代前期の遺構が確認できたことは、板付遺跡のひろがりを考える上で新たな成果を得た。

2　板付II式の時期の袋状竪穴4基が、切り合い関係なしに確認された。

3　第1・4号袋状竪穴からそれぞれ出土した大型甕・蓋形土器が接合したことは、この地点の袋状竪穴が同時期であることを裏づけた。

4　『オイ屋敷』と通称されているこの地域で、直接の関係は分らなかったが、中世の溝状遺構の確認ができたことは、今後の調査に期待される。なお、この遺跡より南の警察学校遺跡[②]で、礎石・古銭が出土しており、なんらかの関連があるものと思われる。

註

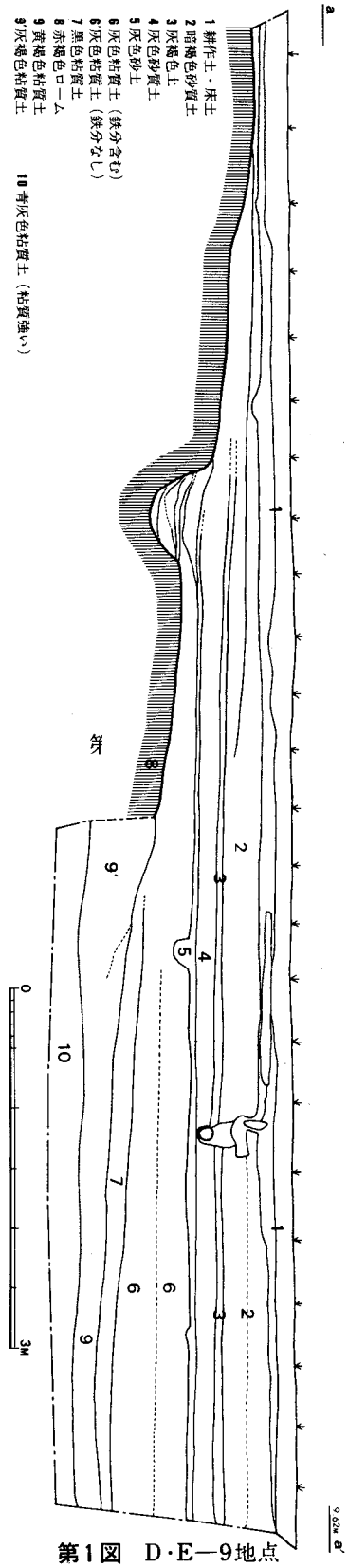
① 森貞次郎、岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』1960年。下條信行編『福岡市板付遺跡調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集　1970年。

② 福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971年

第2章 D・E—9地点

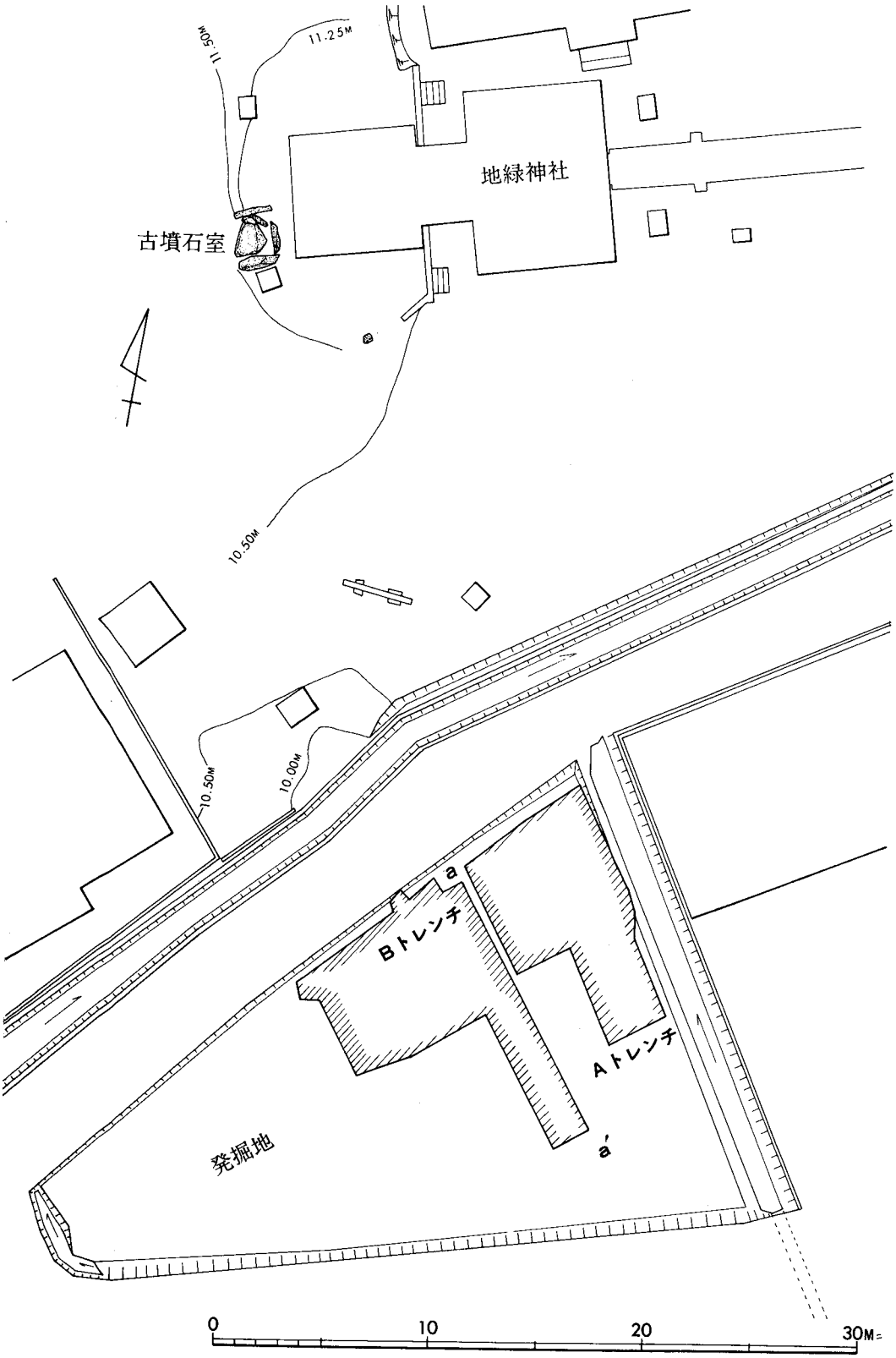
I 調査概要 (PL. I—2)

D・E—9地点は、南北長さ約600m・東西幅200～100m・最高点で12m前後をはかる板付丘陵の南端にあたる。同地点周辺は住宅の増加に従い、蚕食状態となって本来の地形は失なわれつつある。調査は、対象地に木材などの障害物があったため、東隅に5×2.5mのトレンチ2本（A・Bトレンチ）を設定した。Aトレンチでは厚さ40cm内外の耕土をもち、水田面より約2.3m下が青灰色粘土の基盤層となることが知られた。Bトレンチでは厚さ30cm内外の耕土下に赤褐色ローム（鳥栖ローム）層がみられ、南へ漸次下っており、丘陵末端の一部であろうと考えられたため、東・西・南方向に拡張を行なった。Bトレンチの東壁側は南に2m×8m延長し、土層断面図を作成した（第1図）。その結果両トレンチでは第2層にあたる暗褐色砂質土層がいずれも厚い水平な遺物包含層となっており、弥生式土器・須恵器・土師器・石器・磁器・瓦など弥生時代から中世にわたる長期間の遺物が混在した。遺物の中では量的に弥生式中期土器・土師器が最も多く、包含層は丘陵端より遠くなるに従って薄く、土層図南端部分ではほぼ消滅する。第8層のローム土は、ゆるやかに下降し、Bトレンチ西壁の北から約6.5m（標高8m）付近で不明瞭となり消滅する。第6～9層は埴土～埴壌土からなる緻密で粘りのある土壌となっており、過去の緩かな堆積状態が知られる。遺構は、木棺墓・小溝・土師器の入った小竪穴2個が検出された。木棺墓は第2層堆積前に営まれており、弥生時代の所産とされるであろう。小溝は下底に円盤形紡錘車・投弾・打製石鏃が出土し、弥生時代前期に位置づけられよう。小竪穴のうち1号は甕形土器2個・小型丸底壺2個のセットに敲石2個。また2号は、前記の小溝を切っており、内部に高杯1～2個体・小形丸底壺1個をもち、いずれも破損している。これらは古墳時代（5世紀代）の祭祀遺構と考えられよう。以下個別の遺構について説明を加える。

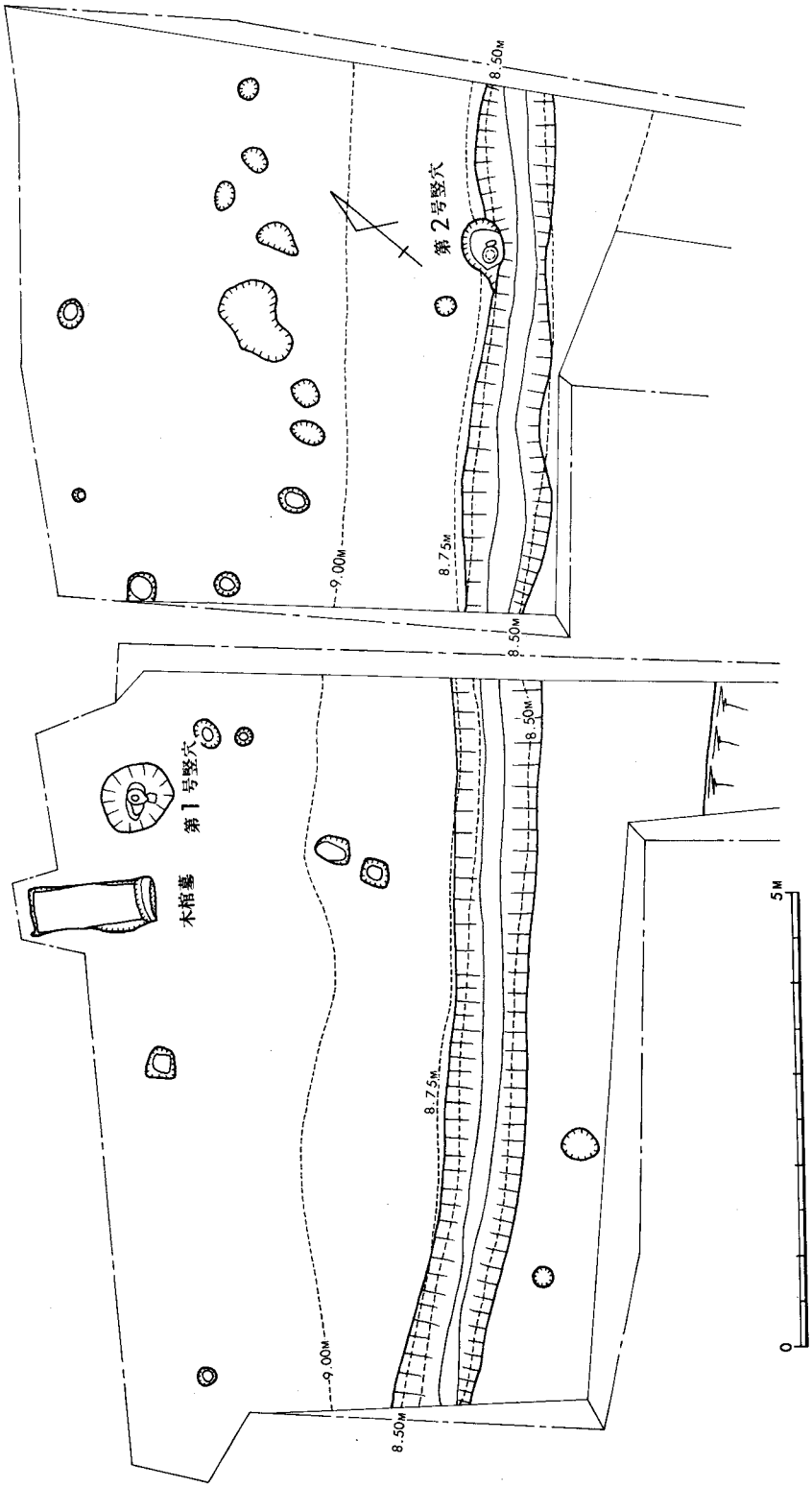


第1図 D・E—9地点
南北土層断面図

II 遺構と遺物


11.50M
11.25M
地緑神社
古墳石室
10.50M
10.50M
10.00M
a
Bトレンチ
Aトレンチ
a'
発掘地
0
10
20
30M

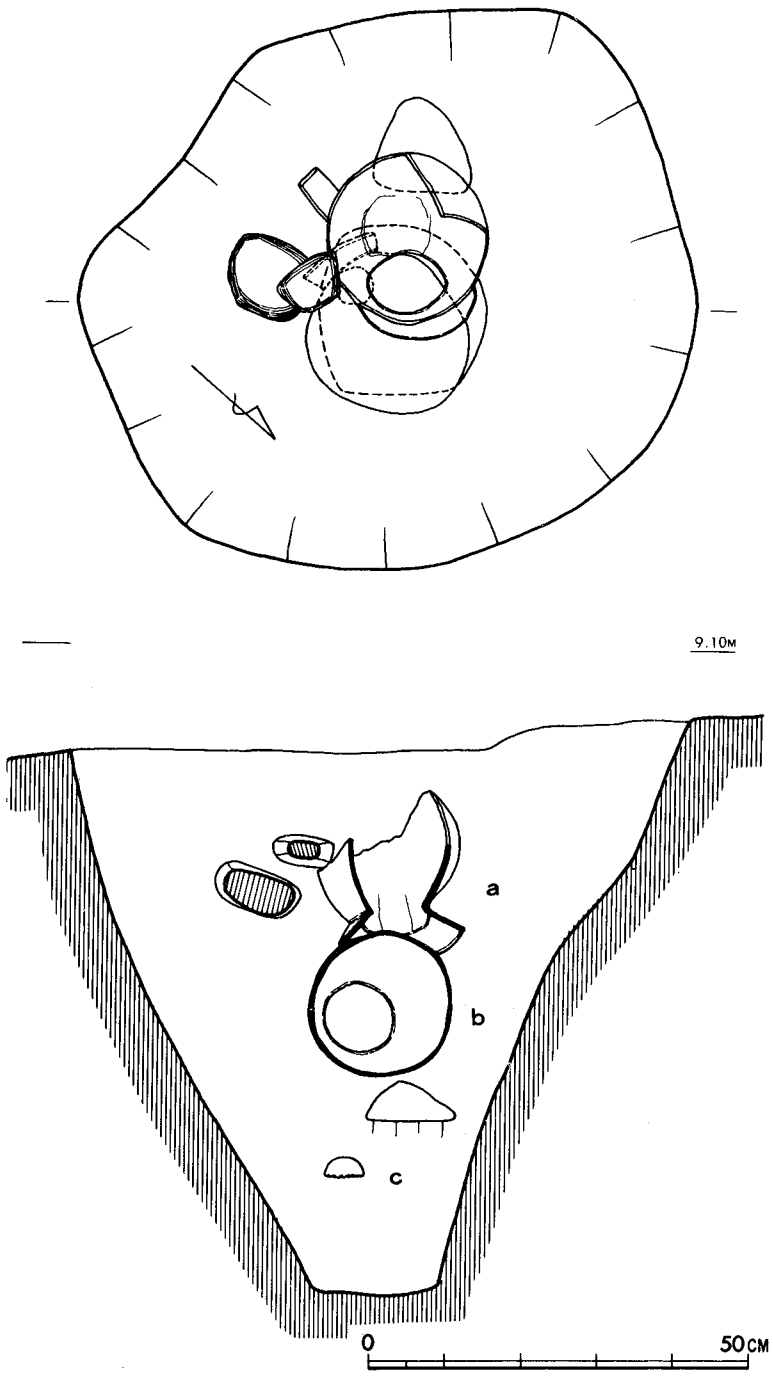
第2図　D・E－9地点図



第3図　D・E—9地点遺構出土状況全測図

1　第1号竪穴（第4図、第6図、PL.II）

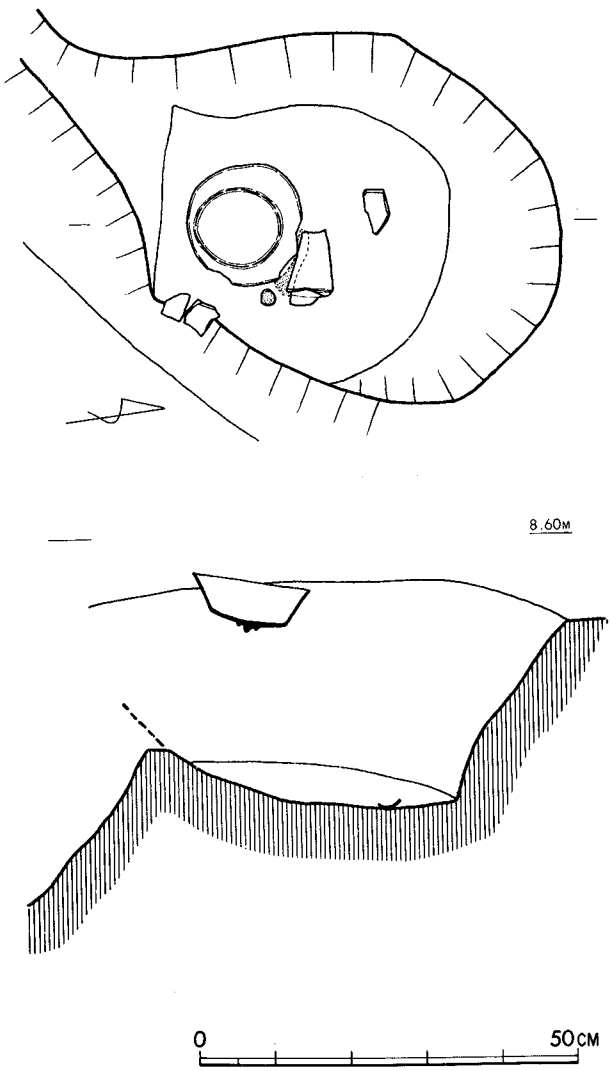
1号竪穴はBトレンチの北隅に検出された。竪穴内に土師器甕形土器2個、小型丸底壺2個、敲石2個が入っているものである。竪穴は上端部がやや削平されているが、現状は約80×70mの不整円形で、底径約20cm、深さ約70cmの規模をもつ。竪穴には底面近くに小さい棚状部分がみられる。遺物は竪穴を埋める黒色粘質土内で出土した。底面から15cm程度上に胴部上半打欠きの小型丸底壺（第4図c）が底部を上にして出土し、さらに30cmほど上のほぼ中位に甕形土器が2個積重なり（同図a・b）上の甕は口縁を下にして、底部打欠き、下の甕は口縁を横にしてその一部を欠く。これと近接して大小2個の敲石（大形―砂岩、小形―花崗岩円礫）がある。他に小型丸底壺1個が底部と口縁の一部を打欠き、甕形土器より上部に出土した。



第4図　第1号竪穴実測図

出土遺物（第6図） 1は竪穴上部出土の小型丸底壺である。口縁はゆるく外反し、しまった頸部から小さい肩を作って、胴はほとんど膨らみを持たない。外面は淡い灰褐色、内面は灰色～灰黒色を呈し、両面ともに器面の荒れがはなはだしい。口縁部内外面は横なで調整。胴部内

面は指による調整痕をのこす。胎土中に砂粒を含み、焼成は不良で軟質、口径6.6cm・推定器高6.2cm。2は竪穴下部出土。胴部上半を打欠いているが、それほど張らない。器色は、外面赤褐色～淡い灰褐色、内面灰黒色を呈し、器表の荒れがはなはだしい。内面は、底部にかけて指調整を施し、その後をなでている。器表はなでか。胎土に砂粒の混入多く、焼成不良で軟質である。3は竪穴中の甕のうち下の甕にあたる。口縁部はややふくらみをもってゆるく外反しており、頸部は短く立ち気味となり、この部分で器厚を増し、球形の胴へつながる。器色は内外面とも淡褐色～灰褐色を呈し、器面は若干荒れている。外面は胴部中位では斜位あるいは横位の刷毛目が残り、下半ではなでの様に細い刷毛が底部から上方に向い、縦に施す。また上半部の頸部～口縁部にかけては横なでで、胴中位の調整が先行する。口縁内面は刷毛調整後に横なで。胴内面はななめ上方向の箆削りであり、底部では指おさえ後に削られる。外面の頸部以下に煤付着。胎土にはやや多くの砂粒を含み、焼成不良で軟質である。口径14.8cm・器高21.9cm。4は竪穴中の甕のうち上の甕にあたる。打欠きで底部の一部を欠損。胴部は中位が最大となり、口にむかってすぼまり、ゆるやかに外反する口縁が口唇の近くで細かく外側に折れる端正な甕である。器色は内外面ともに淡い灰褐色を呈し、口縁部内外面および胴外面は磨滅がいちじるしい。外面は1cmあたり約6本程度の斜位の刷毛調整。口縁内外面は横なでであり、頸部内面は横なで後に縦のなでがみられる。胴部外面は箆削り。胎土中にやや大きめの砂粒を含み、焼成は不良で軟質である。口径16.6cm・推定器高25.3cm。



第5図　第2号竪穴実測図

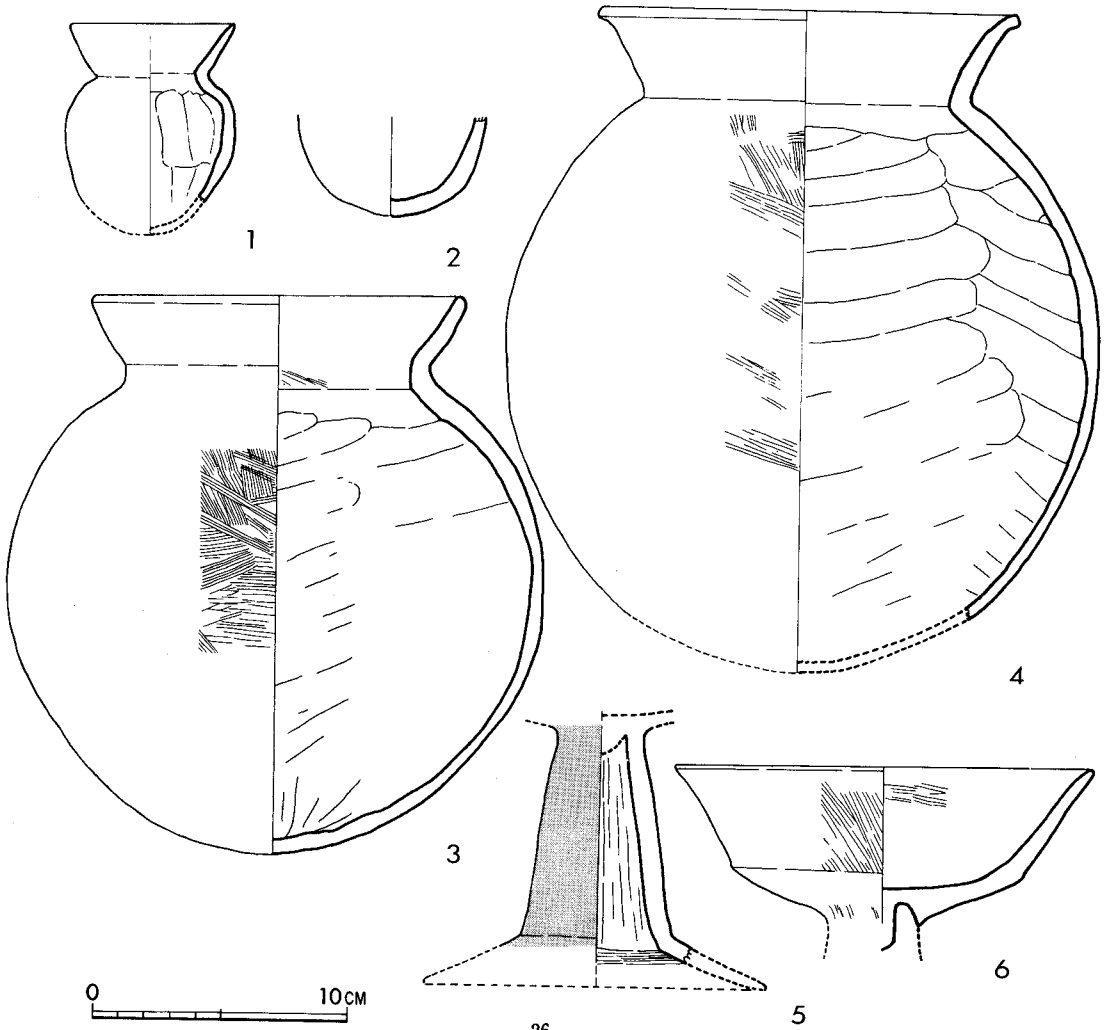
2　第2号竪穴（第5図・第6図）

2号竪穴はBトレンチの東拡張部に検出された。前記のように溝遺構を切って営まれており、南側壁の立あがりはつかめなかった。約45cm×60cmの長楕円形で、深さ30cm以上。第1号の約7m東側に位置し、その上面比高差は60cm前後である。竪穴内では、底面に接して底部のみを残す小型丸底壺破片、杯部および脚裾

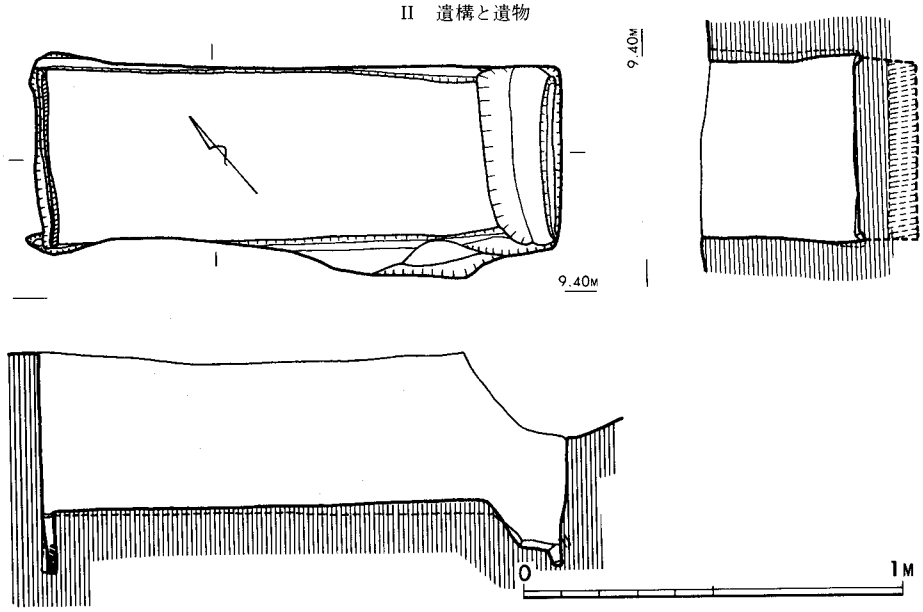
を欠損する高坏脚、小円礫（花崗岩）各1個が出土しており、青灰色粘土の小塊も同時に見出された。また底面から約20cm浮いて脚部を欠損する高坏坏部が1点出土したが、前のものとは同一個体でない。竪穴の上部層では多くの小型丸底壺等が見出されており、高坏2個以上、小型丸底壺数個のセットが考えられる。

出土遺物（第6図5・6） 5は底面出土の高坏脚部である。内外面ともに淡い灰褐色を呈し、上部がしまり、ゆるやかな膨らみをもつ脚となる。外面はなでによる調整と思われ、丹塗りで磨滅がはげしい。内面は篦削りで、裾にかかる部分に横位の刷毛調整。胎土は少量の砂粒を含み、焼成不良。5は竪穴上部で出土した高坏坏部である。坏は浅くひらいた口縁とへそ状に突出した底部をもつ。内外面灰褐色～暗灰色。内外面ともに斜めの刷毛調整後横なで。胎土には砂粒をごく少量含み、焼成不良で軟質。口径16.8cm。

上記両遺構で出土した甕、壺、高坏などは故意の打欠き、破砕などにより容器のもつ機能を破壊されており、甕・壺の二対の組合せ（1号）、丹塗り高坏・壺の組合せ（2号）等のまとまりを示す点から、これを祭祀行為の性格をもつ遺構と考えた。1号出土土器のうち下の甕は体部に煤の付着が厚く、日常雑器からの転用が考えられる点は注目される。遺構の時期は出土



第6図　第1・2号竪穴出土土器実測図
（1～4：1号竪穴、5・6：2号竪穴）



第7図　木棺墓実測図

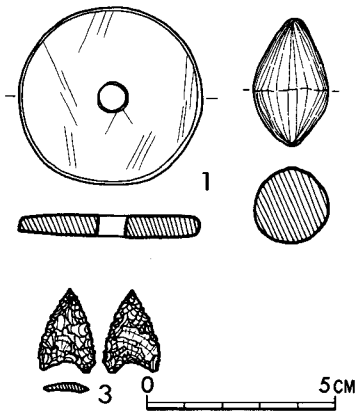
した高坏および甕の特徴から5世紀中頃に位置づけられよう。類似遺構は、板付丘陵の北端で数ヶ所が知られている。①

3　木棺墓（第7図）

木棺墓はBトレンチの北側に長軸をN—50°—Wに向けて検出された。遺構は、外法で130×45cmを計る長方形で、内部には小口板、側板の痕跡がみられる。棺は内法で44×144cmを計り、小口板の下端は両側板の下端より約15cm程度深い。棺材は、殆ど腐蝕して失なわれていたが、北側小口板の一部が遺存していたので、島倉巳三郎先生に鑑定を依頼したところ、クスノキ属に似ているとのことであった。②木棺墓は、上端部をかなり削られていると考えられ、埋土内からは弥生式土器壺底部破片と少量の胴部破片が出土し、他の時代の土器類を含まない。壺底部は退化した円盤状となり褐色を呈し、胎土・焼成とも良くないが、前期後半に多くみられる特徴を備えており、本遺構の時期もこれに近い可能性がつよい。

4　溝（第3図）

溝は調査された部分で長さ14.5m・幅0.8～1m・深さ0.5mをはかる浅いV字形の小溝で、ゆるい蛇行を操返しながら南西から北東方向に伸びている。土層図をみると（第1図）、遺構は、灰色砂土～砂壌土からなる第4～5層の堆積以前に廃絶し、4層は土製投弾1点以外殆ど遺物を含まないので、遺構内の遺物が時期決定の有効な資料となる。溝内は黒色砂土と壌土の互層となっており、底面は細かい砂層となる。遺物は遺構中ほどの底面近くに近接して、石製紡錘車・土製投弾・打製石鏃各1個が出土した。



第8図　溝内出土遺物実測図

出土遺物（第8図）　1は石製紡錘車である。扁平な円盤

形で表裏面、側面ともに丁寧な研磨が加えられている。径4.7cm・厚さ0.6cm・孔径0.7cm。結晶片岩質。2は土製投弾である。3.3×1.9cmをはかり、重さ10g。黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好であり堅緻。3は打製石鏃である。基部の抉り込みの顕著な無茎式であり、先端部は丁寧なつくり。第一次剝離面を残し打点を基部に持つ。長さ2.2cm。石材は黒色黒耀石。

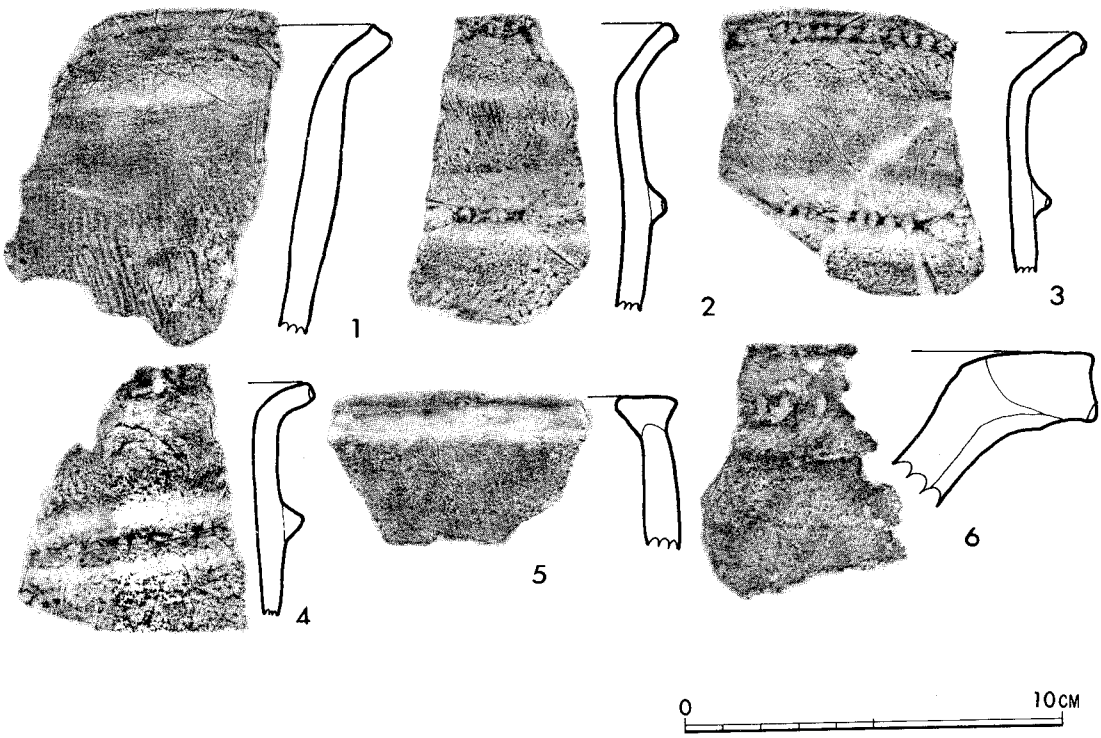
以上溝内出土の遺物は量としては多くないが、第2層より板付II式土器の出土があり、また第4～5層が遺物を含まぬ点で弥生時代前期後半～末の時期と考えられよう。

5　第2層と出土遺物（第1・9～17・12図） 第2層については調査概要の項で略述したが、同層は厚さ30～40cmの遺物包含層であり、丘陵裾にあたる部分はほとんど土を混じない程遺物の堆積は濃厚である。遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・石器・石製品・瓦等であり、Bトレンチ東側では瓦・須恵器類が上部に比較的まとまって含まれ、この時期に丘陵付近の包含層破壊がなされたと思われる。

(1) 弥生式土器（第9～12図） 土器は甕・壺・短頸壺・器台・鉢・蓋形土器・高坏・小形土器である。

甕（第9、10図） 甕形土器は出土土器中最も多数を占める。これらは器形によって5つに分類される。第1類は第9図1のように小さく屈曲する口縁をもち、刻目をもたず口縁下を横なでするものや同図2～4である。内外面とも暗褐色で、如意状口縁の口唇下端に刻目を施し、口縁にかなりの間隔をもって一条の刻目突帯をもつもの、同図6のように口縁の平坦化が始まり、口縁下端に刻目を施しているものを含み、胎土・焼成ともにあまり良くない。口縁の特徴から板付II式とみられる。特に同図6は甕棺と考えられる。第2類は、第9図5のように口縁端部が丸味をもち、内外の張りが弱いものや口縁端の外側への発達がよく、いわゆる「L」字形口縁となるもの（第10図6・13）で、6では口縁下に低いM字形の突帯一条をもっている。城ノ越式を含む中期前葉に相当する。第3類は「T」字形口縁をもち、中期中葉にあたる（第10図7～9）。第4類は口縁端が内部へ張り出し、幾分口縁がすぼまり気味のもの（第10図5・10・11）で特に11は口縁上端が窪み、宝台II式の特徴をもっており[3]、中期後葉にあたる。褐色～暗褐色、胎土・焼成とも良好。第5類は口縁の内傾化が進み、いわゆる「く」字形口縁をもつもの（第10図1～4）で、後期前半に含められよう。器壁は厚さが増し、胎土・焼成ともあまり良くない。第10図14～16は底部である。14は分厚く小さい。15は上げ底。16は薄い器壁をもち高台状のあげ底をもつなど前期末～中期前半の特徴をもっている。2層中の甕形土器のうちでは第3～4類が量的に多く、続いて5類、2類、1類の順に減少する。

壺（第11図1～6）　壺は若干を除いては小破片となり、また量的にはそれほど多くなかった。器形の特徴から4つに分類可能である。第1類は、球状の胴部としまりのよい頸部に一条の三角突帯をもつもの（同図1）であり、中期初頭に位置づけられよう。灰褐色を呈し器面の荒れがはげしい。胎土・焼成ともに不良である。第2類は、朝顔状にひろく頸部に幅ひろいいわゆる「鋤形」口縁をのせ、内側への張り出しの弱いもの（同図2）で、中期中葉に位置づけられよう。黄褐色を呈し、胎土・焼成良好。第3類は、やや外反して直口する短い口縁部下に低い稜のない三角突帯をもつもの（同図3）であり、中期後葉に位置づけられよう。突帯上部



第9図　第2層出土弥生式土器拓影

は粗い縦の刷毛調整。暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。第4類は、口縁部が内傾して、逆く字形となり、外面の屈曲部に稜をもつもの（同図4・5・6）で後期前半に位置づけられよう。なお15は第1類の壺に接合するものと思われる。褐色を呈し、胎土・焼成とも良好、16は形の定まらないいびつな土器底部である。

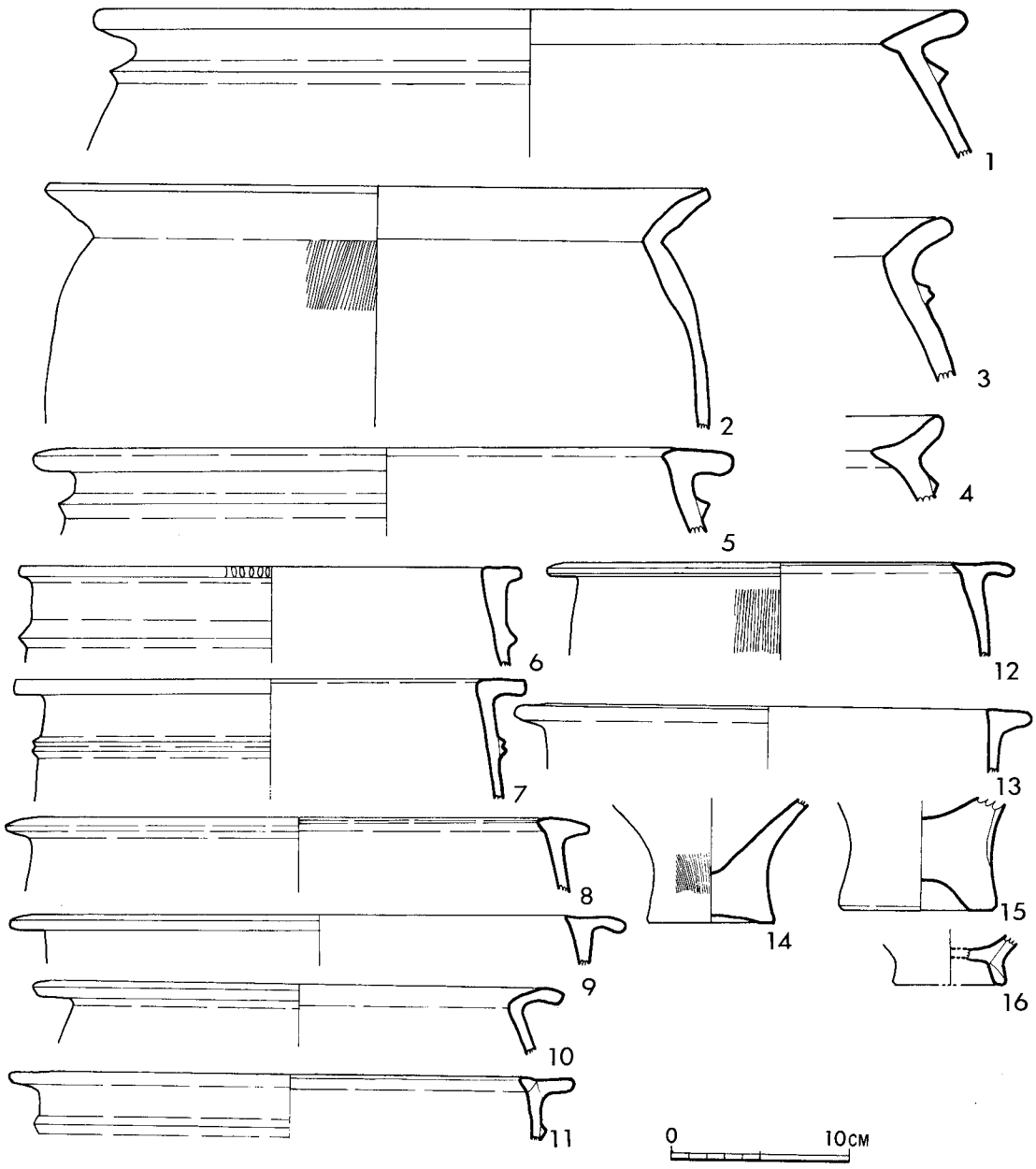
短頸壺（第11図7）　短頸壺は1個にすぎない。口縁部は水平にのび全面丹塗りの整美な土器である。褐色を呈し、胎土・焼成ともに非常に良好。中期中葉と思われる。

器台（第11図8～12）　器台も多くなかった。器台はその形態から大まかに2類に分けられる。第1類（8・9・10・11）は体部のくびれがゆるく、開きの大きくないものであり、8は内面指調整、9は外面粗い縦刷毛を施す。黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。第2類はくびれが強く、口径の割には器高の低いもの――11・12である。11は外面縦刷毛、内面くびれ部に篦削り、裾部に横刷毛。いずれも黄褐色を呈し、胎土焼成不良。12は外面指調整、内面篦削り。いずれも後期前半の所産であろう。

蓋形土器（第11図13）　1個が出土した。頭部径が小さく、上端がやや窪み、身の膨らみの少ない形態である。縦刷毛調整。胎土・焼成不良。中期後半にあたろう。

鉢（第11図13）　鉢は特別に形態上の特徴をもたないが、中期に多くみられる器形である。暗褐色を呈し、胎土・焼成不良。

高坏（第12図1～5）　高坏は図に示した坏部1、脚部4例をあまりこえない出土である。1は立あがりの小さい口縁から鋭く屈曲して底部につながり、後期の所産であろう。脚部は形

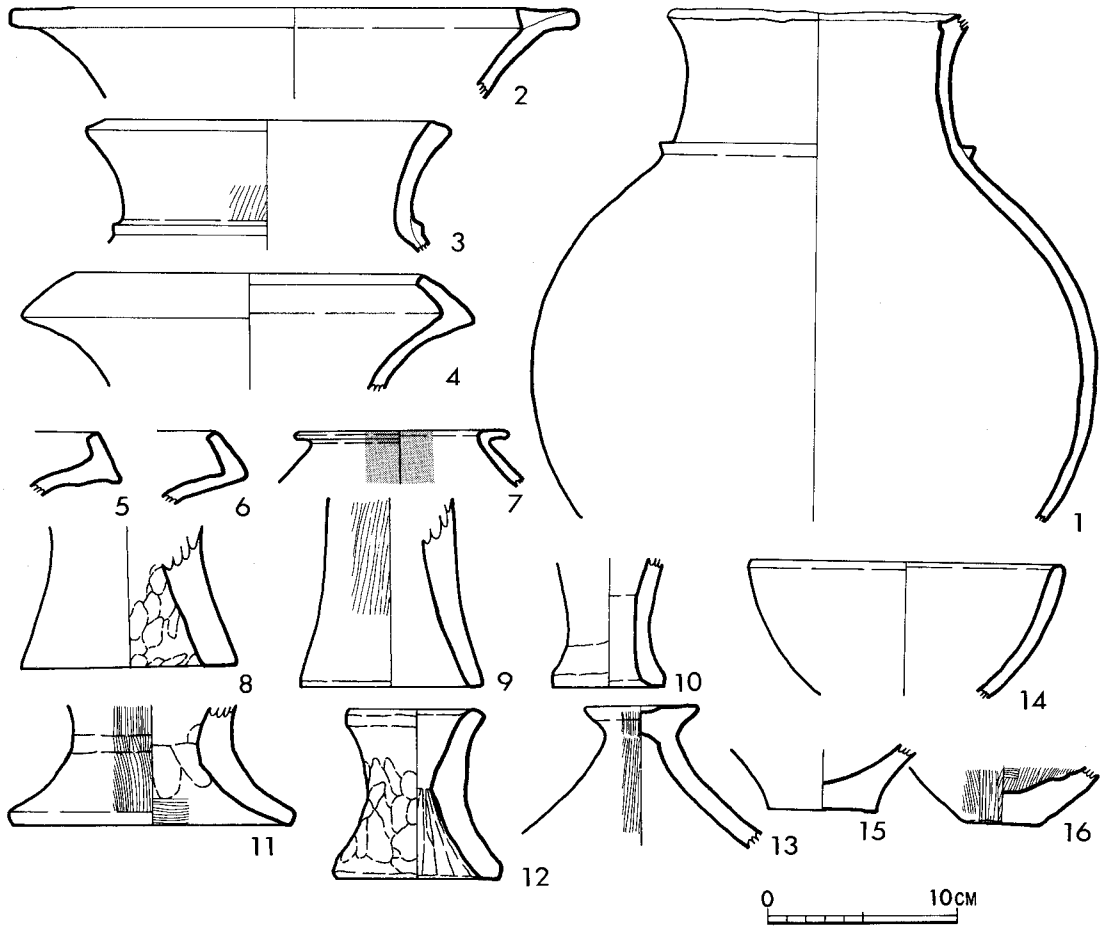


第10図　第2層出土弥生式土器実測図(1)

態から2類に分けられる。1類はしぼりによる長い円筒形からゆっくり開く裾をもつもの（同図2・3）である。褐色を呈し、胎土・焼成ともあまり良くない。第2類は坏部にすぐ低い脚部を接合するもの（同図4・5）である。第1類は中期中葉以降に、また第2類は中期後半に位置づけられよう。褐色を呈し胎土・焼成良好。

小型土器（第12図6～11）　いわゆるミニチュアの手捏ね土器である。器形上からは鉢形、壺形、甕形に分けられる。鉢形は全て底部から直線的に外方にひらく形態になると考えられ、灰褐色を呈し内外面に粗い刷毛調整をもつ6や、内面に指調整痕の著しい7・8・9がある。

胎土は砂粒の混入多く、焼成不良、底部を欠く。胴は肩からしまりのない頸につながり、頸部内面は突出しており、製作上の特徴を示している。暗褐色を呈し焼成不良。甕形としたものは、内外面とも指痕が著しく、底部径の大きい樽形で、器面の凸凹がはげしい土器である。



第11図　第2層出土弥生式土器実測図(2)

暗褐色を程し石粒の混入が多いが焼成良好。これらは各れも時期決定は困離であるが、10は前期後半～中期前半の壺形土器を髣髴とさせ、また鉢形は中期に位置づけられるであろう。

以上第2層出土の弥生式土器は発見がプライマリーな状態ではなかったにもかかわらず、板付丘陵南端における弥生式文化の開始、発展を示し、板付遺跡のひろがりをも示す。

(2)土師器（第13・14図）第2層で出土した土師器は、壺・甕・埦・鉢・高坏・器台であり、Bトレンチ東拡張部分の中央に多く出土した。量の上では高坏・壺が圧倒的に多く、器台は1点のみの出土である。

壺（第13図1～10）図示した壺は小型の丸底壺である。形態から5類に分けられる。

〈1類〉（第13図1・2）よく締る頸部、斜め外方に開く口縁をもち、膨らむ胴部はゆるい肩をもち、やや尖る底部につらなる。　1は内外面淡灰褐色、外面下半横～斜刷毛。内面下半

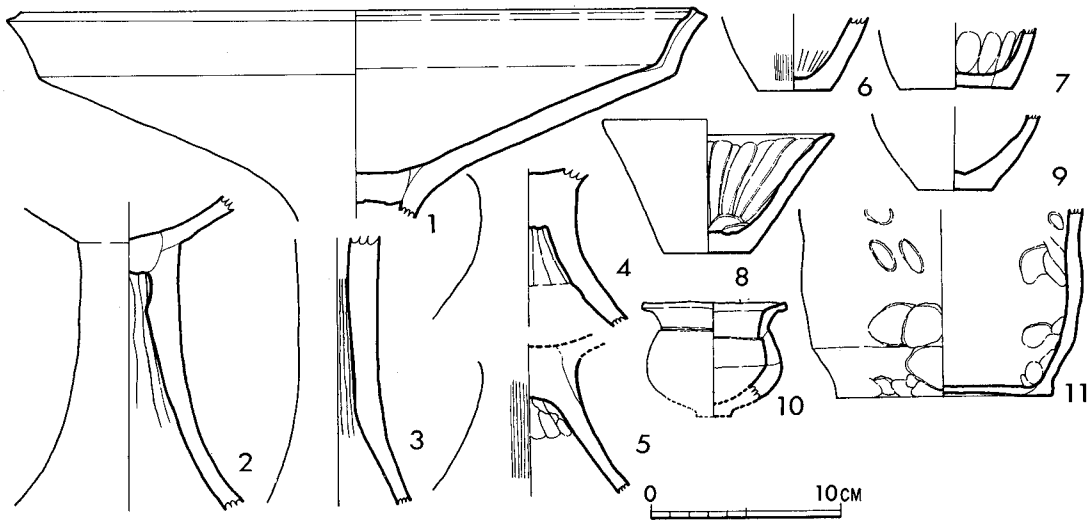
篦削り。胎土精良。焼成不良で軟質。2は外面褐色、内面暗灰色。胎土精良。焼成不良。口径9.2cm。**〈2類〉（同図3・6・8）**頸部のしまりが少なく、胴部の肩は強くない。3は内外面灰褐色。外面は横なでと刷毛、内面横篦削り。焼成やや不良。口径10.2cm。6は内外面灰褐色。内外面上半横なで。下半刷毛、内面上半刷毛調整後横なで、下半指押え後なで。口縁の一部と胴部に煤付着。胎土精良。口径10.4cm・器高8.6cm。8は内外面淡褐色。外面上半横なで。内面下半横篦削りで、底部内面指押え。胎土は精良で焼成あまり良くない。**〈3類〉（同図4・5）**ほぼ直立する口縁をもち、胴部の肩が高い。4は内外面褐色で、胎土精良、焼成不良軟質。口径9.6cm。5は内外面淡赤褐～淡灰褐色。外面上半は横刷毛後横なで、下半は刷毛なで、内面上半横刷毛調整後横なで、下半横篦削り。口径9cm。いずれも胎土精良。焼成不良。**〈4類〉（同図7・10）**頸部がしまり、斜外方に開く低い口縁をもち、低い張った胴部をもつ。7は内外面灰褐色。外部下半横篦磨きか。胎土精良。10は内外面淡赤褐～黄褐色。磨滅がはげしい。いずれも焼成不良。**〈5類〉（同図9）**低く張る胴部と斜外方に伸びる長い口縁をもつ。内外面淡褐色。磨滅がはげしい。焼成不良軟質。口径11.6cm。

甕（第13図11～17）11は口唇部跳ね上げ状で、内外面淡褐色。外面は横なでで、内面上半は横なで、下半篦削り。口径14.8cm。12は内外面とも横なで、灰褐色。口径17.4cm。13は外面は淡褐色で、内面は灰褐色。磨滅はげしい。口径17.8cm。14は低い直立口縁。内外面灰褐色。口縁内外横なで。頸部刷毛、胴部内面篦磨き、胎土精良。口径14.4cm。15は内外面灰褐色。口径17cm。16は外面褐色で、内面黄褐色、磨滅がはげしい。外面は横なで。口径20cm。17は低い口縁をもち、内外面淡黄褐色。外面刷毛。内面下半横篦削り。いづれも焼成不良。

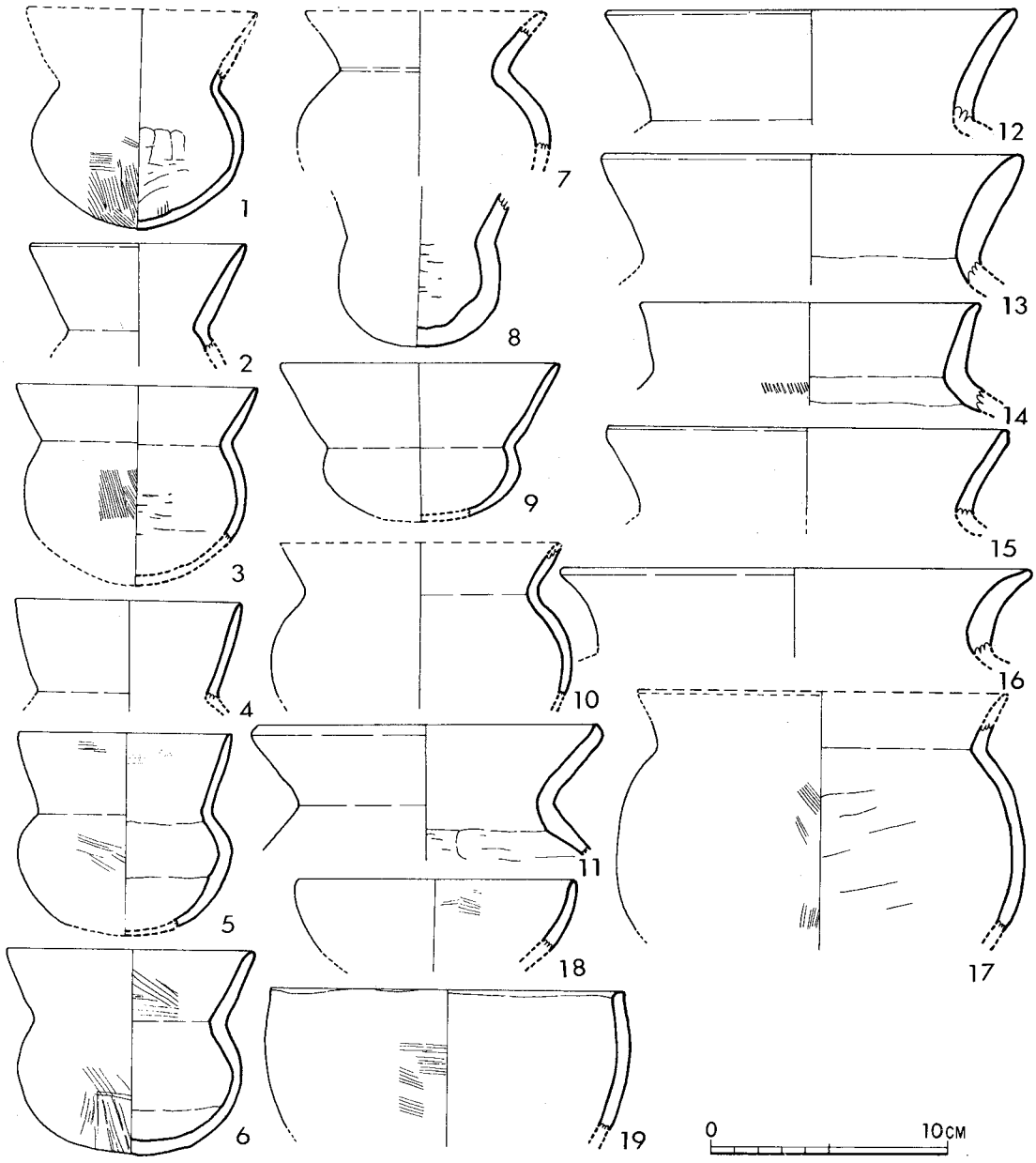
埦（第13図18）内外面灰褐色、口唇横なで。内面刷毛。焼成不良。口径15cm。

鉢（第13図19）内外面黄褐色～灰褐色、外面中位刷毛、焼成不良。口径15cm。

高坏（第14図1～16、18～21）　1～3は坏部である。1は内外面淡黄褐色で、焼成不良。口径19.8cm。2は内外面灰褐色。口唇内外横なで。口径17.4cm。3は内外面灰褐色。胎土精良、

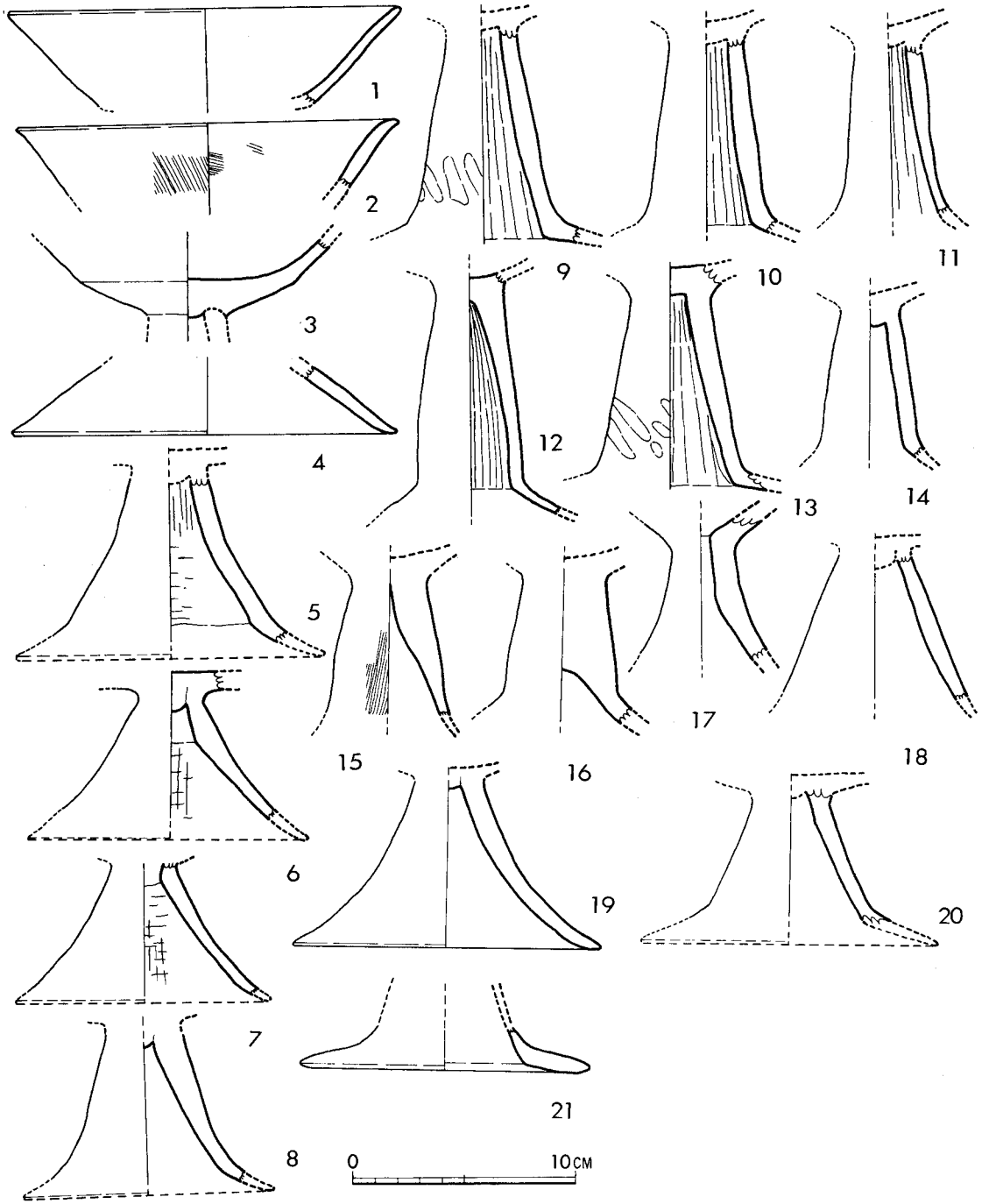


第12図　第2層出土弥生式土器実測図（3）



第13図　第２層出土土師器実測図（１）

焼成不良。**4**～**16**、**18**～**21**は脚部である。**4**は内外面灰褐～淡褐色で焼成不良。底径17.6cm。**5**は内外面黄褐色で、内面上半しぼり、横篦削り。焼成不良。**6**は内外面灰褐色で、磨滅がはげしい。内面横篦削り。焼成不良。**7**は内外面灰褐色。外面刷毛調整後なでか。内面横篦削り。焼成やや不良。**8**は内外面淡灰褐色。磨滅がはげしい。胎土精良、焼成不良。**9**は内外面淡灰褐色、外面指調整痕残す。内面篦削り。焼成不良。**10**は内外面灰褐色。内面篦削り。焼成不良。**12**は外面灰褐色～淡褐色で内面灰褐色、内面しぼり。焼成不良。**13**は外面黄褐色。内面灰褐色。外面指調整痕、内面篦削り、焼成やや不良。**14**は内外面灰褐色、磨滅がはげしい。焼成不良。



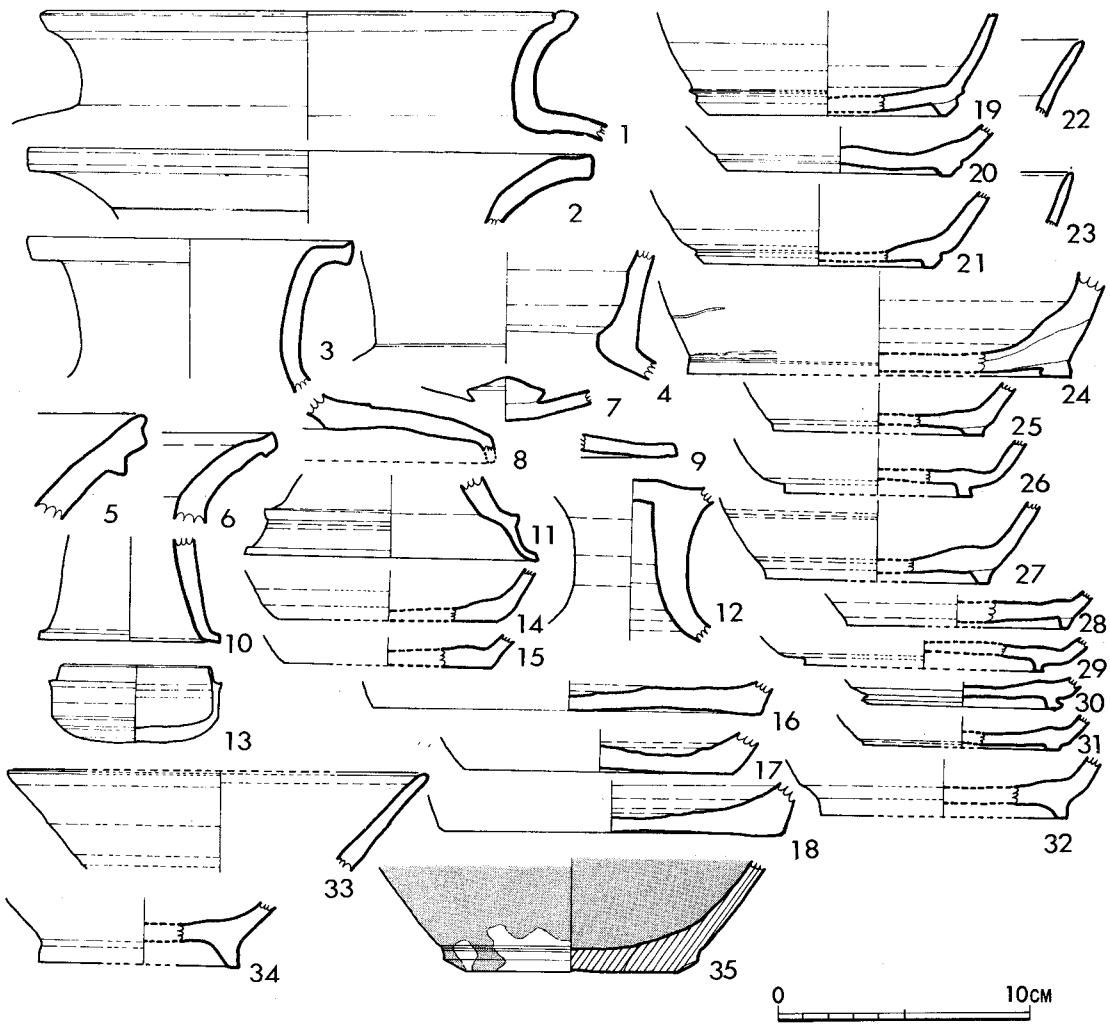
第14図　第2層出土土師器実測図（2）

15は内外面黄褐色、外面上半指なでか。下半細い刷毛、内面不明。焼成不良。**16**は内外面淡灰褐色。磨滅はげしい。焼成不良。**18**は内外面灰褐色。磨滅はげしい。**19**は内外面淡赤褐色。磨滅はげしい。底径14cm。焼成不良。**20**は外面褐色、内面暗黄褐色。内面横篦削りか。磨滅がはげしい。胎土精良、焼成不良。**21**は内外面淡赤褐色。磨滅はげしい。焼成不良。底径13.2cm。

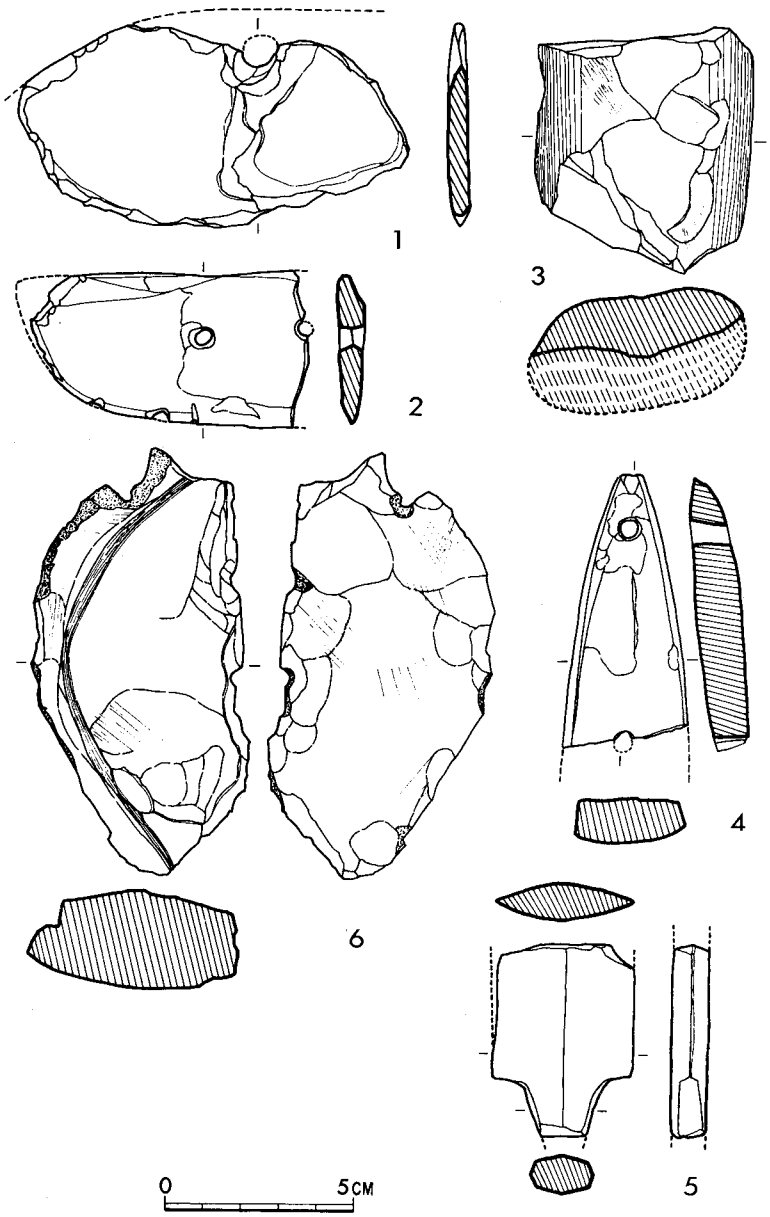
高坏坏部はあまり深くなく、下部に稜をもつと思われる。脚部は基本的には短脚で裾の広くひらくものと脚中位がゆるくふくらみをもって裾が更に強くひらくものに分類される。

器台（第14図17） 内外面灰褐色、磨滅がはげしい。焼成不良で軟質。

(3)須恵器（第15図1～32）　須恵器は第2層のBトレンチ拡張部に多く出土した。器種は壺（1～6）、坏蓋（7～9）、器台（10）、高坏（11、12）、合子（13）、高台をもたない平底の坏（14～18）、低い高台をもった坏（19～32）である。**壺**のうち**1**は明灰色で胎土・焼成良好、口径21cm。**2**は暗灰色。焼成良好、口径22cm。**3**は赤色をおびた暗灰色。一部に灰釉をみる。焼成良好。口径12.8cm。**4**は白味をおびた灰色、内外面ともに緑色釉がかかる。**5・6**黄灰色。**坏蓋**では、**7**は低いいびつな擬宝珠つまみをもち、**8・9**は内面に反りをもたない。灰色で焼成不良。**器台10**は明灰色。焼成良。**高坏2**個のうち**11**は暗赤褐色。**12**は短脚型で赤褐色～青灰色。焼成不良。**合子13**は立上り外面に赤色顔料付着。身～底部の内外面に草色釉。胎土は灰褐色。口径5.6cm・器高3.1cm。**平底坏14・15**は明灰色。**16～18**は底径10～15cm。明灰色。



第15図　第2層出土須恵器・土師質土器・磁器実測図



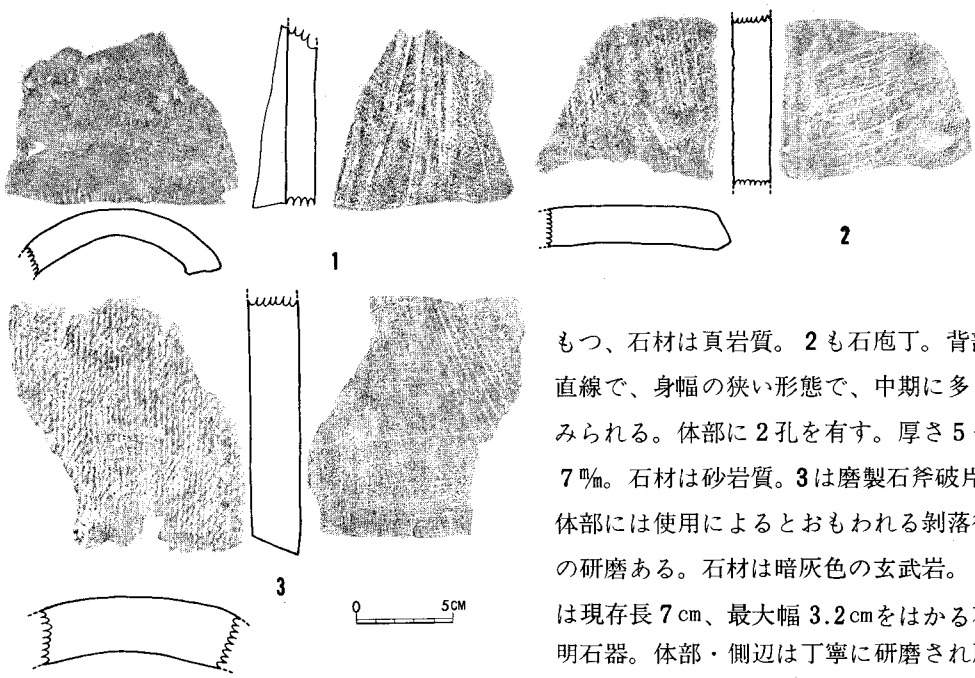
第16図　第2層出土石器・石製品実測図

焼成良好。**高台付坏**は、各れも直口する口縁となると考えられ、**22・23**がこれに相当すると思われる。高台つけ根に稜、窪みを持つもの（**19～21**）と持たぬもの（**24～32**）があり、いずれも明灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好。

(4)土師質土器（第15図33・34） この種土器の出土は少なかった。**33**は青灰色を呈し、焼成良好。内外横なで、推定径16.4cm。**34**は褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成良好。

(5)磁器（第15図35） 内外面とも淡い草色釉を施す。胎土は赤褐色、焼成良。推定底径8cm。

(6)石器・石製品（第16図）石器　第2層で出土した石器は図示した以外に、黒耀石剝片数点のみであった。**1**は石庖丁である。体部研磨。刃付け後の剝落と考えられ、上縁に穿孔1個を



第17図　第2層出土瓦拓影

もつ、石材は頁岩質。2も石庖丁。背部直線で、身幅の狭い形態で、中期に多くみられる。体部に2孔を有す。厚さ5～7㎜。石材は砂岩質。3は磨製石斧破片、体部には使用によるとおもわれる剝落後の研磨ある。石材は暗灰色の玄武岩。4は現存長7㎝、最大幅3.2㎝をはかる不明石器。体部・側辺は丁寧に研磨され扁平となり、残存する一端は狭く、その先端は表裏とも窪む。石材は砂岩質。5は磨製石剣破片である。身は中央に鎬をもち、断面紡錘形、短い茎は八角形に研ぎ出される。石材は白色粘板岩。

石製品　6は不明石製品である。鋭利な刃物で高台状に切り出されており、裏面は平滑に研磨される。石材は滑石。

(7)瓦（第17図）　瓦は前記の須恵器とともにBトレンチ東拡張部に多く出土した。1は丸瓦破片である。上面は荒めの縄目痕のあとを磨消して平滑に仕あげる。下面は1㎝の間隔に6～7本の糸がみとめられる布目痕、端部はヘラ切り。厚さ1.5㎝。赤褐色。焼成良好。2は平瓦破片である。上面は1と同じ程度の縄目痕をもつ。磨滅がはげしい。下面は1㎝間隔あたり6～7本の糸がみとめられる布目痕であり、指頭に似た窪みがみられる。厚さ2㎝。黄褐色。胎土に砂粒少量混入。焼成不良。3も平瓦破片である。上面は荒目の縄目文。下面は1㎝間隔に6本の糸が認められる。厚さ2.5㎝。灰褐色。焼成良好。

III　まとめ

以上D・E－9地点の調査によって検出された遺構、出土した各々の遺物類についてのべて来た。本地点では、第2層に各時期にわたる遺物を多量に包含するとはいえ、調査区ではそれらのほとんどが遺構と遊離した性格のものであった。現場での観察からは、それらの遺構は調査区の北側に面する丘陵のより高所に求められよう。また同時に調査された丘陵部（F－9a地点）では、前述のように弥生時代前期後半に営まれた袋状竪穴群の存在が確認され、出土土器の下限もほぼD・E－9地点と同一であり、両地点がこの時期において近密なひろがりの

中にあったことが考えられる。さらに板付丘陵全体では、北端に貯蔵穴群、木棺墓、甕棺墓が密集して検出されており[①]、環溝遺構を含め同時期の遺構が丘陵のほとんどをおおっていたとみられる。また第2層では一片ながら前期末の甕棺片が出土しており、検出された木棺墓は、F—9a地点を含む集落内の墓地の一部に相当するものかも知れない。また出土須恵器のうちには北側に石室の露出する板付八幡古墳[③]施設と関係あるものもあると思われる。そして第2層の土器の推移からは、この丘陵南端地域が弥生時代以降もひきつづき人々の生活の場であった事が知られる。

註

① 板付水田遺跡調査で確認。報告書は1975年度刊行。

② 島倉巳三郎先生より下記の鑑定結果を得た。

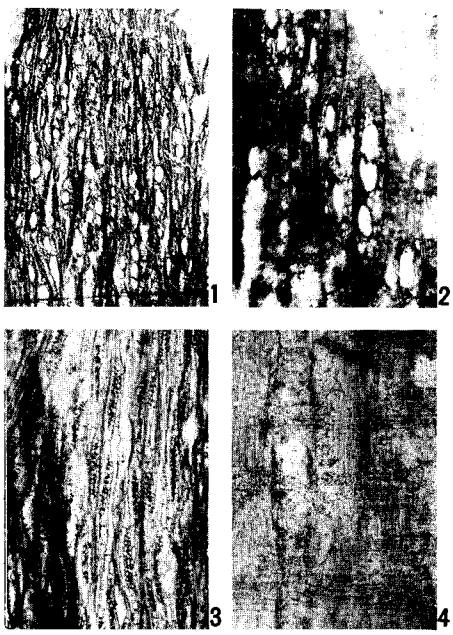
「試料は極めて脆く、適当な切片をつくることができず、氷結法によったところ、解氷しても細胞の収縮変形が復旧せず、失敗したのは遺憾であった。予察のためのそのままの切片と併用してしらべた。

材の構造　材は散孔材で、道管は大きく 150 ～ 200μ に達し、多分単穿孔、側壁に蜂単状有縁膜孔が著しい。不定形の充塡物があるが、タイローズか二次的のものか不明、導管の周りに柔細胞があり、いわゆる周囲状らしい。放射組織は中央部に著しく横長の細胞、外縁部にやや縦長になる細胞から成り、やや異性、1—3細胞幅、5—25細胞高。

以上のうち、周囲状柔細胞の発達した散孔材で、1—3細胞幅を有する異性の放射組織などからみるとクスノキ属 Cinnamomum に類似する。不完全の切片で確定できないが更にしらべてみる必要がある。」（1975年1月）

③ 高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住宅公団　1970年

④『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表、総集編』福岡市埋蔵文化財報告書第12集、1971年



D・E—9地点木棺墓棺材

1　横断面（×15）
2　横断面（×25）
3　板　目（×25）
4　柾　目（×25）

第3章　諸岡遺跡

I　調査概要（第1図・第2図・PL.III～VI）

遺跡の立地、周辺の遺跡等については昨年度報告[①]にゆずる。1974年度の調査は、前年度調査の甕棺墓地（A区）を含む丘陵東斜面の西側上部（C区）と、A・C区の参道をはさんだ北側（D区）を調査した。この間丘陵頂部西側で塀を作るさいに甕棺墓がみつかったので、これも工事を一時中止してもらい、2日間で調査を行った（B区）。遺構番号は調査の進行にあわせて付したものをそのまま使用した（**第2図**）。

C・D区の調査では、弥生時代竪穴遺構20基が検出され、そのうち11基では南朝鮮に分布する特徴的な「無文土器」が板付II式土器とともに出土した。それとともにA区の甕棺墓地が、C区東側の段の下に限定され、西方にのびていないことが確認された。

古墳時代以後の竪穴25基も存在していた。これは、弥生時代竪穴が主にC区にあるのに対し、D区に多かった。これら竪穴はA区北側に少数あった同時期の竪穴と一連のものであろう。またC区東側の段をなす部分で4基・C区北側で1基・D区北側で1基、合計6基の地下式横穴を確認、調査した。

前年度調査にひきつづき、先土器時代の調査も竪穴調査終了後に行ない、C区南側とD区北側にトレンチを入れた。

これらの調査と平行して、遺跡のほぼ全体の地形実測も行った（**第1図**）。

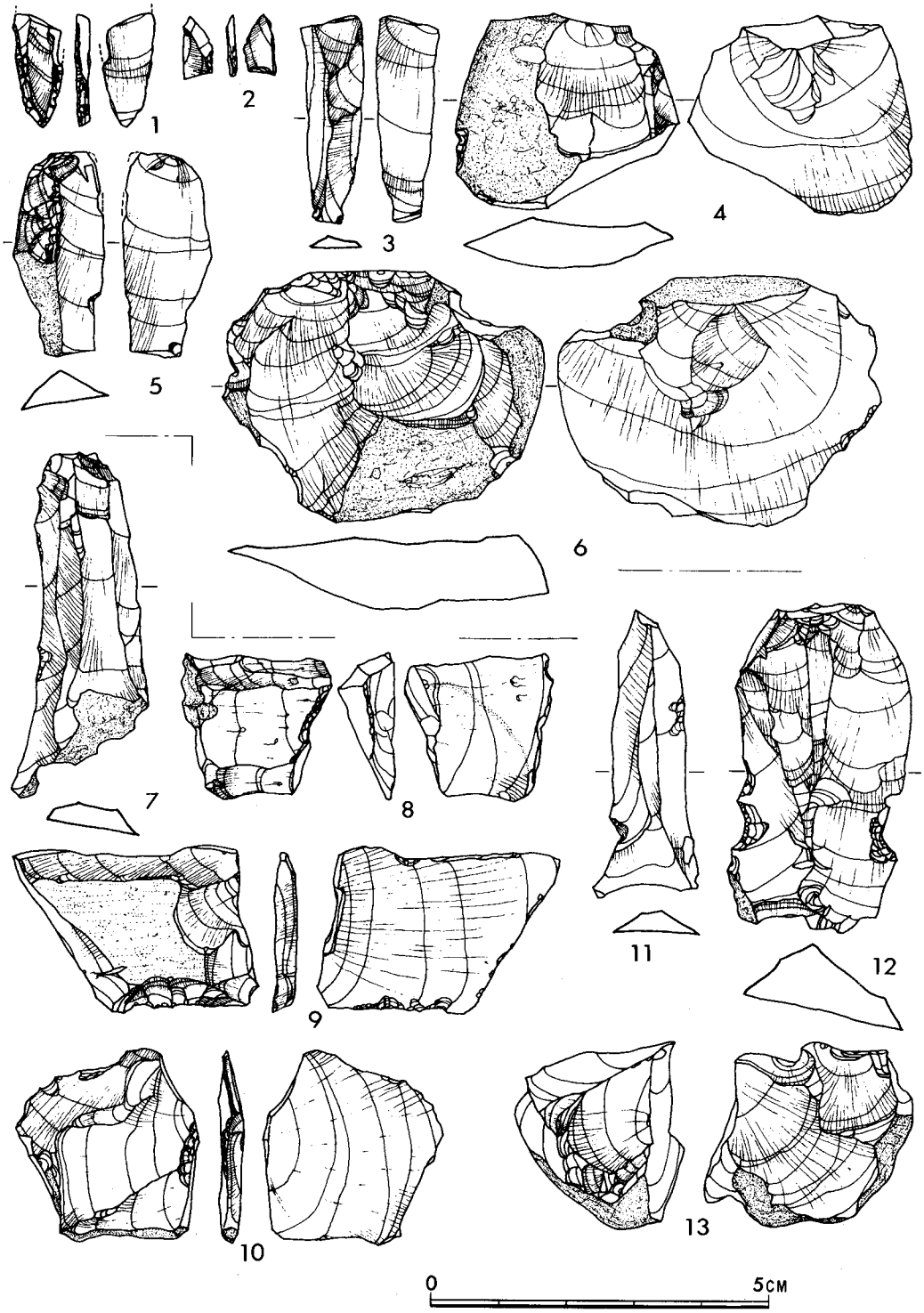
以下、時代順に遺構と出土遺物について報告する。なお表土層や地山上の無遺構部で出土した遺物については、一括して末尾にのべる。

註 ① 横山邦継編『板付周辺遺跡調査報告書（1）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集、1974年

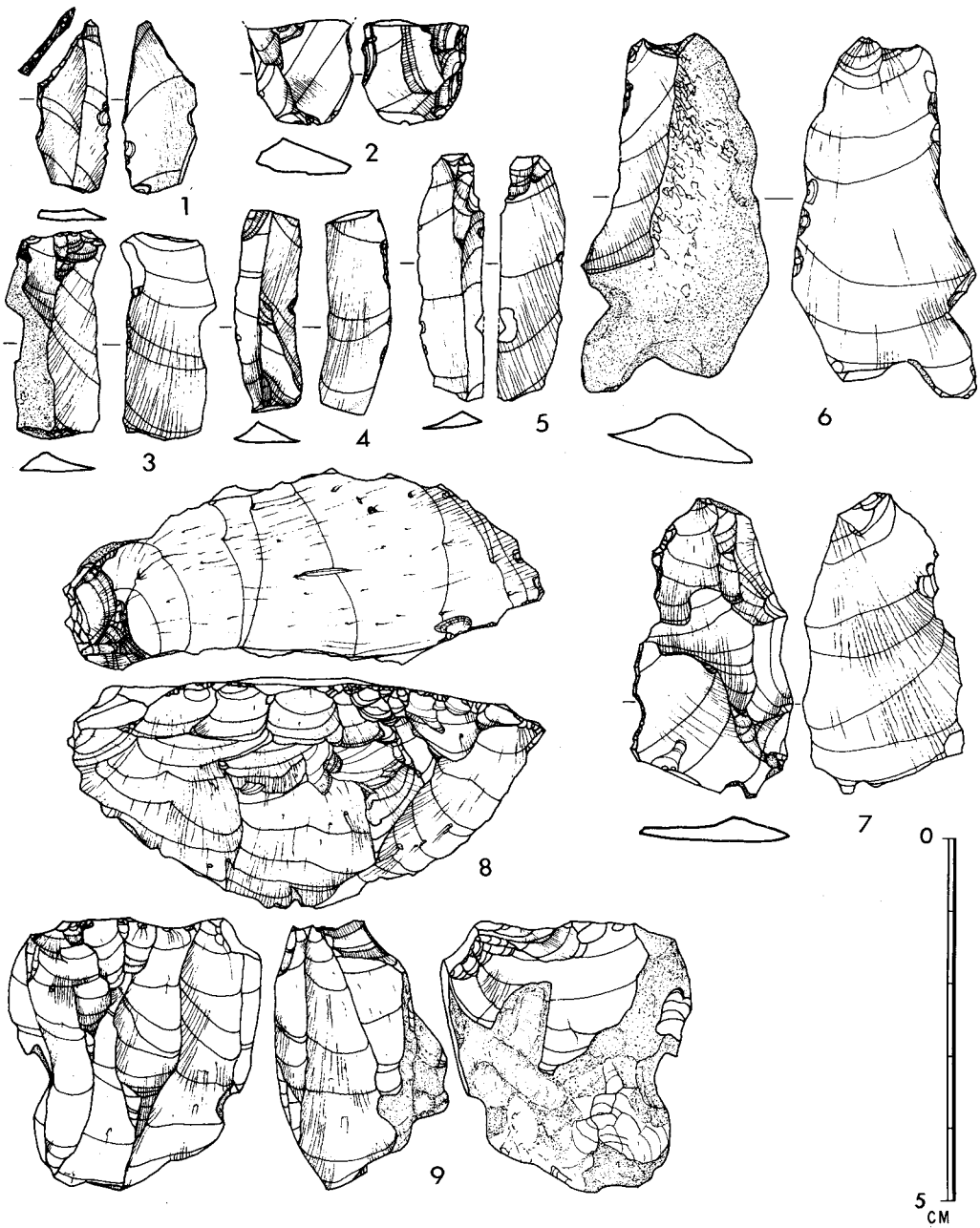
II　先土器時代（PL.IX）

調査概要　昨年度グリットを組み、調査を行なった結果、ナイフ形石器などの石器が鳥栖ローム層中より出土したので、本年度は遺物の広がり及びナイフ形石器文化以外の文化層の確認を目的として調査を行なった[①]。先土器時代以後の弥生時代竪穴遺構・古墳時代の遺構・中世の地下式横穴等の遺構は、先土器時代の遺物包含層に切り込んでいるので、遺物の発見が予測されたが、第3号・23号・40号竪穴より石核（コア）、ナイフ形石器、細石核（マイクロコア）が出土したのみだった。昨年度、遺物の密集したグリッドB・C列の遺物のひろがりを確認するために、2m×14mのAトレンチを設定し、南側の参道まで拡張した（第2図）。さらに、各時期の遺構がなかった第2号地下式横穴の東に2m×2mのBトレンチを、D区の北端に2m×4mのCトレンチを設定し、調査を行なった。

土層堆積は、弥生時代以後の遺構確認のため削土した黒色土（腐植土、**第1層**）の下に、砂質の暗褐色花崗岩ばいらん土層（**第2層**）・石英粒などを多量に含む赤褐色ローム層（**第3層**）・黄褐色ローム層（**第4a層**）・やや粘性がよわく砂質の黄褐色（赤褐色を呈するところもある）



第4図　先土器時代石器実測図
（下段は、1973年度調査で出土）



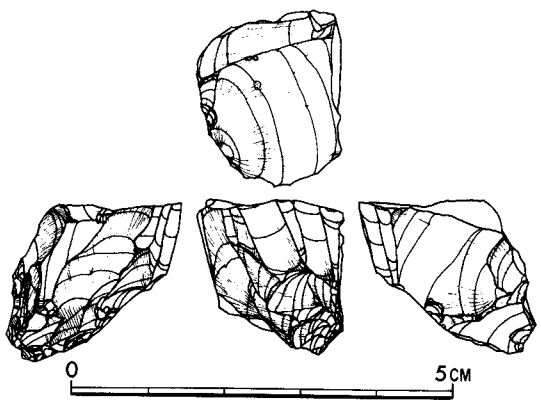
第5図　表面採集石器実測図

ローム層(**第4b層**)・黄褐色ばいらん土層（**第5層**）・橙色ばいらん土層（**第6層**）・白色粘質土層（**第7層**）・暗灰色ばいらん土層（**第8層**）と続く(**第3図**)。 **2・3層**は中世以後に削平されたと考えられ、諸岡丘陵の東側斜面では**4a**層より下層が残っていたのみである。**4a・4b**層は斜面を下るにしたがって厚くなっており、赤褐色を呈したり、砂質をおびたりしているので、まとめて鳥栖ローム層としてとらえられるものと考えられる[2]。

遺物は、Aトレンチ4a層中でナイフ形石器が出土し、ナイフ形石器文化層のひろがりはつかめたが、他の文化層は確認できなかった。

出土遺物（第4図） 1は黒耀石製のナイフ形石器であり、縦長剥片の先端を基部としている。縁辺の一部を刃部とし、他の縁辺は刃潰し加工が加えられているが、ナイフ形石器の先端部は欠損している。昨年出土したNo.86（以下昨年出土したものは遺物番号で記す）と同型のものである。2も黒耀石製のナイフ形石器の先端部である。3・4・5は黒耀石製の剥片で、縁辺には使用による刃こぼれがみられる（Uフレク）。4は自然面が大きく残っており、円礫利用の石核より剥離されたことが分る。3・5は石核の打面再生のため剥離された剥片が利用されている。6は黒耀石の大形剥片の縁辺に二次加工を加えた削器（スクレイパー）である。7（No.79）・11（No.4）・12（No.64）は縦長剥片で、二縁辺には刃こぼれがみられる。8（No.42）・9（No.35）・10（No.11）は台形石器で③、いずれも寸づまり剥片を利用しており、8は基部を折り、折った面に二次加工を加えている。9は先端を折り、折った面の一方向から二次加工が加えられており、縁辺には使用による刃こぼれがみられる。10（No.67）は打面と先端に二次加工が加えられ、一縁辺には使用による刃こぼれがみられる。13は不定形の石核で、3面の剥片剥離がみられる。

表面採集遺物（第5図） 1は縦長剥片の片方の先端に刃潰し加工が加えられ、打面が折りとられた黒耀石製ナイフ形石器である。縁辺には刃こぼれがみられる。2は剥片が利用されており、裏面に粗い整形剥離が加えられている。黒耀石製で尖頭器（ポイント）の基部と考えられるが、諸岡遺跡のナイフ形石器に共伴しないものと考えられる。3・4・5・6・8は黒耀石製の剥片で、縁辺に使用による刃こぼれがみられる。3は先端に二次加工がみられる。7は黒耀石製の石核で、円礫を半割し、半割面を打面とし、一方向から剥片剥離が行なわれており、裏面には自然面が残っている。9は黒耀石製の石核で、一方向から整然と剥長剥片の剥離が行なわれている。**第6図**は黒耀石製の舟底状細石核である。打面は再生のためか欠損か分らないが、その状態を知ることはできない。ナイフ形石器文化より後出のものであり、佐賀県原遺跡など唐津周辺より表採されているものに類似点がみられる。



第6図　第40号竪穴出土細石核実測図

遺物の広がりと組成（第3図） 昨年度と今年度調査出土遺物総数は116点で、ナイフ形石器7点・台形石器6点・削器4点・Uフレイク13点で、石器が25%を占めている。

遺物は出土位置のまとまりから、No.5・7・8のナイフ形石器のグループ（**A群**）、No.81のナイフ形石器、No.14・22・35・42の台形石器のグループ（**B群**）、No.86・104・113のナイフ形石器、No.84の台形様石器のグループ（**C群**）の3群に分けられる。A群

はナイフ形石器の他、台形石器2点（No.11とNo.H 5〈第45号甕棺墓坑より出土〉）・Uフレイク2点・石核1点とフレイク・チップよりなる。B群はナイフ形石器・台形石器の他に、削器1点・Uフレイク8点・石核2点などよりなる。C群はナイフ形石器などの他、削器3点・Uフレイク3点などよりなっている。A・B・C群とも同様の組成をもっているが、ナイフ形石器は、A・C群に各々3点づつ出土し、かたよった分布を示している。台形石器がB群で多く出土していることと、対照的な分布をもっている。

A・B・C3群に分けて説明してきたが、昨年度調査区域は甕棺墓域内にあり、また遺物分布図の中央部の空白地帯は土取りが行なわれていた所であるところから、群として確実に扱うことができるのはC群のみである。もし、甕棺墓がなければ、4群以上の石器群としておさえることができるのかも知れない。これらの群は、時期差を考えることはできず、遺跡における生活の場を示していると思われる。諸岡丘陵では、先器時代遺物は西斜面の一部にのみ分布し、ナイフ形石器・台形石器・彫器・削器・Uフレイク・石核・剝片よりなるナイフ形石器文化の一時期に利用された遺跡といえよう。

諸岡遺跡の先土器時代における位置　近年福岡市蒲田遺跡、春日市門田遺跡、筑紫野市峠山・野黒坂遺跡など、先土器時代の調査が行なわれ、県内では60ヶ所をこす同文化期の報告例があるが、残念ながら、門田遺跡[6]で包含層が確認されたほかは良好な状態で遺物が出土した例は皆無である[5]。諸岡遺跡の石器群は、前記のとおりナイフ形石器、台形石器などよりなる。注意すべきことは、ナイフ形石器と台形石器の共伴関係がみられることである。

ここで、北部九州の先土器時代の遺跡ではどのような石器群があるか、石器群の共伴関係はどうかについてみていく。各遺跡は細石器を組成の中心とする石器群[6]（細石器群）、ナイフ形石器を中心とする石器群（ナイフ形石器群）、その他の石器群[7]に大別できる（**表2**）。戸沢充則・富樫憲次両氏は、唐津周辺の表面採集遺物を分析し、細石刃とナイフ形石器・台形石器を同時期共伴関係として把握された[8]。さらに同氏は近年唐津市原遺跡の調査を行ない、土層の堆積状態を疑問視しながらも、先土器時代終末期の様相として一括された[9]。三上貞二氏[10]・橘昌信氏[11]らも同様の立場をとり、ナイフ形石器の一時期が細石器と、または台形石器と細石器が共伴する

第1表　出土石器一覧

No.	器　種	石　質	レベル(m)	備　考	No.	器　種	石　質	レベル(m)	備　考
101	Uフレイク	黒燿石	14.31	第4図3	117	チップ	黒燿石	14.262	
102	スクレイパ	黒燿石	14.415	第4図6	118	〃	黒燿石	14.38	
103	チップ	黒燿石	14.345		119	〃	黒燿石	14.375	
104	ナイフ形石器	黒燿石	14.405	第4図2	120	Uフレイク	黒燿石	14.35	第4図4
105	チップ	黒燿石	14.315		121	チップ	黒燿石	14.30	
106	〃	黒燿石	14.315		H51	ポイント？	黒燿石		第5図2
107	〃	黒燿石	14.39		H52	Uフレイク	黒燿石		
108	Uフレイク	黒燿石	14.355	第4図5	H53	チップ	黒燿石		
109	チップ	黒燿石	14.345		H54	〃	黒燿石		
110	フレイク	黒燿石	14.338		H55	〃	黒燿石		
111	チップ	黒燿石	14.345		H56	フレイク	黒燿石		
112	〃	黒燿石	14.345		H57	チップ	黒燿石		
113	ナイフ形石器	黒燿石	14.295	第4図1	H58	コア	黒燿石	ピット3号覆土中	第5図8
114	チップ	黒燿石	14.447		H59	ナイフ形石器	黒燿石	ピット23号覆土中	第5図1
115	〃	黒燿石	14.333		H60	マイクロコア	黒燿石	ピット40号覆土中	第6図
116	〃	黒燿石	14.235						

とする人も多い。しかし福井洞穴・白蛇山岩陰[12]・宮地前遺跡Ⅰ7区[13]では細石器群が出土し、百花台遺跡では4層で台形石器[14]が出土し、岩戸[15]・東台[16]・早水台[17]各遺跡では、ナイフ形石器群が出土している。以上より、ナイフ形石器群と細石器群は、基本的には共伴するものではなく、細石器群は百花台遺跡や福井洞穴など縄文時代に続く遺跡からみて、ナイフ形石器群より後出だといえる。

第2表　北部九州の主要先土器時代遺跡遺物組成

県名	遺跡名	包含層	出土遺物
長崎	福井洞穴	第2層	細石刃、舟底型細石核、削器、有孔円板、土器
		第3層	細石刃、細石核、削器、土器
		第3層下半	細石刃、細石核、削器、尖頭器、土器
		第4層	細石刃、細石核、削器、尖頭器
		第7層	小石刃、小石刃核
		第9層	削器
		第15層	尖頭器、大形打製石器
	百花台遺跡	第3層	細石刃、細石核、ナイフ形石器、彫器、削器
		第4層	台形石器、削器、剝片石器
		第7層	大形剝片
佐賀	白蛇山岩陰	第11層	細石刃、細石核、尖頭器、スクレイパー、刃器
大分	岩戸遺跡	第2層	ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、彫刻刀？、チョッパー、チョッピング・トゥール？、敲石、石核、Uフレイク、剝片、こけし形石製品
		第5層	剝片
		第9層	剝片、石核
	早水台遺跡	第3層	ナイフ形石器、石刃、石刃核、楕円形石器
		第5層	石英石器群
	宮地前遺跡	Ⅰ7区	細石核、スクレイパー
		Ⅴ3区	ナイフ形石器
	東台遺跡		ナイフ形石削器、石核、剝片

台形石器は、百花台遺跡・長崎県日ノ岳遺跡[18]で出土しており、良好な状態で出土しているのは諸岡遺跡のほかは現在2ヶ所のみである。百花台遺跡はナイフ形石器の共伴がないが、諸岡遺跡では共伴している。諸岡遺跡のナイフ形石器は、『縦長剝片の鋭利な縁辺の1部分のみを残しその辺の基部と他辺の全面にわたって加工を加えたもの』といわれる九州型ナイフ形石器[19]そのものではないが、No.86のように前述の要素をもった小形のものもある。諸岡遺跡のナイフ形石器は、No.5・No.8・No.104を除いて、一辺を残して他の辺と接断面に刃潰し加工を加えたもの(No.7)、細長の石刃状剝片を素材とするもの(No.86、No.113)、その他（No.41）とバラエティに富んでいる。もし、ナイフ形石器群が日本全域的に同じような変遷をもつ石器文化としてとらえることが許されるならば、神奈川県月見野遺跡[20]及び富山県ウワダイラ遺跡[21]の出土遺物に類似点をみい出せる。また、鹿児島県上場遺跡では4層・6層、熊本県石飛遺跡では4層・6層と、それぞれ2枚のナイフ形石器包含層が確認され、石飛遺跡4層、上場遺跡4層・6層のナイフ形石器群は、石飛遺跡6層より中・小形化、分化していることがわかった[22]。

台形石器出現の時期はまだ分らないが、小形のナイフ形石器を共伴する石器群は、ナイフ形石器文化の~~最~~終末の段階といえるのではないだろうか。諸岡遺跡は北部九州のナイフ形石器文化の最終末の遺跡で、細石器文化に先行するといえよう。

Ⅲ　まとめ

簡単に本年度の成果をまとめてみる

1　諸岡遺跡の先土器時代遺物は、諸岡丘陵西斜面の鳥栖ローム層[23]より出土する。

2　出土遺物は出土状態からA・B・Cの3群に分けられるが、時期差はない。

3　腰岳産の黒耀石を素材とし、ナイフ形石器・台形石器・削器・彫器・Uフレイク・石核

などの組成からなるナイフ形石器群である。

4　諸岡遺跡の石器群は、北部九州のナイフ形石器文化の中で最終末の段階である。

以上により、次にあげるような問題点を提起できよう。

1　台形石器は、細石刃を組成の中心とする石器群とは共伴しない。

2　北部九州のナイフ形石器文化は、少なくとも台形石器を共伴するナイフ形石器群を最終末として、II期以上の時期差をもつナイフ石器群よりなる。

註

① 山口「諸岡遺跡の先土器時代遺物」『板付周辺遺跡調査報告書(1)』所収、1974年

② 昨年度の調査においても鳥栖ローム層として扱ったが、第4a・4b層を鳥栖ローム層比定層とすることは若干問題があり、今後検討していきたい。

③ a　和島誠一・麻生優「島原半島・百花台遺跡の調査」日本考古学協会昭和38年度大会要旨、1963年。b　Shizuo ODA "Some Aspects of Japanese Preceramic Age：The Microlithic Tendency in the South-western Parts of Japan"『人類学雑誌』第77巻第5・6号、1969年。c　小田静夫「台形石器について」『物質文化』No.18, 1971年。d　萩原博文「長崎県松浦市周辺の先土器文化」『考古学ジャーナル』No.59、1971年。e　杉原荘介・戸沢充則「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』第4巻第4号、1971年。aは多数の台形石器が第4層より出土し、器形は寸づまりの剝片を用い、打面と先端部を刃潰し加工により台形に整形したもので、百花台型と称され、注目されている。bは台形石器をI型＝百花台型と称されるもの、IIa型＝台形様石器、IIb型＝切出型石器と3型に分類し、cではさらに西九州の台形石器を分析し、bの分類を一歩すすめている。dは長崎県松浦市周辺の採集石器を分析し、刃潰し加工に注目し切断面に両方とも刃潰し加工したものをI類、片方に刃潰し加工したものをII類、刃潰し加工をしないで、断面に二次加工があるものをIII類とした。eはaでいう台形石器の分けかたから、IIb型をはずしたものであり、I型を百花台型、IIa型を技去木型としている。ここでは台型石器は、I型＝縦長剝片（石刃状剝片）を素材とし、基部及び先端を折りとって、台形に整形したもの、II型＝石器の主軸が刃部と直交するものとして把握した。

④ 木下修氏の教示による。細石刃包含層が確認され、その下からナイフ形石器2点などが出土した。

⑤ 橘昌信「先土器時代の常松遺跡」『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』1970年。1点のナイフ形出器の出土例がある。

⑥ ここでは細石刃を組成の中心とする一群をさす。

⑦ 鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井洞穴」『日本洞穴遺跡』1967年。第15層の石器などをさす。

⑧ 戸沢充則・富桝憲治「唐津周辺の細石器(1)・(2)・(3)」『考古学手帖』No.14・16・18、1962年、1963年。

⑨ 註3eに同じ

⑩ 三上貞二「九州のナイフ形石器」『鬼鼻山』No.3、1971年。

⑪ a　橘昌信編『峠山遺跡』1973年。b　正林護編『堂崎遺跡』1971年。

⑫ 森醇一郎編『白蛇山岩陰遺跡』1974年。

⑬ 誠辺誠編『大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報』1973年。

⑭ 註3aに同じ。台形石器の基本形は刃潰し加工を加えることにあるところから、ナイフ形石器群の中で扱う。また、3層でナイフ形石器が出土しているが、前時期の残存遺物としてよいのではないだろうか。

⑮ a　芹沢長介「大分県岩戸旧石器時代の遺跡調査」『考古学ジャーナル』No.14、1967年。b　同「大分県岩戸出土の『こけし』形石製品」『日本考古学・古代史論集』1974年。

⑯ 清水宗昭「先土器時代の遺物」『東台遺跡』1974年。

⑰ 賀川光夫編『続早水台』1965年。

⑱ 下川達弥氏の教示による。

⑲ 鎌木義昌「刃器文化」『日本の考古学』1 所収、1965年。

⑳ 明治大学考古学研究室月見野遺跡調査団『概報月見野遺跡群』1969年。

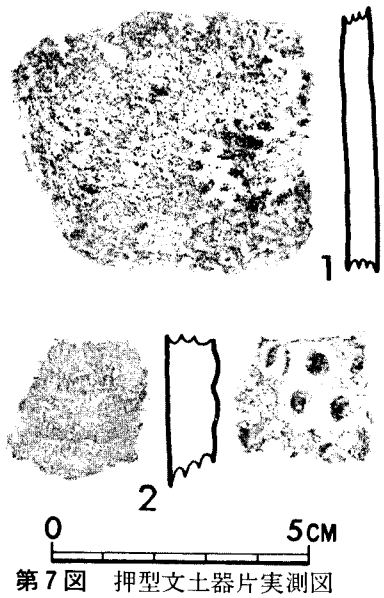
㉑ 橋本正・上野章・神保孝造『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第二次緊急調査概要』1974年。

㉒ a　池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第3巻第4号、1968年。b　池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』No.21、1968年。c　池水寛治「鹿児島県上場遺跡発見の住居址」『鹿児島考古』第9号、1974年。

㉓ 註2に同じ。

III　縄文時代の遺物（第7図）

縄文式土器は、押型文土器が2片出土している。1は、第6号竪穴埋土中からの出土で、長径約4㎜、短径約2.5㎜の楕円押型文を施文する。石英粒や砂を含み、焼成は良好。外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。弥生時代の竪穴に混入している為か、摩滅が著しい。2は、径約6㎜の円形に近い楕円押型文を施文している。胎土に砂を混入し、焼成は良好。外面赤褐色、内画暗褐色を呈する。表土層からの出土である。以上、本遺跡の縄文式土器は、押型文土器2片の出土のみであり、今後の資料の増加を待つことにしたい。



第7図　押型文土器片実測図

IV　弥生時代の竪穴と出土遺物（PL. V～VIII）

弥生時代竪穴は20基あり、うち11基は板付II式土器と朝鮮系無文土器を出土し、4基は前期土器を出し、2基は無遺物だが、位置・構造から同時期とみられる。これら17基は同性格のものであろう。残り3基は、昨年度調査した甕棺墓地に含まれる土壙墓とみられるのが2、性格不明1である。

17基は、A区の甕棺墓地より一段高い部分（地山標高16m以上）に群集し、甕棺墓地と占地を明瞭にわけあっている。それらは地山標高で17.5m以上のところに大部分があり、C区南側では相互にきわめて近接し、北へゆくにつれ間隔があき、D区では南側に2基が存在するだけである。これら竪穴の分布範囲は、今回の調査だけでは明らかにしえないが、19号竪穴が北端を示すことは間違いなかろう。東側は一段低くなって甕棺墓地につづくが、この段は21号竪穴にみられるように、弥生時代以降に削られて生じたもので、本来はゆるい傾斜をなしていたとみられる。したがって竪穴群の東端は、削平されて消滅した竪穴によって示されるのかもしれないが、その可能性は乏しく、11号竪穴が東端を示すものと考えたい。A区甕棺墓群との間は10m余りである。南側は参道と広場によってすでに削平されているが、3号竪穴よりもう少し南までのびていたであろう。西側は、参道の下にまで拡がっていることは確実である。さらに古墳の下にまでつづいているであろうが、B区の甕棺墓地までは及んでいないと思われる。B区甕棺墓群と竪穴群との間がどのようになっているかは興味深い問題であるが、知る由もない。

竪穴のほとんどが、平面不整形の浅い皿状で、最大長が3mをこえるものはほとんどない。袋状をなしていたとみられる壁部分もあり、本来は現状より深かったであろうが、後世に大きな削平を受け現状のようになったのであろう。

また調査地には幅50cm前後の溝状の遺構が斜面に直角にあるが（第2図で1～7の番号を付したもの）、2を除いて弥生時代以後のものとみられ、時期は明らかでない。2も溝状部内は凹凸がはなはだしく、性格は明らかでない。

ほとんどの竪穴で土器を主とする遺物が出土したが、調査の際、原則として土器片1片毎に

番号を付し、出土位置と深さを記録し、伴出関係・埋土との関係をみることにした。

1.第1号竪穴（第8図）

南側は調査できず、北西側も攪乱層に接しているが、ほぼ北西―南東に長軸をもつ2.2m×1.4mの長楕円形平面で、深さ20cm前後である。床は皿状になり、軽い凹凸がある。壁はゆるやかに上るが、本来の形状は明らかでない。南側床に礫があるのみで、遺物は出土しない。形状と位置から無文土器出土竪穴と同時期・同性格とみられる。

2.第2号竪穴（第8図）

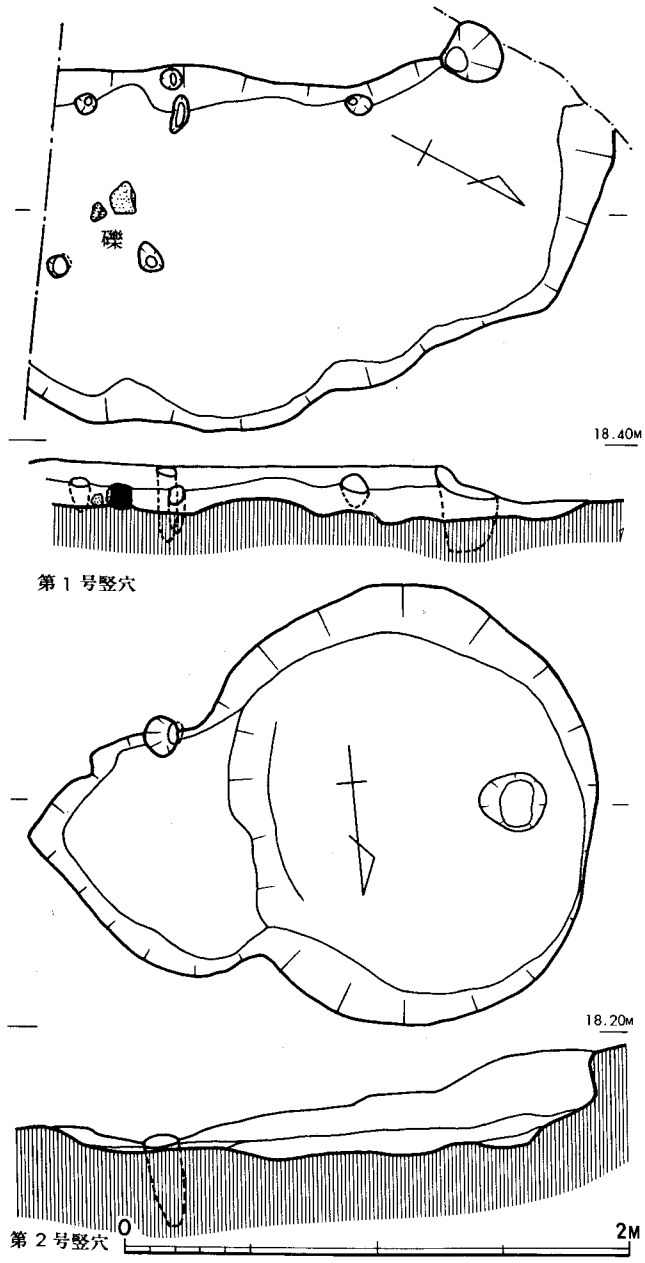
0.4mの間をおいて1号竪穴の西側にある。1.8×1.6mほどのほぼ円形の竪穴と思われ、後世東側に別の穴ができて、瓢形に近い平面形になったとみられる。床は皿状で、西側に径20cmほどの窪みがある。最も残りのよい西壁上端と床の最も深い所との比高は約40cmを計る。西壁は上方に内傾し、袋状であったことを思わせる。

東南側の柱穴は竪穴と無関係である。出土遺物はないが、形状と位置から1号竪穴と同様とみてよい。

3.第3号竪穴（第9図、PL. Ⅵ―2）

2号竪穴の東側にある。根や後世の穴さらには地山の崩落・削平などで東側はかなり荒されているが、元来は直径2.3mほどの円形竪穴であったろう。現状の深さは35cmほどで、床はほぼ平坦である。南側で多くの土器片が出土した。それらは床から数cm上にあり、北側に先土器時代の黒耀石製石核（**第5図8**）1点が出土した。竪穴放棄直後の流れ込みであろうか。土器は弥生式土器と無文土器とが混在して出土した。

遺物　8は壺である。胎土に石



第8図　第1・2号竪穴実測図

粒を混ぜ、外表面は暗褐色・内表面は黄褐色を帯びる。外表面は篦磨きを加え、肩部に貝殻腹縁による羽状文を施し、その上下端に各々2本の沈線をまわす。推定高25cm・口径14.6cm・腹径23.2cm・厚さ2～7㎜。7は壺形土器の肩部破片。石粒混り砂質胎土で黄褐～明褐色を帯びる。篦描沈線による羽状文を施し、その下に2本の沈線をめぐらす。また別に貝殻による重弧文を施す丹塗壺形土器小片1点がある。

5・6は高杯脚部破片で、石粒・砂粒混り胎土で、外面はていねいななで調整である。5は外面が黒褐色・内面が橙褐色、6は黄橙褐色。いずれも脚端部に明瞭な稜がつく。

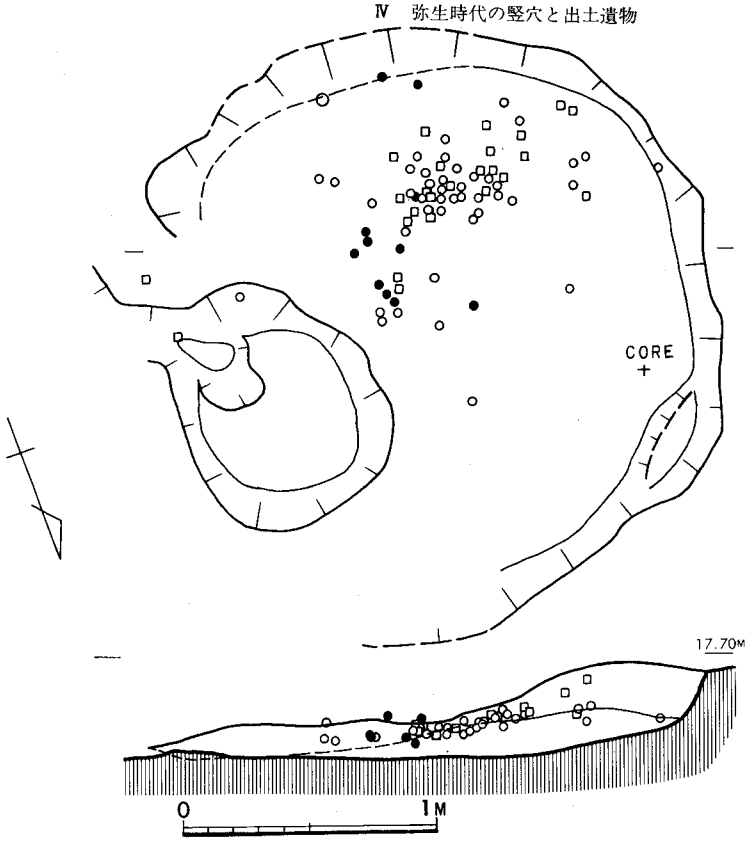
無文土器は6個体出土した。1は完形品である（PL. Ⅶ—1・2）。底部はやや上げ底で、円盤状の粘土にもう一枚粘土を張りつけ、胴部は幅2.5～3cmの粘土帯を巻き上げ、胴中央よりやや上に最大径をもつ。口縁下に粘土の継ぎ目がよく残り、器壁を内側から外側下方へそいだようにして、そこに上部の粘土帯を接合することが観察される。口縁部は内傾し、口縁端に直径1㎝弱の粘土紐をまきつけ、器壁上端をこれにかぶせるようになでつけて付着させる。口縁部のこの粘土帯を仮りに「口縁部突帯」とよぶ。器面調整は、内面は縦ないし斜め方向（右下→左上）になで、粘土帯接合部をなめらかにする。一部に刷毛目状の擦痕がみられるが、意図的なものでなく、篦状具でなでた時に生じたものであろう。口縁部内面は突帯付着後にていねいに横方向になで、突帯自体も篦状具でなでている。外面は縦ないし斜め（左上→右下）のなで、および一部に横なでを加える。底部近くは横なでだけである。なお、口縁部をみると、器体外表面をなで調整したのちに突帯を取付けることがわかる。突帯をおしつけるため、器体はその部分が溝状に軽くへこむ。こうした口縁部外表面の調整とへこみは、他のすべての無文土器甕に共通に認められる。底部と胴部との境は、底部が高台状に突出する部分と、底面から胴部へなめらかにつづく部分とがあり一様でない。

胎土には細かい砂が少し混り、また白色の石粒が混る。　色調は、内面が淡褐色で一部黒褐色、外面は上半の半分近くが黒褐色で、そこには所々煤のようなものが薄く付着する。他は赤褐色を帯び、器壁内部は淡褐色である。高さ21cm・口径17cm・底径6.3cm・胴部最大径19.6cm・厚さ5㎜前後・底部厚さ2cm。

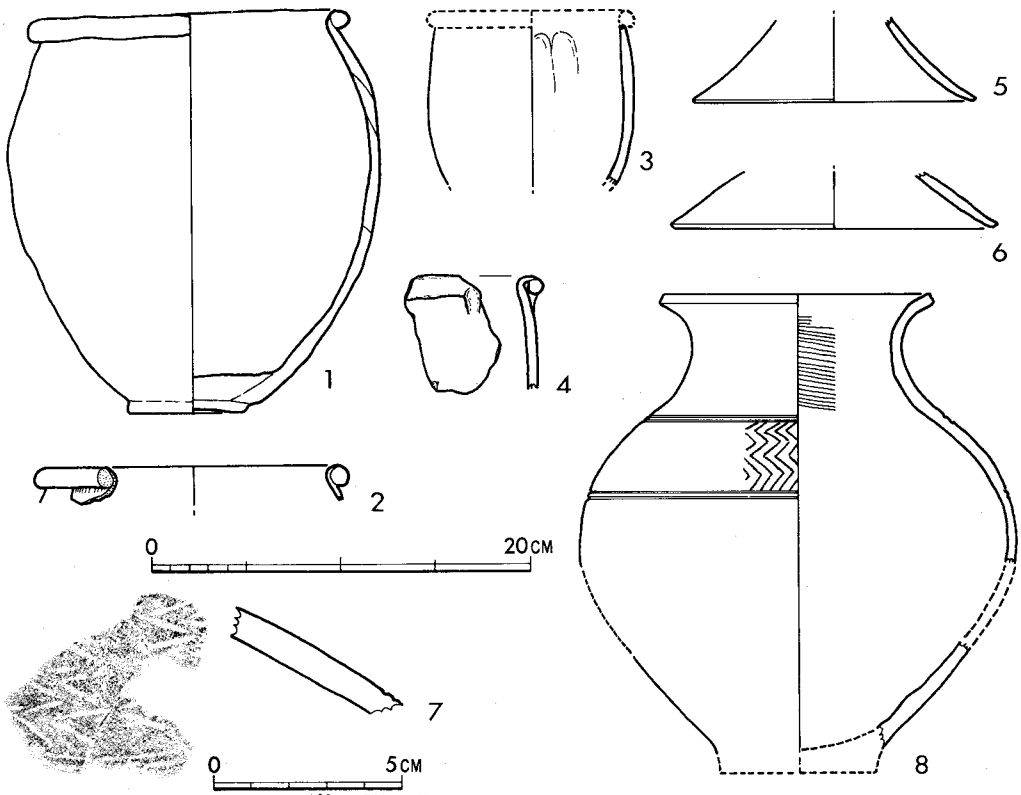
2は石粒混り胎土で淡い黄褐色を帯びる。器体口縁部には、突帯取付け前に口縁部に生じた刷毛目状擦痕が残る。口径16.6cm。3は石粒混り胎土で橙褐色。内外面ともなで調整でなめらかだが、内面上部には指なでの凹凸がある。口径約11cm。4は石粒混り胎土で橙味ある茶褐色。内外面とも横なで調整で、内面の一部に横位の擦痕がある。胴部外面の一部に黒色の煤が付着。突帯の一部に指で押して下方になでつけた痕がある。突帯の付着を確実にするためであろう。この他に突帯の破片が2片（別個体）あり、上記のいずれとも別個体であるから、本竪穴出土の無文甕形土器は6個体である（PL. Ⅷ—7・9・12・14）。

4.第4号竪穴（第10図、PL. Ⅴ—6）

1号竪穴の北西約4mにある。ほぼ北東—南西に長軸をもち、長さ約2.2m・幅約1.7mの長方形に近い。床は東北側が低く南西側が高い（比高30cm）。壁はもっとも高い部分で残高30cmである。南側は木の根などでひどく荒らされている。竪穴内埋土中に点々と土器片が含まれ



○ 無文土器片
● 板付Ⅱ式壺片
□ 弥生式土器片
（1記号が1破片を示すのではない）



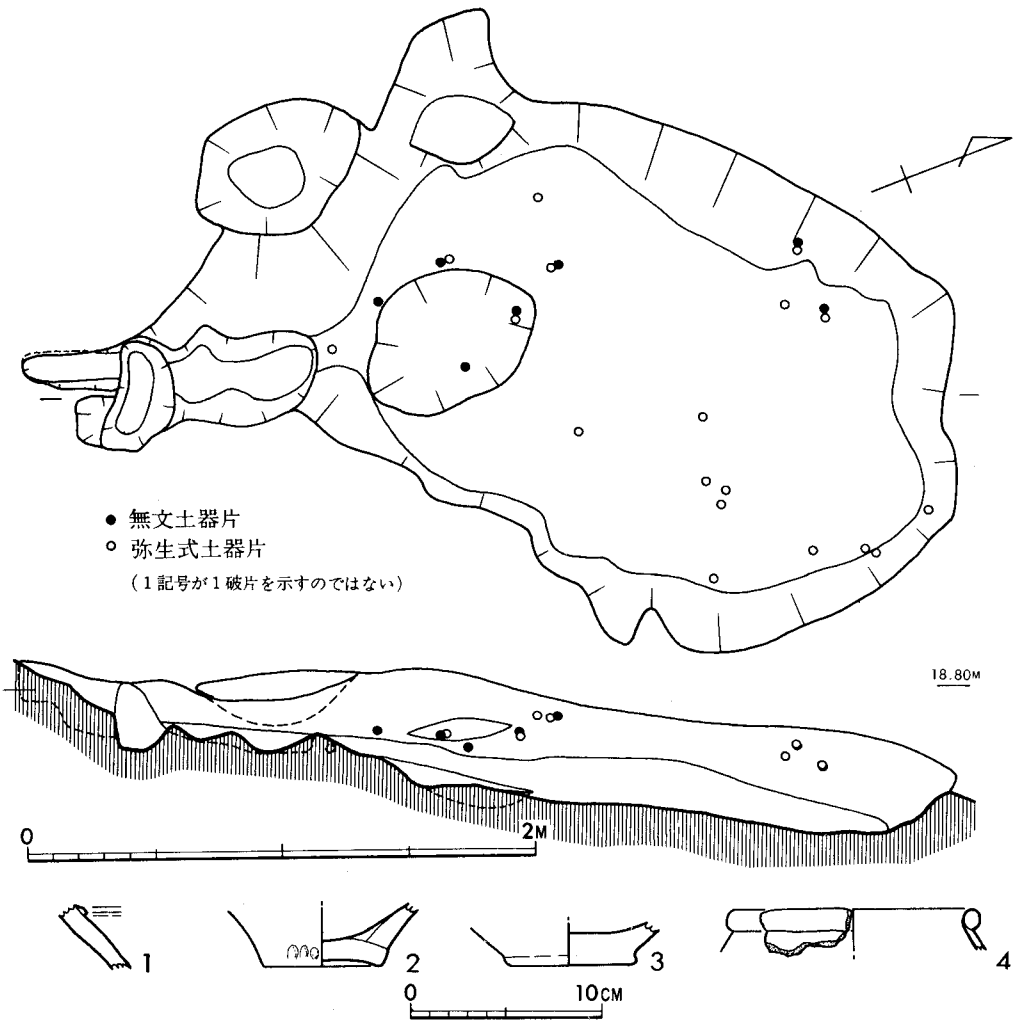
第9図　第3号竪穴と出土遺物実測図

ている。

遺物　1は壺破片で、胴と頸部との境に山形突帯がつく。外表はていねいな篦なでを施す。**4 (PL. Ⅷ—5)**は無文土器甕口縁部片で、口径13.4cm。胴部が強く張る。胎土に少量の石粒が混り、橙味をおびる暗茶色で、焼成はよい。突帯部の内面は横なでで、幅6～7㎜の平坦面をなす。2は底部片で、底縁に指押えの痕がある。壺の底部らしい。3は石粒・砂粒混り胎土で、底縁が外に張り出し、厚い作りで、無文土器甕の底部かとも思われる。他に各々別個体の無文土器甕突帯片4片が出土した。

5.第5号竪穴（第11図）

4号竪穴の東1.8m、6号竪穴の東南1.5mにある。東側は地山の傾斜のため壁が失なわれている。平面形は、北西隅が直角であるが、南西側は斜めに折れ、北壁も中央で中へ折れ、きわめて不規則な形である。床の西側が一段高く（10～20cm）、床面はほぼ平坦とはいえ凹凸がある。竪穴内には4枚の層が順序よく堆積しているが、層による遺物の変化はない。遺物は床

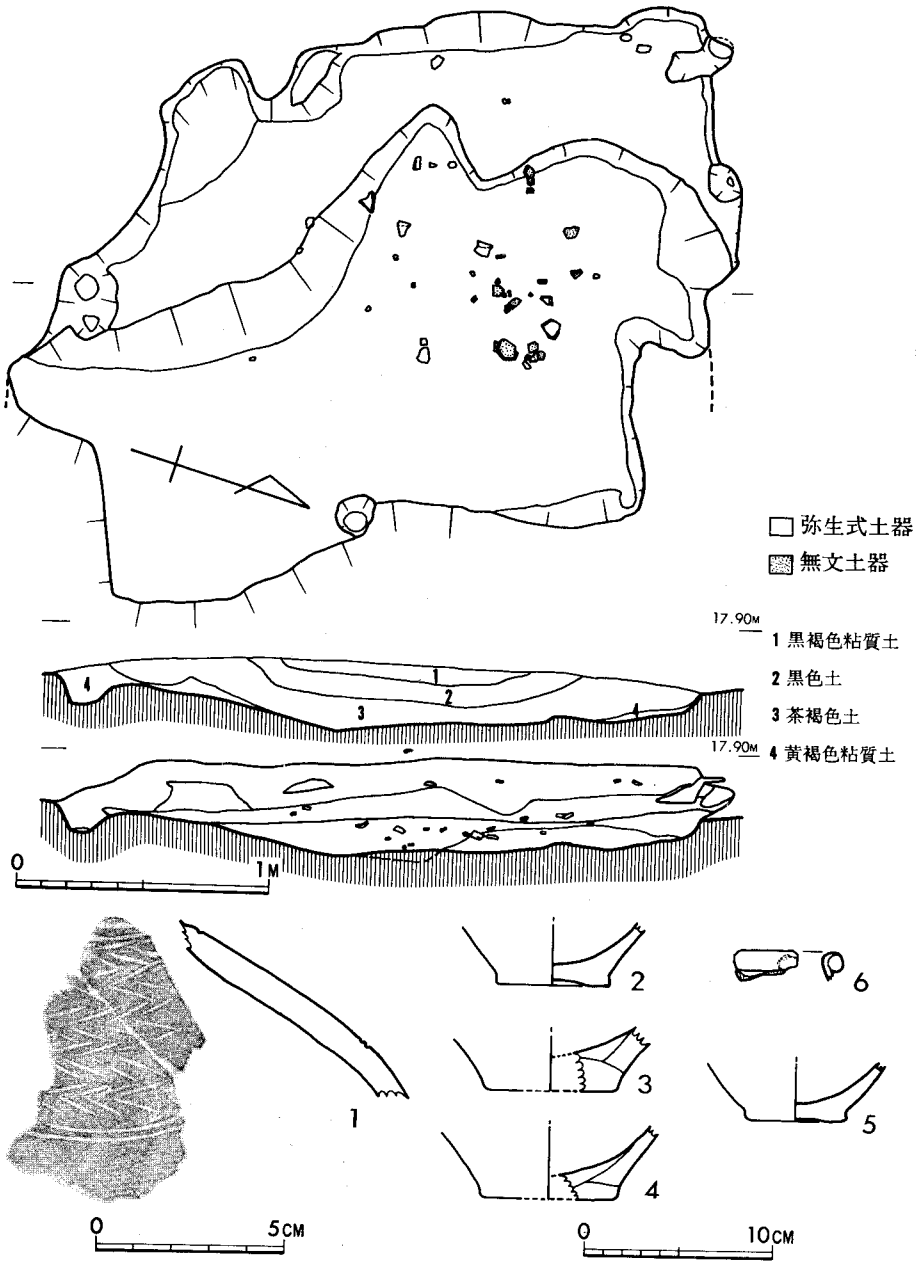


第10図　第4号竪穴と出土土器実測図

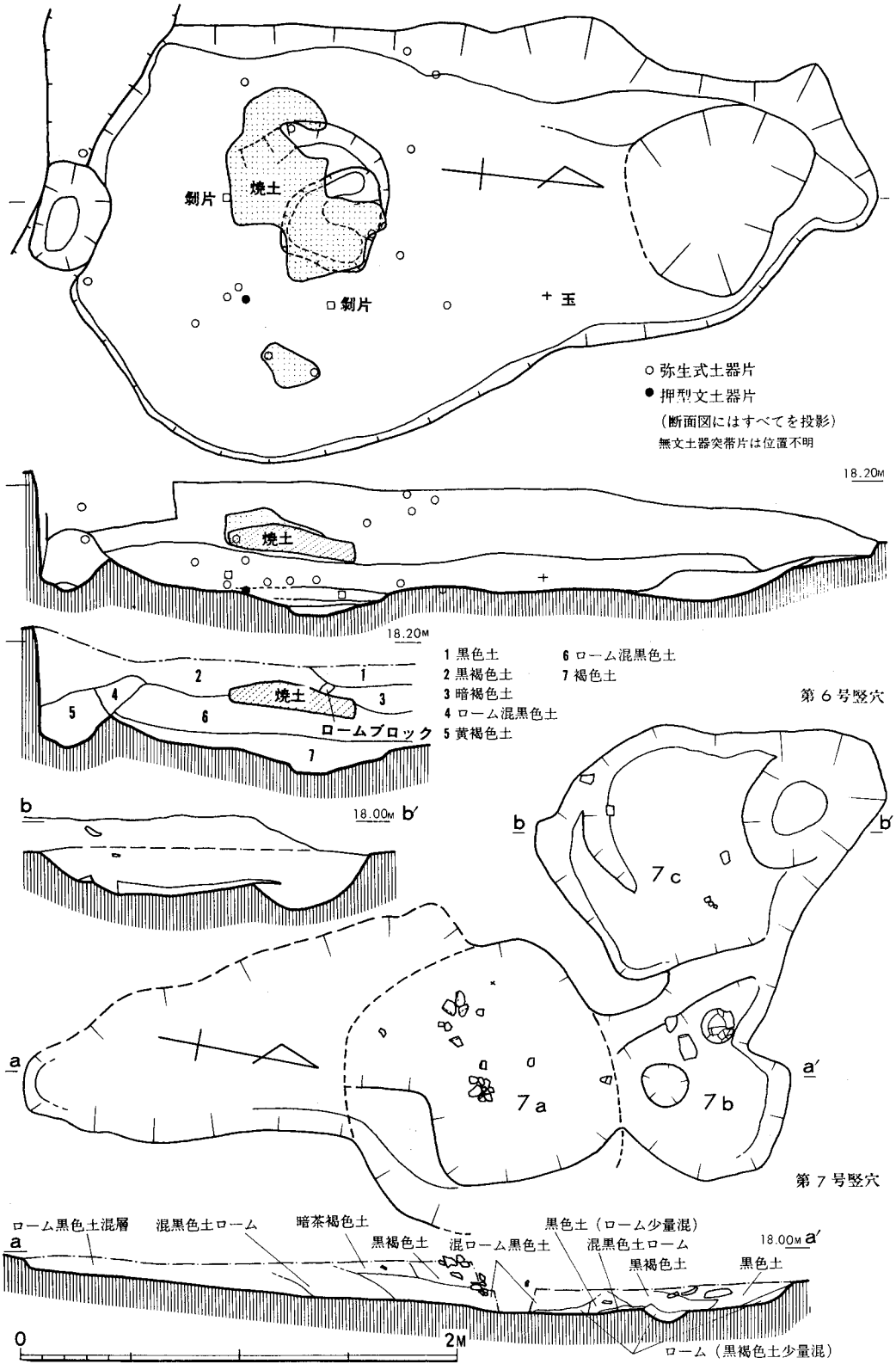
面に密着するもの、20cm以上浮いているものなど様々である。

遺物　1は壺の肩部片で、上下に各2本の沈線をまわし、その間に篦描羽状文を施す。胎土に石粒が混るが、焼きはよい。表面は淡い橙色味のある黄褐色、裏面は暗褐色をおびる。2～4は弥生式土器底部で、いずれも胎土に石粒・砂粒を混じ、黄褐色ないし暗褐色を帯びる。篦・指によるなで調整を施す。

6は無文土器口縁部片である。石粒を少量混ぜる砂質胎土で、外面は暗灰褐色・内面は黄褐色を帯びる。外面は篦状具で横なでされている。5は形状からみて無文土器底部と思われる。



第11図　第5号竪穴と出土遺物実測図



第12図　第6・7号竪穴実測図

多量の石粒を含む砂質胎土で、黄褐色を呈する。内外面ともていねいななで調整を施す。他に丹塗土器小片も出土した。

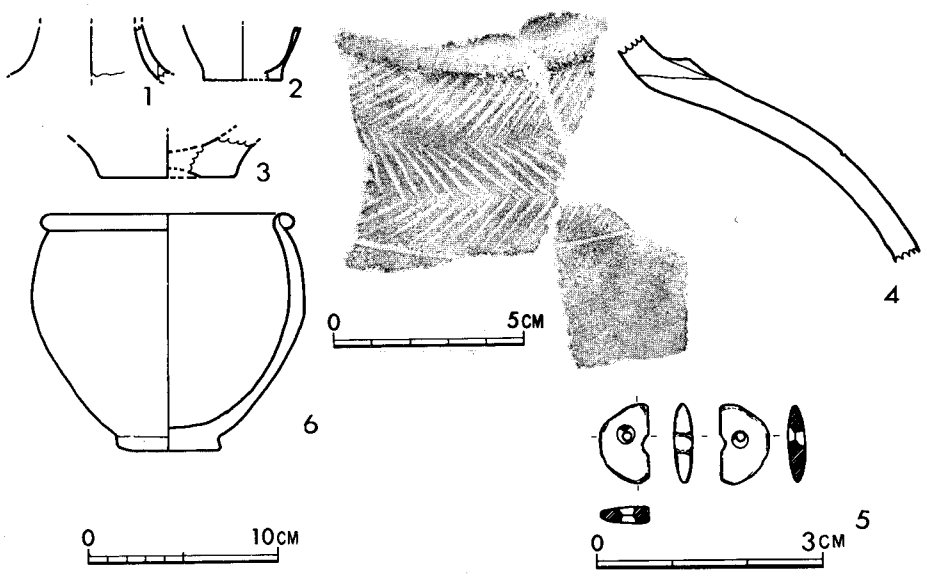
6.第6号竪穴（第12図・第13図、PL. Ⅴ－1）

北北西―南南東に長軸をもつ不整長楕円形に近く、南側は溝状の掘り込みに切られ、北側も別の竪穴に切られたようである。長さ約3.6m・最大幅約2mo床はほぼ平坦で、南側に最大径70cmほどの円形のくぼみがある。壁面はゆるやかに上り、高さ30～35cmを計る。南側を切る溝状掘込みは、東から西へ5号竪穴北西部から延び、現長約6m・幅50cmほどである。溝内に堆積した第5層では城ノ越式とみられる土器底部が出土した（これは盗難にあった）。竪穴内の南側、床のくぼみの上には厚さ10cmの焼土が床面上30cmの第6層上部にある。遺物の多くは床面と、この焼土より下で出土したが、より上部出土もある。しかし層毎の遺物の変化はみられない。なお床面から押型文土器片が出土したが、竪穴廃棄直後の流入であろう（第7図1）。

遺物（第13図）　1は壺破片で、やや砂質の良質の胎土を用いる。褐色ないし暗褐色で全体に橙色味を帯びる。内面は横なでを加えるが胴・頸の継目が少し残る。外面は篦なでであろう。4は大形壺の肩部破片。石粒混り砂質胎土で、外面は灰褐～黄灰褐色を帯び、内面は淡黄褐色を帯びる。内面は指なでで、外面は篦なでで調整する。頸と胴の間に三角形突帯をまわし、その下に篦描羽状文を施し、さらにその下に沈線を一本まわす。

2・3は底部片で石粒混り砂質胎土。2は表が淡黄褐色・内面が淡橙褐色で、焼成はよい。底面は少し上げ底で、外面は横方向のていねいな篦磨きで仕上げる。内面は風化している。3は外面が赤褐色・内面が淡黄褐色・内部が暗灰色。その他に埋土上部で無文土器突帯が1片出土した。

5は北側床面直上出土の玉。半月形で中央に軽いくぼみをつけ、中央をはずれて穿孔する。穿孔は両面から少し傾けて行う。長さ10.5㎜・幅6.5㎜・厚さ2.5㎜弱、孔径は外側が2～



第13図　第6号・第7a号竪穴出土遺物実測図
（6は7a号、他は6号）

2.5㎜・中心部で約1㎜、中央凹入部幅は2.5㎜。全体に白色を帯び、ところどころ淡緑色の部分がある(PL. Ⅷ—2)。

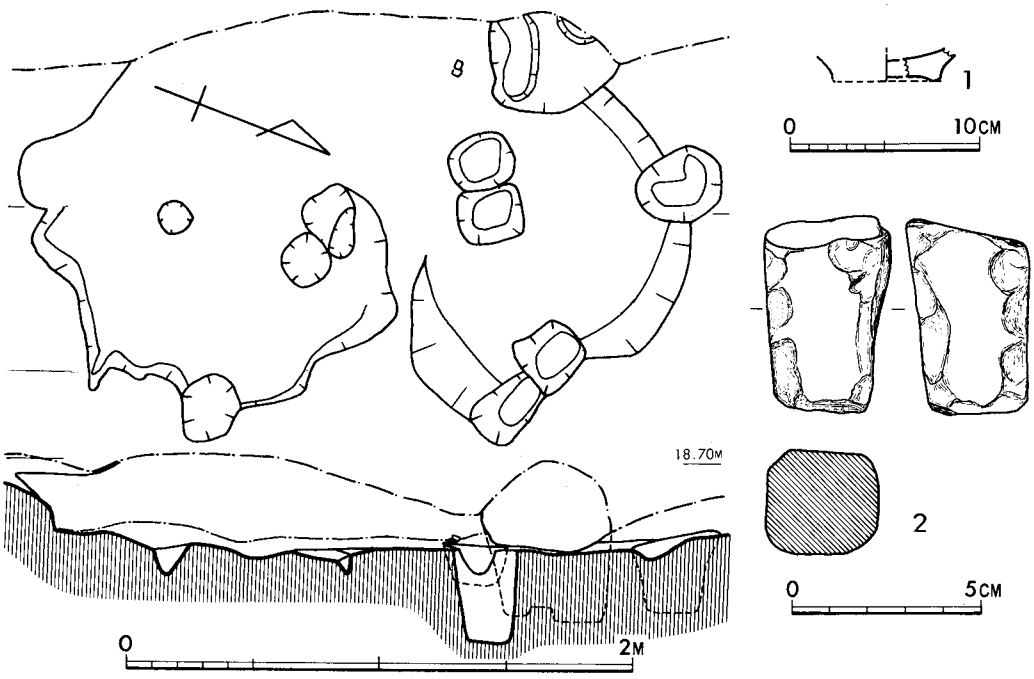
7.第7号竪穴（第12図・第13図）

平面形はきわめて不規則だが、埋土・遺物からみて、ほぼ円形の3つの竪穴が切りあっているものとみられる。南側の舌状突出部は単なる地山のへこみであろう。中央に径1.2～1.3mの竪穴があり(7a号)、これを切る径70～80cmほどの竪穴があり（7b号)、さらにその西に不整楕円形竪穴（7c号）があると考えられる。7b・cは出土遺物から古墳時代以降のものである。7a号は略円形と推定され、完全な皿状で、本来の形状は明らかでない。中央に1個体分の無文土器が南西から北東へ流されたような状態で出土し、その西側に黒耀石剝片1点が出土した。

遺物（第13図6、PL. Ⅶ—5）　無文土器甕である。石粒と砂が混る胎土は粗い。色はくすんだ橙褐色だが、内面は少し黄味を帯びる。底部と胴下部は完全に残るが、口縁部は¼ほどしかない。口縁部に直径8㎜ほどの粘土紐をまきつけ、器体上部を粘土紐にかぶせるようになでつけ、突帯を付着させる。底部はいわゆる円盤貼付け状で、高台をなし、底縁が外に張り出す部分もある。風化が甚しく器面調整は明らかでないが、なで調整であろう。胴部の上から⅓のところに最大径がある。高さ12.5cm・口径13.2cm・胴径16.2cm・底径5.5cm・胴部厚6～8㎜・底部厚1.3cm。

8.第8号竪穴（第14図）

7a号竪穴の北西約2.5mにある。参道のために西側は未掘である。後世の柱穴・木の根に荒らされているが、ほぼ南北長軸の長楕円形とみられる。長さ2.5m・幅1.5m以上で、壁は一番よく残っているところで高さ20cmほどである。北側に6個・南側に1個ある柱穴はいずれも



第14図　第8号竪穴と出土遺物実測図

後世のものであろう。

遺物　1は底部片で、石粒混り胎土で暗茶褐色を帯びる。その他の小片中に壺の破片もある。2は砂岩質の砥石で、長5.2㎝・幅は中央部で2.9×2.8㎝を計る。四面すべてを使用。

9.第10号竪穴（第15図）

3号竪穴の東1.5ｍにある。直径1.5ｍほどの円形竪穴とみられるが、西側と東側は木の根や後世の小穴・柱穴等で荒らされている。床はほぼ平坦で、壁はゆるやかに上り、もっとも高いところで高さが40㎝ほどある。遺物は弥生式土器片・無文土器片で、床から少し浮いた状態で出土し、埋土上面で土師器片1点が出土した。いずれも小片で形状不明である。

10. 第11号竪穴（第15図・第21図）

第10号竪穴の北北東約2ｍにある。南北に並んだ2つの竪穴であるが、各々で出土する土器片に接合するもののあること・両者の間にはっきり壁と認められるもののないことから、本来長さ2.5ｍ・幅1ｍほどの竪穴であったのが、上部が削平されたためあたかも2つの竪穴が並ぶようにみえると考えられる。壁はゆるやかに上り、残壁のもっとも高い所は床面から25㎝ほどである。

遺物　第21図1は壺の肩部片で、外面は丹塗り磨研である。頸・胴部間に三角形突帯をまわす。少量の石粒混り胎土で橙黄色を呈し焼成はよい。2は甕底部で、南側と北側とで出た破片が接合する。石粒混り胎土で外面は橙色・内面は暗茶色を帯びる。外面に刷毛目を施し、底は少し上げ底になる。この他に南側で板付Ⅱ式甕の大形口縁部片が出土したが、盗難で失われた。

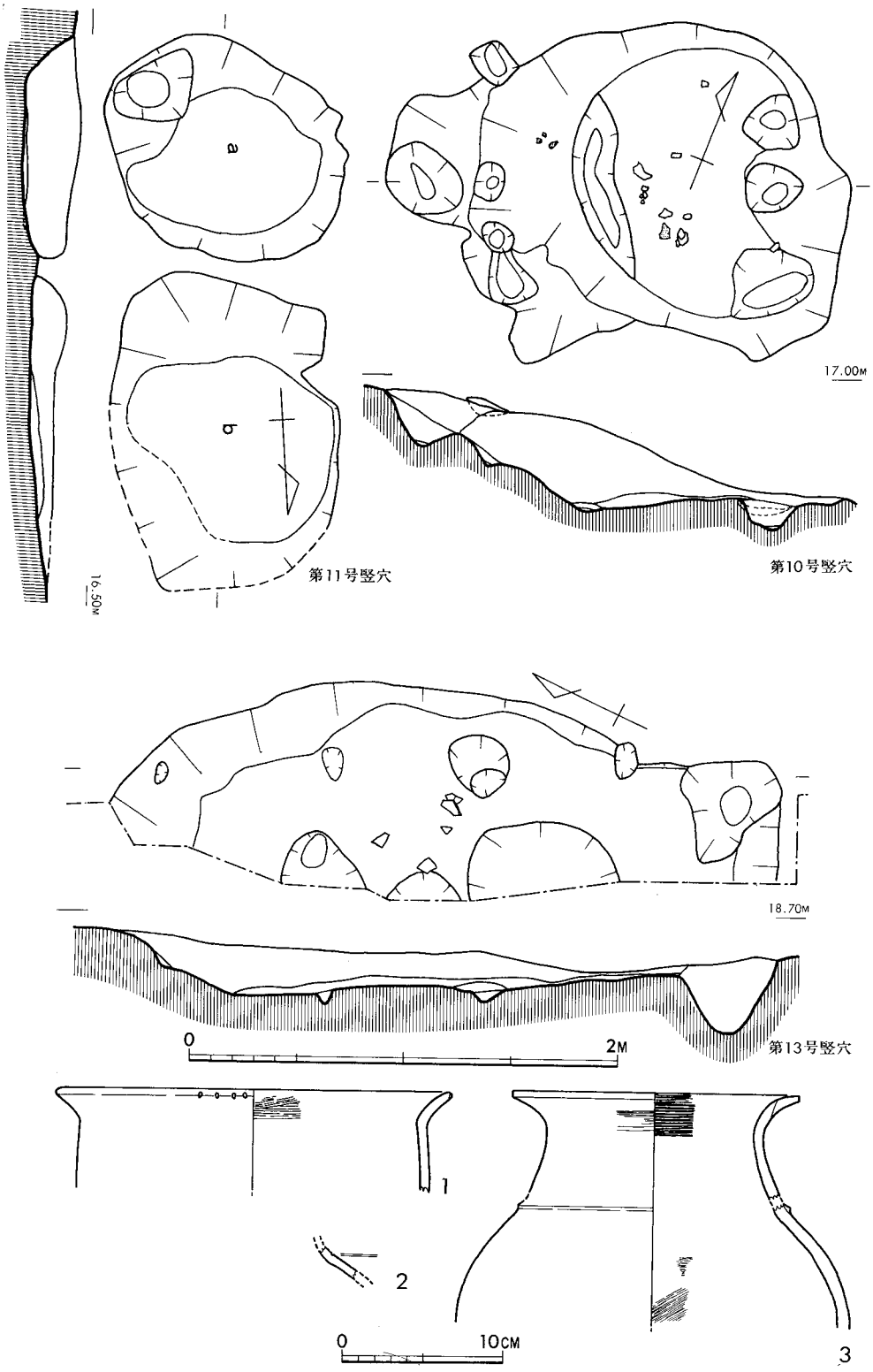
11.第13号竪穴（第15図）

第8号竪穴の北西約1.5ｍにある。参道があって西側は未調査である。木の根や後世の穴でひどく荒らされている。南側突出部は後世のもので、本竪穴の長さは約2.5ｍ・幅は1ｍ以上である。床はやや凹凸があり、壁はゆるやかに上り、北壁の高さは30㎝弱である。

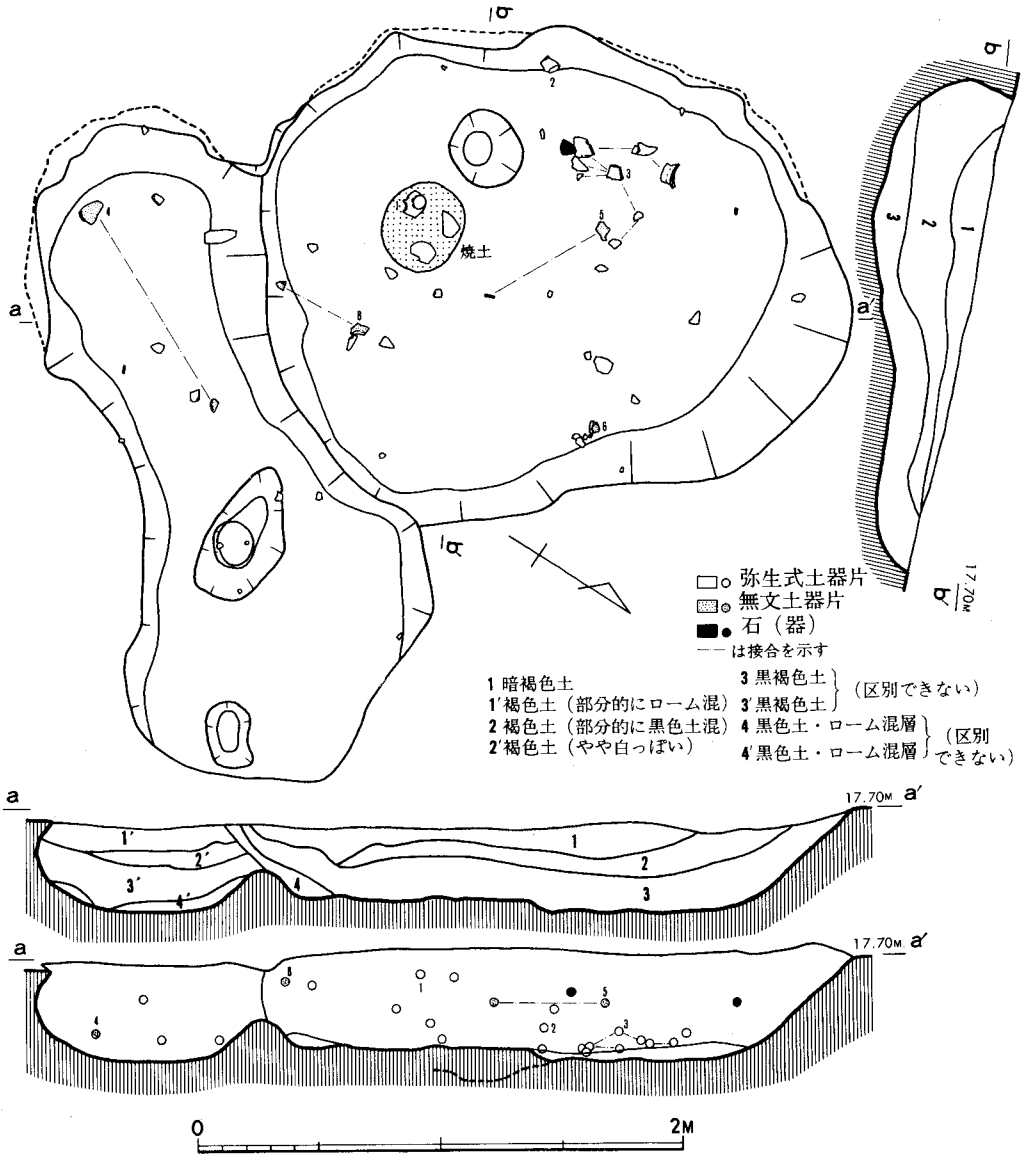
遺物　1は如意形口縁の甕形土器で、胎土は石粒・砂粒混り粗質で、内面は暗灰褐色・器壁内部は黒褐色・外面は橙褐色を帯びる。口縁部に刻み目を施し、外面はなで調整を施し、内面は口縁部に横位の刷毛目・その下に縦なでを施す。口径24.6㎝。板付Ⅱ式。2は小形壺肩部破片。肩・頸の境に沈線1本をまわす。石粒混り粗質胎土で黄褐色を帯び、焼きしまりは良い。内外面とも横方向の篦なで調整を施す。3は壺の破片で、胎土に石粒と砂粒が少し混じる。橙褐色を帯び焼きしまりは良い。頸は上方へすぼまり、口縁は外反する。頸・胴の境に三角形突帯をまわす。口縁端部は刷毛なでで中央が少しくぼむ。口縁部から頸上部は篦の横なでで刷毛目状擦痕がある。その下突帯までは篦の縦なでで一部は磨研に近い。突帯以下は篦状具の横なでで、一部に煤状の黒色の付着がある。内面は、口縁部に横位の刷毛目、頸部は横なで、頸下部の胴との接合部は縦なで、肩部は斜めと横の篦なで、胴腹部は篦なでで刷毛目状擦痕がある。口径18㎝・胴径24.6㎝・現高14.5㎝。

12.第14号竪穴（第16図・第17図、PL.Ⅴ－2）

7a号竪穴の北、13号竪穴の西にあり、間隔は各々5ｍ・3.5ｍである。二つの竪穴が切りあっている。南側（a）は長さ2.8ｍ・最大幅1.3ｍほどの瓢形で、これを切る北側（b）は2.4



第15図　第10号・第11号・第13号竪穴と第13号竪穴出土遺物実測図



第16図　第14号竪穴実測図（遺物No.は第17図のNo.に一致）

×2ｍほどの楕円形の平面形である。出土遺物の上で両者の差は認められず、埋土もほとんど同じである。両者とも床は平坦で、西側の壁は外方にひらいたのち、上方へ袋状にすぼまる。壁が外方にもっとも張り出すのは床面上25cm前後のところで、現在なだらかになっている北～東側の壁も本来袋状だったと考えられる。a 床面の柱穴（床面からの深さ20 cm）は後世のもので、本竪穴西側の古墳時代以降の住居址（？）のものかもしれない。東北側壁は地山削平で失われている。

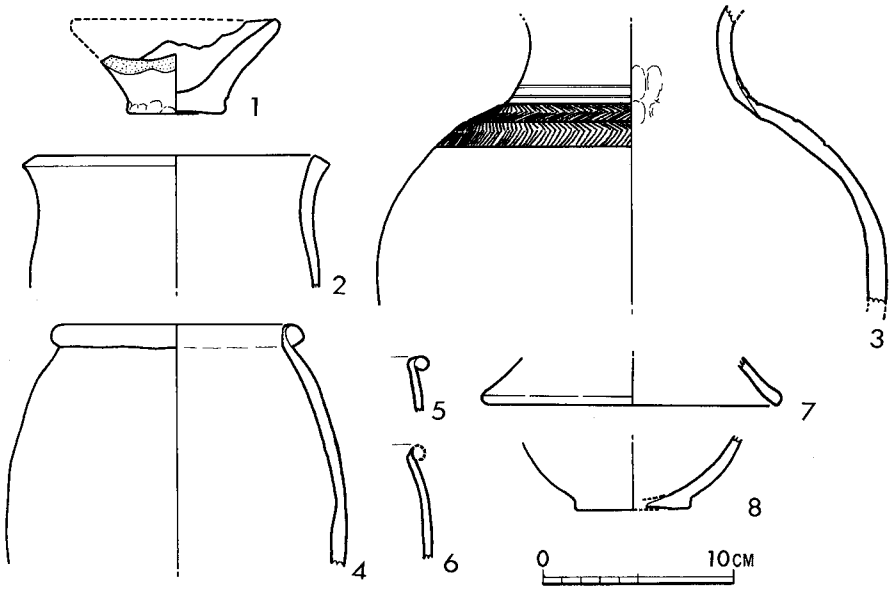
14b 号の床面西側には径30cm・深さ10cm未満のくぼみがあり、その東側の床面上10cmほどに径35cmほどの焼土がある。竪穴内埋土の各層で出土遺物の差は認められない。

遺物（第17図）　1は鉢形土器で、小石粒混り胎土を用い、外面は茶～橙褐色を帯び、一部に焼成時の黒斑がある。内面は黒色～黒褐色。厚ぼったい作りで、厚さは口縁部8㎜・胴部12㎜・底部10㎜を計る。外面調整は口縁部が横なで、それ以下は箆状具の縦なでで、なでた面どうしが稜をなすようになり、上部ではこの上を横なでする。底面はなで、底部と胴との境は指で押える。内面は箆なでで、下部に箆側縁痕がある。器面調整はきわめてていねいで、石粒は完全に沈んでいる。推定口径11cm・高さ5cm・底径5.1cm。無文土器の鉢か？

2は口縁部片。傾きは図示したとうりかどうかはっきりせず、下方がさらに内傾するかもしれない。本来の器形はわからない。小石粒混り胎土で淡橙褐色を呈する。風化して調整ははっきりしないが、なでであろう。口縁端は横なでで、内面上部はなで、その下は指押えらしい。口縁端厚は1cmと厚く、胴部は薄く0.3cmほどのところもある。3は壺の破片。石粒混り胎土で、外面は暗褐～淡黄褐色、内面は暗茶褐色。頸下部から肩上部に5本の沈線がまわり、そのうち下3本の間の2つの空隙部に貝殻腹縁による無軸羽状文を施す。羽状文を施したのち、その端部を消すように沈線を施す。外面調整は箆なでないし磨きで胎土中の石粒を沈め、少し光沢がある。内面は頸部が横なで、頸下部から肩部は指押えで接合部をならし、その下は多方向のなでで調整する。胴径27cm・現高15.5cm・厚1～0.6cm。

7は高杯脚端部片。少量の小石粒混り胎土で淡黄褐色を帯び、全体をなで調整。径15.8cmを計る。以上はすべて14b号竪穴出土。

4は無文土器甕。少量の石粒と多量の砂混り胎土で黄褐色を呈する。口縁に断面1.1×0.9cmの粘土紐をまわし、この上に器体上部をおおうようにかぶせてなでつけ、突帯と口縁内面を横なでし、口縁内面に幅1cmほどの平坦面ができる。その下は指押えとなでで凹凸がある。外面は突帯とその直下までは横なでで擦痕が生じ、その下は風化しているが、ところどころていねいな箆磨き痕があり、その時生じた擦痕が一部にみられる。口径13.4cm・胴径18cm・現高13



第17図　第14号竪穴出土土器実測図

cmを計る(PL. Ⅷ—13)。

5は無文土器口縁部片である。小石粒混りで暗茶色を呈する。焼きしまりは良い。口縁部突帯上面は刷毛なでで平坦になり、刷毛目が少しある。内面は縦なでで凹凸があり、外面はていねいな横なで調整である。6も突帯が外れているが無文土器甕で、胎土は小石粒混り、色は淡茶～茶褐色である。口縁内面は突帯とりつけ時の横なでで外開き平坦面をなし、その下は縦の指なでで凹凸がある。外面はていねいな縦なで。

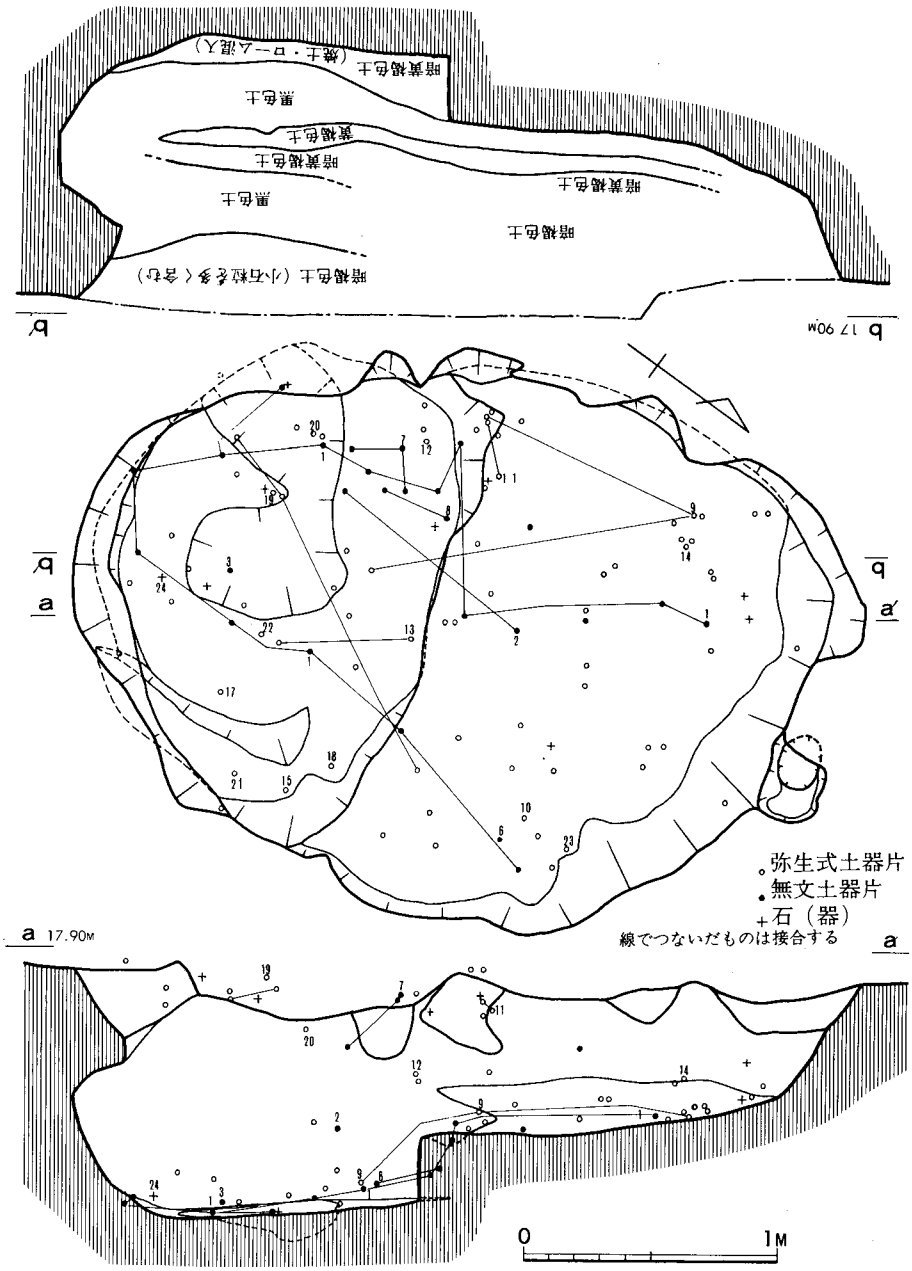
8は無文甕形土器とみられる底部片である。小石粒混り砂質胎土で、淡橙褐色。外面はきわめてていねいな箆なでで、内面は箆なでで細かい擦痕を残す。底部は高台状で、胴下部の曲り方は胴張り無文土器甕と同じである。以上は14a号出土である。他に上記無文土器とは別個体の無文土器突帯片がaとbとで各々2点ずつ出土した。

13. 第17号竪穴（第18図・第19図、PL. Ⅴ—4）

14号の北6m、20号の東1.3mにある。北西—南東長軸の3×2.1mの楕円形平面をもち、この種竪穴中最も深い。床は高さ25cmほどの垂直の段で2段にわけられ、南が低く北が高くなり、二つの竪穴の切合いのようにみえるが、平面形・埋土の状態・出土土器片の接合状態から、本来このように段を設けていたことが明らかである。床はほぼ平坦だが、北側は中央が低く壁際へ高くなり、南側は中央から西側へ大きなくぼみがある。南壁～西壁は袋状に上方へすぼまる。北～東壁はそうでないが、袋状壁の上部が崩落したものであろう。袋状壁の状態は南壁によく残る。すなわち床から50cm上までは外方へ開いてゆき、そこから急に内傾するが、この内傾部は床面上80cmほどで終る。この内傾部が本来さらに上方へつづいていたかどうかは不明だが、もしつづいているとすれば上縁は床にくらべきわめてせまくなろう。現在残る壁上端は南側床より100cm、北側壁より65cmの高さにある。内部堆積層は6枚あり、遺物は各層で出土し、床面近くと埋土上部にとくに多いが、上下で差はない。

遺物（第19図）1（PL. Ⅶ—3）は無文土器甕で、胎土には小石粒を混ぜ、色は暗茶～橙茶色である。口縁部に径1cm弱の粘土紐をまわし、器体上部をこれにかぶせて付着させる。器体上部は幅3.5～4cmの粘土帯をつないで作る。粘土帯の継ぎ目は外から内へ傾むく。下部の製作方法は明らかでない。底は薄くやや上底になる。胴と底とのつながりはなめらかで高台状にはなっていない。風化のため器面調整は明らかでないが、上部外面は横なで、内面上部は縦方向の指なである。高さ19.5cm・口径14.7cm・胴径18cm・底径6.6cm・厚さ0.4～0.6cm。これは小片になって床面直上の全面に散乱していた。

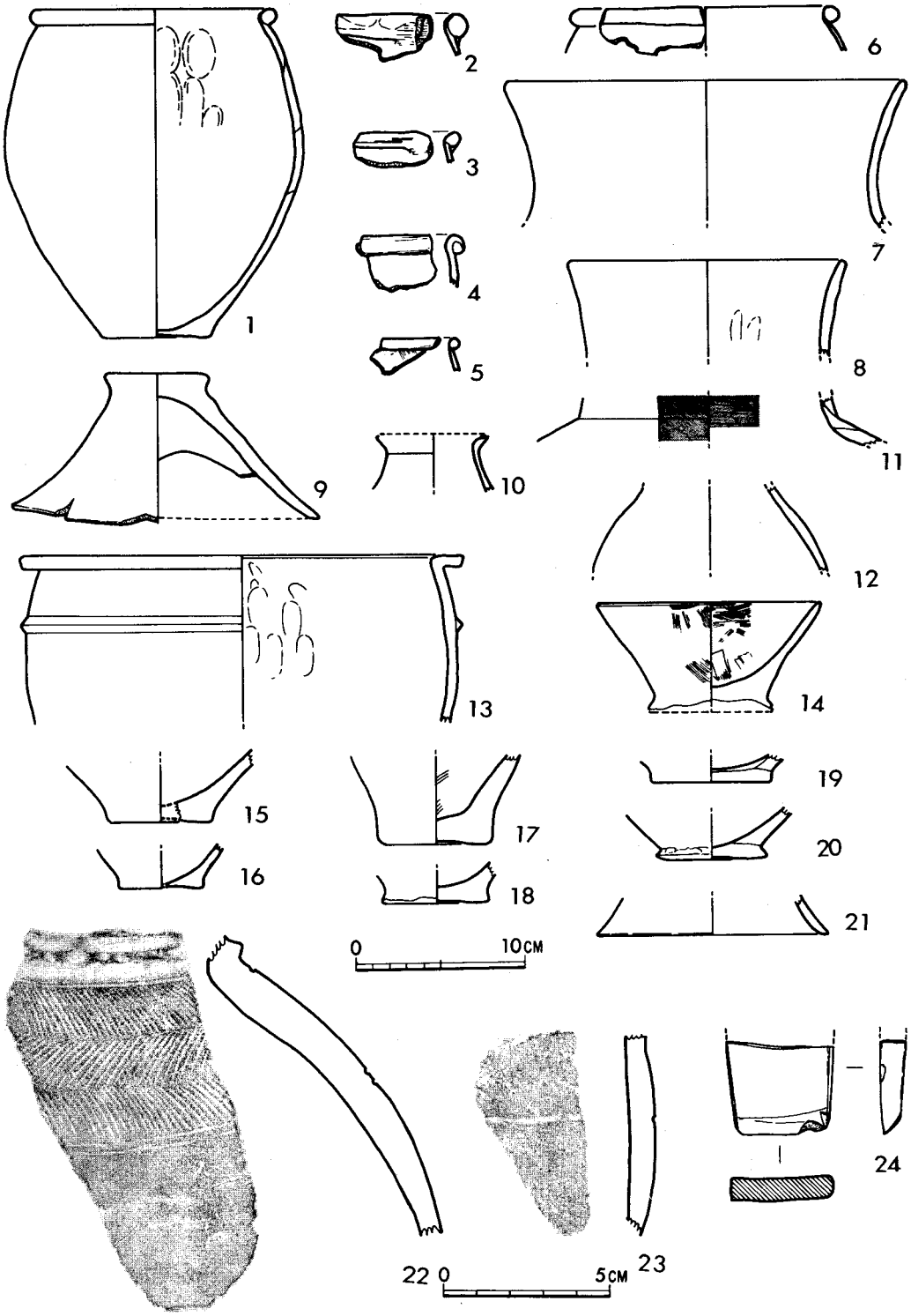
2～8は無文土器口縁部破片である(PL. Ⅷ—1・2・4・6・10・11)。2は小石粒混りで黄茶褐色を帯びる。突帯は径1.4×1.2cmで太い。器体厚はこれに反し3～4㎜しかない。突帯の付着を一層確実にするためか、突帯外面の一部を下方へ指で押しさげて器体に密着させる。内外面とも横なで調整。南側床面上約30cmで出土。3は小石粒混りで橙黄色を呈し、2と同様突帯外部に指で押した痕がある。突帯上に刷毛目状の線が少しある。南側床面直上出土。4は径6～7㎜の細い粘土紐をすっぽりと巻くように器体を厚くかぶせている。石粒混り胎土で橙味のある暗茶色を呈する。外面は横なで、内面は指押えの上を横なでする。5は少量の石粒混り胎



第18図　第17号竪穴実測図（遺物のNo.は第19図のNo.に一致）

土で黒～暗褐色を帯びる。焼成はよい。突帯をつける前に器体外面をなでたらしく縦方向の刷毛目状擦痕がある。**6**は石粒混りで黄褐色を呈する。突帯は径１cmほどである。内面は指の縦なでの上を横なでし、外面は横なで調整である。口径約16cm・厚３～４㎜で、北側床上25cmで出土。

7は壺の口頸部破片。胎土に石粒を少量混ぜ、黄褐色を帯びる。頸中央が細く、口縁部は外に開き、下も胴部へ向って外開きになる。口縁端は稜をなさず丸味がある。外面と口縁部内面はなで調整で、頸部内面は指押えと縦なでのあと軽く横なでする。厚さはほぼ均一で約0.7cm・



第19図　第17号竪穴出土遺物実測図

口径約24cm・頸部のもっとも縮約するところの径は約20.5cmを計る。南側床面上65～85cmの埋土上部で出土。8も同様の壺頸部破片らしい。石粒混り胎土で、外は黄褐色・内は灰褐色を帯びる。外面と内面上部は篦の横なでで、内面下部には指なでの痕がある。復元口径16～17cm・厚さ0.7cmほど。傾きは図示したよりもっと強く、口縁がより外反するかもしれないが、破片が小さく、また口縁端部に凹凸があって確定しえない。南側床面上10cmほどで出土した。以上7・8は無文土器甕に伴う壺形土器とみられる。

9は土器蓋で、小石粒少量混入の砂質胎土である。外面は黄橙褐色ないし暗黄褐色、内側は橙ないし黄橙褐色を帯び、内外面とも横なで調整する。頂部外面には黒色煤が付着し、内面上部（口縁から2～2.5cmより上）には黒色有機物が厚く付着している。高さ9cm・口径18.4cm・頂部径6cmを計る。床面直上出土。

10は小形壺口頸部破片。砂質胎土で淡黄褐色。口縁と頸の境に細い沈線が一本まわる。外面はなで調整。口径6.6cm。埋土上部で出土。板付式土器。11は丹塗壺の頸下部～肩部破片で、良質の砂質胎土を用い、外面は橙色、内面は橙黄色を呈する。外面は篦なでを施し、頸部には間隔の広い刷毛目を施して、全面に丹を塗る。内面は横なでのあと、頸部だけ丹を塗る。埋土上部で出土。中期初頭に位置づけられる。12も壺の破片である。石粒混り砂質胎土で、外面は橙色・内面は黄褐色を帯びる。内外面ともなで調整。埋土中間部（南側床上約50cm）で出土。

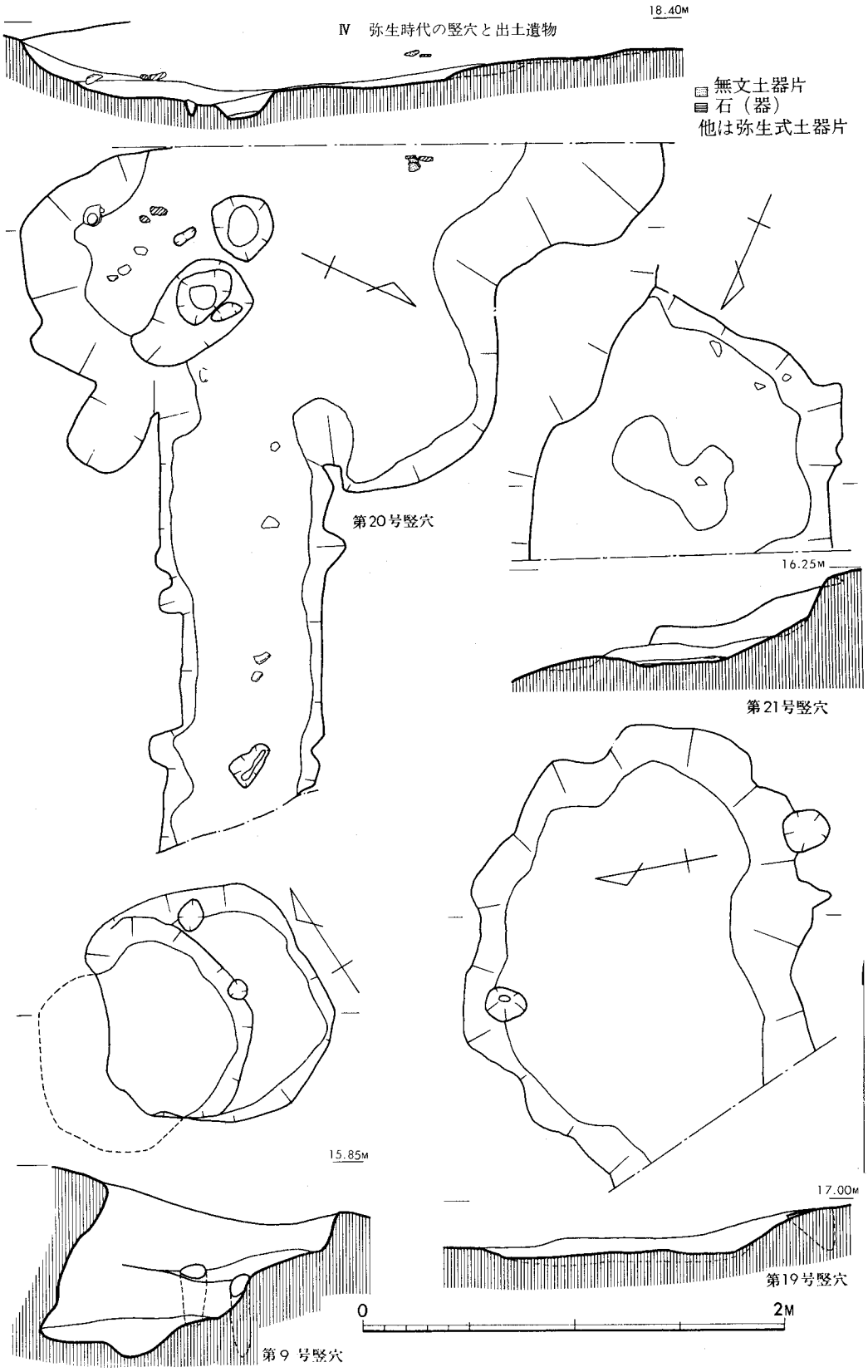
13は甕の口縁部破片で、胎土は石粒混り砂質である。淡茶褐色で、黒色の煤が少量付着している。口縁部はほぼ直角に外に折れ、口縁下4cmに三角形突帯が一本まわる。口縁端と突帯に刻目はない。外面と口縁部内面は横なでで、内面下部は指の縦なでである。口径26.5cm・現高10cm。埋土上層で出土。板付II式の中でももっとも後出のもので、中期への移行を示すものである。

14は石粒混り胎土の鉢形土器片で、暗灰褐色を呈する。底部は破損しているが、一部に胴から底面へ曲る部分を残す。内面上部は刷毛目を施し、その下は篦なでで、外面もなでにより刷毛目状擦痕がつく。北側埋土層略中間部で出土。

15～20は底部破片である。15は石粒混り胎土で、色は橙黄褐色。内外面ともなで調整でやや上げ底。埋土上部出土。16も石粒混り胎土で、淡黄褐色。なで調整。上げ底。17も石粒混り胎土で黄茶褐色を帯びる。外面は指なで、内面は刷毛目が少しある。埋土層中位で出土。18は橙色で太い石粒が混る。外面は指のなでと押え、内面は篦なで調整。埋土層上部で出土。19は橙～橙黄色で、石粒混り胎土。外面は横なで、内面は篦状具でなでて調整。埋土上面出土。20は円盤貼付け状の形で、胎土に石粒を混ぜ、外は褐色、内は黒褐色を帯び、外は指のなでと押え、内は篦なで調整。埋土上部で出土。

21は高杯脚部破片。石粒混り胎土で橙褐色を帯び、一部に黒斑がある。外面は篦なで調整。埋土上部出土。

22は壺の肩部破片。石粒混り胎土で、焼成はきわめてよく、淡黄褐色を帯びる。頸と肩との境に三角形突帯をまわし、下に沈線1本をまわして貝殻羽状文を施し、さらに沈線2本をめぐらす。外面は施文前に篦磨きを加え、内面は指なで。埋土層上部出土。板付II式の新しいもの



第20図　第9号・第19号・第20号・第21号竪穴実測図

である。23は甕胴部片。石粒混り胎土で赤褐色。外面は縦方向の刷毛目を施し、沈線を1本まわす。埋土層上部出土。板付II式。

24は扁平片刃石斧破片。残長2.8cm・幅3.2cm・厚さ0.8cm。南側床面直上出土（PL. Ⅷ— 3）

14. 第19号竪穴（第20図）

D区にあり、この種竪穴中もっとも北に位置する。西側は未調査だが2×1.5mの不整長楕円形である。床はほぼ平坦で、現在の深さは約20cmある。埋土内から少量の弥生式土器片が出土し、埋土上面で陶磁器・土師器などが出土。

15. 第20号竪穴（第20図・第21図）

17号竪穴の西側にあるが、木の根などに荒らされ、平面形はとりとめがない。2m強の楕円形とみられる。東側にはこれを切る幅70cmほどの溝があり、これは17号竪穴南側を切って東側へのびている。溝内からは弥生式土器片が出土した。

遺物（第21図）　3は無文土器甕の口縁部（PL. Ⅷ—8）。石粒が少し混り、黄褐色である。突帯は直径1cmほどである。外面胴部は箆なでらしい。突帯部は横なでで、口縁部内面は平坦面をなす。内面は縦なで。4は石粒混り胎土の底部片。石粒の中に金色に光るものもみえる。外面は暗茶色で内面と内部は橙茶褐色である。外面は胴部が箆縦なで、底部が指なで、内面は箆なで調整である。底部は厚く2.1cmある。外表面には、厚さ0.5㎜ほどの外皮の剝げたようなところがあり（表面の0.5㎜くらいが暗茶色）、表面に泥土をぬりつけて化粧がけしたようにもみえる。形状からみて無文土器底部と思われる。

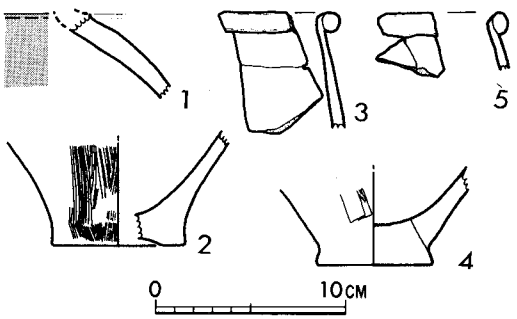
16. 第21号竪穴（第20図・第21図）

17号竪穴の北西10.5mにある。東側は地山が削られて崖状になっているために失われた。もとの形状は不明。床は中央へむかって皿状にへこみ、さらに中央は一段へこむ。第21図5（PL. Ⅷ— 3）は石粒を含まない砂質良質胎土の無文土器甕である。褐色を帯びる。口縁部に突帯をつけ、内面を斜めに削り落したような平坦面を作る。そこに刷毛目状の擦痕がつく。全体になで調整を施す。

17. 第40号竪穴（第22図・第23図、PL. Ⅴ— 3）

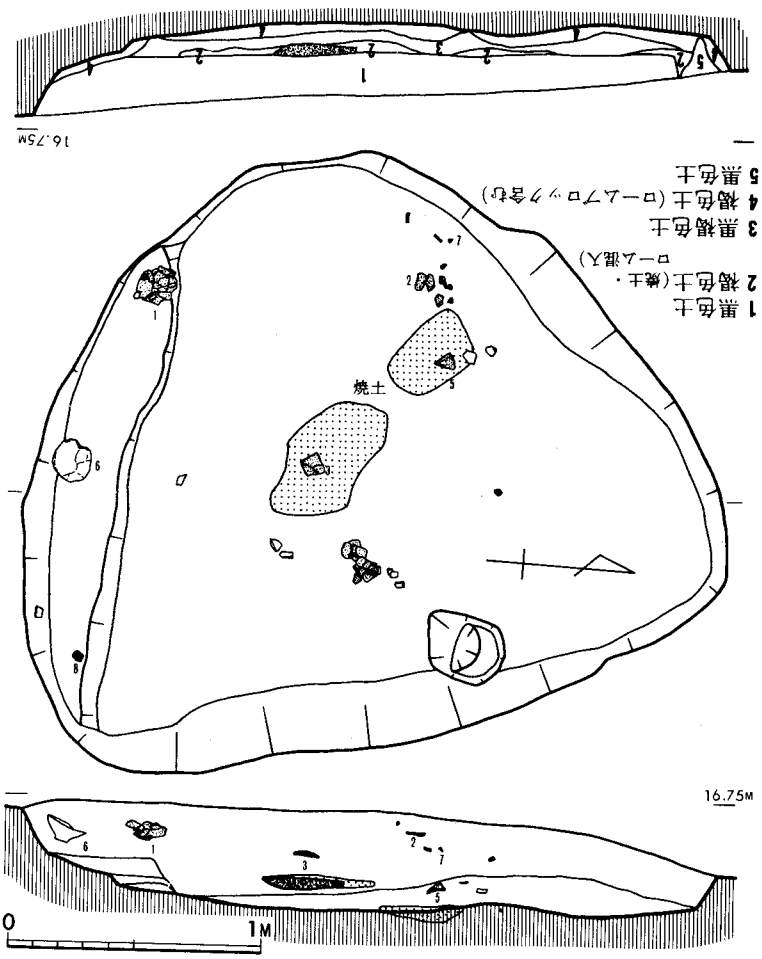
平面形は三角形に近い不整円形で、南北2.8m、東西2.4mを計る。南側床は長さ2m・幅30cmが一段高くなる。床はほぼ平坦で、中央やや西寄りに床が皿状に赤く焼けた部分がある。また竪穴中央の床上10cmほどの第2層上に焼土がある。壁はゆるやかに上り、南西側での壁高は35cmほどである。東北側の柱穴は後世のもので、中から土師器片が出土した。遺物は竪穴内全面で、床面から少し浮いて出土し、1層と2層とに含まれている。

遺物（第23図）　1は無文甕形土器完形品（PL. Ⅶ— 6）。南西側で出土した。胎土には石粒が混り、外面が赤褐色ないし橙赤褐色・内面が暗褐色・内部は黄褐色である。器壁上



第21図　第11号・第20号・第21号竪穴出土遺物実測図
（1・2：11号、3・4：20号、5：21号）

端で巻き込むようにして突帯を付着し、口縁上端は篦なでで平坦とし、そこに刷毛目状の擦痕がある。またいっしょに出土したが、本体に接合しない口縁片は口縁突帯から斜め下方に短い粘土紐を付着させ、両側を器体になでつけている。外面はていねいな指なでのあとを篦状具で軽くなで、底部縁の一部にその側縁の痕がみえる。内面もていねいになで調整を加える。底部は部分的に高台状で、胴との境が明瞭であるが、なめらかになる部分もある。高さ14cm・口径11.2cm・胴径12.4cm・底径5.8cm。



第22図　第40号竪穴実測図
（遺物No.は第23図No.に一致）

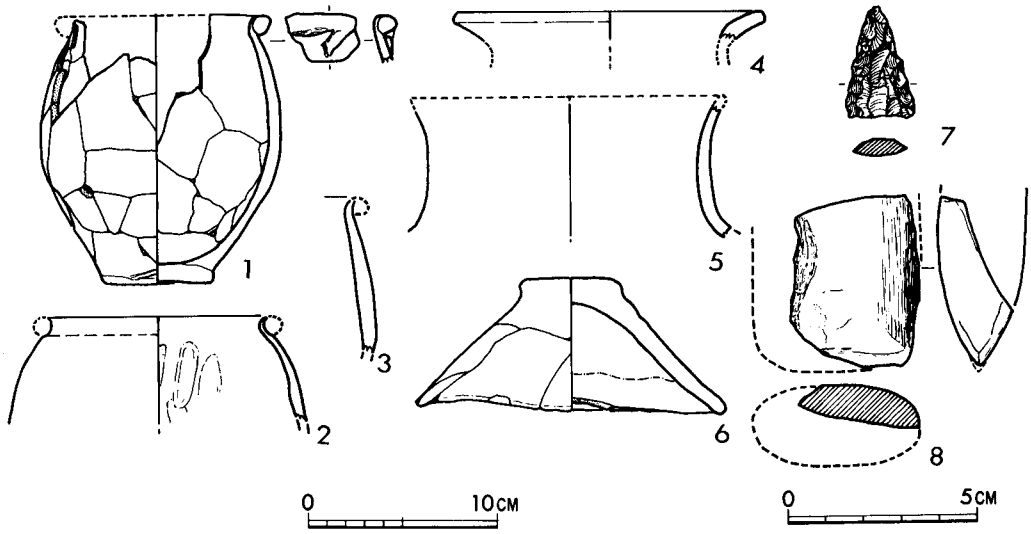
2・3も無文土器甕だが、突帯ははずれている。**2**は口縁が極端に内傾する。石粒混り胎土で、内面は黄茶褐色で全面に黒色煤がつく。内面は黄褐色で器壁中心は灰色である。外面はていねいな篦なでで磨研に近い。内面口縁部は横なで、下部は指なでで凹凸がある。口縁内径約10.5cm。**3**は石粒混り胎土で黄褐～褐色を呈する。内外面とも篦なで調整で、口縁部内面の一部に指押えの痕がある。口縁部は薄く、胴部が次第に厚くなる。

4は壺口縁部小片。石粒混り胎土で黄褐色。推定口径16.5cm。

5は壺頸部破片。口縁部は欠ける。17号出土のものと同形で、無文土器に属するものであろう。石粒混り胎土で黄色。風化が甚しいが、篦なで調整とみられる。推定口径16.6±1cm。

6　蓋。石粒混り胎土で、黄褐色を帯び、ところどころ橙色味がある。内外面ともなで調整を施す。内面の上部（図の破線より上）は器表が薄く剝げていて、下部は剝げていない。土器自体は風化していないので、上部の剝落は使用により生じたものであろう。破線部での直径11～11.5cmはこれをかぶせた土器の口径を示すのであろう。口径16.2cm・高さ7cm・頂部径5.3cm。

7は黒耀石製打製石鏃。長さ3cm・基部幅1.7cm・厚さ0.5cm **(PL.Ⅷ—5)**。**8**は蛤刃石斧破



第23図　第40号竪穴出土遺物実測図

片。現長4.5㎝・幅3.4㎝・厚さ1.7㎝。全体をていねいに磨研し、刃部は少し刃こぼれがある。他に先述したように中央北寄りの埋土中から細石核１点が出土している（第６図）。

18. 第43号・44号竪穴（第24図）

昨年度調査したＡ区の甕棺墓群の西側、第49号甕棺の近くにある。両方とも南北長軸で、南北に並んでいる。共に根などによる攪乱が甚しいが、43号は長軸長1.8ｍ・幅0.8ｍほど、44号は長軸長1.6ｍ・幅0.8ｍほどであり、深さは43号か10cmほど・44号は20cmほどである。43号の床にある小穴のほとんどは木の根のあとだろう。44号は南側にほぼ四角形の柱穴状掘り込みがあるが、これも後世のものかもしれない。埋土内からは弥生式土器小片若干が出土した。位置・形状・方向からこれらが昨年調査のＡ区甕棺墓地内の３基の土坑墓と同じ性格のもので、弥生時代中期に属するとみられる。ただし、２号だけが南北長軸で、１・３号が東西であった。

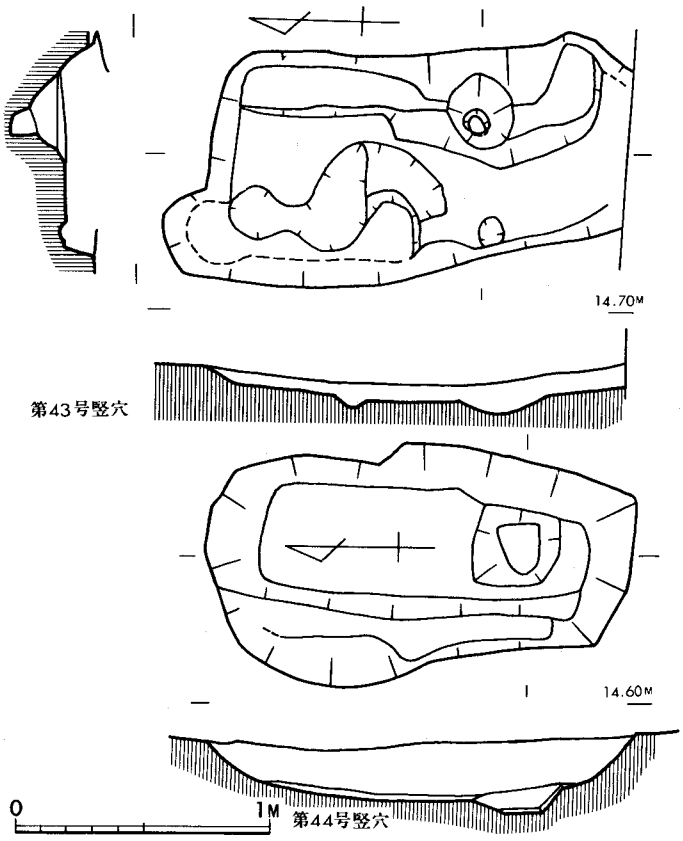
19. 第９号竪穴（第20図）

43号・44号竪穴と10号竪穴の中間、すなわちＡ区甕棺墓群とＣ区無文土器系竪穴群との中間に位置する。上面形は径１ｍほどの不整円形で、中途に一段を設け、さらに径１ｍほど、深さ30～40cmの穴を西に片寄って掘り込む。長軸が東西にあり、その形状は甕棺の墓坑を思わせる。埋土内には弥生式土器小片若干だけで、甕棺片はなかった。性格不詳という他ない。

攪乱層・表土層からも多くの弥生式土器片が出土したが、そのうち無文土器をここでとりあげておく（第25図）。１・２はＤ区19号竪穴北東2.3ｍの地山上に散乱していた無文土器３個体中の２個体である。１は石粒混り胎土で、黒～暗褐色を帯び、内面の一部は橙色を帯びる。突帯ははずれている。外面は篦なでし、その時生じた擦痕がある。内面も篦なでである。幅２～３㎝の粘土帯の巻上げで作ったとみられる。口縁内径9.6㎝・推定口径12㎝・胴径12.2㎝・

現高11cm。2は口縁部が強く内傾する。石粒混り胎土で橙茶褐色を帯びる。篦なで調整。口縁部突帯下と器体の間の隙間の一部を幅7㎜ほど、粘土でうめている。

3はC区1号竪穴付近の攪乱層出土で、一番最初に出土したものである（PL. Ⅶ—4）。石粒混り胎土で黄茶褐色である。突帯は長楕円形で、口縁上端はなでて平坦になる。内面は縦なで、外面は篦なでで、磨研に近く、少し光沢がある。出土無文土器中、外面がもっともなめらかである。口径12.8cm。



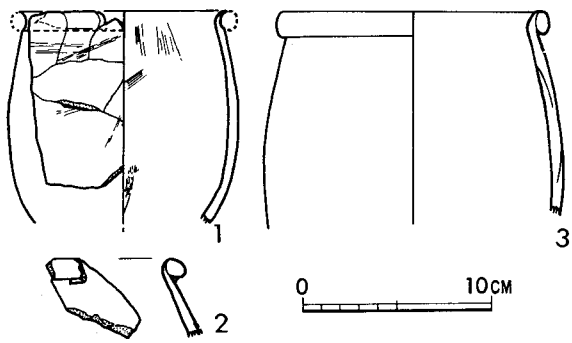
第24図　第43・44号竪穴実測図

小結　—無文土器について—

無文土器が出たのは前期末に位置づけられる17基のうち1・2・8・11・13・19号を除く11基で、14号と17号では無文土器壺とみられる頸部片3点も出土した。無文甕形土器の個体数は、口縁部・突帯片について1点ずつ検討した結果47ないし51個体と算定される。40号の7ないし11個体分・17号の9個体分・14号の7個体分が多い。

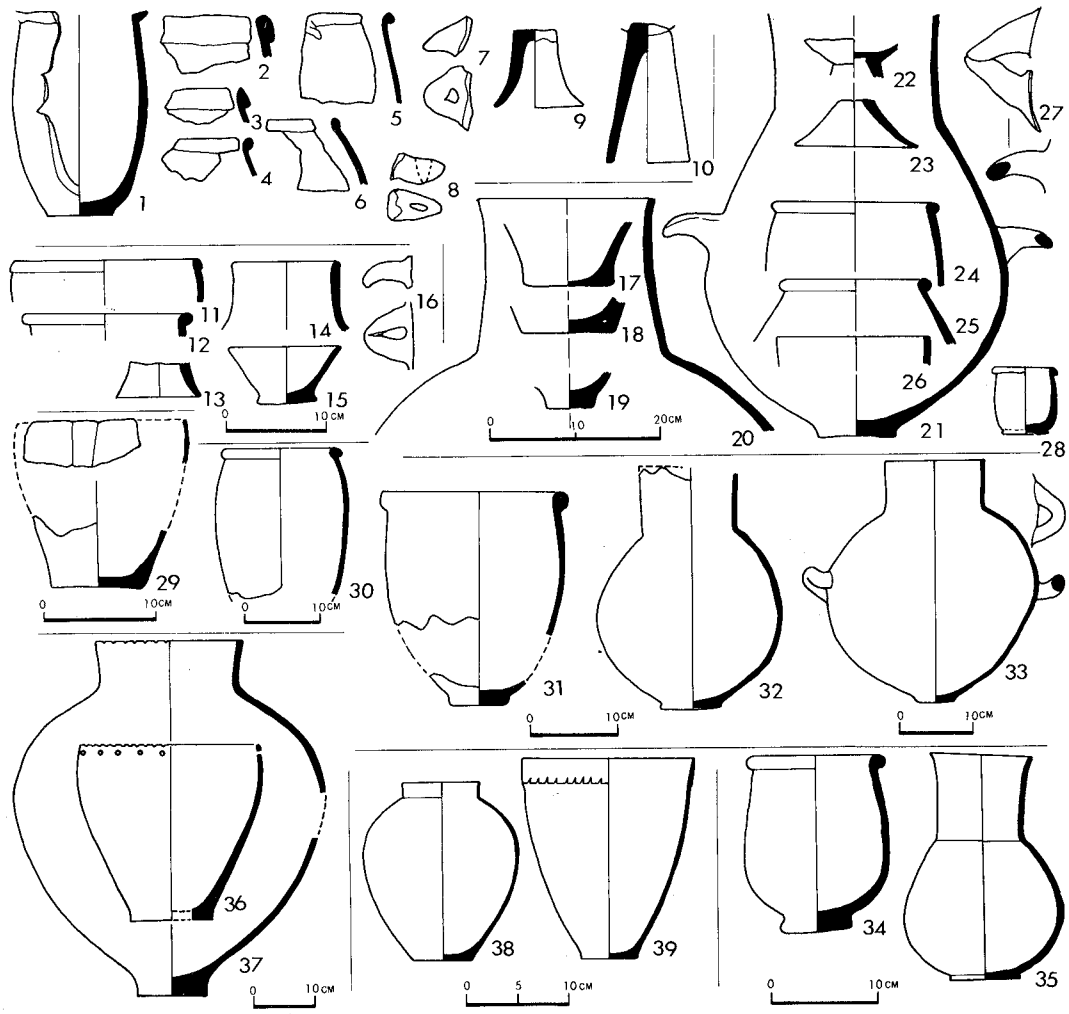
完形品は3号・7a号・17号・40号出土の4点だけである（PL. Ⅶ）。形態は基本的に同じで、口縁部には粘土紐の突帯をまわし、胴部が張り、胴径は口径より大きい。胴下部はゆるい弧を描いて底へつづく。底は高台状になることが多く胴と底とのつながり部は明瞭な段をなすが、なめらかに底面へつづく場合もあり、同一個体で、両者ともみられる場合がある。底部は軽い上げ底をなす。

完形品中最大のものは3号出土品（第9図1）で、高さ21cm・口径（突帯の一番外側での直径）17cm・胴部最大径19.6cm・底径6.3cmである。底径以外は本遺跡出土無文土器中最大値をもつ完形品中口径が最小のものは40号出土品（第23図1）で11.2cm、高さが一番底いのは7a号出土品（第13図6）で12.5cmを計る。底径は7a号出土品が5.5cmと最小で、17号出土



第25図　攪乱層・表土層・出土無文土器実測図

品（第19図１）が6.6㎝と最大である。破片のうち口径のわかるもの５点、突帯を欠くが内径がわかり、突帯直径（１㎝弱）を加えて口径を推定しうるもの３点で、完形品４点を加えた12点の口径はいずれも完形品の口径の範囲（11.2～17㎝）に入り、12㎝・13㎝台が５点で多い。ただし３号出土の突帯欠如片（第９図３）は内径９㎝、推定口径11㎝でもっとも小さいらしい。これは胴径が口径より小さい唯一例でもある。完形品以外で胴径のわかる破片は３号・14号・表土層出土の４点（第９図３、第17図４、第25図１・３）で、口径の1.10～1.34倍ある。最大径の位置は、完形品では上から⅓ないし½ほどの胴中央よりやや上にある。底径は完形品についてみると5.5～6.6㎝でさして変化はない。口縁部突帯の太さは、細いのは17号出土の0.7㎝ほど（第19図４）、太いのは17号出土の1.4×1.2㎝（同図２）で、多くは0.9ないし１㎝ほどである。器厚は口縁部が薄く胴部が厚いことが多いが、0.4～0.7㎝ほどで、１㎝に達するものは皆無である。底部厚さは１㎝以上であるが、17号出土完形品は0.5㎝ほどで薄い。こ



第26図　南朝鮮地域の無文土器

（1～10：燕巖山、11～16：俄嵯山、17～28：鷹峰、29～33：水石里、34・35：槐亭洞、36・37：駅三洞、38・39：可楽洞）

のように本遺跡出土無文土器甕は高さ12.5cm～21cmほどの薄手小形器で、弥生式土器甕にくらべると小づくりである。

胎土は小石粒を混ぜた砂質粘土を用いる。底部は厚さ1cm前後の円盤状で、更に一枚粘土盤を貼りつけて2cmになるものがある。器体は幅2～3cmほどの粘土帯を巻き上げるらしいが、成形法は十分明らかではない。粘土帯の接合部は3号の完形品の口縁下部によく残っている（48ページ）。底部と器体を作り、突帯をつける前に内外面に調整を施す。内面は篦や指でなで凹凸のある場合が多い。外面は篦でていねいになで、時には磨研に近く光沢を生じている。こうしたなで調整で刷毛目状の擦痕ができることがある。これは意図的な刷毛目や胎土中の砂粒・石粒が移動したものでもない。器面調整のあと口縁部に粘土紐を巻きつけ、器体上部をこれにかぶせるように指でなでつけて突帯をとりつけ、そのあと突帯と器体上部（口縁）内面を横なでする。突帯下側と器体外面との間は特になでつけたりはせず、まれに突帯の一部を指で下方に押し、なでつけて器体との接着をより確かなものにする。こうしたものは4例出土した。突帯がはずれた口縁部片は突帯を押しつけたあとが、口縁をめぐる幅5～7㎜ほどの凹入部として残る。突帯は脱落しやすく、突帯だけの破片もかなり出土した。

焼成は弥生式土器とかわらず、色は赤褐色と総称しうる褐色・橙褐色・黄橙褐色などで、黒斑のあるものもある。刷毛目のない弥生式土器とは、胴部破片はまったく区別がつかない。

甕の他に壺とみられる頸部片が17号で2点・40号で1点出土した。いずれも黄褐色で、口縁から頸下部まで厚さは均一で、口縁は外開きになり、頸中央で縮約し、下部で再び外に開く。口径は2点が16～17cm・1点が20数cmで、相当大形と思われる。胴部は長卵形に近いであろう（**第26図**参照）。

この他に14号竪穴出土の鉢形土器（第17図1）も、弥生式土器の鉢とは形態がことなり、あるいは朝鮮系かもしれない。その形態はソウル市俄嵯山出土の鉢形土器（**第26図15**）に近く、大きさもほとんどちがわない。

これら無文土器と伴出した弥生式土器は、甕は少なく壺が多い。これらは福岡市西区浄泉寺遺跡袋状竪穴群[1]・福岡県筑紫野市野黒坂遺跡28号竪穴[2]・八女市亀ノ甲遺跡[3]・北九州市八幡区原遺跡[4]などの土器と共通し、板付II式の新しいもの、前期末に位置づけられる。したがって伴出した無文土器も弥生前期末と断定できる。

ところで、朝鮮の無文土器は地域・時期によって差がある。南朝鮮地域の無文土器（**第26図**）は前半期と後半期に大別される[5]。前半期は、ソウル市可楽洞[6]の刻目肥厚帯土器やソウル市駅三洞[7]の孔列口縁土器で、後半期は本遺跡出土と同じ突帯口縁土器である。突帯口縁をもつ無文土器はさらに古・新の2つに大別しうる。忠清南道大田市槐亭洞[8]・京畿道楊州郡水石里[9]のものが古く、ソウル市往十里鷹峰A地点[10]・同俄嵯山[11]・京畿道楊州郡陶谷里[12]・慶尚北道大邱市燕巌山[13]が新しい。新しいものには組合せ牛角式把手付大形壺が伴ない、口縁部突帯も断面が丸いものの他に三角形・長方形のものがある。本遺跡のものは、古い方に属すると思われる。

こうした特徴的な突帯をもつ土器はこれまでに原ノ辻下層で口縁部2片が出土し[14]、最近板付遺跡の前期～中期の層で突帯片1点が、攪乱層で口縁部片1点が出土した。

これら無文土器の胎土・色・焼成は、刷毛目をもたない弥生式土器と区別できないが、器形は完全にことなり、当時の南朝鮮の人間により作られたことは疑いない。ただ、これが南朝鮮から搬入されたのか、九州に来た当時の南朝鮮人がこの地で作ったのかはわからない。胎土分析などによって明らかにしたいと思う。いずれにせよ、前期末以降朝鮮から細形銅剣などの青銅利器が流入し、その後の青銅器文化が南朝鮮青銅器文化と密接な関係にあったこと、[15]金海会峴里に前期末型式の甕棺墓が存在すること[16]、また佐賀県土生遺跡で中期前半の土器とともに組合せ牛角式把手が出土したこと[17]などとあわせ当時の両地域の密接な関係を示すものである。

これら無文土器の出土した遺構は小形の竪穴で上部を相当削られているらしく本来の形状はわからない。袋状のものもあるが[18]、床やその少し上に焼土があったりして、単なる貯蔵穴とはみられない。こうした竪穴が互に切りあうことがほとんどなく群集していて、存続期間はかなり短

第3表　弥生時代竪穴出土遺物一覧表

竪穴	弥生式土器	無文土器	その他
3	板付II式壺2(第9図7·8) 〃 丹塗·貝殻重弧文1 高杯脚片2(同図5·6) 小片 49	甕 完形1 (第9図1) 〃 口縁3(同図2~4) 〃 突帯片2	黒耀石石核(第5図) 〔先土器時代〕
4	板付II式壺1(第10図1) 底部 2(同図2·3) 〔同図3は無文か〕 破片37(半数以上は底部と同一個体か) 丹塗片2	甕 口縁1(第10図4) 〃 突帯片4	
5	板付II式壺1(第11図1) 口縁片小形壺? 2 〃 甕 ? 1 〃 器形不詳 2 底部4(同図2~5) 〔2·5は無文か〕 〃 小片13〔2·5と同一か〕 小片13〔丹塗1〕	甕 口縁1(第11図6) 突帯片1〔これと同一とみられる小片4〕	小礫 2
6	板付II式甕2(第13図1·4) 壺?片 2 甕片 3 底部3(同図2·3) 小片15〔丹塗2〕	突帯片1	押型文片1(第7図1) 剥片 2 礫 4 木炭小片 1 玉1(第13図5)
7a	小片1	甕1 (第13図6)	黒耀石剥片1
8	壺·甕小片各1 底部(第14図1) 破片9		土製品?1 砥石1(第14図2)
10	甕片1 小片7〔丹塗1〕	甕片10〔同一個体〕	土師質土器片1 礫 1
11	板付II式甕1〔盗難〕 甕底部(第21図2) 丹塗壺片(同図1) 小片7〔刷毛目付2〕		礫 1
13	板付II式壺1(第15図6) 〃 甕1(同図4) 壺片 1〔同図5〕 小片7〔丹塗1〕		

竪穴	弥生式土器	無文土器	その他
14a	板付II式壺1(第17図3) 鉢1(同図1) 高杯脚1(同図7) 壺?片2 口縁小片2(同図2) 底部1(同図8)〔無文か〕 小片 16	口縁部2(第17図5·6) 突帯片 2	礫 1 黒耀石片 1
14b	壺?片1 小片 10	甕1(第17図4) 突帯片 2	
17	板付II式壺4(第19図10~12·22) 〃 甕2(同図13·23) 鉢?1(同図14) 蓋 1(同図9) 底部9(同図15~20) 高杯脚片1(同図21) 甕棺?底部1 小片 119〔丹塗1〕	甕1(第19図1) 〃 口縁部5(同図2~6) 〃 突帯片3 壺頸部2(同図7·8)	扁平片刃石斧1 (第19図24) 礫7、石器?片1 スサ混り? 焼土小片37
19	丹塗口縁片1 甕棺片 2 小片 4		黒耀石錐·磁器片·土師片·滑石製品片 礫各1·瓦片2
20	丹塗壺?片1 壺?片1〔溝〕 底部1(第21図4)〔無文か〕 底部1〔溝〕 甕?片1 小片 3〔溝〕	甕口縁1(第21図3)	黒耀石チップ1 剥片 1 礫 2
21	小片 3	甕口縁1(第21図5)	礫 1
40	板付II式壺1(第23図4) 蓋 1(同図6) 小片 90余	甕 完形1(第23図1) 〃 口縁2(同図2·3) 〃 片 1 突帯7〔4は上記と同一か〕 壺頸部 1(同図5)	黒耀石石鏃1(同図7) 石斧1(同図8) 黒耀石石核(第6図) 〔先土器時代〕 礫 2 焼土塊 13
43	小片 若干		
44	小片 若干		
19	小片 若干		
C区 攪乱層		甕1(第25図3)	
D区 地山上一括		甕4(第25図1·2)	黒耀石剥片
41号 埋土上部		突帯1	

かったと思われる。しかも中期中葉から始る甕棺墓地が、その群集範囲に存在していない。これら検討すべき問題は多く、今後を期したい。

註

① 村岡和雄・松村道博等『浄泉寺遺跡』東洋開発株式会社　1974年

② 松岡史・前川威洋・副島邦弘編「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会　1970年

③ 小田富士雄編『亀ノ甲遺跡』八女市教育委員会、1964年

④ 北九州市香月地区埋蔵文化財調査会『原遺跡』1973年

⑤ 後藤　直「南朝鮮の『無文土器』」『考古学研究』19―3、1973年

⑥ 金廷鶴「広州可楽里先史住居址発掘報告」『古文化』2、1962年（翻訳は『古代学研究』49）

⑦ 金良善・林炳泰「駅三洞住居址発掘報告」『史学研究』20、1968年

⑧ 李殷昌「大田槐亭洞青銅器文化の研究」『亜細亜研究』Ⅺ―2、1968年

⑨ 金元竜「水石里先史時代聚落住居址調査報告」『美術資料』11、1966年

⑩ 横山将三郎「京城郊外鷹峰山遺跡報告」『史前学雑誌』2―5、1930年

⑪ 林炳泰「漢江流域無文土器の年代」『李弘稙博士回甲紀念論文集』1969年

⑫ 金廷鶴「韓国無文土器文化の研究」『白山学報』3、1967年

⑬ 尹容鎮「琴湖江流域の先史遺跡研究1」『古文化』5・6、1969年

⑭ 東亜考古学会調査、森貞次郎先生の御教示による。現在京都大学人文科学研究所蔵。

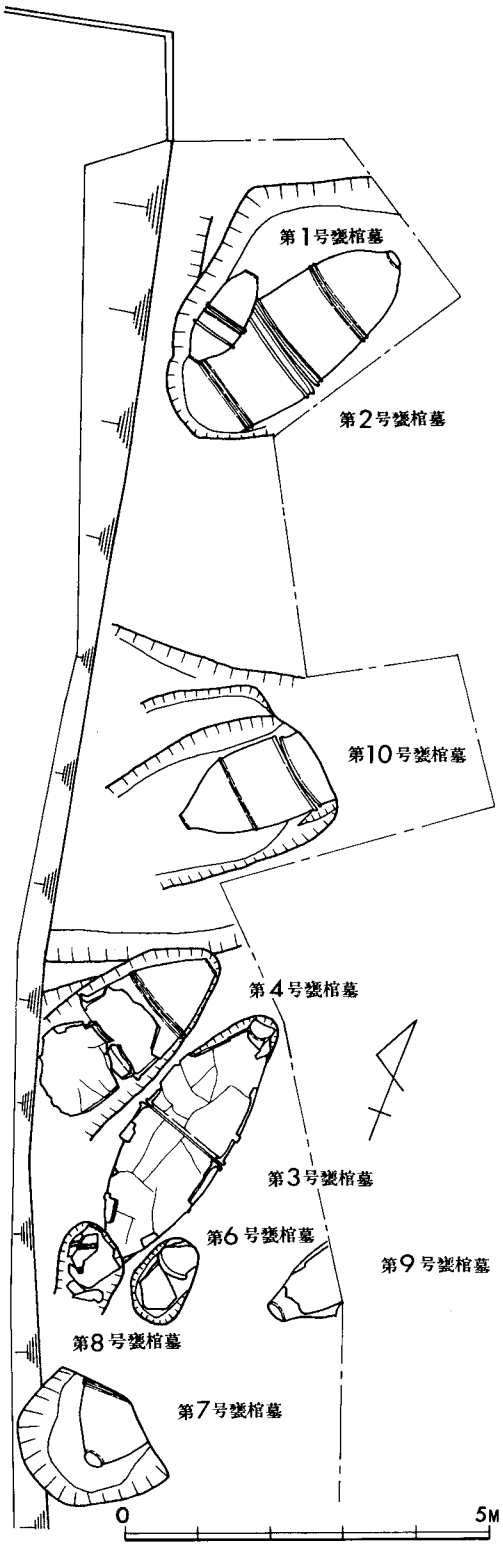
⑮ 西谷正「青銅器から見た日朝関係」『日朝関係史の史的再検討』朝鮮史研究会論文集4、1968年

⑯ 梹本杜人「金海会峴里発見の甕棺に就て」『考古学』9―1、1938年

⑰ 土生遺跡発掘調査委員会『土生遺跡発掘調査概報』1972年

なお、諸岡遺跡でも前年度調査時の游離土器片中に、小形の組合せ牛角式把手片1点がある。第16号甕棺墓付近の土器片中の1片である。本書第65図、115ページ参照。

⑱ 厳密にいえば、袋状竪穴とはことなる。一般の貯蔵穴としての袋状竪穴は壁が床面から直ちに内傾することが多いが、今回出土した竪穴のうち袋状をなすものは、壁が床面から一度外開きになってから内傾しはじめる。なお、朝鮮では、現在のところ類似遺構はみつかっていない。



第27図　諸岡遺跡B区甕棺墓出土状況実測図

V　甕棺墓地（第27図）

1.調査概要　C・D地区調査中に、丘陸西側における工事に伴い数基の甕棺墓が露出したために、小児棺3基（第1・6・8号）、成人棺6基（第2・3・4・7・9・10号）の計9基を確認調査した。この甕棺墓地をB地区と呼ぶことにする。今回調査された甕棺墓は丘陵の頂上部分近くに営まれたものの一部にあたると考えられる。群集の状態は小範囲のために、現状を墓地全体には敷衍できないが、墓坑の掘り方に注目すれば、第1・2号を除いてはいずれも東一北東方向に集中し、頂上部に対して求心的な在り方が知られる。調査区の東側に近接して小円墳が存在し、第1号～10号甕棺墓間には破壊された小児棺とともに円筒埴輪破片の堆積があり、この古墳の造営にあたって、かなりの甕棺墓地の削平破壊が行なわれた事が知られ、現存部分もまたこの影響を受けている。したがって甕棺墓は墓坑の切り合いによって時期的な先後関係を観察する事は容易ではなく、僅かに第1号（小児棺）が第2号成人棺（ゴホウラ製貝輪8個をともなう）の墓坑埋土内に営まれたことが知られるに過ぎないが、甕棺の構成から時期的には中期中葉から後期前半にわたると考えられる。以下B地区出土の個別甕棺についてのべることとする。

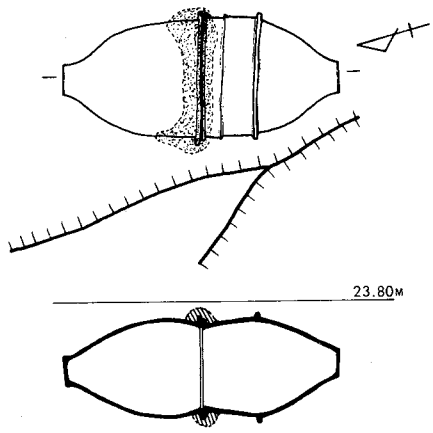
2.出土甕棺墓と甕棺

小児棺

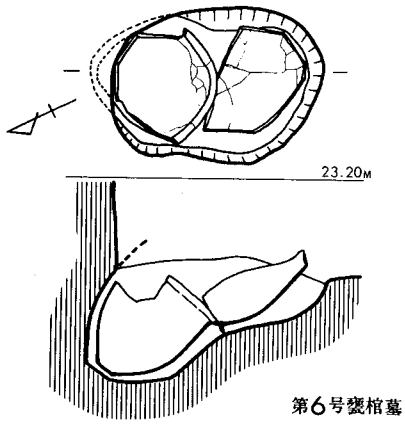
(1)第1号甕棺墓（第28図、第32図）

第1号甕棺墓は、上・下に小形の甕形土器を使用した接口式小児用棺である。棺は第2号（成人）棺の墓坑を埋める暗褐色の花崗岩ばいらん土にほぼ水平に埋置され、N

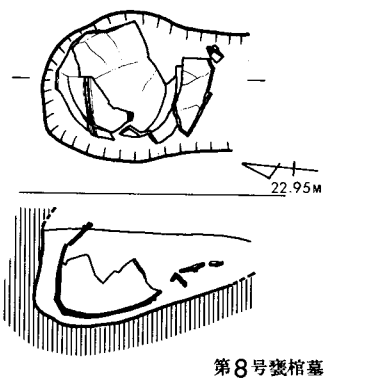
—15°—E方向である。なお接口に際しては青灰色の粘土による丁寧な目張りがなされる。上甕はやや内傾するT字形口縁をもち、口縁直下に一条の三角突帯をめぐらし、胴部の突帯は先端に一条の沈線をもつ。口縁から胴部中位にかけては正反対の位置に黒斑部分2ヵ所をもつ。黄褐色を呈し、全体の刷毛調整が著しく、口縁下は横なで調整。胎土・焼成ともに良好。器表全面丹塗り。口径34cm・器高34.2cm。下甕はやや外口唇の垂れるT字形口縁をもち、全体的に整った甕である。器壁は胴部中位で2.5～3.0㎜をはかる。器面は黄褐色～褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。口縁下の横なでを除き器表刷毛調整。口径34cm・器高31.9cm、時期は中期中葉。



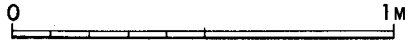
第1号甕棺墓



第6号甕棺墓



第8号甕棺墓

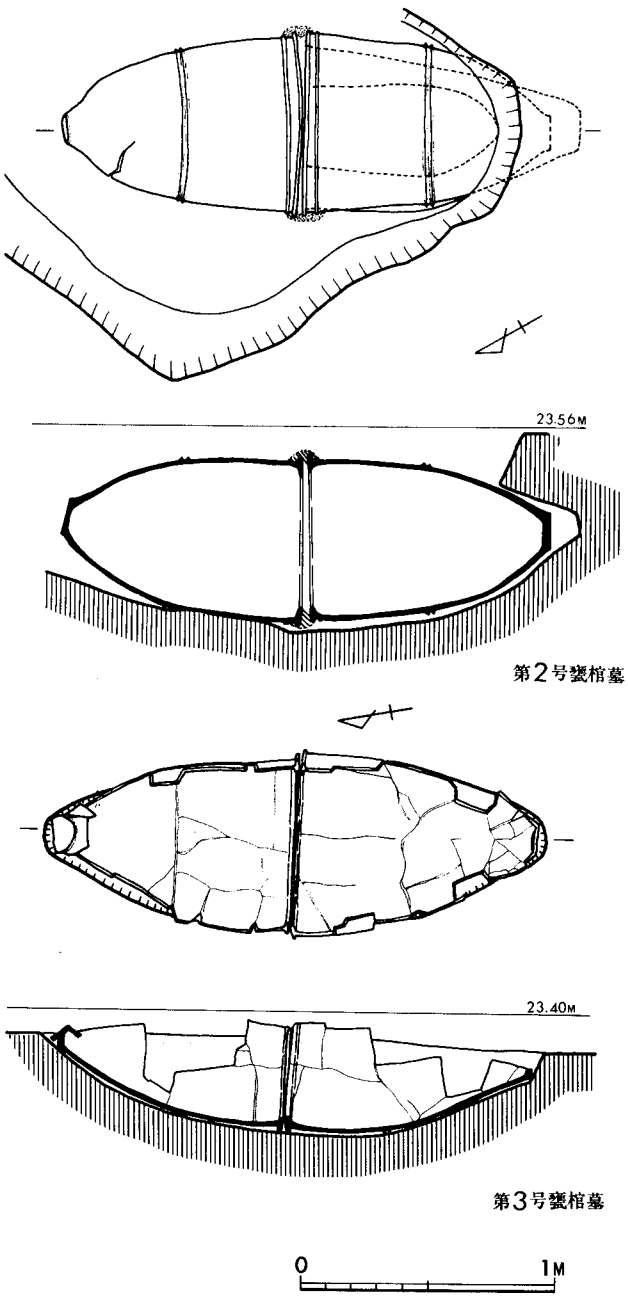


第28図 第1・6・8号甕棺墓実測図

(2)第6号甕棺墓（第28図、第32図） 第6号甕棺墓は、上・下ともに小型の甕形土器を使用した接口式小児用棺である。竪穴状の墓拡に50°の傾斜をもって埋置され、N—25.5°—E方向である。墓拡は甕棺をようやく入れうる大きさで作業に無駄がない。上甕は、肥厚して内面に弱い稜を持つく字形口縁となり、胴部の半分以上を欠失する。器面は粗めの刷毛で調整され、口縁直下および内面は横なで。胎土・焼成不良。器表丹塗り。口径30.4cm。下甕は、肥厚する「く」字形口縁をもち、胴部のふくらみが強い甕である。器表面に刷毛調整が施されており、内面底部付近は指調整によってなで上げている。器色は褐色～黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。また口縁部付近には二次焼成の煤が付着し、日常雑器からの転用が考えられる。口径30cm・器高34.1cm、時期は後期前半。

(3)第8号甕棺墓（第28図、第32図） 第8号甕棺墓は、上甕に小形の甕形土器、下甕に壺形土器の口縁を打欠いたものを使用した覆口式小児用棺である。棺は33°の傾斜をもって埋置され、ほぼ南北に近いN—2°—W方向である。上甕は、沈線をめぐらす一条の突帯を胴部にもち、底部がやや上げ底となる壺である。器表は丁寧な刷毛調整で、内面の胴部中位では粗い刷毛調整。底部内面は指調整痕。器色は黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。器表丹塗り。打欠きの最終調整は器面内

側の上方から下方に向ってなされている。突帯部径32.8cm・現存器高27.3cm。下甕は、外口唇がやや垂れる平坦口縁をもち、口縁直下に一条、胴部に二条の複合三角突帯をめぐらし、底部はゆるい上げ底となる整美な甕である。器色は黄褐色～褐色を呈し、胎土・焼成ともに非常に良好である。器面は底部付近に篦みがきによる調整が顕著であり、全面丹塗りとなる。また口縁部上端には短直線の暗文が描かれており、底部近くに外面からの二次穿孔がみられる。口径31.2cm・器高30.8cm。時期は中期中葉の後半。



第29図　第2・3号甕棺墓実測図

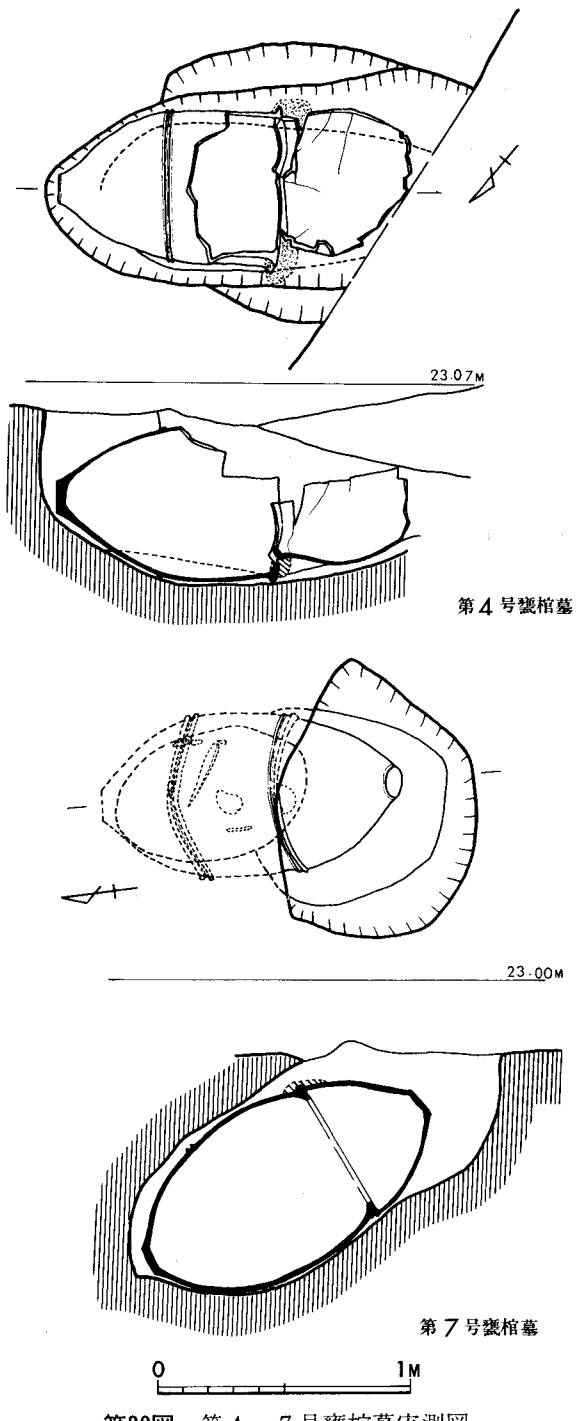
成人棺

(4)第2号甕棺墓(第29図・第34図・PL. X) 第2号甕棺墓は、上・下棺のいずれにも大形の甕形土器を使用した接口式の成人用棺である。棺は、隅丸長方形の墓坑中に、長軸をS—28°—Wに向け、ほぼ水平に埋置されており、出土甕棺の中では挿入の方向を異にしている。接口部は青灰色粘土によって全周に目張りがなされている。本棺には、ゴホウラ製貝輪（8個）を前腕に装着した横臥屈葬の成人男性骨一体が、頭位を南にして遺存していた。上甕は口縁内側の張出しの強いT字形口縁をもち、胴部の上半が殆どふくらみを持たない器形となる。器壁は上部突帯下および胴部のほぼ中位にあたる下部突帯付近では特に厚くなり、下部突帯以下は均一である。　器色は暗い赤褐色を呈し、胎土・焼成はあまり良くない。口径68.4cm・器高 100.5cm。下甕はやや外傾するT字形口縁をもち、胴部のふくらみの少ない細身の器形である。口縁下に

一条の低い「コ」字形突帯をもち、ほぼ胴部中位の下部突帯は二条の低い三角突帯となる。器色は褐色～黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。口径68.4cm・器高104.4cm。時期は中期中葉後半。

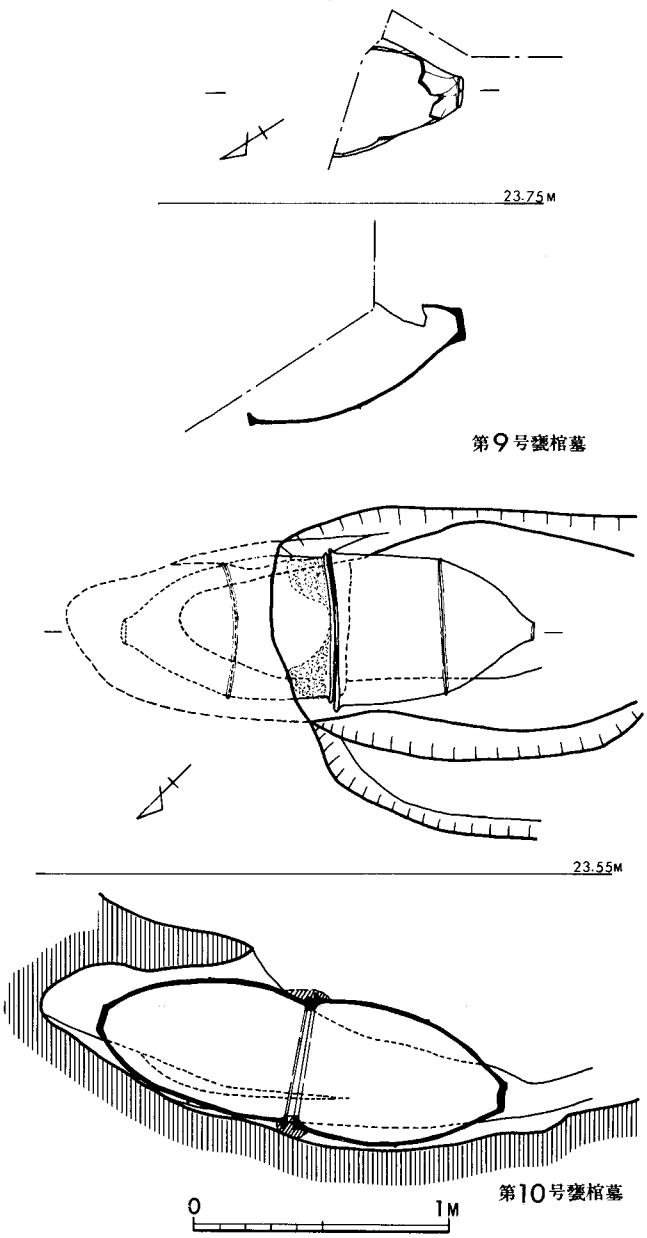
(5)第3号甕棺墓（第29図・第34図） 第3号甕棺墓は、上・下に大型の甕形土器を使用した接口式成人用棺である。N－12°－E方向で、ほぼ水平に埋置されており、周辺の削平が著しい。上甕は、内外ともに張出しの弱い平坦口縁をもっており、胴部のふくらみの少ない器形となり、細身である。胴部中位よりやや上部にめぐる一条の複合三角突帯は低い。器壁は幅10～7cm内外の粘土の積上げが観察できる。器色は、暗い褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。口径63.2cm・器高92.2cm。下甕は、外側への張出しの弱い平坦口縁をもち、胴部が口縁に近い部分でゆるくすぼまって卵形を呈する。胴部中位よりやや上部にめぐる一条の複合三角突帯は低く、しかも鋭い断面をもつ。器面には、突帯部分の上・下に横位のなでがみられ、また底部近くは細い縦方向の刷毛調整がみられる。器壁は胴部上半で幅20cm内外の粘土積上げが観察される。器色は褐色～黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径60.4cm・器高90.8cm。時期は中期中葉前半であろう。

(6)第4号甕棺墓（第30図・第35図） 第4号甕棺墓は、上に中形、下に大形の甕形土器を使用した接口式棺である。棺は長軸をN—48°—Eに向け、ほぼ水平に埋置されている。棺として使用された甕の口径値差は青灰色粘土の充塡によって埋められている。上甕は底部を欠失するが、内部に張出しの強い平坦口縁をもち、胴部のふくらみが中位で最大となり、口縁のすぼむ卵形の器形となる。器壁は薄くて均一であり、



第30図 第4・7号甕棺墓実測図

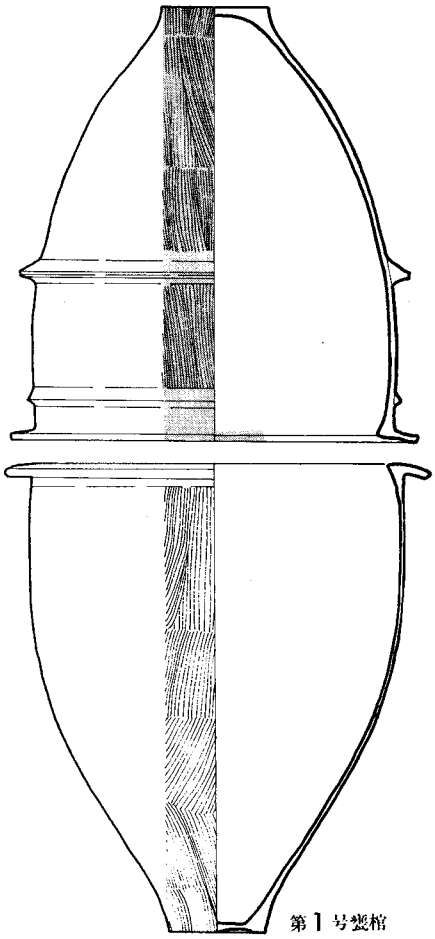
胴部の低く、鋭い三角突帯とともに全体的にきゃしゃな感じをあたえる。器色は褐色～暗褐色を呈し、胎土・焼成とも非常に良好である。口径45.6cm・現存器高54.9cm。下甕はに張出しの弱いT字形口縁をもち、胴部上半の口縁に近い直線部分を変換点として、ふくらみの少ない器形となる。胴部中位の複合三角突帯は低く、鋭い。器壁は特に分厚い口縁付近を除いては、ほぼ均一となる。器色は内外面とも暗い赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。口径67.2cm・器高87cm。時期は中期前葉後半。

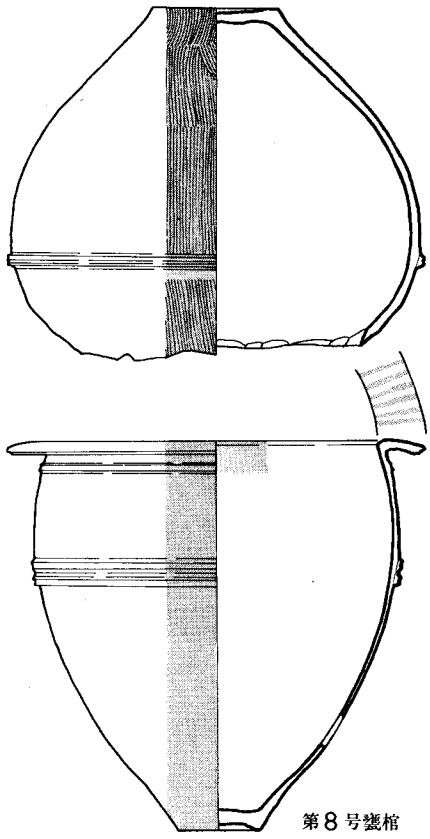


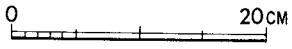
第31図　第9・10号甕棺墓実測図

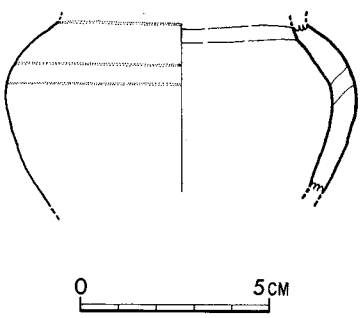
(7)第7号甕棺墓（第30図・第35図）

第7号甕棺墓は、上に打欠きの甕、下に大形の甕形土器を使用した接口式成人用棺である。棺は長軸をほぼ南北に近いN—2.5°—Eに向け、24.5°の傾斜をもって埋置されており、挿入角度が大きい。接口部分は青灰色粘土の目張りが全周にわたってなされている。また内部には人骨の一部の遺存があって頭骨および足骨がみられるが、上甕に頭骨の一部があることから埋葬時には脚から入れられたものと考えられる。上甕は、大型の甕と思われる土器の胴部下半を粘土接合部より外し、打欠き調整して使用している。器色はやや赤味をおびた褐色を呈し、胎土・焼成ともに非常に良好である。底部付近には焼成時の黒斑が広く見られる。現存胴部径65.4cm・現存器高34.2cm、下甕は、内傾する口縁をもち、胴部のふくらみの変化が大きく、全体的にどっしりした感じの器形となる。上部の突帯は断面が片肩の三角形となり低く、著しく口縁に近づいている。胴部中位よりさがる下部突帯は二条であり、断面コ字形で高く、一方はややたれる。典型的な中期後葉の特徴を備えている。底部付近には細い刷毛調整が縦に施されている。器色

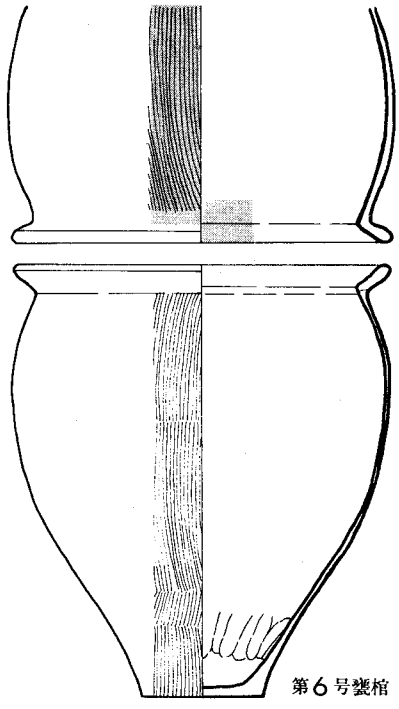








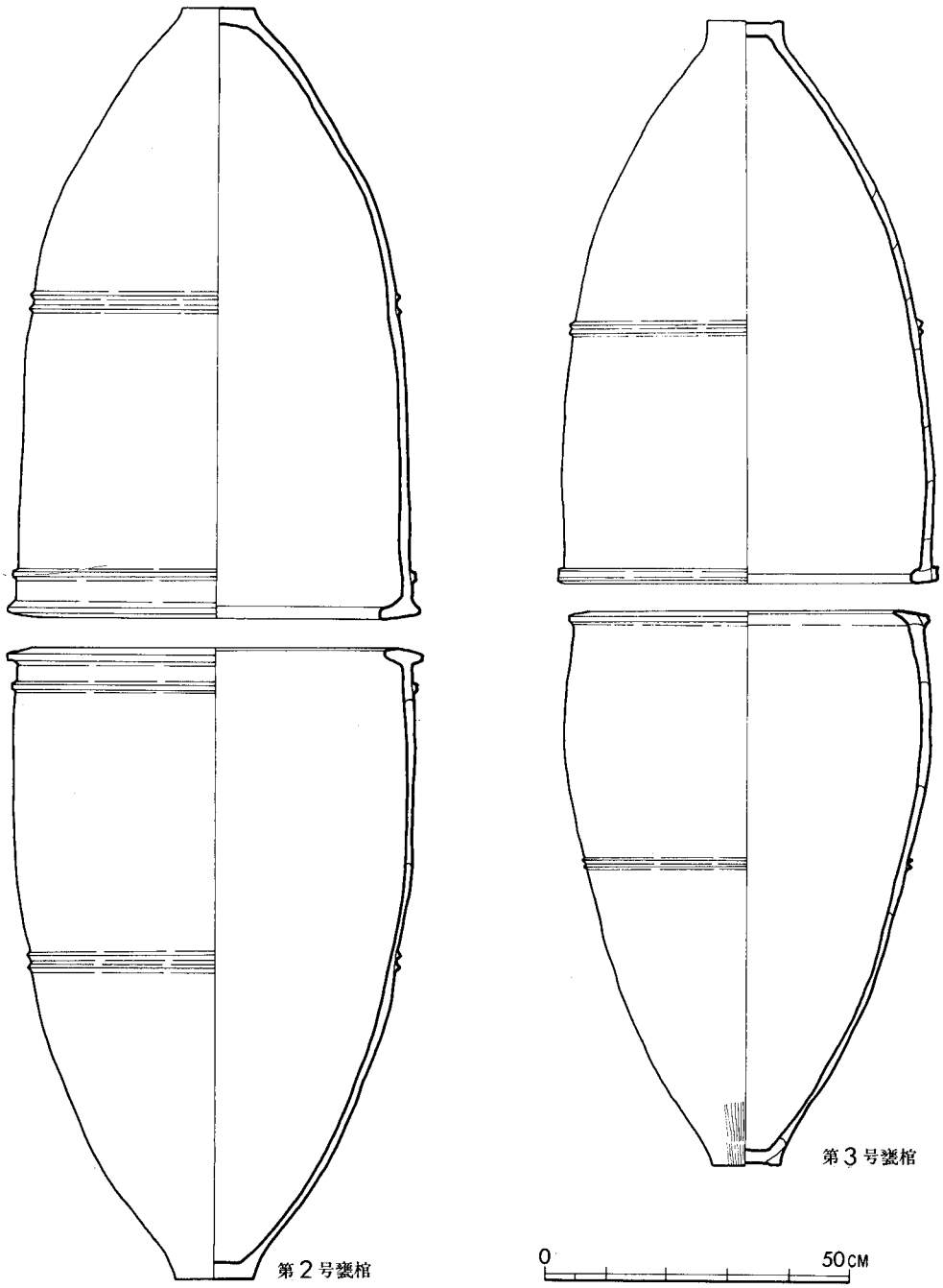
第33図 甕棺墓地内採集土器実測図



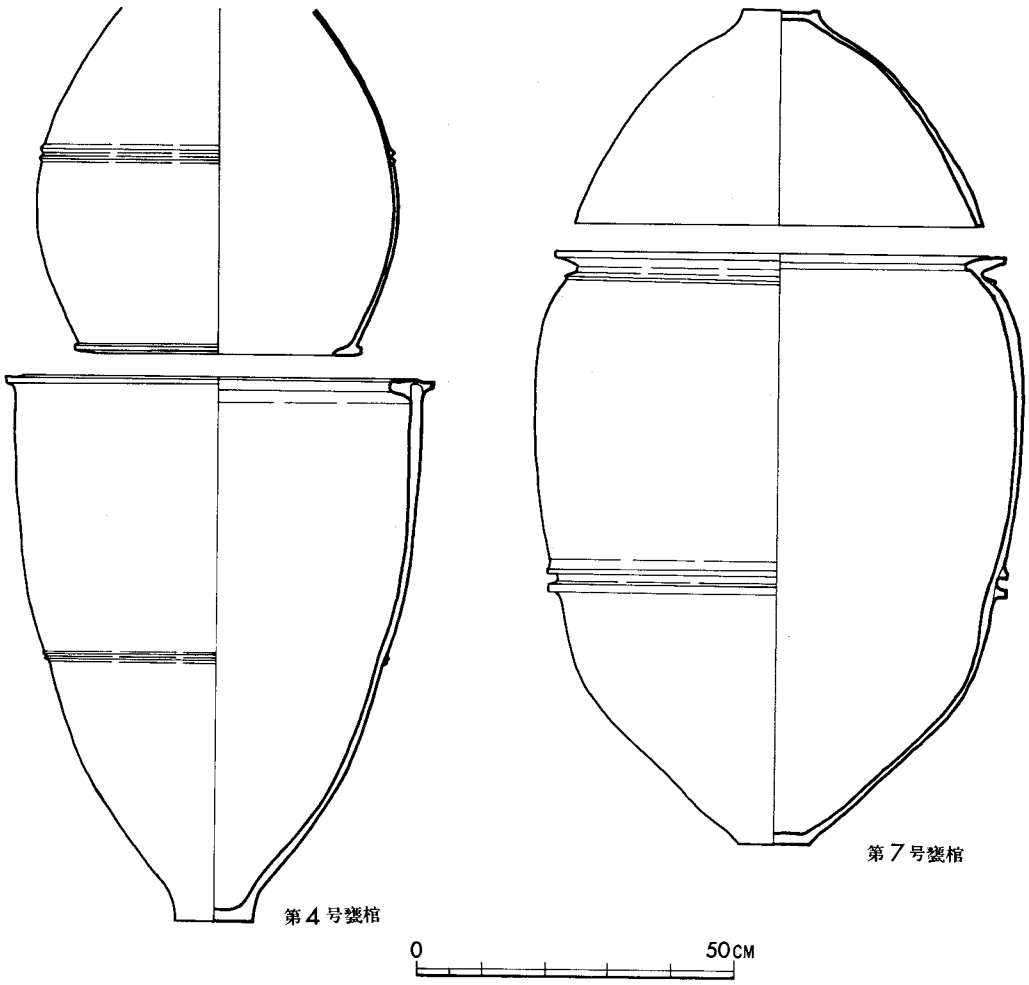
第32図 第1・6・8号甕棺実測図

は暗い赤褐色を呈し、下部突帯付近には焼成時の黒斑が多い。胎土・焼成ともに良好である。口径72cm・器高93.9cm。

(8)第9号甕棺墓（第31図・第36図） 第9号甕棺墓は、上・下に大形の甕形土器を使用した接口式成人用棺である。棺は長軸をN—30.5°—Eに向け、ほぼ水平に近い9°の傾斜をもって埋



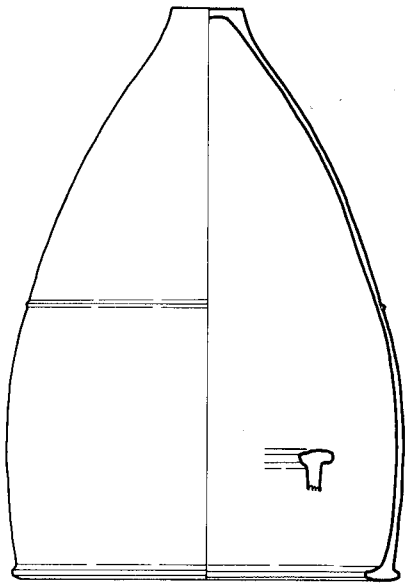
第34図　第2・3号甕棺実測図



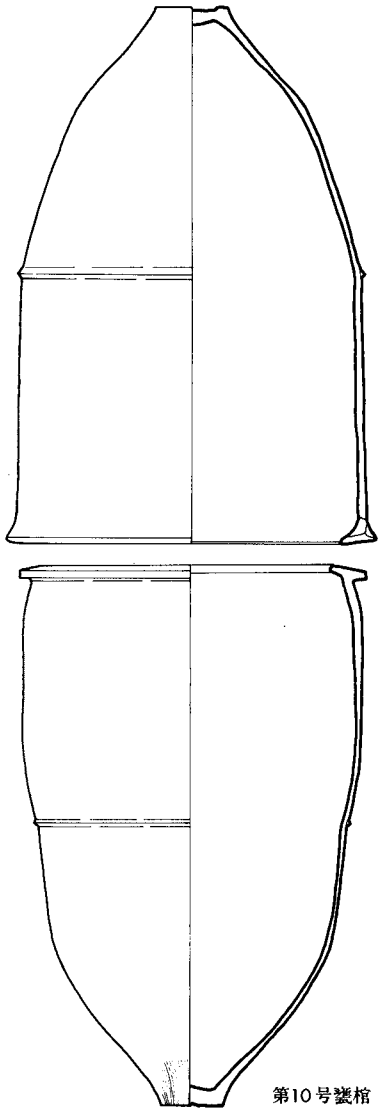
第35図 第4・7号甕棺実測図

置されている。上甕は、外側への張り出しの弱い平坦口縁をもち、胴部のふくらみの少ない細味の器形となる。胴部の中位より上る一条の突帯は低く、鋭いものである。器壁は非常に均一であり、器面の仕あげは丁寧である。底部外側には組織痕と考えられる凹凸が観察される。器色は暗い褐色を呈し、焼成はあまり良くない。口径61.2cm・器高90cm。下甕は口縁の一部を取り上げたにすぎず、全体を知り得ない。器色は赤褐色を呈する。時期は中期前葉後半。

(9)**第10号甕棺墓（第31図・第36図・PL. Ⅵ—1)** これは、上・下ともに大形の甕形土器を使用した接口式成人用棺である。下甕に小骨片が存在した。棺は、長軸をN—44.5°—Eに向け、8.5°の傾斜をもって埋置されている。接口部は全周が青灰色粘土で目張りされている。上甕は内外ともに口唇の張出しが弱い平坦口縁をもち、中位から直立する胴部が特徴的な器形をつくっている。胴部突帯は低く、鋭い。器壁は殆ど均一である。器色は赤褐色を呈し、胎土・焼成は良好。口径58.2cm・器高85cm。下甕は、わずかに外傾するT字形口縁をもち、胴部中位がしまる特徴的な器形となる。著しい胴部のふくらみがない事から細身の感じをあたえる。底部は比較



第９号甕棺



第10号甕棺

第36図　第９・10号甕棺実測図

第４表　諸岡遺跡Ｂ区甕棺墓一覧表

甕　棺	方　　位	傾　　斜	形　式	土　　器	墓　　坑	時　　期	備　　考
1 号	N — 15°— E	ほぼ水平	接　口	甕 ＋ 甕		中期中葉	小児・第２号棺墓坑中にあり
2 号	S — 28°— W	〃	〃	〃	隅丸長方形	〃	成人・貝輪着装人骨出土
3 号	N — 12°— E	〃	〃	〃		〃	成人
4 号	N — 48°— W	〃	〃	〃		中期前葉	
5 号	欠　番						
6 号	N—25.5°—E	＋50°	接　口	甕 ＋ 甕		後期初頭	小児
7 号	N— 2.5°—E	＋24.5°	〃	甕（打欠き）＋ 甕		中期後葉	成人・頭、足骨の一部がのこる
8 号	N — 2 °— W	＋33°	呑　口	壺（胴欠き）＋ 甕		〃	小児
9 号	N—30.5°—E	＋ 9°	接　口	甕 ＋ 甕		中期前葉	成人
10 号	N—44.5°—E	—8.5°	〃	〃	隅丸長方形	中期中葉	成人・下甕に骨片がのこる

的均一な胴部にくらべて厚みが著しく大きい。底部付近にはこまかい刷毛調整をのこす。器色は赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。口径54.6cm・器高85.2cm。時期は中期中葉。

⑽その他（第33図） 墓地内では第2号甕棺の西側に近接して底部口縁部を欠く小型壺1個が採集された。頸部に1本、胴部に2本を数える横位の線状彩文をもつ。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに不良。

小 結

諸岡丘陵では、1973年夏に東側斜面で弥生時代中期中葉から後期前半に相当する甕棺墓・土壙墓で構成される墓地（A区）の調査が行なわれたが[①]、今年度は前記の様に斜面の更に上部（C・D区）および丘陵西側の甕棺墓地の一部（B区）を調査した。その結果、A地区に近接するC・D区では、甕棺墓等の弥生時代墓と考えられる遺構は全く発見されず、B区甕棺墓地との間はこれらより時期的に遡る弥生時代前期末の竪穴群に占められる（第3章Ⅳ参照）。今、過去の知見、調査から諸岡丘陵における墓域の大まかな範囲を考えてみたい。

丘陵での最初の本格的な破壊は1949～50年に始まり、西南部一帯の削平がなされた。この際、甕棺墓等が出土したであろう事は1968年前後にA区に接する住宅建設で多数が、また現在の南崖面には数基が確認出来ることから明らかである。西側一帯（B区を含む）は、1954年忠魂社の建立工事で甕棺墓の存在が知られた。現在C・D区に接する参道上に散布する甕棺破片はこの時のものであろう。1971年の踏査ではB区に接する西側の住宅地の崖面に数基の甕棺が露出していた。また北側にあたる部分では現在まで、甕棺墓の存在を示す何ものも見あたらない。以上の点から想定すれば、諸岡遺跡における弥生時代墓地は、丘陵の南半を占め、当時最高点にあたると思われる忠魂社付近の尾根から西斜面をおおい、南側丘陵端を廻って東斜面に至るいわば不整な馬蹄形に近いひろがりとなろう。

次に諸岡甕棺墓地における時期別構成につきふれる。調査によって知られたのはA区とB区の一部である。 表面採集ではB区の東側、およびC地区斜面で前期タイプ（**第65図**）の甕口縁が見つかっており、一応墓地形成の最初の段階と考えてよい。続く中期前葉では後半にあたる型式がB区（第4・9号）に見出される。A地区ではこれに相当する型式をもたず次の中期中葉に至ってようやく墓地の形成が始まる。そして後葉までの時期がA区の盛行期であろう。次の後期初頭では両区とも大形成人甕棺が姿を消し、「く」字形口縁をもつ小児用甕棺のみが散発的に営まれており、これ以後に墓地が廃絶するものと思われる。

第2号棺内に遺存したゴホウラ製貝輪8個は、中期中葉の後半に比定されよう。1954年出土の同数のゴホウラ製貝輪、細形銅剣は原位置を外れているが、採集位置は至近距離にあり、丘陵最高部に近いB区に営まれた弥生墓地を構成する一要素となるのは間違いない。1973年ゴホウラ製貝輪1個を出土したA地区第43号棺とは水平距離で63mはなれ、比高差8mをはかる。出土貝輪は合計17個になるが、各れも内孔が「D」字形の特徴ある腹面利用の貝輪であり[②]、山口県土井ヶ浜例と類似する。

註 ① 横山邦継編「板付周辺遺跡調査報告書（1）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集、1974年
② 同上書および河口貞徳「鍬形石の祖形」『鹿児島考古』第8号、鹿児島県考古学会、1973年

Ⅵ甕棺墓出土の人骨と装着貝輪

§人骨　（第37図、PL．X－1）

今回の緊急発掘で調査の対象になった一群の甕棺のうち、辛うじて人骨を残していたものは第2号、第7号、第10号の3甕棺のみであった。このうち第7号及び第10号内のものはごく少量でようやく人骨であることが判る程度であり、第2号のみやや多量に残存していた。従って特に見るべき所見のない第7号、第10号墓人骨から先に記述する。

第7号甕棺墓人骨　女性(？)、熟年初期

残存骨片でややまとまった形を残していたのは左大腿骨下半のみで、他は主要な四肢長骨の破片、頭蓋冠の小片数個及び破損歯牙6本がある。性・年令の推定は困難であるが、長骨の性状が後記第2号甕棺人骨とくらべて「せん弱」であること、歯の咬耗3度であることなどから上記の推定をした。従って確定的なものではない。埋葬姿勢・抜歯風習の痕跡など不明である。

第10号甕棺墓人骨　性別不明、成年

最も保存が悪く全身の微小骨片を残すのみである。ただ下顎小臼歯の歯冠の一部が幸い残っており、それの咬耗が1度であることから成年ならんと推定した。この人骨も埋葬姿勢その他不明である。

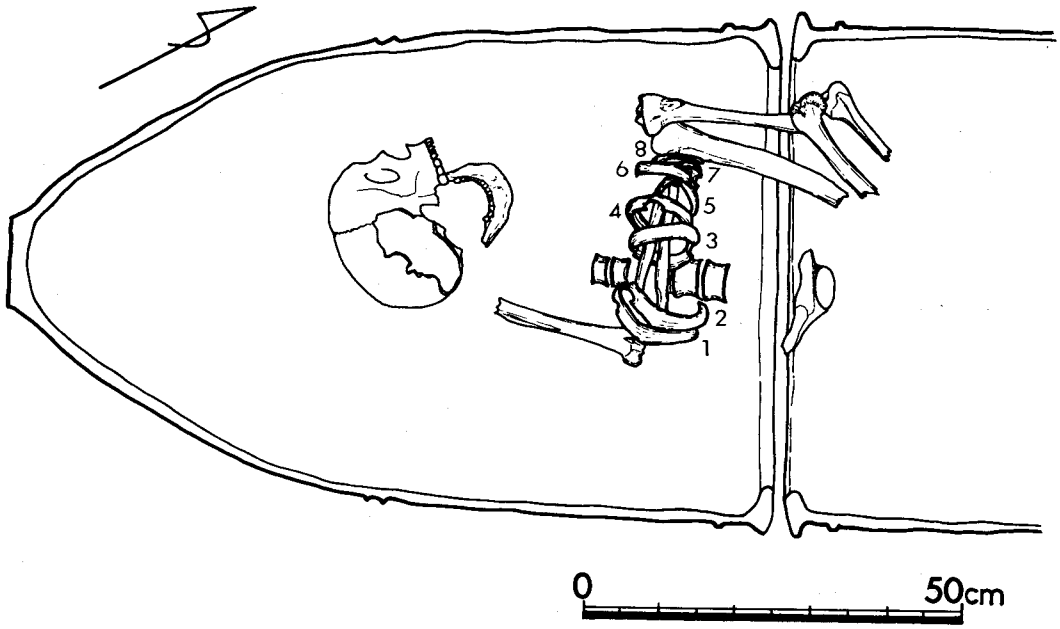
第2号甕棺墓人骨　男性、熟年　貝輪装着

保存状態　左右側頭部に腐蝕が著しい頭骨、腰椎数個、右上肢骨、右腸骨、左右下肢骨で膝関節に近い部分などが残っている。ほぼ水平に埋置された棺内で比較的高位にあった右半身の骨の残りが良く、低部に位置し棺内に侵入した土に埋没していたと思われる骨部の保存は不良でほとんど形を残していない。一方、装着された8個の貝輪によって化学的に保護されたと思われる右前腕骨およびその低位にあった腰椎の残りは良好である。

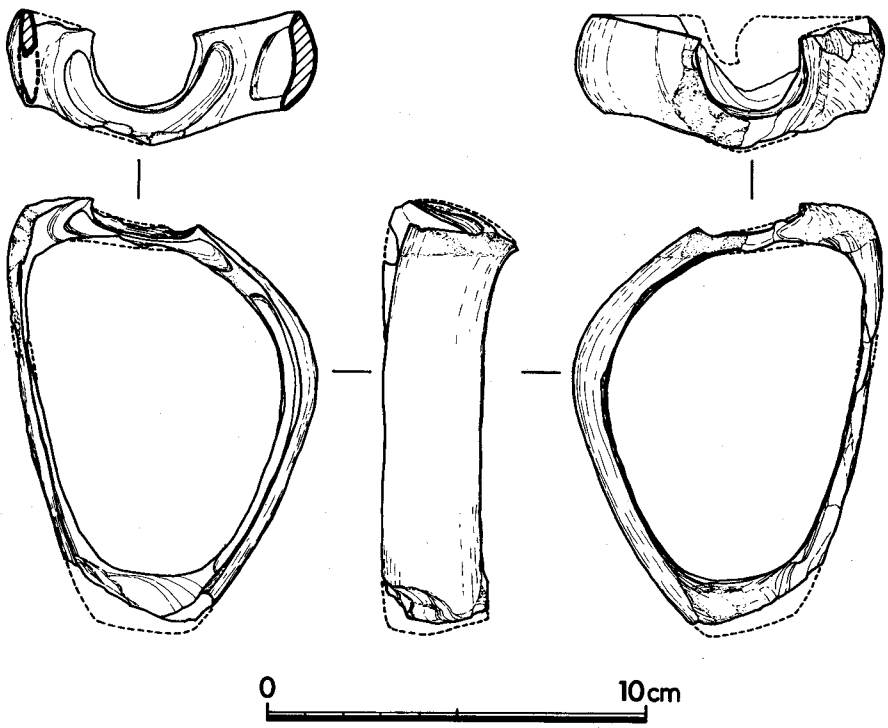
埋葬姿勢　頭骨の向き、および棺内において両膝節部の骨が北側に偏していたこと、両半身骨間の保存状態の著しい相違などからこの遺体の葬法は左側臥屈葬であったと判断される。両側膝関節附近の下肢骨の出土位置からみると、股関節での大腿部の屈曲度は左側で強く右側はややゆるかったと思われるが、膝関節では両側ともに強く屈している。思うに、遺体は先ず下甕に頭から先に左側臥で挿入され、ほぼ上半身を収容し得たが、長身のこの遺体はなお殿部及び下腿下半以下が口縁外にはみ出し、蓋甕を当ててこれを収容したのであろう。接口式甕棺全体はほぼ水平に置かれているとはいえ、垂直断面図をよく見ると蓋甕の低位胴部が最も低いレ

第5表　諸岡出土貝輪の計測値　　※長・短径は手首側内孔の値

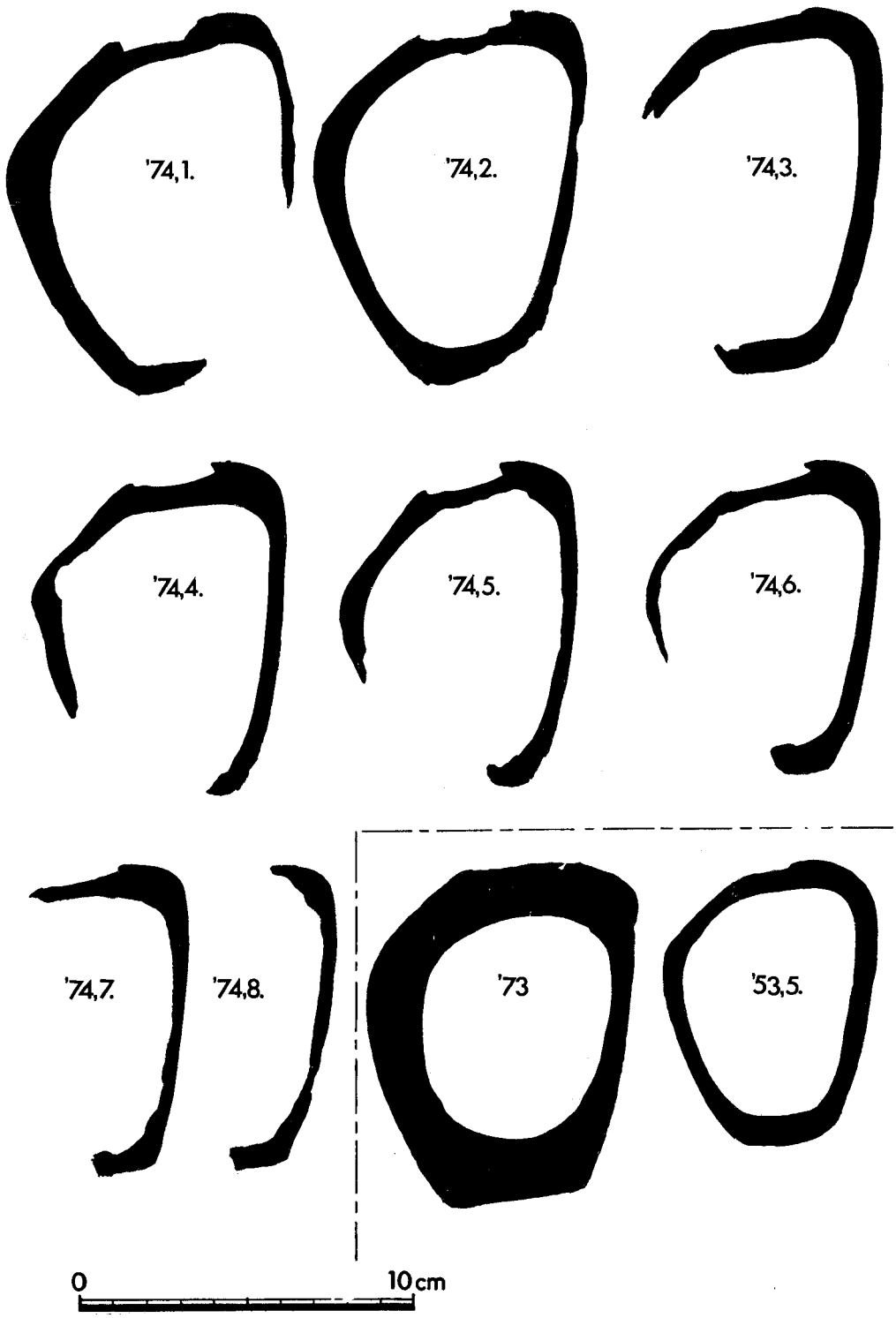
	貝輪番号	1	2	3	4	5	6	7	8
'74諸岡	長　径	91	86	88	80±	75±	73	75±	—
	短　径	68	65	62±	61	59	56	—	—
	掌側縁高	—	25±	26	26	25±	24	23±	—
	背側縁高	28	26	26±	26±	24±	—	—	—
'53諸岡	長　径	80	77	69±	68	67	65	65	64
	短　径	55±	55	53	51	51	49	50±	50±
	掌側縁高	24	23	21	22	22	21±	21±	20±
	背側縁高	23±	23±	22±	22	22	22	22	22



第37図　第２号甕棺墓人骨出土状態



第38図　第２号甕棺墓No.２貝輪実測図



第39図　諸岡遺跡出土貝輪投影図

ベルにあり、従って棺内に侵入した地下水もこの附近に溜まりがちで、この辺りに考えられる足骨などは完全に消滅している。なお、下顎骨は軟部腐敗とともに関節から外れて落下転位しているが、これも埋葬後の相当年月の間、左側を低位にした上顎との咬合位にあったと思われ、左側下顎枝の腐蝕が強い。また頭骨右側半に著しい丹の附着を認める。

人骨の性状　全体に骨格太く強大で、筋肉附着部の浮彫像も粗い。頭骨では眉上弓の隆起強く、前頭側面観の傾斜も急であり、外後頭隆起も著しい。骨盤骨は右腸骨のみで最も確実な性別推定の根拠を欠くが、他の点ではすべて典型的な男性を裏づける性状を具えている。

また、冠状縫合内面は完全に癒合しており、歯牙の咬耗は前歯から後歯に亘って象牙質を広く露呈した咬耗3度であるので熟年とみてよい。

推定身長は幸い、貝輪に保護されて右橈骨が全長にわたり殆んど完全に保存されていたので、この最大長254㎜よりPearson氏の公式を用いて169.0㎝を推定した。当時としては高身である。

抜歯風習の痕跡については、上・下顎の歯はよく揃っており、その証跡のないことは確実である。

§装着貝輪（第38・39図、PL. X－2）

1．出土状態

肘関節でほぼ直角に曲げられて腹部に横たわる2本の前腕骨に8個装着されていた。これらは便宜上、最初にはめられまた最大の肘側（近位）のものをNo.1とし順次小さくなって最も手首側（遠位）にあったものをNo.8とする。No.7～8は侵入土に埋没し最も保存が悪かった。残りの6個も完形品は1つもなく、出土の際に低位にあった部分がいずれも腐蝕欠落している。**図39**はこれら一連の貝輪の平行光線による投影図である。もともと貝輪内孔の形を歪みなく撮し取るため、陽光を鏡面2回の反射で室内へ垂直な落下光線として導入、ジアゾ感光紙に印画したもので、着装時遠位側から見た像となっている。この像の欠落部位から個々の貝輪がどのような出土状態であったか良く察知出来る。**PL. X－2**において一連の貝輪の並びを見るとき、No.3にやや著しい回外転位が見てとれる。一方、2本の前腕骨の並び方を見るとき、回内位をとった自然位では両者は交叉すべきはずであるが、この場合平行し、橈骨の尾側に尺骨がならびいずれも後面を上にしている。貝輪、前腕骨ともに死後の軟部融解に伴ないこのような転位を起すに到ったものであろう。それにしてもNo.3貝輪と橈骨近位端の転位は著しい。

2．貝輪の形状（第5表、PL. X－2）

これらの貝輪の型は、北部九州・弥生中期の遺跡出土のものによく見られる型であって、着装時肘側から見た形はアルファベット大文字Dに近似し、直線的な掌側縁とわん曲した背側縁とを持つ。手首側から見れば第39図のごとくその鏡像となる。大きさについては第5表と第37・38図を、記載用語・計測手技については文献（1）を参照されたい。

3．原材及び利用部分

原材となった貝はやはりゴホウラ*Tricornis Iatissimus*であって、殻軸を通る直線に対して不相称性が著しく、掌側縁に対して背側縁の肩がひどく落ちている。利用部分は、殻軸をはさ

み側縁高の幅で殻口面にほぼ平行にとったものである。ゴホウラ特有の肩部の一瘤はすり落して丸味を持たせてある。

4．諸岡既出土例との比較（第39図）

この遺跡で最初にこのような貝輪が発見されたのは昭和28年であった〔文献(2)〕。発見者は亀井勇氏、発見場所はこの第2号甕棺より10mあまりしか離れていない現忠魂社社殿の敷地内であることは当時を知る高田一弘氏から現地に同行して頂いて知った。弥生中期の須玖式で接口式の甕棺内から熟年男性人骨の右前腕に同じく8個の縦切貝輪がはめられて出土し写真も残っている。この人骨の頭部とくに顔面には鮮かな丹の附着が認められる。近距離で、しかも出土状況・内容ともにこの第2号甕棺とは共通性があると考えられるが、貝輪も同型で、ただ第2号甕棺人骨着用のもののほうが大型である。

また昭和48年、上記より水平距離で約80m、レベルで8m低い地点(A区)で出土し、同じ須玖式に属する丹塗磨研の甕棺第43号内より出土した男性の可能性高い年令不明の人骨の右前腕に着装された1箇の縦切貝輪は時代はあまり変らないに拘らず背側縁高が高く厚手で、むしろ土井ヶ浜出土例に最も近似している。

5．貝輪着装と関係あるかと思われる特記所見

前腕の橈骨・尺骨が他の体部の諸骨と同じく太くたくましいことは勿論であるが、他に一見して正常とやや異なる所見がある。すなわち、一般にこの両骨には矢状面および前頭面における骨体部の「わん曲」があり、これが回内・回外運動に好都合であることが知られている。ところが、第2号甕棺人骨のそれは軽微であり、全体的印象は太い棒を思わせ、尺骨体遠位部の周径もそれほど細まっていない。また橈骨背側面には、長母指外転筋および短母指伸筋の起始と走向に相応するかの如き浅い溝が走り、両者の間には隆線が見られ、これは骨間縁から斜に茎状突起に向って走っている。これらの所見が、長年の貝輪による絞扼から前腕や上記両筋の運動がある程度制約されたために生じたものか頗る興味のあるところであるが、残念ながら比較的照すべき左側の前腕骨が全く保存不良であるので今後の好出土例を期したい。

文献

1．横山編『板付周辺遺跡調査報告書(1)』福岡市教育委員会、1974年

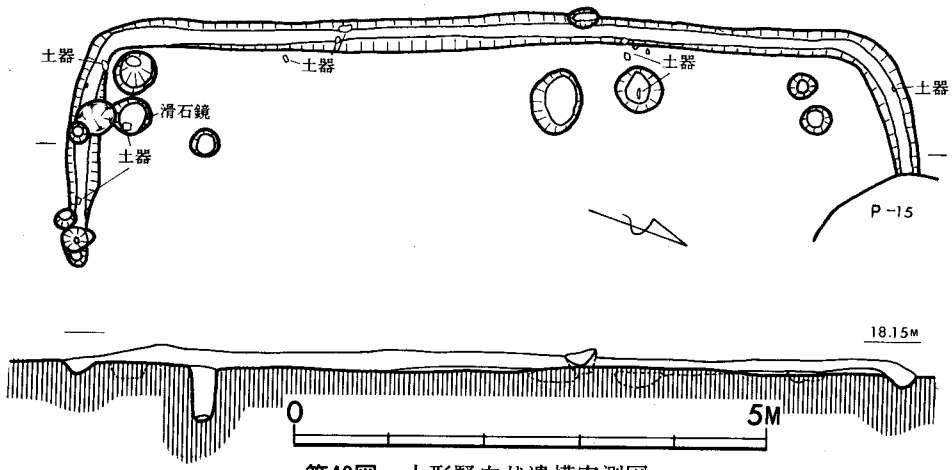
2．「福岡市大字諸岡発見の貝輪」『福岡教育』Vol．12 No.7、1968年

Ⅶ　古墳時代以後の竪穴と出土遺物

1　大形竪穴状遺構（住居址？）　（第40・41図）

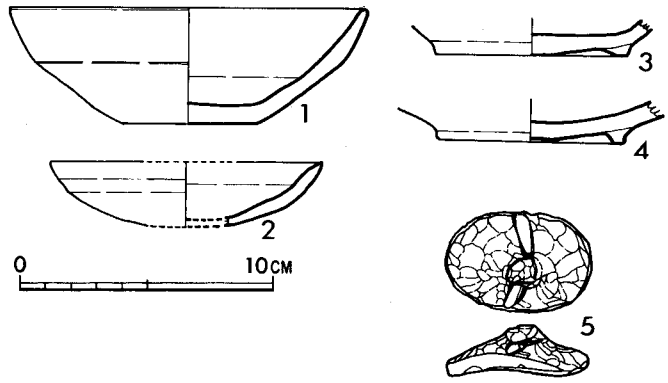
C区の第14号竪穴の西にコ字状の溝がある。長さ８ｍほどで、北北西―南南東にのび、その両端がほぼ直角に東側に曲るが、地山の傾斜のため各々２ｍほどしか残っていない。溝の内側は外側より20cmほど低い平坦面をなす。溝は幅20～30cm、内側平坦面より10～15cmの深さである。溝の内側には柱穴状の浅い小穴が不規則にあるが、南側のひとつだけが深さ60cmほどである。周溝をもつ竪穴のようだが、断定できない。

溝の周辺から土器が出土した。１は椀形土師質土器で、外開きの器壁は口縁下で内へ折れる。外面は篦なでで、内面は平滑。橙黄色だが、口縁部外面と内面の口縁からやや下までは灰黒色。口径14.2cm・底径 5.3cm・高さ 4.6cm。２は杯で、内面は篦磨き、外面は篦削りとなでて、口縁部外面が灰黒色、その下が淡黄褐色、内面は灰褐色。口径10.8cm・推定高 2.6cm。３・４は高台付椀の底部片。淡黄褐色だが、３の内表面は黒色。いずれも内面は篦磨きにより平滑だが、外面は風化してはっきりしない。４の底面には粘土の継目が残る。高台は低く、直径は7.6cmと

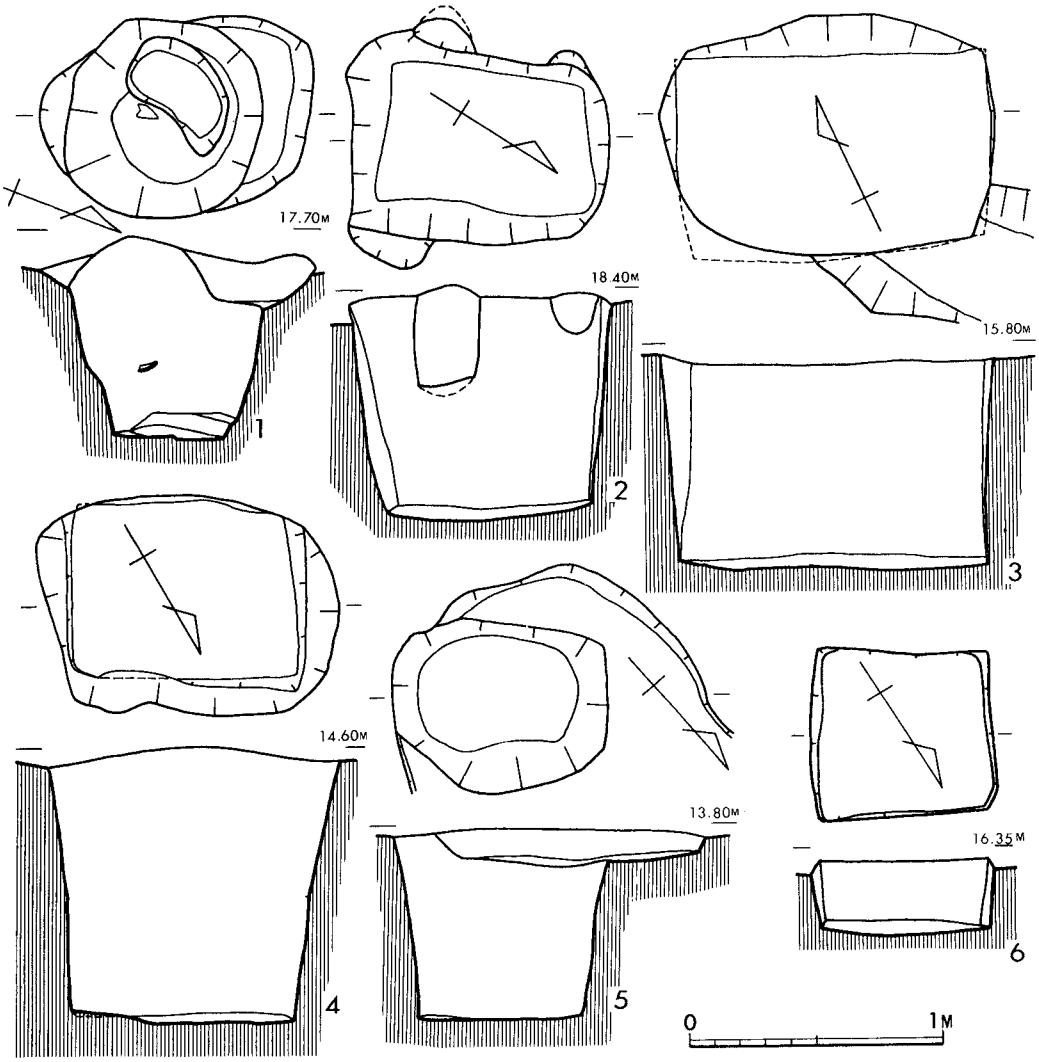


第40図　大形竪穴状遺構実測図

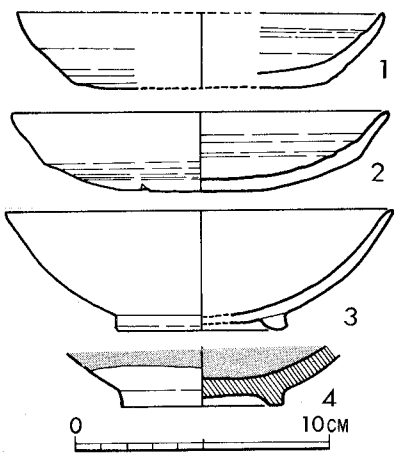
7.4cm。５は滑石製品で、下面は内ぞりの平滑面をなし、上面は山形で、中央が突出する。ここに両側から孔をあけ、両端は溝状になる。孔の奥に鉄が入っていて、孔に鉄芯を通したようにみえる。平面は楕円形で模造鏡のようにもみえる。長径5.8cm・短径４cm・厚さ約２cm・孔径0.5 cm～0.7cm（PL. Ⅷ－４）



第41図　大形竪穴状遺構出土遺物実測図



第42図　第12・16・22・24・35・36号竪穴実測図
（1：16号、2：12号、3：22号、4：35号、5：24号、6：36号）



第43図　第16・22・35号竪穴出土遺物実測図

2.竪穴と出土遺物（第42図～第54図）

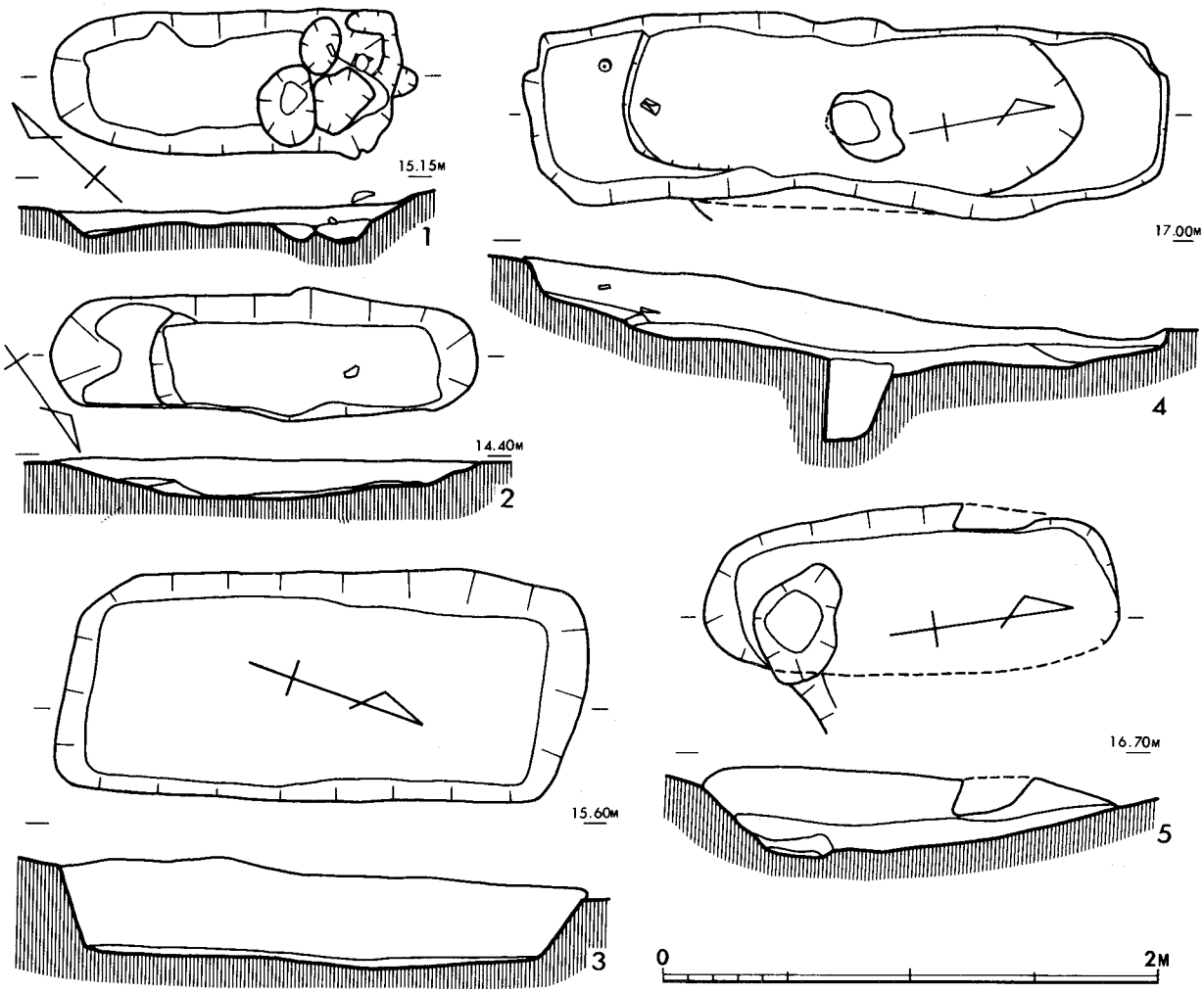
土師器・須恵器・磁器などが出土する竪穴は26基ある。これは竪穴の形状だけを基準にすれば７形態にわけられよう。ただし、この分類は便宜的なものにすぎず、時期あるいは位置関係等での意味はまったくない。

第１は、平面が方形ないし長方形の深さ70～120㎝の竪穴である。**12・16・22・24・35・36**号の各竪穴がそれである（**図42図**）。**22号**がもっとも大きく、床は1.25×0.8ｍの長方形で、深さは85㎝ある。壁はほぼ垂直である。**12号**は西壁に柱穴状の穴があるが、竪穴とは無関係の柱穴であろう。**16号（PL.Ⅴ－８）**は上

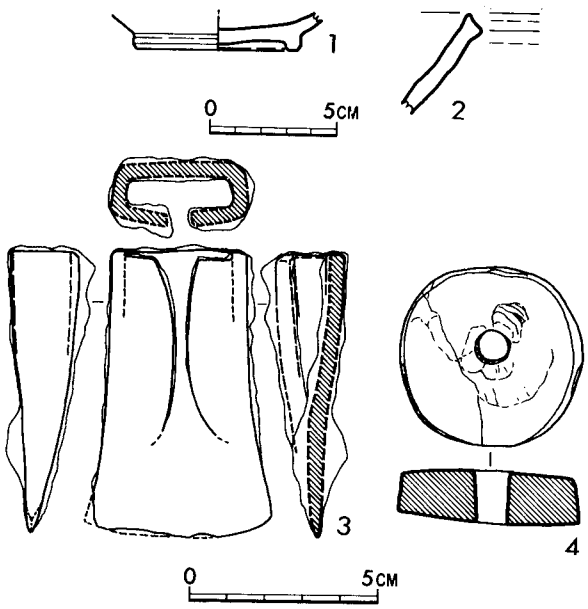
端も底も円形平面で他のものとことなる。**36号**は一辺約70㎝・深さ30㎝ほどで中にロームを多量に含む黒色土が入っていて、他の竪穴のロームを含まない黒色埋土と異なる。これらは昨年度調査のA区で時期不詳としたものと同一形態である。①

なお、22号竪穴から南へ長さ5m、幅0.7mの浅い溝6がのびている。この溝は22号に切られているが、遺物は出土せず、時期不詳である。

遺物（第43図） 1は16号出土の土師質土器。良質胎土で、ロクロ痕が内外面に残る。底は篦削りを施す。復元口径14.7㎝・高さ3㎝。2も土師質坏。やや砂質胎土で、淡橙褐色。中央下部に段があり、その下にロクロ痕が残る。底には篦痕とみられる深い切込み状の直線が長さ10



第44図　第32・34・38・39・42号竪穴実測図
（1：32号、2：39号、3：34号、4：38号、5：42号）



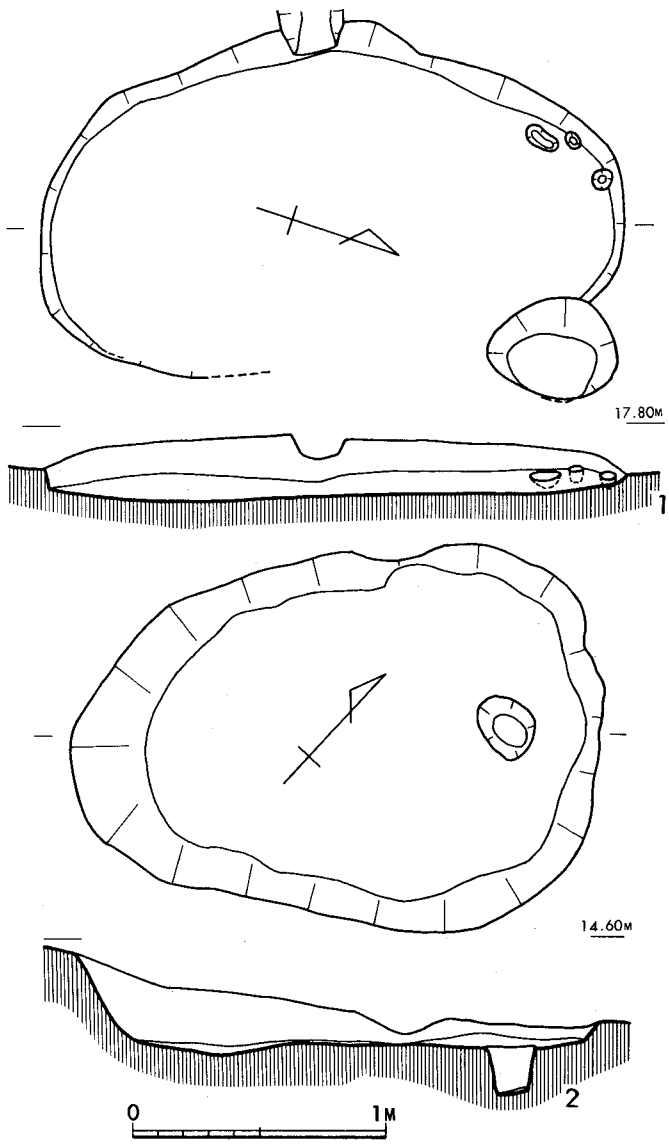
第45図　第32・34・38号竪穴出土遺物実測図
(1:32号、2:34号、3・4:38号)

cmほどある。**3**は土師質の高台付椀である。外面は風化が甚しく、淡茶白色で一部灰色を帯びる。内表面は黒色でなめらかだが、剝落した部分が多く、その部分と器壁内部は外表と同じ色である。高台はやや外にひらき、内側は斜めに削ぐ。口径15.4cm・高さ4.8cm。**2**・**3**は22号竪穴出土。**4**は35号竪穴出土の白磁底部破片である。施釉は内面と外面上部にされる。釉色は淡いかすかに緑色味のある白色で、細かいひび割れがある。高台は直径6.4cm。高さ0.6cm。畳付部幅0.5cmで、ほぼ垂直である。高台内側は斜めに削る。

第2は細長い**32・34・38・39・42号竪穴**である（**第44図**）。長さ×幅×深さは**32号**が140×55×10cm・**34号**が210×95×40cm・**38号**が260×75×40cm・**39号**が170×45×15cm・**42号**が170×65×35cmである。**32号**の床はひどく荒れている。**38号**は西端に一段高い部分があり（**PL.Ⅴ－5**）、**39号**も一端に一段高い部分がある。**34号**はととのった長方形をなす。**42号**と**38号**は底に後世の柱穴が掘り込まれている。長軸は**34・38・42号**がほぼ南北で、**32号・39号**はほぼ北西～南東である。形状からみて土坑墓の可能性がある。

遺物（第45図） **1**は32号出土の黒色土師質土器である。胎土は精良で灰白色であるが、外表は黒色・内表は黒色の部分と暗灰色の部分とがある。内外面ともなめらかである。高台径6.8cm・高さ0.6cmほど。**2**は**34**号出土須恵器口縁部破片。胎土はやや砂質で、灰色を帯び、内外面にロクロ痕が残る。**3**・**4**は38号出土の鉄斧と紡錘車である(**PL.Ⅷ—1・2**)。**3**は長さ7.5cm・刃部幅4.8cm・袋部幅3.6cm・厚さ2cmほど。刃部はゆるく弧をなす。**4**は頁岩質の石材で、直径4.7～4.9cm・厚さ1.4cm・孔径0.9cmを計る。この38号は土師質土器を出土する中世の竪穴と明らかに性格が異なり、古墳時代の可能性が強い。

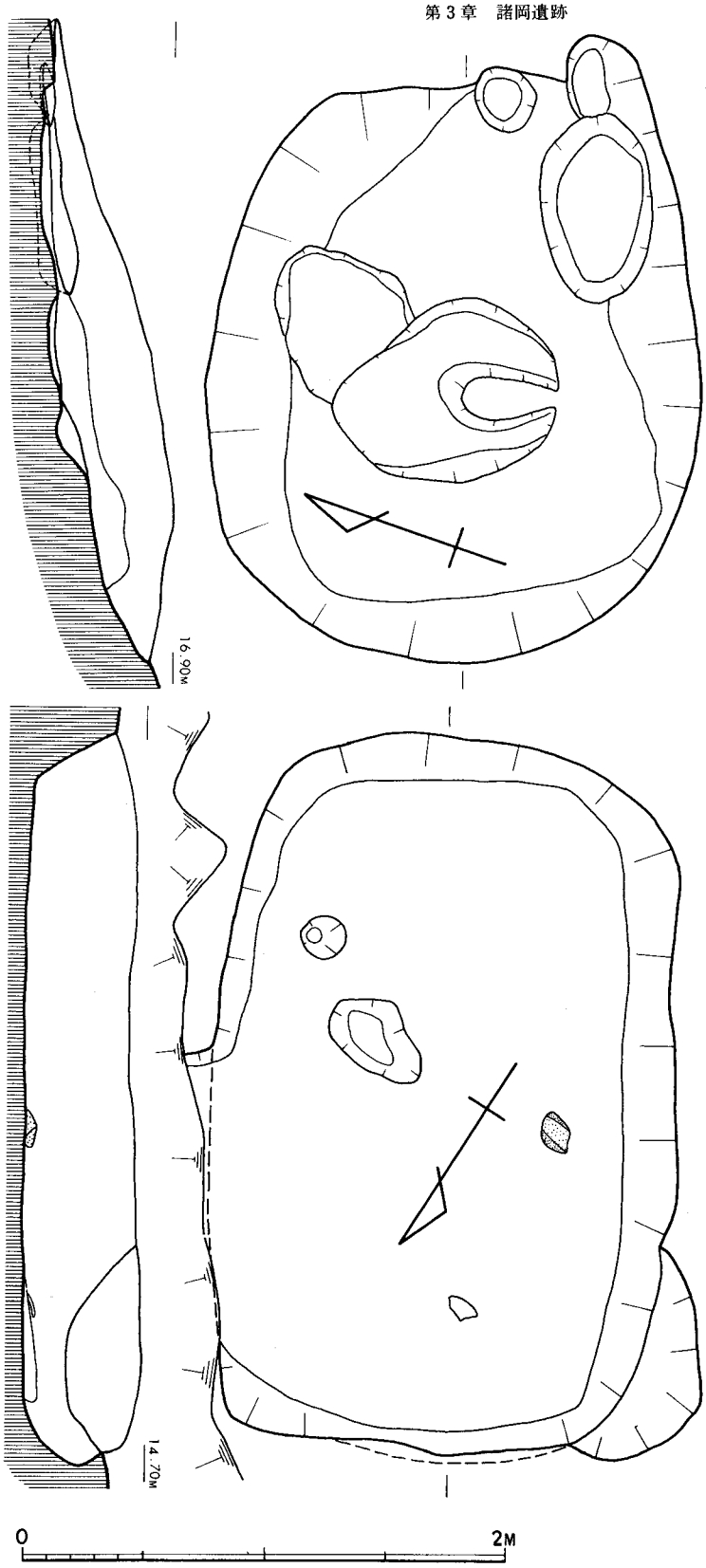
第3は平面形が長方形・楕円形の大形竪穴で、**15号・18号・23号・31号**がそれである（**第46・47図**）。**15号**は230×130cmの楕円形で、深さ約25cmである。長軸は北北東—南南西。**18号**も240×200cmの大きさの楕円形平面で、深さは50cmある。床は皿状に中央が低いが、南東部と中央に浅い穴がある。本来この竪穴に付属するかどうかは明らかでない。長軸はほぼ東西。**23号**は210×150cmの長楕円形で、深さは35cmある（**PL.Ⅴ－7**）。床は平坦で、東側の柱穴はこの竪穴とは無関係であろう。長軸は北東—南西。**31号**竪穴は隅丸長方形で3×1.8m・深さ45cmである。床は平坦で、壁はなだらかに上るが、北西壁上部は内傾する。長軸は北北西—南南東である。



第46図　第15・23号竪穴実測図
（1：15号、2：23号）

遺物（第48図） 1～5は31号竪穴出土である。1は椀形で底部を欠く。外面はひどく風化しているが、上部は黒色、下部は胎土の色がそのまま出ていて淡いクリーム色である。内面はおそらく篦磨きで、平滑になり、全面が黒色である。口縁はなめらかに外上方へのび、端部は少し厚く、丸く仕上げる。砂質胎土で口径16.8cm・現高 4.8cm。2は淡黄褐色の坏である。器体上部の内外に段がつく。底部はほぼ平坦であるが、篦切り離しによって生じたらしい段状の凹凸がある。胎土には極少量の石粒がまじり、器壁中心部は灰～黒灰色を帯びる。復元口径16.8cm・高さ24.1cm。3は坏とみられる口縁部分である。少量の石粒混り胎土で、淡黄褐色を帯び、色・質は2にほとんど同じ。外面にロクロ痕が残る。復元口径14.2cm・現高 1.6cm。4は黒色土器底部である。器壁内部はまっ黒で、内外表面はやや灰色味を帯びた黒色である。内面は篦磨きで平滑、外面も篦磨きらしい。高台復元径 5.6cm・高さ 6～7㎜・現器高2cm。5は口縁を玉縁状に厚くした白磁口縁部破片である。6は黒色土師質椀口縁片である。表面は黒ないし黒褐色で、器壁内部は褐色。内外面とも篦磨きである。復元口径16cm・現高 2cm。7は土師質高台付底部片である。胎土はやや砂質で、黄褐色を帯びる。内外面とも平滑に仕上げるが、高台部分は磨滅している。高台復元径 8cm・現高 1.7cm。

第4は**7b号・7c号・25号・26号・27号・29号**の各竪穴で、小形円形のものである（**第12・49・50・51図**）。7b・7c号はすでにのべた（54ページ）。25・26・27号は南北に接近して並び、29号も27号のすぐ北東にある。**25号**は 1.3×1 mの楕円形で、深さ40cm。**26号**は 1.3×1 m・深さ80cmである。**27号**は80×70cmの円形皿状で深さ20cmなどである。**29号**は径90cmほどで、深さは20cm



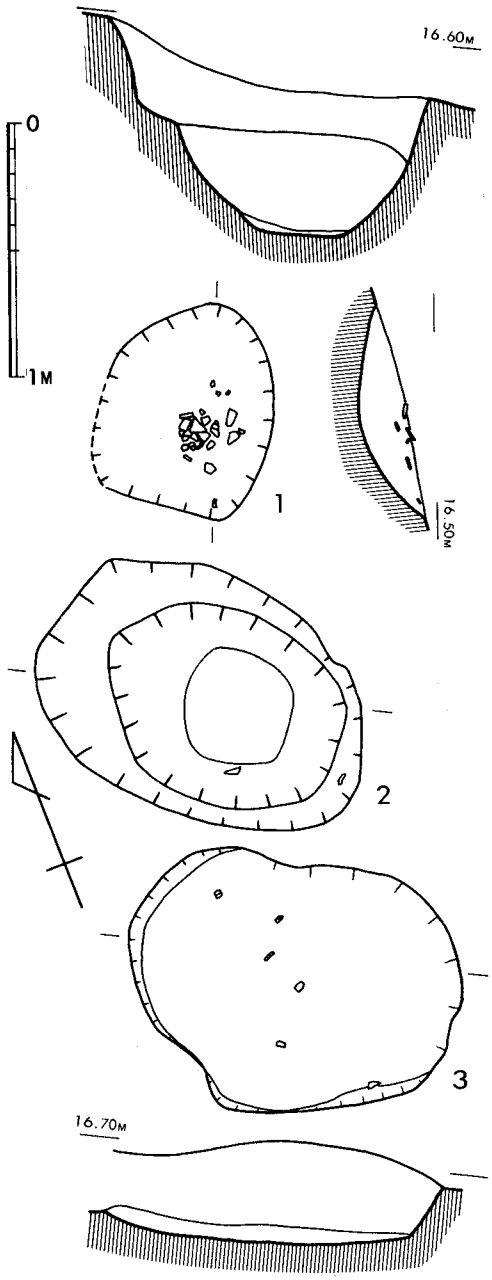
第47図　第18・31号竪穴実測図（1:18号、2:31号）

余りである。

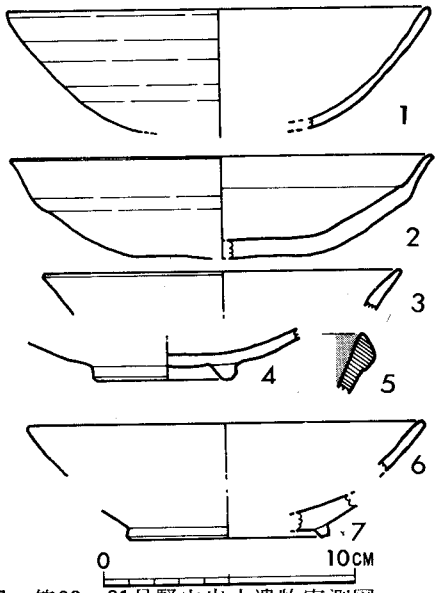
遺物（第50図） 7b号竪穴からは土師皿３点が出土した。いずれも砂質胎土で、淡い黄褐色を帯びる。１は復元口径14.4cm・高さ 2.9cmで、底面に同心円状のロクロ痕がある。口縁部分はまっすぐに外方へひらく。２は復元口径10cm・高さ1.4cmで、底面に同心円状のロクロ痕がある。３は復元口径16.2cm・高さ 2.8cm。風化が甚しい。底部内面は同心円状に凹凸があり、黒褐色を帯びる。４は26号出土の高台付底部破片。復元底径 7.2cmで、高台内外面ともロクロ痕がある。内面はなめらかで、高台端部は幅２㎜ほどで細い。底面外部には同心円状の凹凸がある。胎土は砂質で淡い黄色を帯びる。５も26号出土で、釉のある灰色の須恵器片である。内面に青海波文がある。外面は叩きの上に暗緑色～黒色の釉が上から下へ垂れたように３本ある。施釉の厚さは１～２㎜で厚い。

第５は細長い**第28号・33号**である**（第51図）**。**28号**は長さ 2.4ｍ・幅 0.7ｍほどであるが、底は凹凸がはなはだしく、中央に80×40cmの長楕円形の穴が掘り込

まれ、東北壁に柱穴2つがある。いくつかの竪穴、柱穴が複合していると思われる。**33号**も西端に浅い張り出しのある平面形だが、これらの張り出しはこの竪穴とは無関係であろう。本来は長さ1.7m・幅0.9m、深さ60cmほどの長方形竪穴とみられ、32号等の土壙墓状



第49図　第25・26・27号竪穴実測図
(1:27号、2:26号、3:25号)

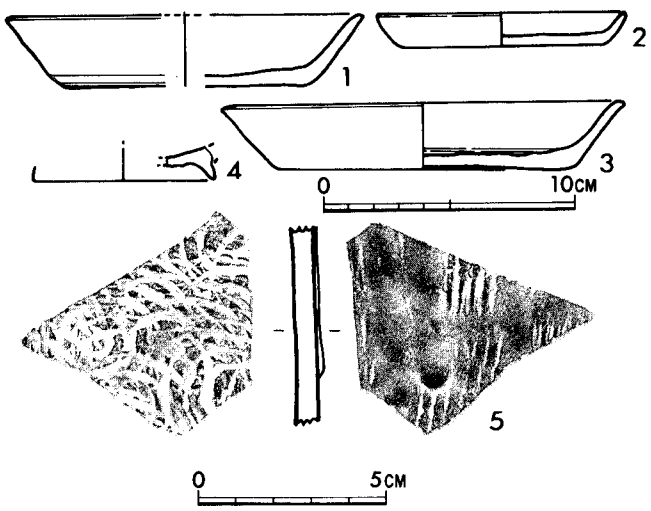


第48図　第23・31号竪穴出土遺物実測図
(1～5:31号、6・7:23号)

のものと同じと思われる。床はほぼ平坦である。長軸は**28号・33号**とも北西―南東で、32号竪穴と同方向である。

第6は**第30・37号竪穴**で23号・31号竪穴をひとまわり小さくした形のものである**(第51図)**。**30号**は1.5×1.1mの隅丸長方形で、東西長軸である。深さは約25cmで、床はほぼ平坦。西側床上で土師質土器が出土した。**37号**は長軸を北東―南西にもった1.4×0.9mの長楕円形で、床は西端が低く、中央が高い。その差は15cm未満で、壁上端と床最下部との差は40cmあまりである。

遺物(第52図)　28・30・33・37号竪穴出土遺物は一括してのべる。**1・2**は高台付椀である。**1**は口径16cm・高さ5.2cm・高台径7cm。**2**は口径15.2cm・高さ5.1cm・高台径6.4cm。**1**は淡褐色で、口縁部の内外面は淡灰色である。内面は全体を篦磨きし、外面上部は篦削り、下部はなでている。胴中央で軽く折れ、口縁は外開きになる。高台は軽く外開きで、内側は篦削りで斜めにそぐ。**2**も内面と外面上部は篦磨きで平滑にし、外面の高台近くはロクロ痕が残る。色は淡黄色あるいはクリーム色で、底部の内側の一部と高台内の一部



第50図　第7b・26号竪穴出土遺物実測図
（1～3：7b号、4・5：26号）

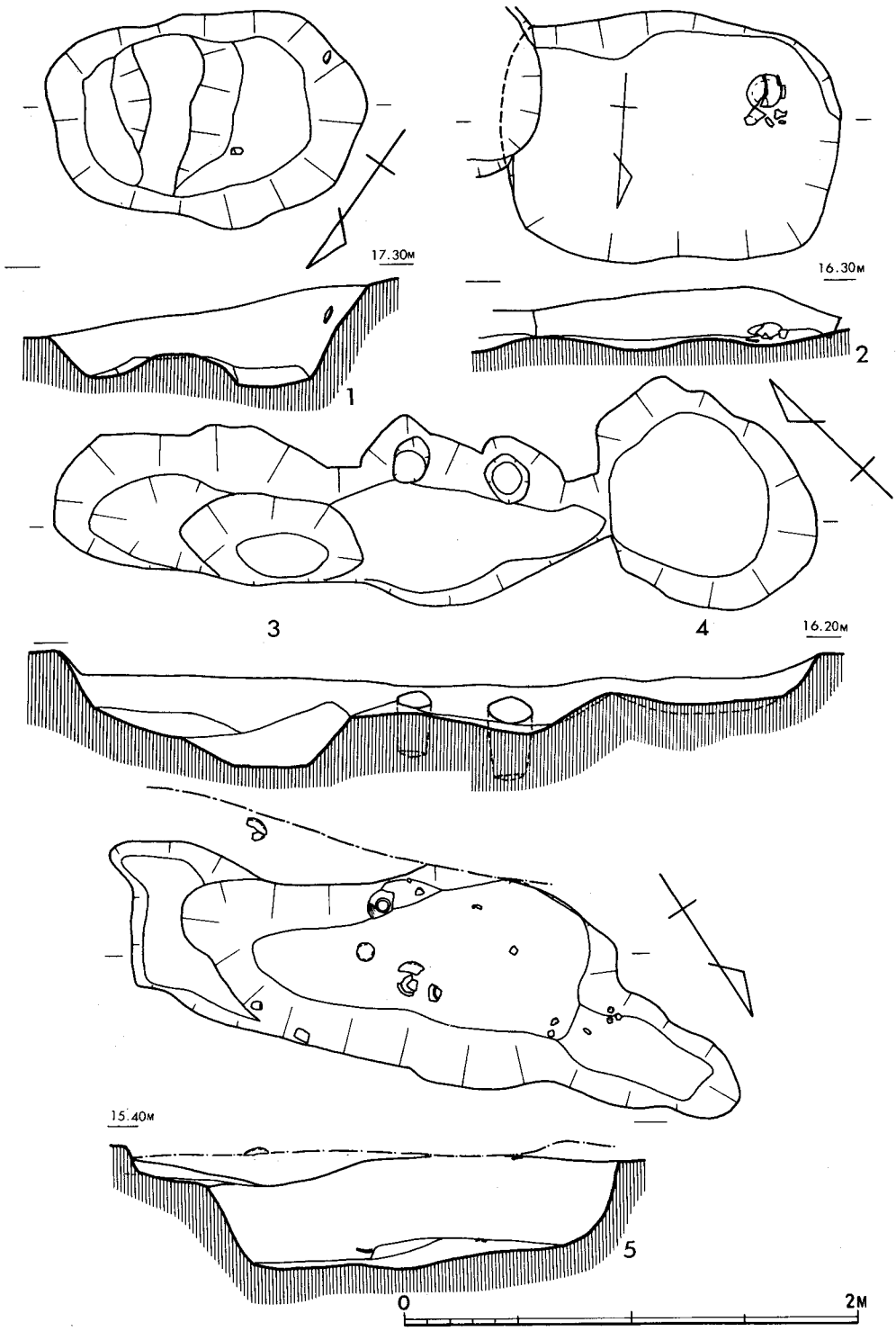
は黒色を帯びる。7は黒色土器椀で内側は、篦磨きで淡灰褐色、外側は篦削りでやや凹凸があり黒色である。凹凸の下で器壁がやや内へ折れる。復元口径18cm。12～14も同様の椀の底部であろう。12はクリーム色で内面は篦磨き、底面はなでである。高台径7.2cm。13は白褐色で内表面は黒色、風化して調整不明。高台径6cm。14は白褐色だが、内側は黒色でていねいな篦磨きを加え、底外面は灰色を帯びる。

3～6・8は坏である。3は口径14cmほどで橙茶色を呈し、なで調整である。4は淡黄色～橙黄色で、内面上部を篦磨きする。底部近くの内外面には粘土の継目が残り、内面には凹凸があり、底近くの外面にはロクロ痕がある。底はていねいになでる。口径15cm・高さ3.4cm。5の色は淡黄色で、内面は篦磨きで平滑、外面は調整不明。底面には粘土の継目が同心円状に残る。口径16cm・高さ4.2cm。6は4・5より底が平らで、底から胴部にロクロ痕が残る。色は黄褐色。8は黄褐色を帯び内外面とも篦磨きするが、内面は平滑、外面は凹凸がある。底面は剝落している。復元口径15.4cm・高さ3cmほど。15も坏の底部片だろう。内面は黄褐色を帯び平滑。外面底部は灰色で継目が残る。

9～11は皿である。9は口径9.2cm・底径6.8cm・高さ1.2cm。淡茶色。底面は糸切り離しの上に簾状圧痕がある。10は、器体下部に篦の切り込みをまわして底が突出するようになり、底面にも篦の切り込みが1本ある。内面は平滑で、ロクロ痕がある。口径9cm・底径6.8cm・高さ1.2cm。11は底部片で、淡橙色を帯びる。底面はなでているが、一部に簾状圧痕のようなものがみえる。

16は淡茶灰色の須恵器で、口縁の一部が注ぎ口のようにへこむ。外面には水平の凹凸がみられる。22も須恵質の灰色土器で、底径13cm・高さ1.5cmほど。内面は篦削りのままである。

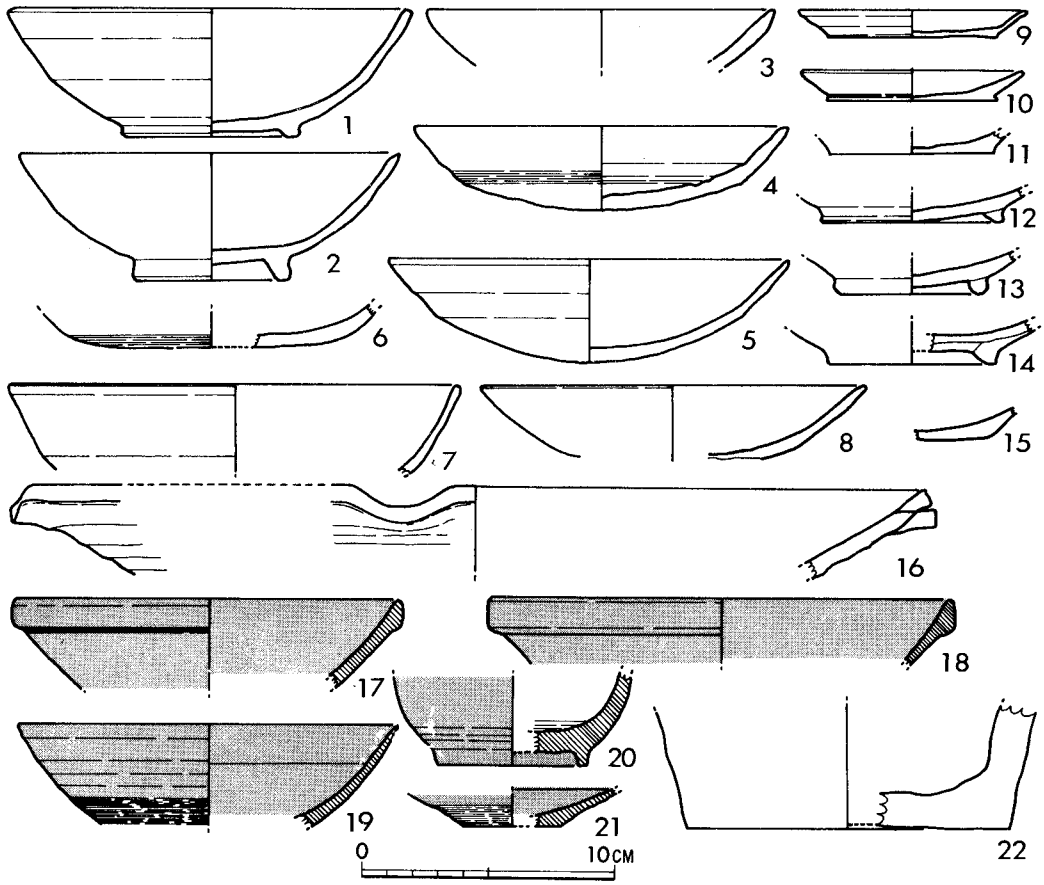
17～21は青・白磁で、33号竪穴出土。17・18は玉縁状口縁をもつ白磁。口径15.8cmと18.8cmを計る。胎土は白色で、18は釉に細いヒビがみられる。亀井明徳氏の分類によれば白磁碗Ⅱ類②である。19は青磁で、口縁内面に沈線が一本入る。内面と外面上部に施釉し、無施釉のところには篦削り痕がある。青磁A群碗Ⅰ類であろう。口径15cm。20は白磁で、内面全面と高台畳付部以外に施釉する。内面下部には篦削りで生じた凹凸がある。釉は18のような透明なガラス質の感じはなく、油っぽい感じである。21は青磁皿底部である。内面には沈線が一本あり、施釉は内面と外面上部だけである。釉色は緑っぽい。青磁A群皿Ⅱ類であろう。これら青磁と9～11の土師皿から、33号竪穴は12世紀頃のものとみられる。



第51図　第28・29・30・33・37号竪穴実測図

（1：37号、2：30号、3：28号、4：29号、5：33号）

最後に**第41号竪穴**はいくつかの竪穴の複合とみられる（**第53図**）。長軸が北西―南東にあり、長軸長4.1m・最大幅1.8mを計る。北側に1.2×0.6mの略長方形の竪穴①があり、その南側に



第52図　第28・30・33・37号竪穴出土遺物実測図
（2·3·11·13：28号、1·4：30号、5：37号、他は33号）

も1.2×1.0ｍほどの竪穴②がある。その床は竪穴①より7～8㎝高い。それらの西側は一段高く（竪穴①より30㎝余り、竪穴②より25㎝ほど）長さ2.7ｍ・幅1ｍ弱の竪穴③で、そのほぼ中央に直径0.9×0.8ｍ・竪穴③床からの深さ25㎝ほどの柱穴状の穴④がある。これらが前後して作られて、現在のような形になったのであろう。竪穴①北側壁が内傾しているのも、側壁崩落によるためであろう。これら竪穴の前後関係は、土層断面によっても、遺物のうえからも判断できない。

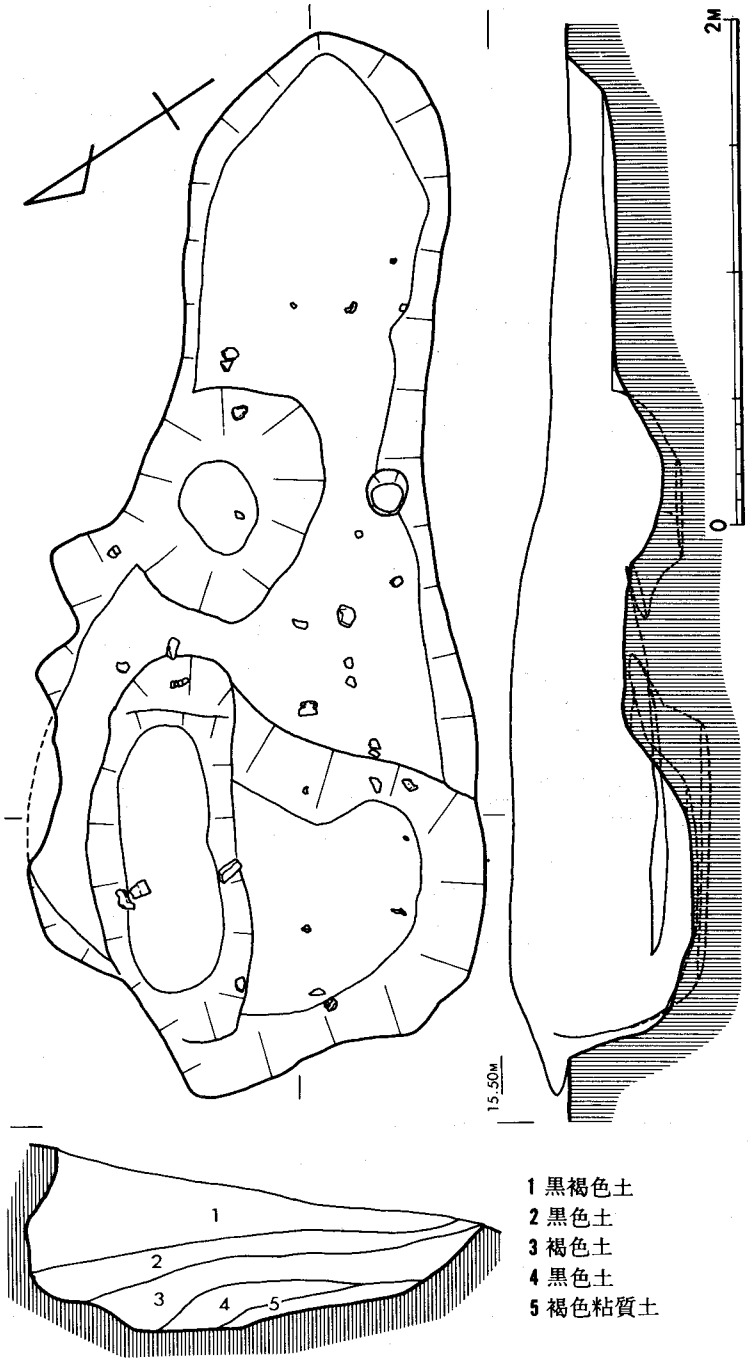
遺物（第54図）　1は淡褐色の土師皿で復元口径6.8㎝・高さ0.9㎝。底面は糸切り離しの上に簾状圧痕がある。2～7は杯である。色は淡褐色、橙褐色、褐灰色等である。2の底部には簾状圧痕らしいものがみえ、7は糸切り離しの上に簾状圧痕がある。5・6の底部には粘土の継目が残る。2～5の内面は篦磨きで平滑になっている。6・7も篦で調整しているが、同心円状の凹凸がある。いずれも外面は篦なでで凹凸がある。口径—高さは、2が9㎝—1.6㎝以上、3が13㎝—3.1㎝、4が14.6㎝—2.3㎝。

8～12は高台付椀である。9・10・12は黒色土器で、9・12は内外表面が、10は内表面が黒色を帯びる。いずれも内面は篦磨きで平滑。9は篦磨き痕がはっきり残っている。外面は篦削

り・なで。9の高台内部底面は簾状圧痕のようなものがあって、その上を篦なでする。8は復元口径17cm・高さ4.4cm。中位に軽い稜があって、ここから上は少し内傾気味である。稜の下は篦削りのままで上は篦磨き。内面上部は篦磨きで平滑。底部側に同心円状凹凸がある。色は黄灰褐色で、底部近くは少し黒灰色。11は灰白色で、内面は篦磨きで平滑、外面は風化しているが、高台内底面は指でなでたらしく粗い。

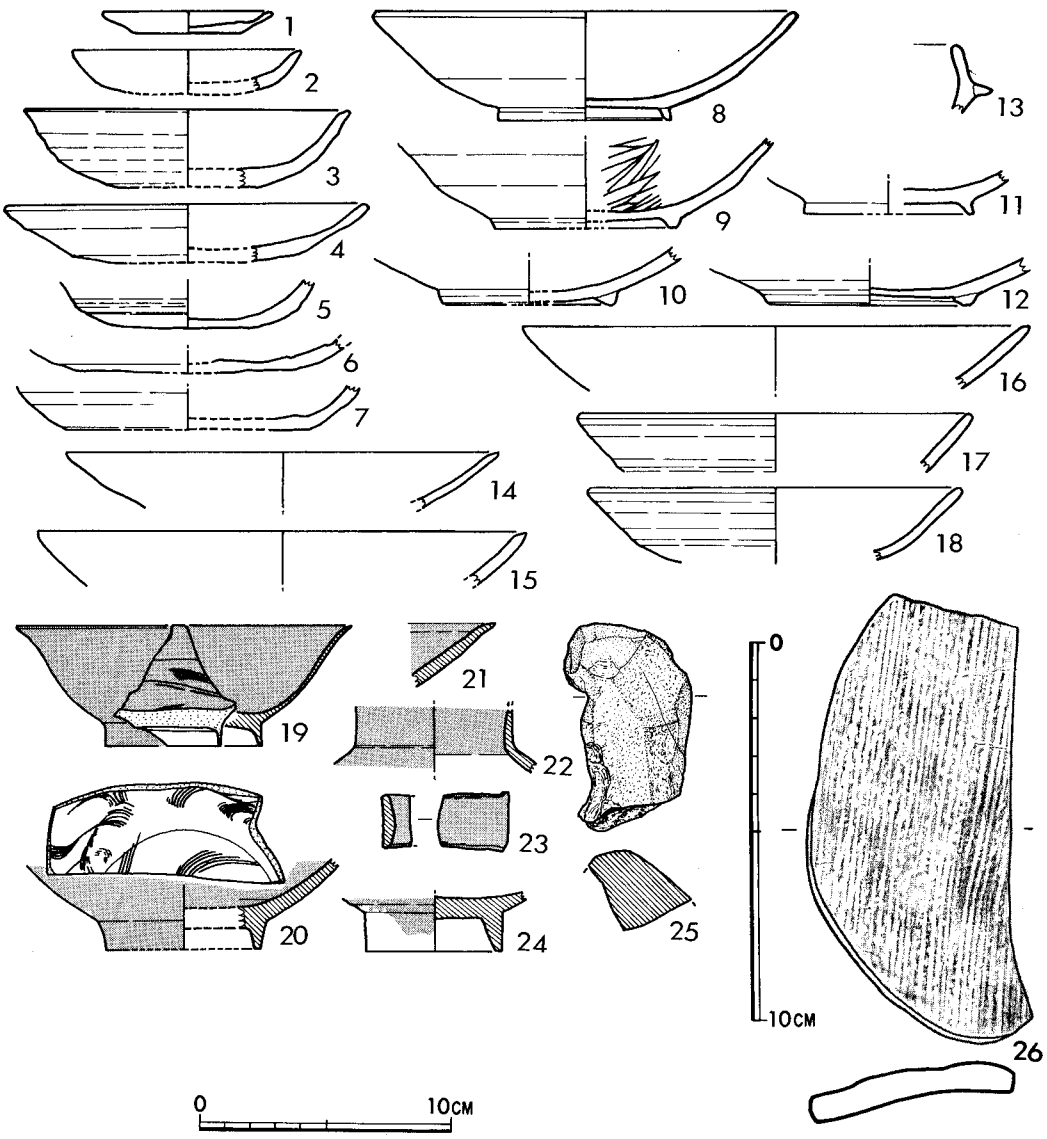
13は蓋受けのつく土師質坏、古いものの流入であろう。淡い褐色で内面にロクロ痕がある。

14～18は椀の口縁部片、口径は15～20.2cm。14・15は淡黄褐色で、内面はやや灰色味を帯びる。内外面とも篦磨きと思われる。16は暗灰色で、内外面とも篦磨きである。これらは口縁端がとがる。17は灰色味のあ橙褐色で、内面はていねいな篦磨きで平滑。外面は篦磨きだが同心円状に凹凸がある。18は白褐色で、内面は平滑、外面はやや凹凸がある。17・18の口縁部は丸く終る。



第53図　第41号竪穴実測図

19～24は青磁、白磁などである。19は口径13.2cm・高さ 4.8cm・高台径 6.2cmの碗であ



第54図　第41号竪穴出土遺物実測図

る。釉は緑灰色で、器壁はやや内傾ぎみに上り、口縁端が外反する。内面に櫛描文がある。青磁E群であろう。**20**は白磁碗。口縁部を欠くが、高台径 6.2㎝・高台の高さ 1.2㎝・残高 3.5㎝。高台畳付部幅はせまい。釉は灰白色で内外面に施される。内面下部に沈線がまわり、櫛描文を施す。**31**は口縁片である。褐灰色胎土で、内外面に黒紫色の施釉がある。口縁は軽く外反し、端部はとがる。外表面には凹凸があり、内面口縁部に一段がつく。釉・胎土とも青・白磁と完全にことなる。**22**は灰白色胎土の壺胴頸部片である。頸は直立し、頸下部に把手のようなものの痕がみられる。外面には黒色味のあるくすんだ釉が施され、内面頸部には茶色の施釉がある。**23**は22と同じ胎土で、釉色も黒・茶・紫を混ぜてくすませたような色である。**24**は白磁底部片である。高台径 5.4㎝で、釉は高台の上の外面だけである。高台部の内外面にはロクロ

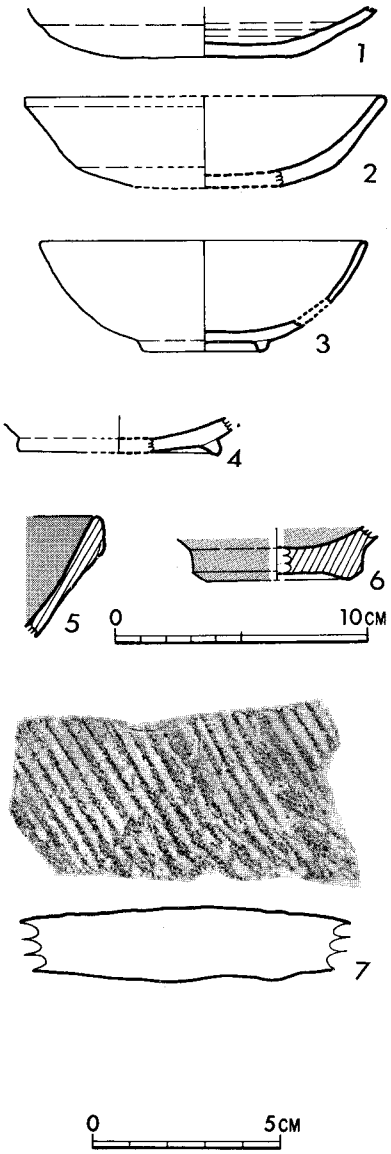
痕が残る。白磁椀Ia類であろう。25は砂岩質の石を磨いて不規則な面とりをしている。各面は平坦でなく少し丸味をもってもりあがっている。用途不明。26は黒色の叩きのある土器片の一端（図の左中央下側）をすってなめらかにしている。裏面は篦なで痕が残る。

以上に述べた各竪穴は、出土遺物からみて平安末～鎌倉初頭のものとみられる。これらと同様の竪穴はA区でも少数あった。[③] ただし38号はことなり、古墳時代後期ぐらいで、丘陵上の古墳となんらかの関係があるかもしれない。

3　柱穴出土遺物（第55図）

D区北側には多くの柱穴が出た。建物のあとはたどれないが、このうちのいくつかでは内部から遺物が出た（第2図の番号を付した柱穴）。

1は土師質坏片で、内面は篦磨きで平滑、底部には簾状痕がかすかにみられる。淡黄褐色。2も同様の杯である。内面は篦磨き、底面の様子は不明。3は土師質椀である。外表面は淡黄色であるが、器壁内部は灰色、内表面は淡黄色と灰色がまじりあう。外面は風化が甚しいが、内面は篦磨きで平滑。復元口径17.2cm、復元高5.8cm、高台径6.8cm。4も同様の椀形器の底部片で、高台径10.8cmでかなり大きい。内面は黒色で、外面は灰色。調整不明。5は玉縁状口縁をもつ白磁片。6は内面に施釉する白磁。高台は厚手で外底部が低く白磁碗Ⅱ類bとみられる。第7柱穴では他に、いわゆる珠光青磁片も1片出ている。7は叩きのある瓦片である。淡灰白色で、叩きのある表面は黒灰色である。



第55図　柱穴出土遺物実測図
（1：第13柱穴、2：第14柱穴、3：第23柱穴、4：第16柱穴、5・6：第7柱穴、7：第15柱穴）

註

① 横山邦継編『板付周辺遺跡調査報告（1）』1974年。P.72第67図上参照。

② 青・白磁の分類は亀井明徳氏による。亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析―太宰府出土品を中心として―」『考古学雑誌』第58巻 第4号、1973年。

③ ①に同。pp.69～71、第62～第64図参照。

第6表　古墳時代以後の竪穴出土遺物

竪穴	土師質土器	須恵器・磁器	その他
12	（遺物なし）		
16	杯1（第43図1）		
22	杯1（第43図2） 高台付椀2（第43図3） 口縁片3、小片23		滑石片1 礫1
24	（遺物なし）		
35	口縁片1	白磁片1（第43図4）	
36	（遺物なし）		
32	黒色土器底片1（第45図1） 小片6		
34	口縁片1、小片3	須恵口縁片1（第45図2）	瓦？1、弥生片1、木炭1
38	底片1、小片1	須恵小片1	鉄斧1（第45図3） 滑石紡錘車1（第45図4） 弥生？小片1
39	小片2		弥生？小片1
42	（遺物なし）		
15	（遺物なし）		
18	（遺物なし）		
23	黒色土器椀1（第48図6） 高台底片1（同図7） 底小片1、小片9		砥石1 先土器時代ナイフ形石器1（第5図）
31	黒色土器椀1（第48図1） 黒色土器底1（同図4） 杯2（同図2・3） 小片20余	白磁口片1（第48図5） 白磁小片1	
7b	Ⅲ3（第50図1～3）		
25	高台底片2、小片5	須恵底片1	
26	高台底片1（第50図4）	須恵釉付片1（第50図5）	
27	口縁片2、小片2	須恵高杯脚片1	甕棺片2、砥石1
7c	（遺物なし）		
29	（遺物なし）		
28	椀2（第52図2） 杯1（同図4） 高台底片2（同図13） 口縁片5、小片60～70	須恵壺片1 須恵小片1（第52図16）	小礫2
30	椀1（第52図1） 杯2（同図5・8） 口縁片6（同図7） 底片3（同図15）		
33	糸切底Ⅲ4（第52図9～11） 高台底片5（同図12・14） 底片9（同図6） 口縁片10、小片53	須恵底片1（第52図22） 須恵小片1 白磁底片2（同図20・21） 白磁口縁片5（同図17～19）	瓦？片5
37	口縁片1（第52図5） 小片5		
41	椀2（第54図8） 杯4（同図1～4） 杯底24（同図5～7） 椀口縁片5（同図14～18） 高台底片14（同図9～12） 蓋受付杯1（同図13） 口縁小片64、小片316	須恵破片利用品1（第54図26） 須恵破片3 白磁片2（同図19・20） 磁器口縁片3（同図21） 磁器底片2（同図24） 磁器壺片1（同図22） 磁器把手片1（同図23） 磁器肥厚口縁片3 磁器胴片5	砂岩質加工品（第54図25） 黒耀石剥片1、礫7 滑石製品片6、木炭3 鉄針1、鉄塊片2 瓦？片1

Ⅷ　地下式横穴（第56～64図、PL. Ⅳ）

C・Dの両調査地区において計6基の地下式横穴が確認された。ここで地下式横穴と呼ぶ遺構は、南九州、特に宮崎県西南部地域に集中して発見される古墳時代中期から奈良時代に及ぶ墳墓に形態上類似することから、便宜的にこの名称を使用した。ただ出土した遺構については、その機能・性格および時期をあきらかにするための積極的な資料を欠くために必ずしもこれが適当な名称とは考えられない。地下式横穴はいずれも丘陵東側斜面にある。C区においては、第1号より第5号の計5基が存在する。同地区は弥生時代および中世の竪穴群・溝などの遺構の分布する斜面とこれを横断して段落ちとなる低い部分とでなっており、第1～4号の4基は段落ちの中部に並列して造営されている。第5号は同区の北端斜面部分で群をわずかにはなれている。第6号は傾斜の緩いD区の北端に軸をほぼ東西に向けて営まれる。なお前の段落ちの壁はこれらの主室をぬって北―南側に延びており、その性格は不明である。遺構はいずれも竪坑とこれに続く短い羨道部および主室をもっている。主室の形態は隅丸長方形（第1・2・4・5号）、不整円形（第3・6号）がみられる。天井部はすべて崩落しており、その形態および規模は知り得ない。各地下式横穴は、遺構間では切り合い関係をもたず、このことは造営の時間的至近性を示すものと思われるが、遺構に明らかに伴うと考えられる遺物は見出し得ない。ただ主室を埋める崩落土中には第5号を除いていずれも土師質坏が採集されていて、他に新しい時期の遺物を含まない。また第6号の東側の丘陵裾部では1972年の緊急調査で同様な遺構が1基確認されている（未報告）。以下個別に説明を加える。

1　第1号地下式横穴（第56図）

第1号はA地区に並列する4基の地下式横穴のうちでは最も南側に営まれ、長軸をS―73°―Wに向けており、竪坑とこれに続く短い羨道および主室で構成される。褐色ローム層を掘り抜いており、床面は花崗岩ばいらん土層となっている。

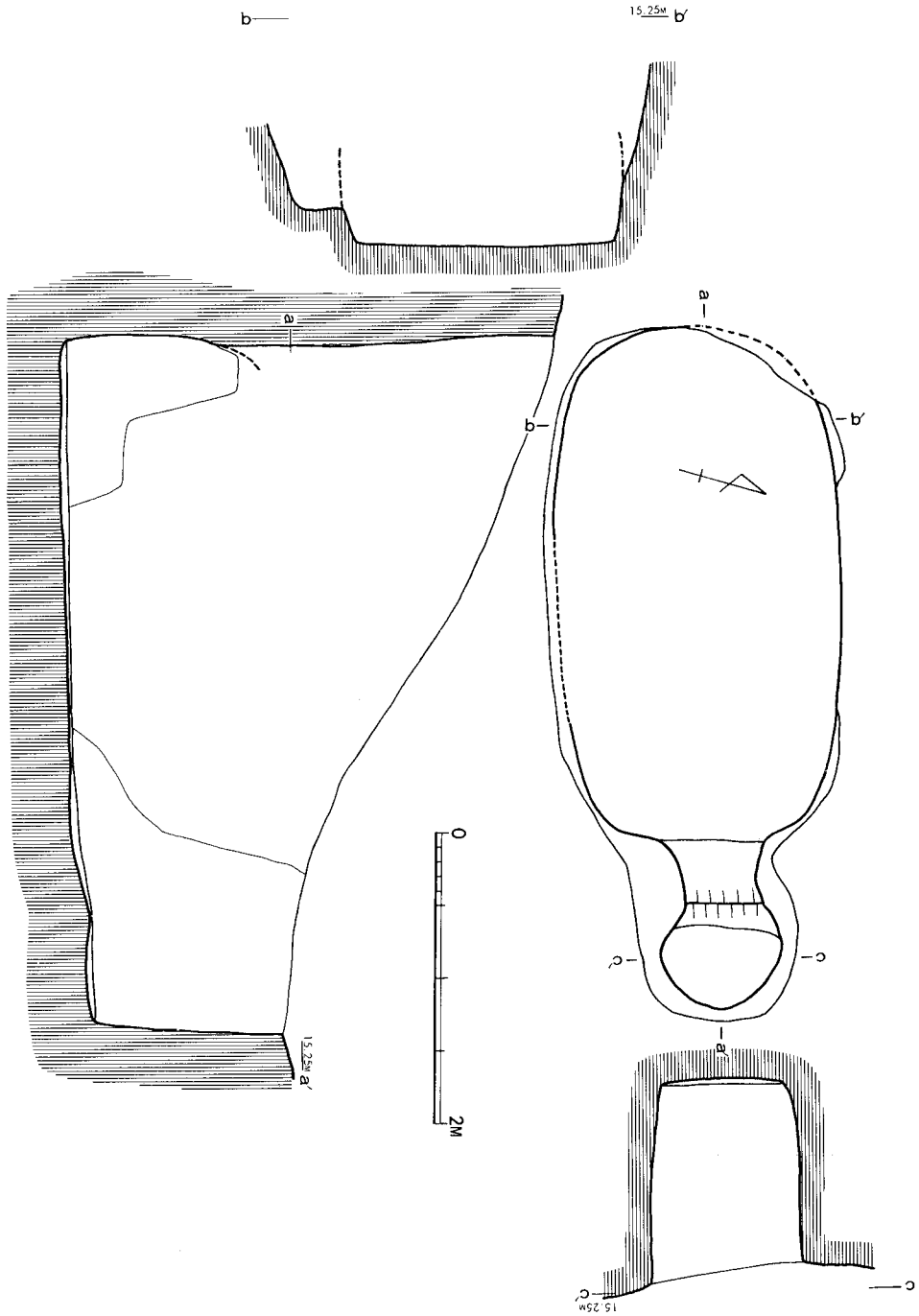
主室は平面が隅丸長方形となり、最大長3.54m・最大幅1.9mをはかる。天井は前記の様に崩落しているが、奥壁の状態から中央部天井は高さ1.5mを越えるものと考えられる。また床面は一体に平坦であり、他の施設をともなってはいない。床面直上崩落土中より土師質坏一個が出土した。主室に続く短い羨道は長さ0.44m・幅0.5mをはかり、緩く傾斜している。竪坑は平面円形であり、径0.84mとなり、深さは1.4m以上になると考えられる。羨道入口からはゆるく傾斜している。

出土遺物（第63図1）床面直上より出土した土師質皿は、底部に糸切り痕をもち、口縁内外のいずれにも紐状の黒斑が残る。黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。口径7.4cm・底径5.8cm・高さ1cm。

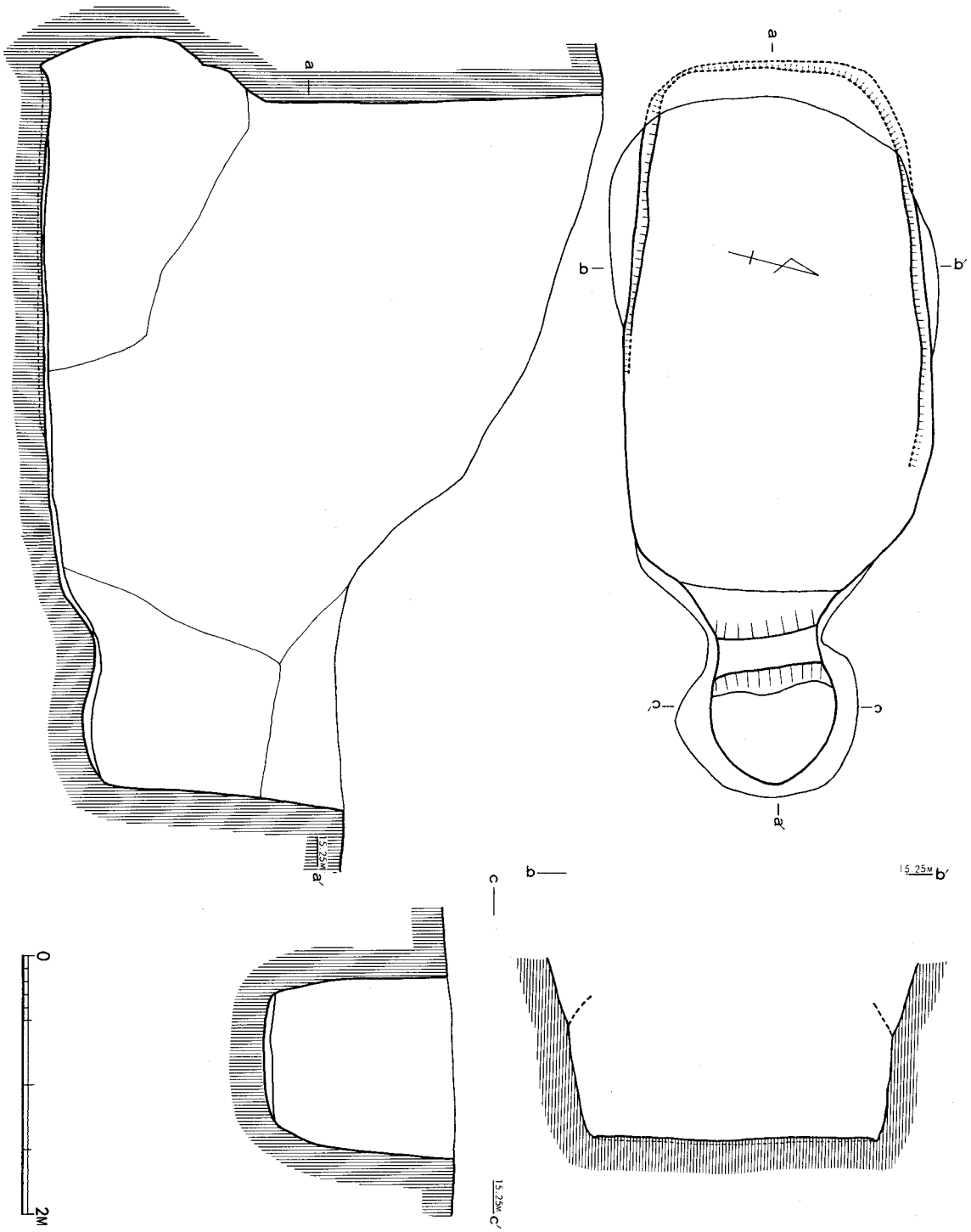
2　第2号地下式横穴　（第57図）

第2号は1号の北側に隣接して営まれている。長軸はS―74.5°―Wに向いている。本遺構もまた床面は花崗岩ばいらん土までの掘削がなされている。

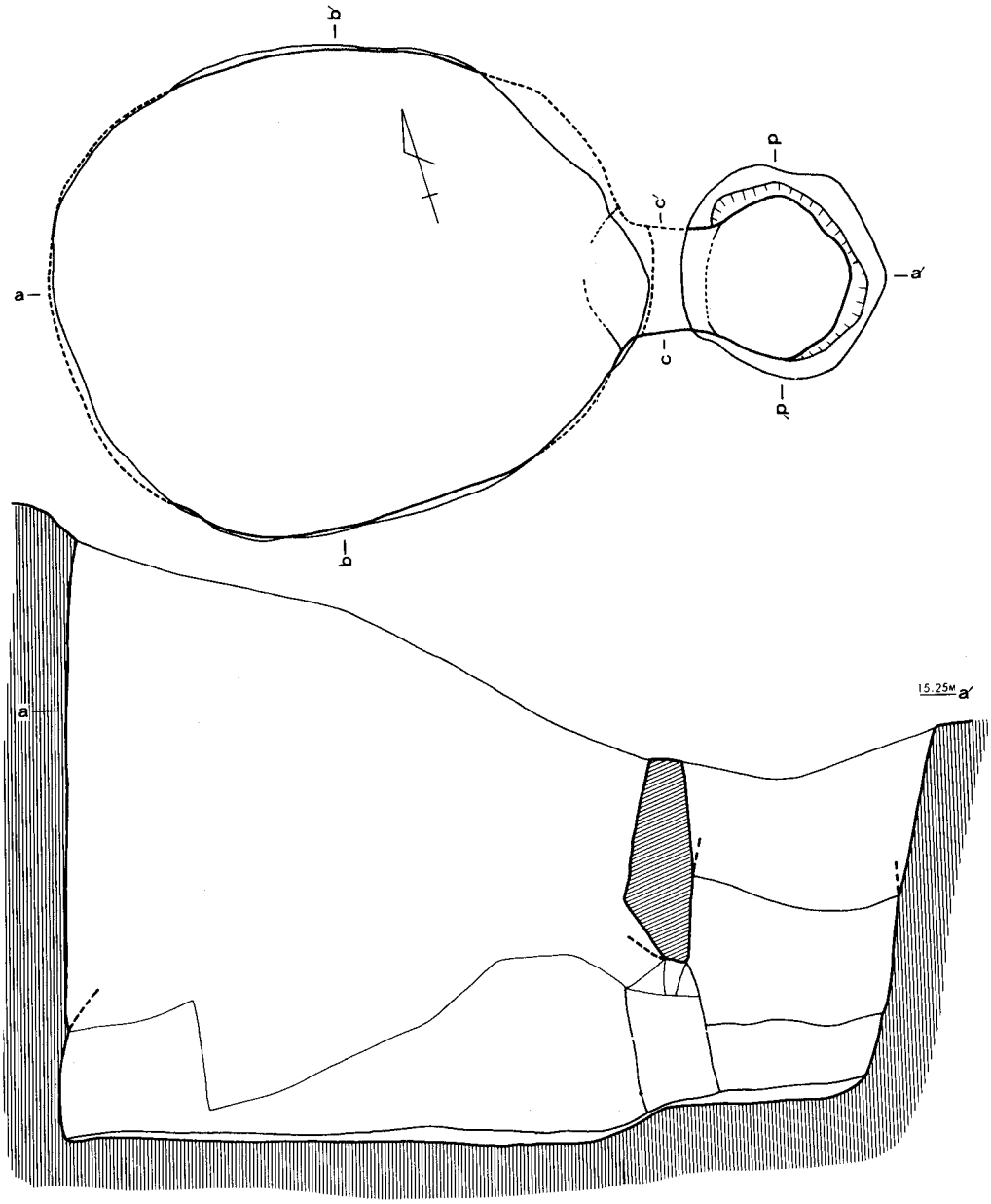
主室は平面が隅丸長方形となり、最大長4.46m・最大幅2.36mをはかる。天井部の形態は現



第56図　第1号地下式横穴実測図

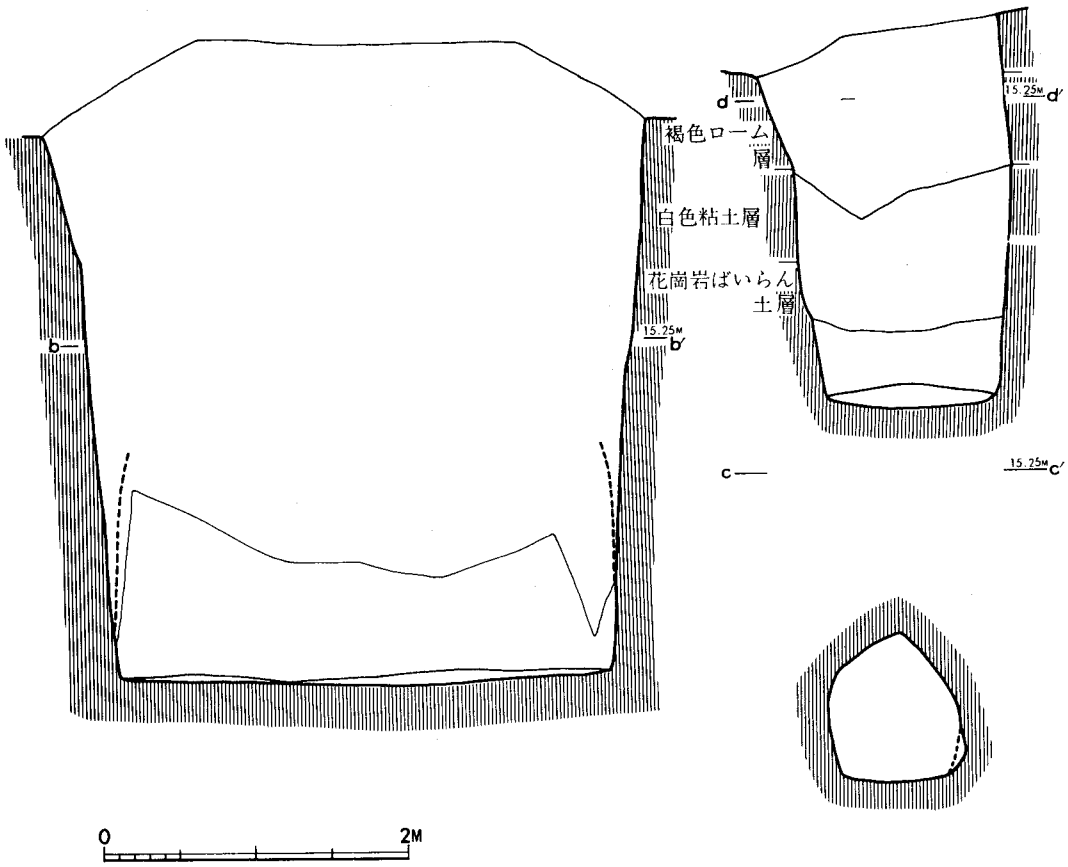


第57図　第２号地下式横穴実測図



第58図　第3号地下式横穴実測図（1）

状からは明らかにすることはできないが、中央部天井は1.5ｍを越える高さが考えられる。床面は平坦であり、奥壁および両側壁に沿って小溝が付設されている。小溝は幅7～12cm・深さ6～8cmをはかり、本来は幅・深さともに10cm内外で、主室の全周に設けられていた可能性が強い。遺物は主室埋土内から土師質皿1個が出土する。しかし遺構にともなうものであるのか



第59図 第３号地下式横穴実測図(２)

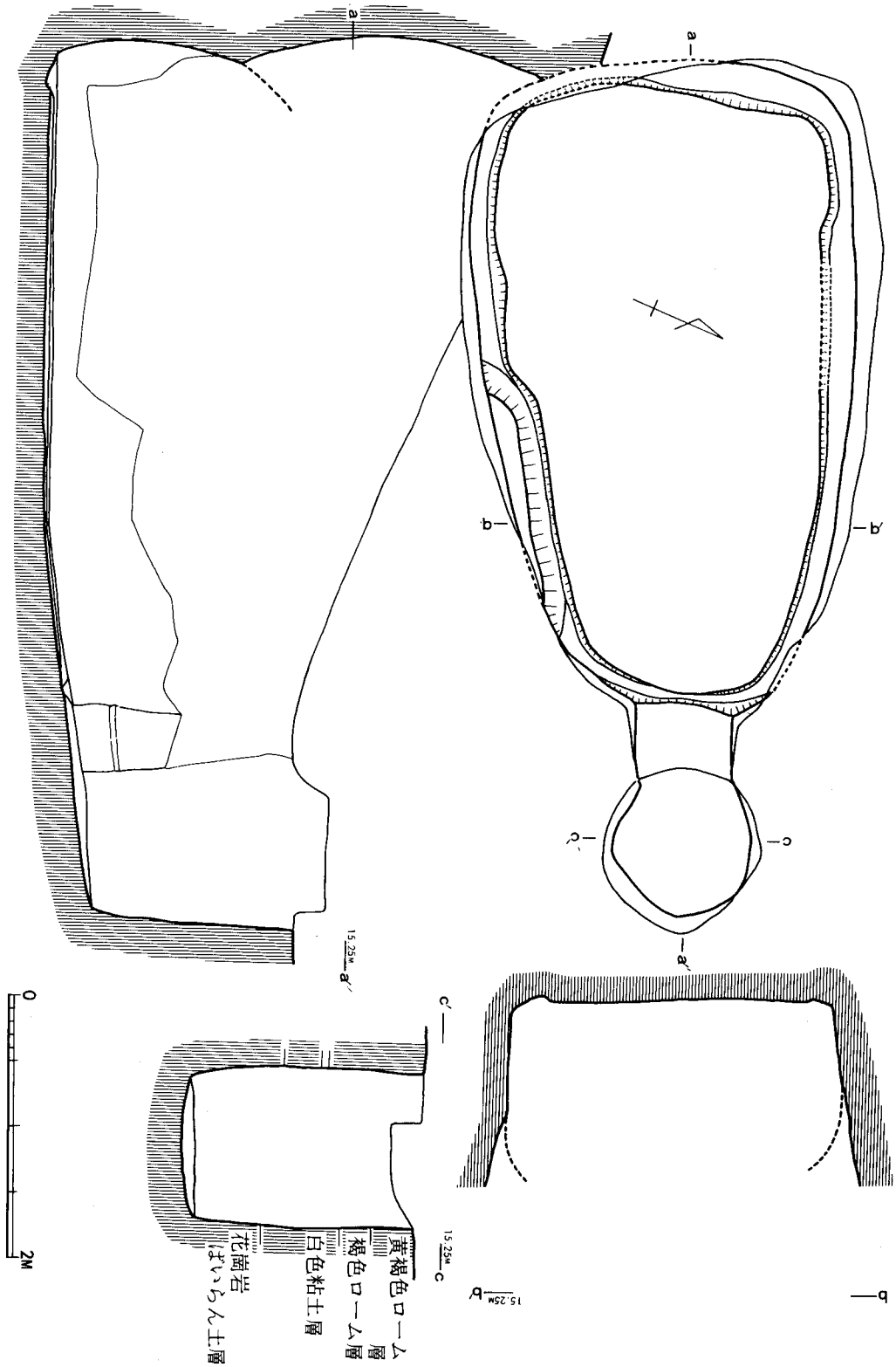
明らかでない。羨道は長さ0.6ｍ・幅0.8ｍをはかる。羨道入口の部分は0.24×0.78ｍの低い台状となり、この両端を境にして各々主室・竪坑に傾斜している。竪坑は平面円形であり、径0.98ｍ・深さ1.5ｍ以上となる。

出土遺物(第63図２) 埋土内出土の土器は、底部に糸切痕をもち口縁が細かく外反する。器色は淡い黄褐色を呈し、胎土・焼成ともにあまり良くない土師質皿である。口径10.8cm。底径8.8cm・高さ1.5cm。

３ 第３号地下式横穴（第58図・第59図）

第３号は２号の北側に隣接して営まれており、長軸をN—73°—Wに向ける。床面は花崗岩ばいらん土となっている。

主室は平面不整楕円形となり、最大長4.06cm・最大幅3.2ｍをはかり、羨道に向ってすぼまる傾向がみられる。天井部の形態は明らかではなく、中央部の高さは1.5ｍを越えると思われる。床面は平坦であり、他に遺構は見出し得ない。右側壁の羨道寄りに床面よりやや浮いて土器破片２個が出土した。羨道は長さ0.56ｍ・幅0.72ｍの規模であり、台状となって主室に傾斜する。羨道は天井の一部を残しており、高さ0.98ｍをはかる。断面形は両側面にゆるい肩をもっており、天井の中央部では鈍い尖頭形となっている。竪坑は、平面円形となり、径1.1ｍ・

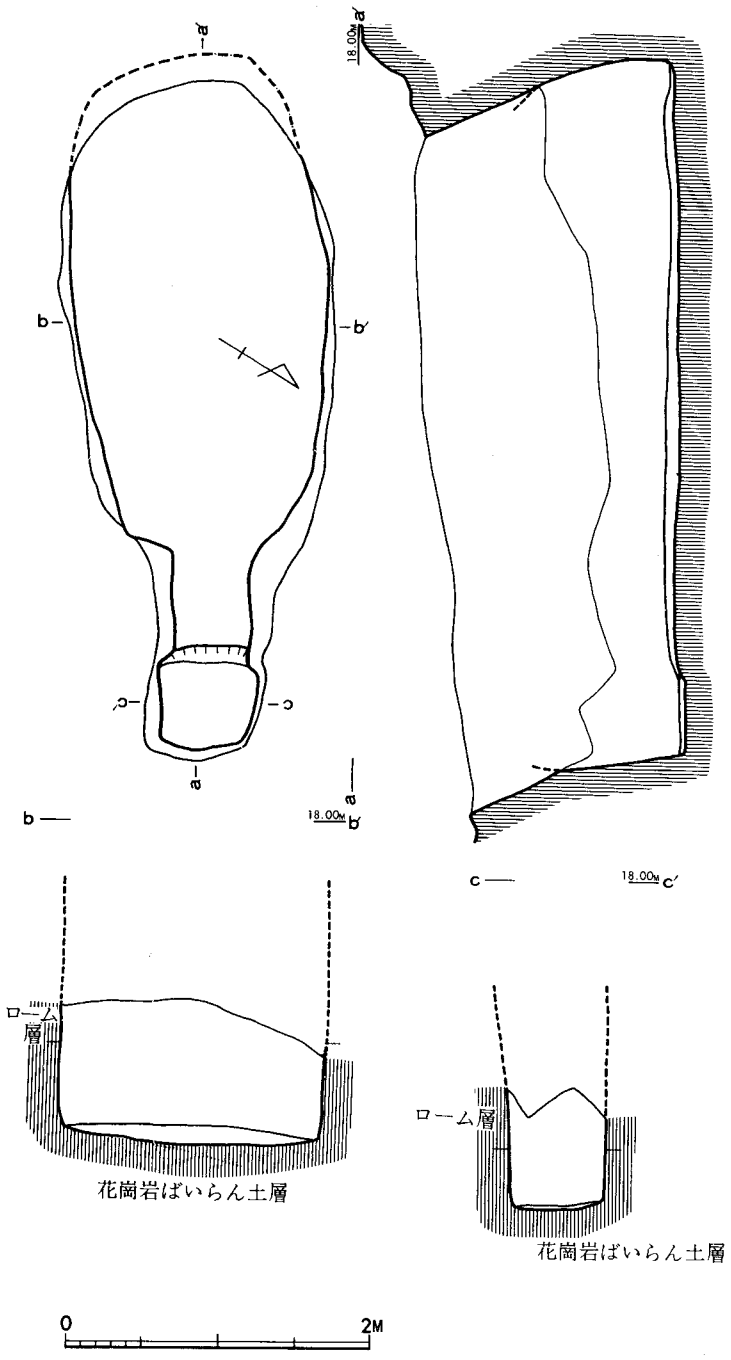


第60図　第4号地下式横穴実測図

深さ2.5ｍ以上をはかる。なお竪坑の埋土中より滑石製石鍋破片１個が出土した。

出土遺物（第63図3･4）

4は小型の盤状容器の口縁を意図的に除去した土師質土器片で、出土状況図の2にあたる。器色は暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。直径4.4cm。同3は復元値で口径11.6cm・底径6.8cm・高さ2.7cmをはかる土師質皿である。器色は明るい褐色を呈し、胎土・焼成ともに不良。崩落埋土中の出土である。なお出土図の1は器色が淡い黄褐色を呈する土師質土器の破片である。

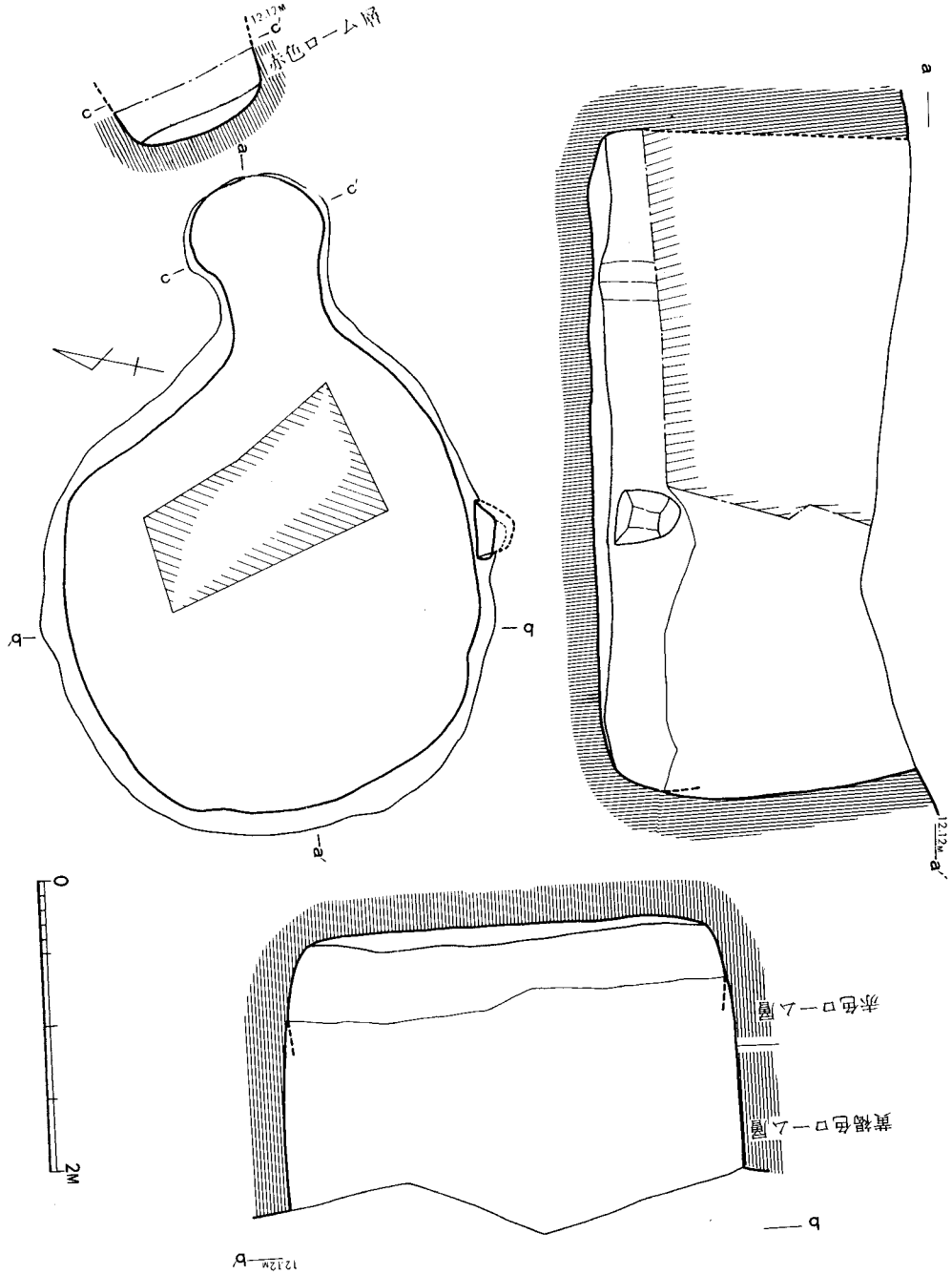


第61図　第５号地下式横穴実測図

4 第４号地下式横穴（第60図）

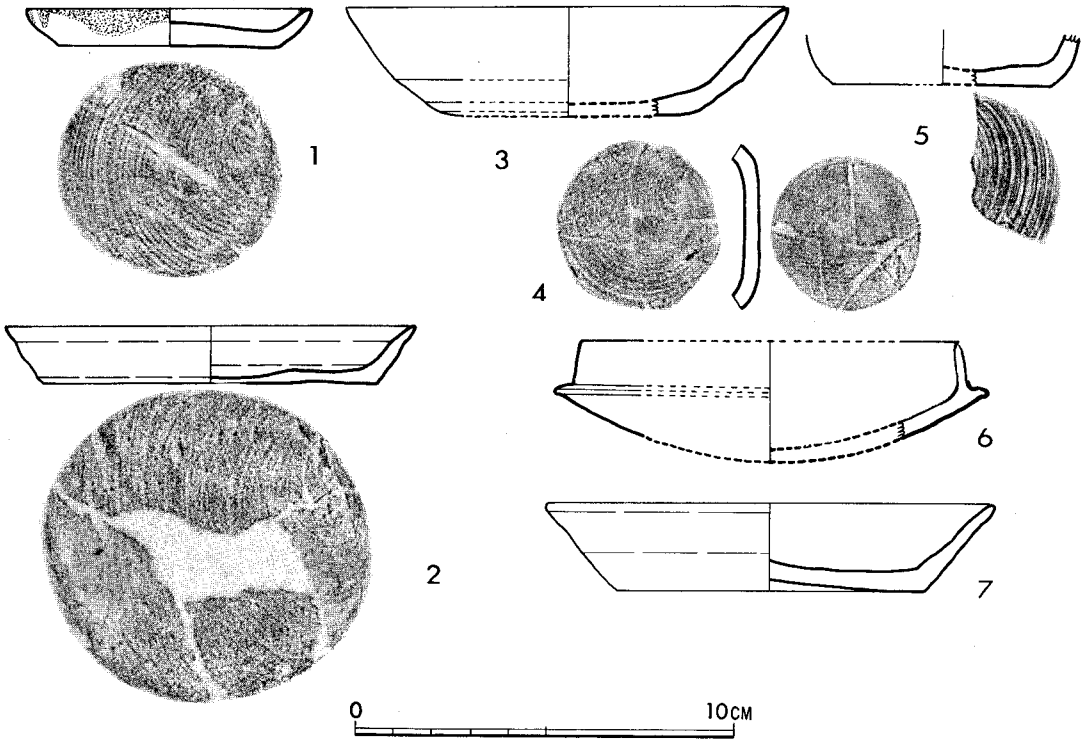
第４号はＡ地区の並列する４基の中では最も北側に営まれ、長軸をＳ―67°―Ｅに向ける。遺構は出土した６基のうちでは竪穴・羨道・主室の区切が比較的はっきりしているものの一つである。

遺構の床面はいずれも花崗岩ばいらん土となっている。主室は奥壁に向ってゆるやかに撥形にひらく傾向があり、最大長4.9ｍ・最大幅2.74ｍをはかる。室内は各壁面直下に幅６～12cmの小溝が廻っており、羨道側に近い左側壁には低い棚状になる部位がみられる。床面は奥壁に向ってゆるく傾斜する。主室内では遺構に直接伴うと考えられる遺物は見出されなかった。



第62図　第6号地下式横穴実測図

羨道は長さ**0.62**m・幅**0.72**mをはかる。天井は崩落して旧状のすべてはとどめていないが、残存部分から推定して、高さは**1**m内外と思われる。竪坑は平面円形であり、径**1.4**m・深さ**1.8**m以上であろう。なお、主室部分を埋める崩落土中には、土師質皿・白青磁器を副葬する火葬



第63図　地下式横穴出土遺物実測図

墓一基が見出された。本遺構が地下式横穴の構築以前か以後か明確には知り得ないが、遺構床の乱れが無い点では以後だろう。

出土遺物（第63図 5・6） 第4号で出土した遺物は、全て崩落土中より出土した資料であり、直接遺構と関連あるものか判らない。 **5** は赤褐色を呈し、復元底径5.8cmをはかる土師質皿破片である。底部には糸切り痕を残し、胎土・焼成ともに良好である。 **6** は、淡い灰色を呈する須恵器坏身の破片である。坏の受部は焼成時のゆがみで下に垂れており、立あがりはやや内傾して、高さは低い。口縁の復元には疑問がのこる。胎土・焼成ともに良好。

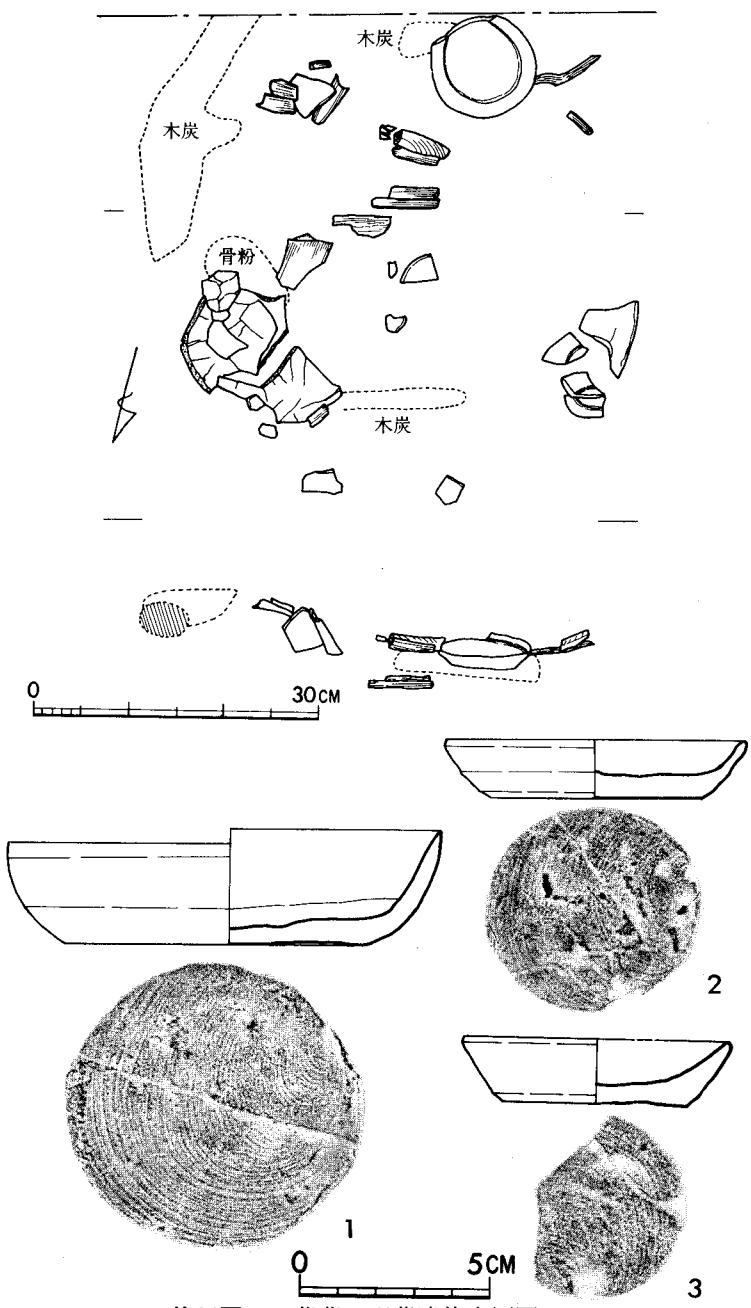
5 第5号地下式横穴（第61図）

第5号は第1～4号の一群とははなれており、C地区の北端斜面に営まれている。方向は丘陵の頂部に向いており、長軸はS—58.5°—Wに位置する。本遺構は各部の区別が比較的はっきりしているもののひとつである。

主室は側壁の胴部がやや張る不整な隅丸長方形を呈し、最大長3.28m・最大幅1.68mをはかる。規模の上からは第1号に近い。天井部中央は1.0mを越えるものと思われる。床面は平坦であり、他の施設および遺構に伴う遺物は見出し得なかった。羨道は長さ0.74m・幅0.52mをはかり、平井は崩落している。竪坑は0.5×0.6mの不整な方形を呈し、深さは0.8m以上と思われる。

6 第6号地下式横穴（第62図）

第6号はC地区の一群とは距離的にはなれて営まれる。長軸をS—70.5°—Wに向ける。土地



第64図　火葬墓と副葬遺物実測図

境界線上にあるため羨道および竪坑は床面のプラン調査に終った。床面は褐色ローム土となる。本遺構は位置および形態などにおいて、1972年調査例とともに一群をつくることが考えられる。

主室は羨道部に向ってすぼまる不整な円形となり、3.3×2.8mを計る。北側壁の一部は直線的となる。南側壁では床面より15cm程度上った位置に間口約40cm、奥行25cm程度の小遺構が付設されている。このつくり出しは奥にゆくと狭くなり、床面の一部に青灰色粘土を敷いており、『竈』に似た性格を持つものかも知れない。床面は平坦で、他に施設・遺物をともなわない。天井部中央の崩落土中より土師質皿・軒平瓦などが出土した。羨道は長さ0.3m・幅0.64mをはかる。竪坑は平面円形で径0.94mとなる。

出土遺物（第63図7）

図に示した土器は、器色が暗い褐色を呈する土師質坏である。口径11.9cm・底径9cm・高さ2.25cmをはかり、底部は糸切り痕があり、胎土・焼成ともに不良。なお同遺構の埋土中で採集された瓦は表採遺物の項でのべる。

7　火葬墓と出土遺物（第64図）

火葬墓は、第4号地下式横穴崩落土内中位にあり、70×50cmの範囲に木炭・骨がほぼ水平にある。骨は小破片になっていて、頭骨・脚骨が大部分を占め、火を受けて多くの亀裂があり、

第7表　地下式横穴一覧

No.	長軸方向	全長(m)	主室			羨道		竪坑			備考
			形態	長さ(m)	巾(m)	長さ(m)	巾(m)	形態	大きさ(m)	深さ(m)	
1	S—73°—W	4.82	隅丸長方形	3.54	1.9	0.44	0.5	円形	径0.84	＞1.4	
2	S—74.5°—W	6.04	隅丸長方形	4.46	2.36	0.6	0.8	円形	径0.98	＞1.5	主室周囲に小溝あり。
3	N—73°—W	5.66	不整円形	4.0	3.2	0.56	0.7	円形	径1.1	＞2.5	
4	S—67°—W	6.92	撥形	4.9	2.74	0.62	0.72	円形	径1.4	＞1.8	主室周囲に小溝あり 羨道高さ1m内外
5	S—58°—W	4.62	隅丸長方形	3.28	1.68	0.74	0.52	不整方形	0.5×0.6	＞0.8	
6	S—70.5°—W	4.54	不整円形	3.3	2.8	0.3	0.64	円形	径0.94	?	主室南壁につくり出しあり

第8表　地下式横穴地名表

番号	地名	備考
1	大分県竹田市大字大田字平2372	平地下式土坑
2	〃　大野郡野津町大字宮原字中山	1基内部に五輪塔あり
3	〃　直入郡直入町大字長湯字桑畑	長湯古墳群第3・5号墳
4	〃　臼杵市大字深田	小五郎地下式土坑（炭焼小五郎の伝承あり）
5	〃　〃　大字前田字立中	門前地下式横穴 註①
6	〃　杵築市大字大内字東大内山	大内地下式土坑
7	〃　〃　大字狩宿字大塚	大塚地下式横穴
8	〃　東国東郡安岐町大字矢川字中の川	矢川地下式横穴
9	〃　〃　国東町大字治郎丸字上治郎丸	宮西地下式横穴1・2号
10	〃　中津市福島字仮屋敷	福島地下式横穴 註①
11	熊本県荒尾市大字野原字今寺	今寺地下式横穴、3基('74·1調査)内部より五輪塔·青磁器·散骨など出土
12	〃　〃　大字木村	1基（三島格氏調査）
13	〃　菊池郡西合志町大字野ノ島延寿寺	2基（'74·9調査）
14	〃　〃　〃　大字野ノ島中尾原	1基（三島格·隈昭志氏調査）
15	〃　宇土郡三角町郡の浦	数基（坂本経堯·富樫卯三郎氏調査）
16	〃　玉名郡南関町上長田字源田	1基（'62　乙益重隆·三島格·上野辰夫氏調査）
17	〃　〃　〃　久重字南326	1基
18	福岡県嘉穂郡稲築町岩崎稲築公園内	4基註④
19	〃　粕屋郡粕屋町（旧大川村）大字大隈小字谷吉	2基註⑤

一部は焼けこげている。遺構の形状は明らかでないが、ほぼ方形とみられる。これと共に土師質皿3個と青磁口縁部小片1点が出土した。

1～3は土師質の糸切離し底をもつ皿である。内面はなで調整でロクロ痕があり、外面もなめらかである。色は淡茶色で、口径—高さは、1が11.3cm—3cm・2が8cm—1.6cm・3が7.1cm—1.7cmを計る。

小　結

諸岡遺跡で調査された6基の「地下式横穴」類似遺構は、遺構の遺存状態の点で諸々の制約をもっていたが、その主な特徴をあげれば、①高燥地にあり、群集性をもつこと、②構造上基本的に竪坑・羨道・主室の三つの部分からなり、主室形態は長方形・楕円形であり長大であり、③主室内に屍床やそれに類する施設を持たない、④副葬品に相当する遺物が見当らない事があげられる。次に、類似遺構として、比較的構造の明らかな大分県中津市福島の例をあげる。[①] 福島では台地上に2基が発見され1基が調査されている。遺構は「竪坑と玄室のみの組あわせ」で、羨道をもたない。「玄室」プランは隅丸方形で奥行5.2m・幅4.3mをはかり、玄室内に

は安山岩円礫が2.5×0.5mの「箱形」にひろがっていることから、調査者はこれを「屍床台」と考えている。遺物は全く見出されておらず、調査者はこの遺構の時期を古墳時代後期から中世期においている。諸岡例と対比すれば、福島例が屍床台に相当する遺構をもち、羨道を有しないという若干の構造上のちがいはあるが、立地・群集性・規模・副葬品を持たない点では、むしろ類似するものといえよう。ここに宮崎県・鹿児島県を除いた大分・熊本・福岡各県の類似遺構と考えられる遺跡の地名表（**第8表**）を示した。これによれば、大分県南部から国東半島のほぼ全域、豊前にひろがっており、北九州市八幡区内[②]にも存在するといわれる。一方熊本県荒尾市、城南町、菊池郡西合志町等にもひろがっている事が知られる。この様に点的にではあるが、類似遺構の分布がみられ、南九州の地下式横穴との比較研究を含めて今後の課題とされよう。さて諸岡例では、地下式横穴に直接共伴する遺物が判然としないが、第1・2・3・6号の埋土中より土師質皿の出土があった。これらの土器は、最近の研究[③]では、ほぼ12世紀後半から13世紀に置かれており、遺構の造営もまたこの時期に行われた可能性をもっている。

地名表の作成にあたっては、大分県文化課清水宗昭、福岡市歴史資料館館長三島格、熊本県文化課島津義昭・高木正文、西合志町教育委員会井上兼利の諸氏の教示を得た。記して感謝する。

註

① 渋谷忠章他『福島地下式横穴』中津市教育委員会、1974年

② 黒野肇氏の御教示による。

③ 森田勉「九州地方の瓦器埦について」『考古学雑誌』第59巻第2号、1973年

④ 児島隆人・藤田等編『嘉穂地方史　先史編』1974年

⑤ 山本博「福岡県粕屋郡遺跡遺物」『考古学雑誌』第12巻第1号、1930年

Ⅸ　表土層・表採の遺物

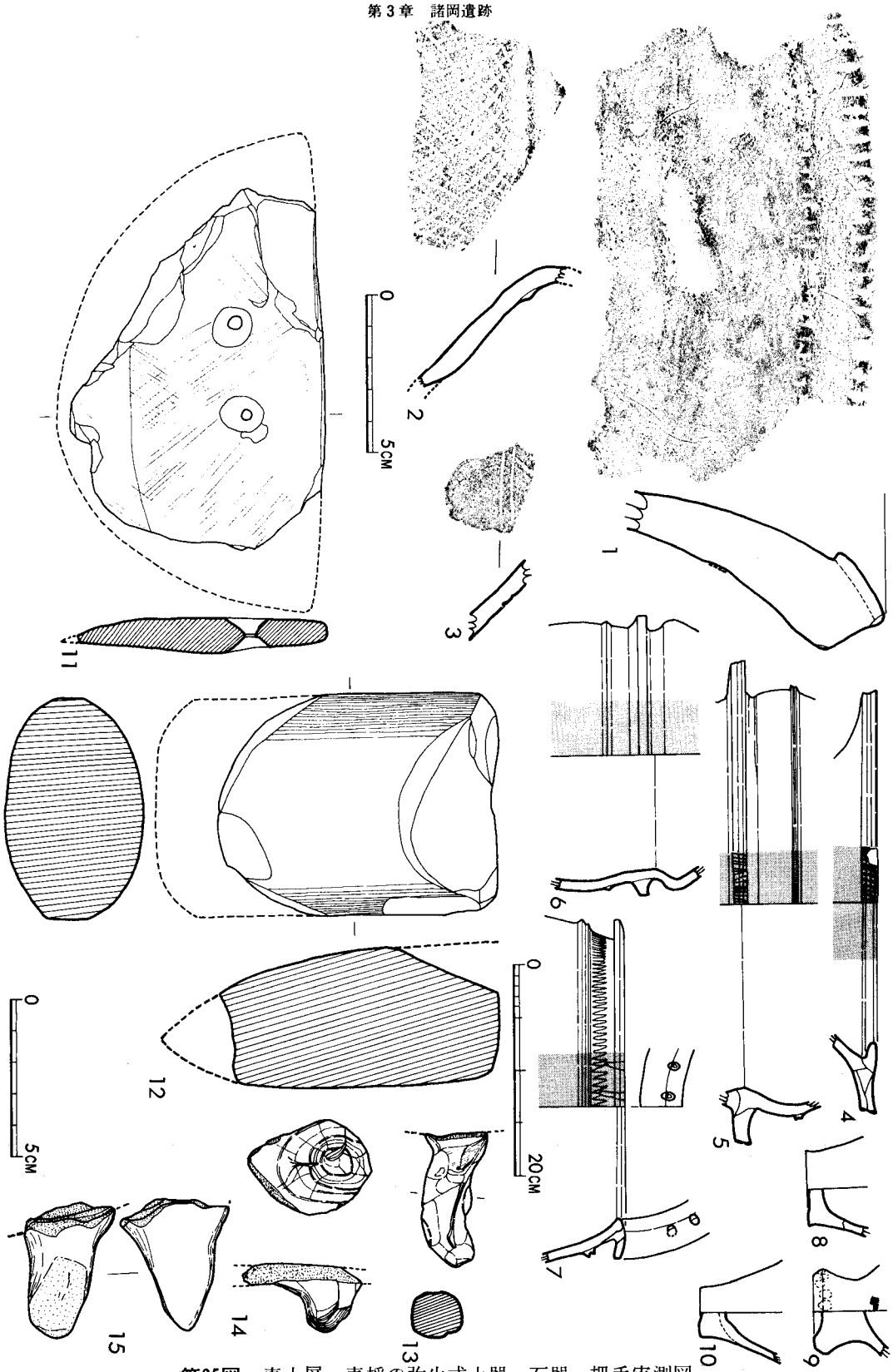
C・D区では、表土層や竪穴・地下式横穴埋土上部から各時代の遺物が出土し、地表でも若干の遺物が採集された、B区でも埴輪が出土した。これらのうち縄文式土器と無文土器についてはすでにのべた。それ以外の遺物について以下にのべる。

1弥生式土器・石器（第65図1～12）

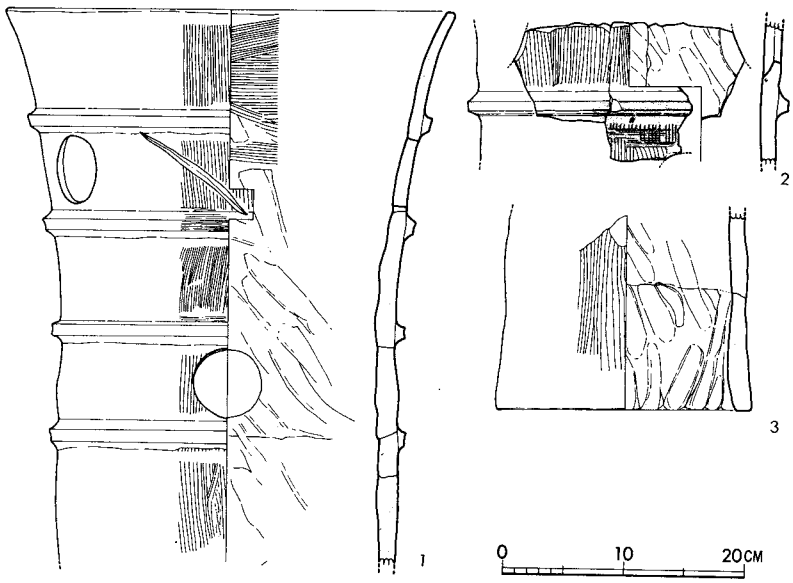
1・2・3はC区採集土器片である。**1**は甕棺口縁部片で、ゆるやかに外反して口縁部に至る。口唇部には薄く粘土を貼り付け、口縁端には刻み目を施す。器表外面には刷毛目、内面は篦なで調整。赤褐色で、胎土に小砂粒を含み、焼成は良好。前期末であろう。**2・3**は壺破片である。**2**は頸・肩部の破片で、頸部には一条の貼り付け三角形突帯をめぐらす。肩部には篦描きの無軸羽状文を施し、ついで、これと交叉するように無軸の羽状文を施して、網目状の文様としている。外面暗黄褐色、内面灰褐色で、胎土は粗く、多量の砂粒含む。**3**は胴部破片で、貝殻腹縁による羽状文（？）の下に沈線2本をまわす。外面暗褐色、内面黄褐色で、胎土・焼成は2とほぼ同じ、いずれも板付Ⅱ式であろう。

4～**10**はC区採集土器である。**7**は後世に甕棺（中期中葉～後葉）とともに第1号地下式横穴南東3ｍに一括集積されていた。**4**は壺の口縁部破片で、鋤形口縁をなし、内唇・外唇が発達する。口縁端には刻み目が施され、その後強いなでにより凹線状に仕上げている。器表両面とも丹塗磨研。口径39.8cmを計る。時期は中期中葉であろう。**5・6**は上半部壺形状、下半部甕形状をなし、上・下の転換部には大きな鍔状突帯をめぐらす瓢形土器である。**2**は球形状の上半部中央に複合三角突帯をめぐらし、そこから急にすぼまり鍔状突帯へ移る。鍔状突帯の直上部の器表は、突帯補強のため強い指なでを行ない、稜ができている。突帯端には不規則な浅い刻み目が施され、なでにより凹線状に仕上げている。外面は丹塗磨研、胎土に多量の大小石英粒を含み、焼成良好。**6**は**5**とほぼ同じ形態であるが小型である。球状に張る上半部中央に突帯をもたず、鍔状突帯の下部には低い貼り付け三角突帯をめぐらし、やや外側に張る。鍔状突帯には刻み目がない。外面は丹塗りを施すが磨耗剝落がはなはだしい。内面上半部は丁寧な篦調整。胎土には若干の石英粒、微量の雲母を含む。**5・6**は、中期中葉～後葉であろう①。**7**は甕の口縁部破片で、いわゆる鋤形口縁をなし、端部がやや下り気味である。口縁上端には2個対の小孔が穿たれ、口縁直下には一条の複合三角突帯をめぐらす、口縁と突帯の間には丁寧な厚い丹塗りの後、細い篦状工具で波形の暗文が描かれている。胎土は緻密で、焼成良好。口径31.9cmを計る②。中期中葉～後葉であろう。**8**～**10**は甕の底部片である。**8**は前期の特徴を有するものであり、**9**・**10**は部厚く、上げ底をなし城ノ越式甕であろう。

11・**12**はD区採集石器である。**11**は外湾刃半月形の石庖丁で、前期のものと思われる。体部磨研の後、両側より敲打・穿孔している。頁岩質砂岩である。推定長15cm・幅8.4cm・厚さ1.1cmを計る。**12**は刃部・胴部を大きく欠損する太形蛤刃石斧である。幅7cm・厚さ4.3cmを計り、磨耗がはげしく敲打痕は確認できない。材質は玄武岩である。なお第4号地下式横穴埋土中より小形柱状片刃石斧1個が出土した。（玉永光洋）



第65図　表土層・表採の弥生式土器・石器・把手実測図



第66図　埴輪実測図(B区出土)

2円筒埴輪（第66図)

B区甕棺調査の際、円筒埴輪が二次堆積の状態で出土した。1は上半分。口径37.2cm。口縁部は若干開く。外面は粗い縦刷毛目で調整した上に、断面M字型の突帯を巡らす。上から2段目に2個の相対する円孔がある。四段目にも、2段目と約$\frac{1}{4}$回転の位置に2個存在する。すべて焼成前に外から穿孔。2段目円孔の一方の間に篦による切れ目を施す。内面上部は指なでの上に粗い刷毛目、以下は指によるなで調整。砂粒混、焼成良好、橙茶褐色。2は胴部。外面は粗い縦刷毛目の上に断面M字型突帯を巡らす。一部丹塗り。円孔の存在も推定される。内面は指なで調整。砂粒混、焼成良好、淡褐色。3は基部破片。底径18cm。外面は粗い縦刷毛目調整。突帯は不明。内面は指なで調整。砂粒混、焼成良好、赤褐色。これらの埴輪は、諸岡2号墳に伴うと推定され、古墳時代後期のものと思われる。　（沢　皇臣）

3把手（第65図13～15)

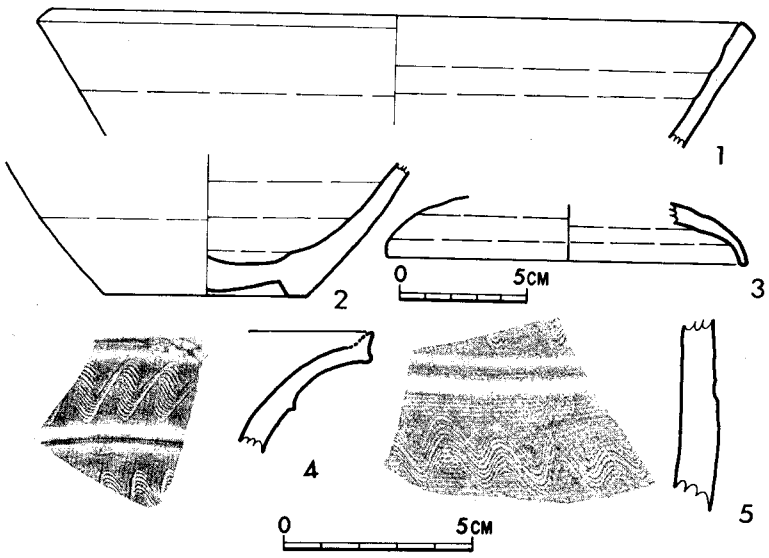
13は粘土紐を折り曲げ、指で外面を調整した把手で、片面に折り曲げた痕が残る。胎土は若干の細砂を含み、焼成良好、黄褐色、一部黒褐色。14は小さな粘土塊を貼り付け、そのまわりの粘土をつまみ出し状に盛り上げた小さな把手である。砂粒を含み、焼成良好、外面黄褐色、内面赤褐色。これらの把手の時期判定は不可能であり、時期不詳としか言いようがない。

15は、前年度調査時に、A区16号甕棺墓付近で採集した。砂粒混り胎土で、帯淡黄灰褐色を帯び、片面に平坦な粘土の剝げた痕がある。その角状の形から、組合牛角式把手の一方がとれたものつまり朝鮮系無文土器壺につく把手とみられる。　（沢　皇臣）

4須恵器（第67図)

1～5はD区採集須恵器である。1・4・5は口縁部破片である。1は小破片のため器形不明。口唇・口縁内外上端には灰釉(？)。横なで調整。灰褐色。4・5は壺と思われる。4は外

反して口縁にいたり口唇は跳ね上がっている。口縁下には一条の突帯をめぐらし、その上下に櫛描波状文を施す。内外面とも横なで調整。青灰色。**5**は2条凹線の上下に櫛描波状文をめぐらす。内外面とも横なで調整。青灰色。**2**は器形不明。底部破片である。内外面とも緑釉(？)が施されている。底部は上げ底をなし回転を利用した篦削りにより底部周辺を造り出している。内面凹凸状に横なで調整。灰褐色。**3**は小型の坏蓋(？)である。天井部からゆるやかに下縁部に至り、内外面とも横なで調整。青灰色。（玉永光洋）



第67図　表土層・表採の須恵器実測図

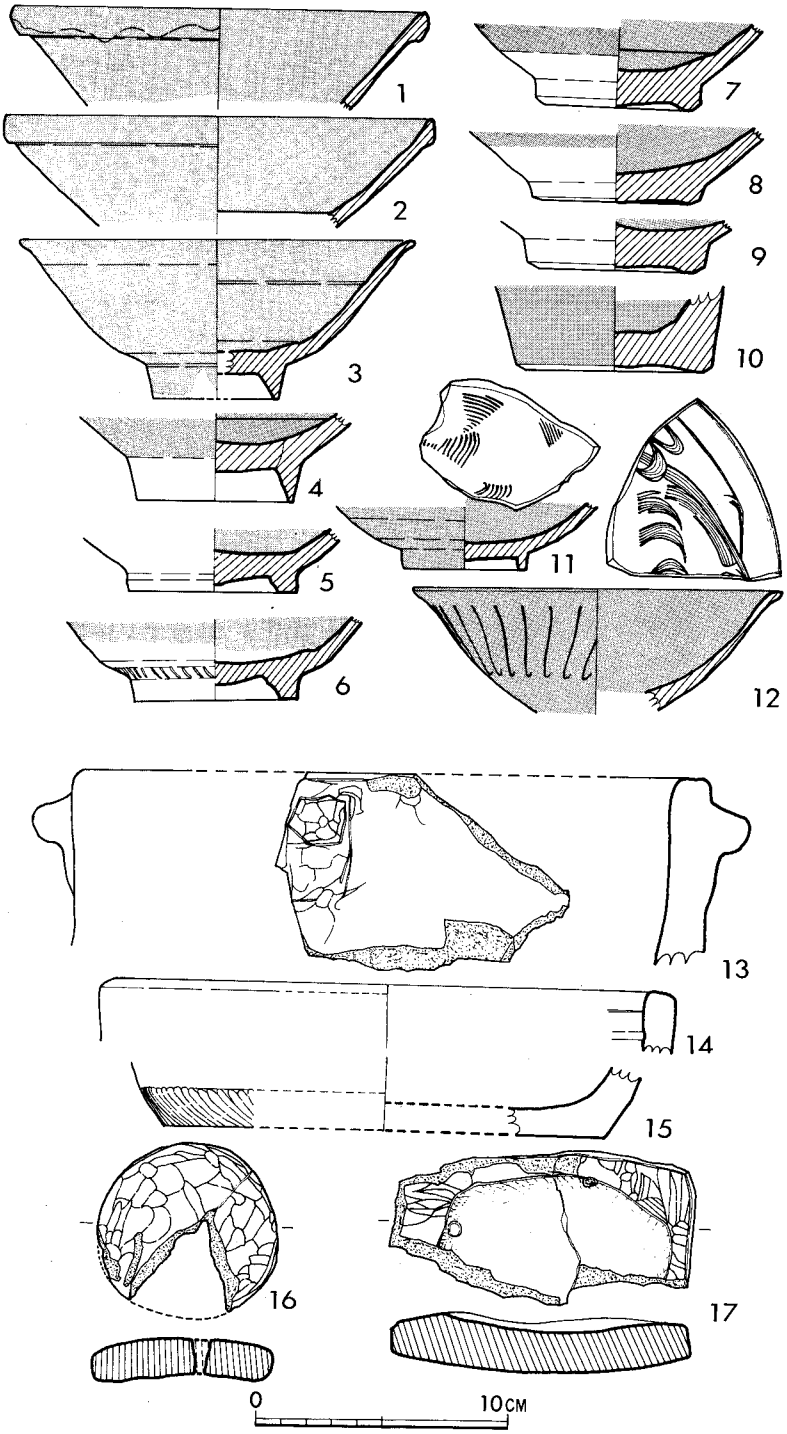
5 滑石製品（第68図13～17）

D区採集滑石製品である。**13・14**は石鍋の口縁部破片で、**15**は底部破片である。**13**は口縁下に幅2cmの鍔をもつ。外面には縦方向の削り痕が残り、内面は磨研仕上げである。推定口径25.3cm。**14**は鍔がなく、内外面とも磨研されている。推定口径22.9cm。**15**は丁寧な縦方向の削り調整痕が底部外面に残り、内面は磨研仕上げである。推定底径17.5cm。**13～15**の器壁にはいづれも煤が付着している。**16・17**は破損品転用で、性格は不明である。**16**は平均直径7.1cmの円盤状をなす。表及び側面には削り調整痕が残っているが、裏面にはない。全体はなめらかな磨研仕上げである。なお裏面凹面部は、前製品の原状部分である。**17**は表裏両面とも原状部分が残る。半分が欠損して全形は不明であるが長方形に削り調整し板状をなすと思われる。又表面には未貫通の敲打穿孔痕が2個所ある。長径12cm・厚さ1.7～2.1cm。**16・17**はもとの面の調整が石鍋の内外面調整と似、石鍋再加工、再利用品であろう。（玉永光洋）

6 青磁・白磁（第68図1～12）

中世遺構以外出土の青・白磁も、遺構出土のものとかわらない。大部分はD区で出土した。とくに22号と23号竪穴の中間の地山では鉄製品破片などと共に破片が多数まとまっていた。

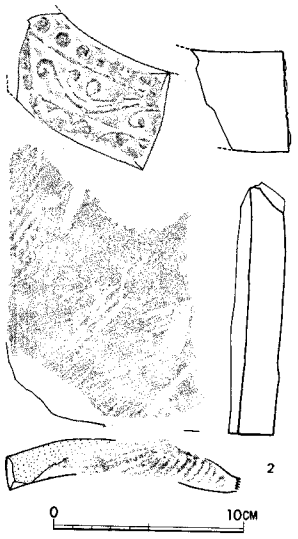
1・2は玉縁状口縁の白磁である。胎土はやや灰色味を帯びた白色である。釉色は**1**がややくすんだ灰白色、**2**は灰白色で、後者の方が明るい。ともに外面下部には施釉されない。**2**の内面下部には沈線がある。口径は16.2cmと17cmである。白磁碗II類③。**3・4**は高台が高い碗で、**3**は口縁が少し外反し、内面上部と下部に沈線がまわる。釉色は白色である。口径15.8cm・高さ6.3cm。**4**も内面下部に沈線が入る。釉色は緑がかっている。高台径6.2cm、高台の高さ1.7



第68図　表土層・表採の磁器・滑石製品実測図

cm。ともに白磁碗Ⅰ類である。**5**は白磁底部で、外面に釉がみられない、内面は、ほぼ平らな底面からはっきり折れて、胴が外方へ上るが、この胴部と、底面の中心に施釉し、底面の外周部は無施釉の部分が幅1～1.2cmの同心円帯状に残る。高台は低く(0.8cm)、底径6.7cm、釉色は乳白色。**6**も内面の施釉は**5**と同じで、外面も胴上部にしか施釉しない。高台のすぐ上部には斜めに篦でついた短線がある。高台の高さ0.8cm・径6.4cm。**7**～**9**は高台内側の高さが高台底面から1～2㎜しかなく、高台は肉厚でずんぐりしている。高台外側は斜めに削ぐ。内面と外面上部に施釉する。釉色は**7**がやや茶味をおびた灰白色で、**8**・**9**はくすんだ緑色味を感じる灰白色である。高台直径は6.4～7cm。**1**・**2**のような上部器体をもつとみられる。**10**は青磁底部である。内・外面に緑灰色の釉を施し、底面は少しへこむ。胎土は灰白色で黒い点々がみえる。**11**・**12**は櫛描文をもつ。**11**は内・外面に淡緑白色の釉のある青磁で、外面には篦削りの段がみ

られる。底径4.9cm。12は淡青灰色の釉があり、口縁は少し外反する。口縁下に沈線があり（消えた部分もある）、その下に櫛描の曲線文がある。外面には沈線の曲線を上から下へほぼ平行に配する。（後藤　直）



第69図　表土層・表採の瓦実測図

7瓦（第69図）

瓦は数点出土したが、瓦に関連する建物は検出できなかった。1は軒平瓦で、上外区に円形珠文を、下外区に鋸歯状の三角形陽文をならべる。左脇区にも同じ三角形文を4個配する。内区には扁行唐草文を配する。灰色を帯びる。老司Ⅰ式であろう。④第6号地下式横穴埋土上部出土。2は橙黄色の平瓦である。凸面には叩きがあるが、大部分は消されている。他面は一部に叩きがあるが、大部分はなでている。側縁は篦切離しが残り、前側縁には叩きがある。この他に縄目の叩きのある小片など瓦とみられるものが数片ある。（後藤　直）

註

① 甕形土器は器形、成形とも特異な土器である。他の遺跡例を見ても、丹塗磨研されることが多く、出土状況から見ても、日常用器としての性格よりも祭祀的要素が強いのではないかと思われるが、甘木市小田遺跡D地区11号住居址のごとく、竪穴住居出土の例もあり、今後の増加を待ちたい。工楽善通編『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報』福岡県教育委員会、1971年。井上裕弘編『高辻遺跡』春日市文化財調査報告書第3集、1973年。高山明編『小田集落遺跡』甘木市文化財調査報告第2集、1974年。

② 同形態の土器は、他に2例出土しており、いづれも波形の暗文を有す。

③ 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析―太宰府出土品を中心として―」『考古学雑誌』第58巻第4号、1973年

④ 石松好雄氏（太宰府調査事務所）の御教示による。

X　まとめ

諸岡遺跡には先土器時代から中世に到る遺構と遺物が存在する。先土器時代の遺構は確認されなかったが、丘陵東南部のローム層中にある程度のまとまりをもってナイフ形石器を主とする石器群の包含層がある。縄文時代の遺物は押型文土器片2点が今回出土しただけで、遺構は確認されていない。

弥生時代では、中期～後期前半の甕棺墓地が東南側と西側で確認され、甕棺墓地の範囲もかなりの程度明らかになった。出土々器片から、甕棺墓地は前期後半に始まるとみられるが、遺構は未確認である。この他に土坑墓若干が墓域内に存在する。丘陵東斜面の南側中位以上には、甕棺墓地と明確に範囲を異にして小竪穴群が存在する。その時期は前期末であって、しかも当時の南朝鮮無文土器が多数出土したことは、生活址・生活遺物のレベルで、一定の年代的確かさをもって、彼我の関係をたどりうる端緒を開いたものといえる。遺構の性格は明らかでなく、またこの群集範囲をとりかこむように墓地が営まれつづけたことが意図的なことなのかどうか

等々、今後の課題である。古墳時代の遺構としては円墳5基（南から北へ1～5号）がある。4・5号のみ完存するが、2号墳西側（B区）で埴輪が出土したのは注目される。またD区に鉄斧を伴なう土壙墓状竪穴（38号）があり、古墳時代と推定される。その後、平安～鎌倉時代に小竪穴が営まれ、それと略同時代とみられる地下式横穴が、今回調査したものを含め7基しられた。こうした中世の地下式横穴の例は近年増加しているが、今後の研究がまたれる。

あとがき —板付周辺遺跡調査の成果と課題—

2ヵ年にわたり板付遺跡周辺遺跡調査として緊急調査を実施し、今後も継続する予定である。2ヵ年の調査について簡単にまとめておこう。

板付丘陵は、北北西—南南東にのびる長さ600m・幅150mほどの低丘陵で、そのほぼ中央標高11mほどに環溝遺跡（板付遺跡）があり[①]、その北側はゆるやかに低くなり、南はやや低くくなって再び高くなり、標高12m強になる。丘陵北側には袋状竪穴・甕棺等が、西側沖積地には水田関連遺構があり（板付水田遺跡、整理中）、環溝の東南丘陵上には細形銅剣等の出土した田端遺跡がある[②]。今回調査したF—9a地点は南側高まりの西側で、前期の袋状竪穴が存在し、D・E—9地点では、丘陵南端と沖積地を画するかのように小溝（上部は削平されている）が存在する。小溝南の沖積層中には水田遺構やそれを示す土層はなかった。このように、丘陵上全面には弥生時代前期から（初頭からか後半からかは確定できない）生活址・墓地が営なまれていたのであり、丘陵周辺の沖積地が生産の場になっていたのである。ただ、昨年度調査の丘陵東側と南側のD—6・7地点、D—9・10地点は、完全な氾濫原で、生産遺跡を示すものはなにもなかった[③]。

丘陵南端から南西500mには、沖積地をはさんで諸岡の独立丘陵（標高23m）がある。弥生時代に限れば、この丘陵には前期末から甕棺墓地・無文土器出土小竪穴がいとなまれ、板付・諸岡両遺跡は同時期に存在するようになる。両遺跡を残した集団は当然別個のものであり、両者の関係のありようは、福岡平野の弥生社会の展開の中で今後検討さるべきである。

註

①森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年

②中山平次郎「銅鉾銅剣の新資料（板付北崎の遺物）」『考古学雑誌』第7巻第7号　1917年

③横山邦継編『板付周辺遺跡調査報告書(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集　1974年

調査主体

福岡市教育委員会

古村澄一、紫田勝男、青木崇、志鶴幸弘、三島格、清水義彦、楢崎幸利、草場九男、安田正義、後藤直、沢皇臣、横山邦継、山口譲治

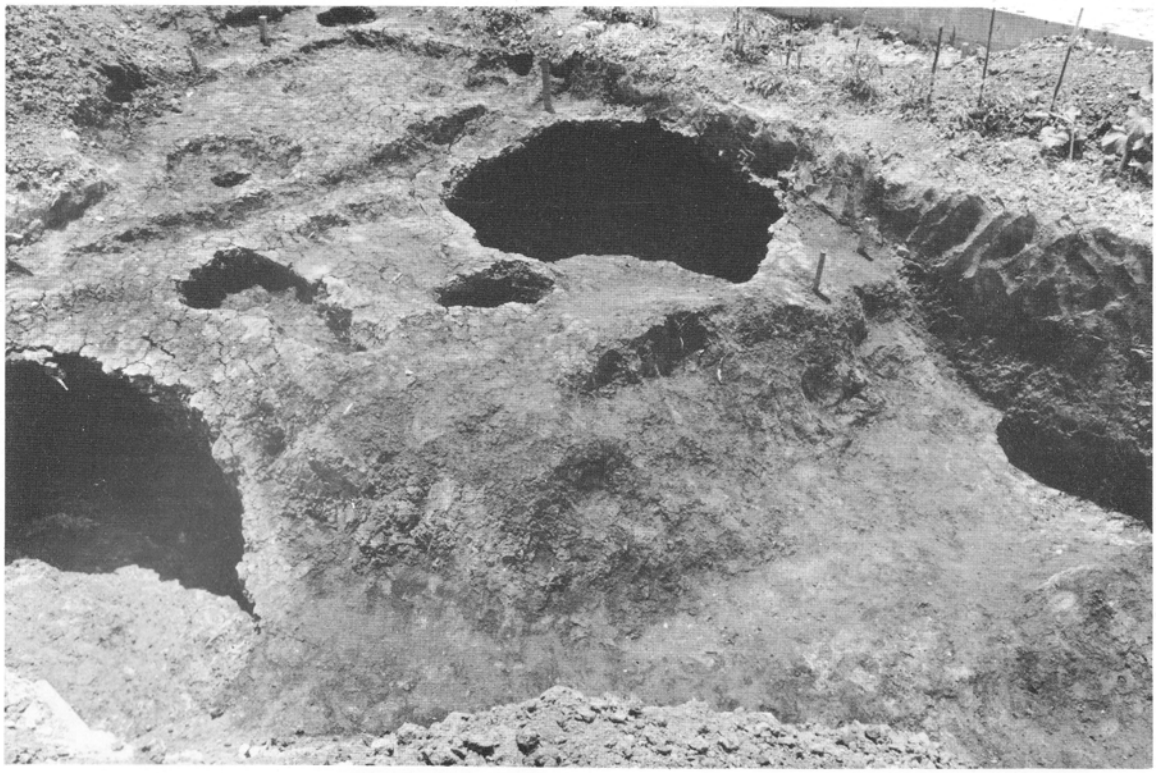
福岡市埋蔵文化財報告書　第31集
板付周辺遺跡調査報告書（2）

1975年3月31日

編集　福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所
福岡市博多区板付2丁目11の1

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷　赤坂印刷株式会社



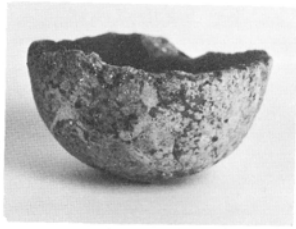
1．F—9a地点西側竪穴群（西から）

2．D・E—9地点発掘地全景（西から）

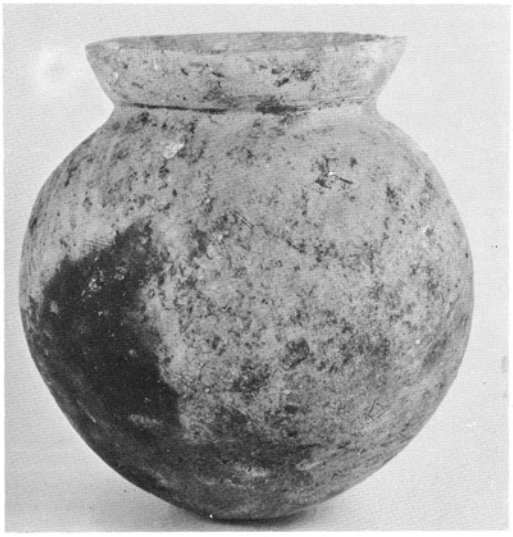
1

2

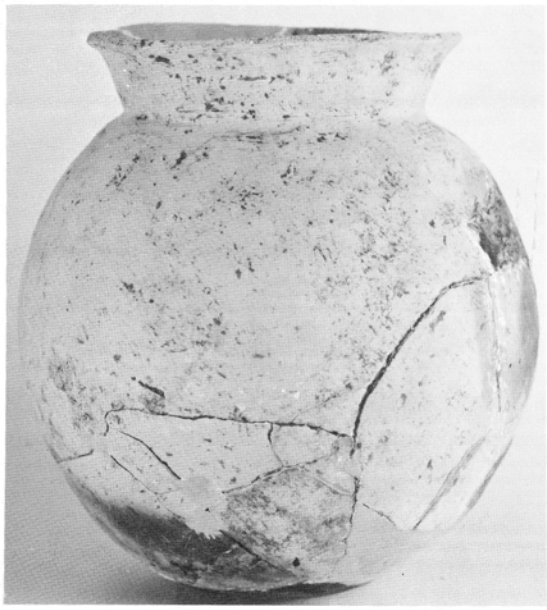
3



4



5

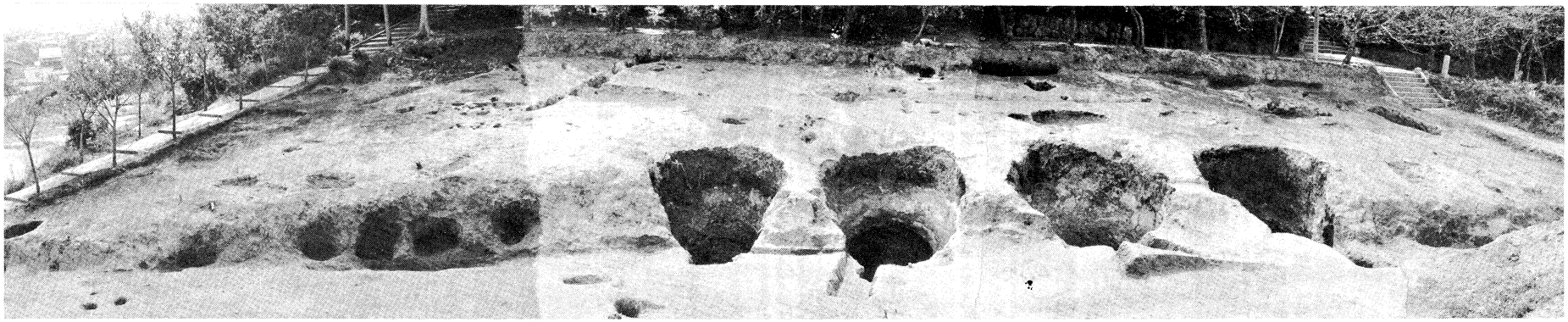


6

F—9a 地点、D・E—9 地点出土土器　1, 2：F—9a 地点第 5 号竪穴出土　3～6：D・E—9 地点第 1 号竪穴出土

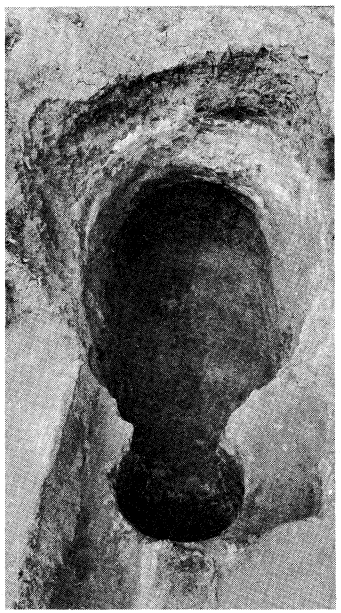
1．諸岡遺跡全景航空写真（北から）

2．諸岡遺跡遠景（東から）



1．諸岡遺跡C区全景（東から）

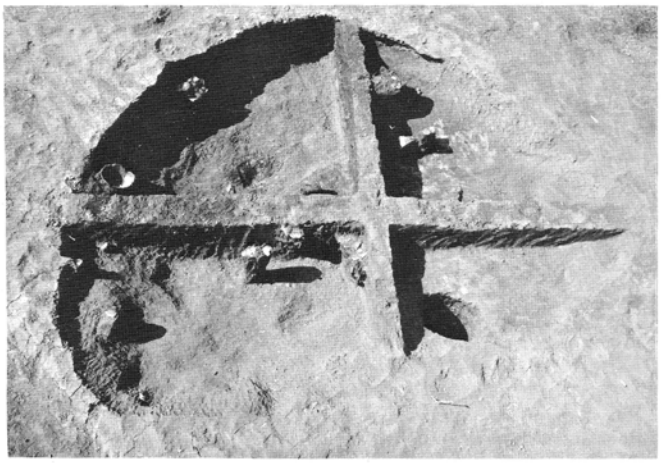
2．第3号・第4号地下式横穴



3．第2号地下式横穴

4．第5号地下式横穴

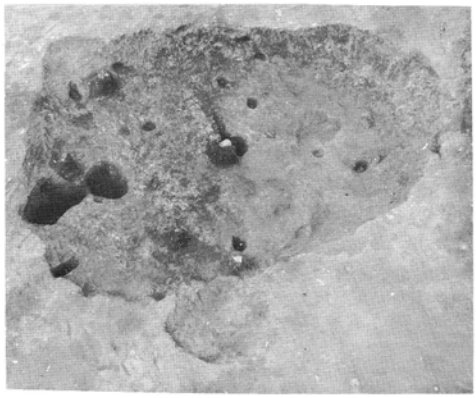
1



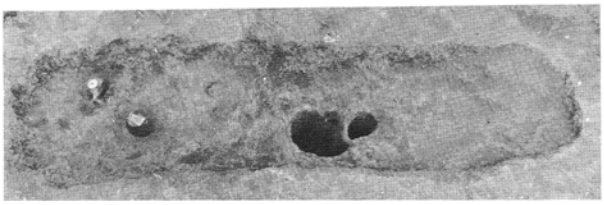
3

4

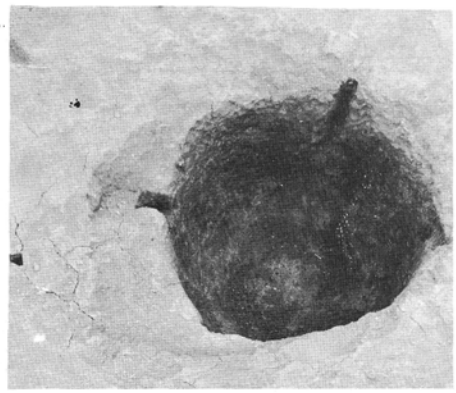
2



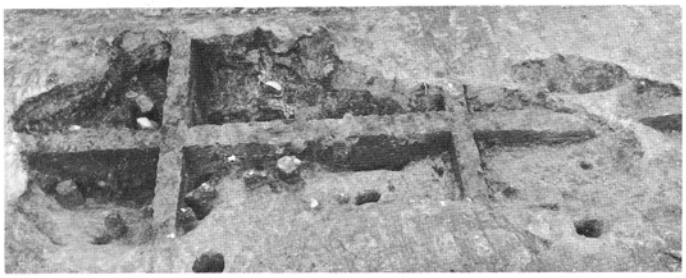
7



5



8

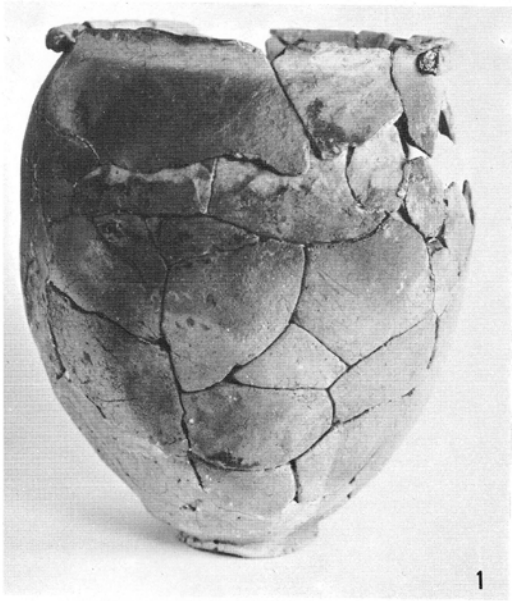


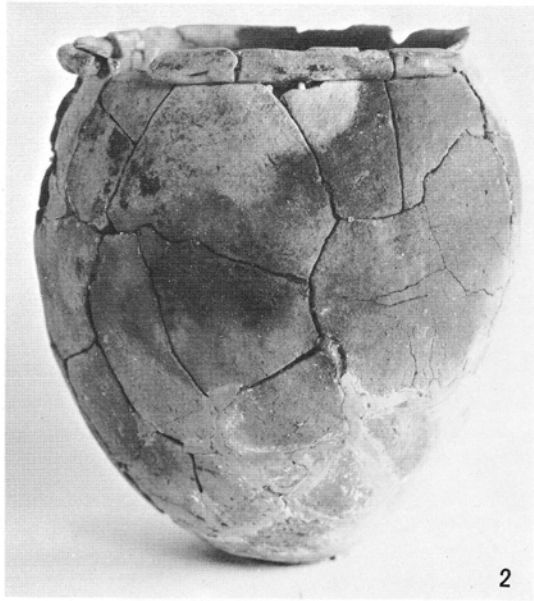
6

諸岡遺跡竪穴　1：6号　2：14号　3：40号　4：17号　6：4号（以上弥生時代）
5：38号　7：23号　8：16号（以上古墳時代～中世）

1．諸岡遺跡B区第10号甕棺墓

2．諸岡遺跡第３号竪穴無文土器出土状態

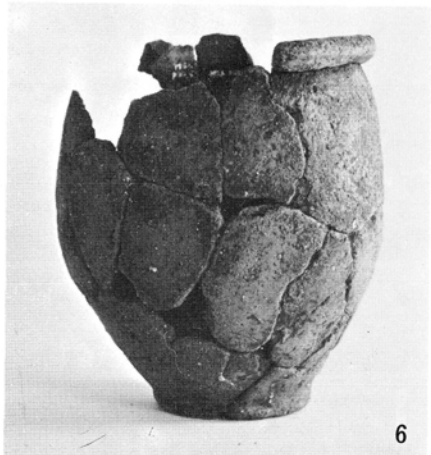

1


2

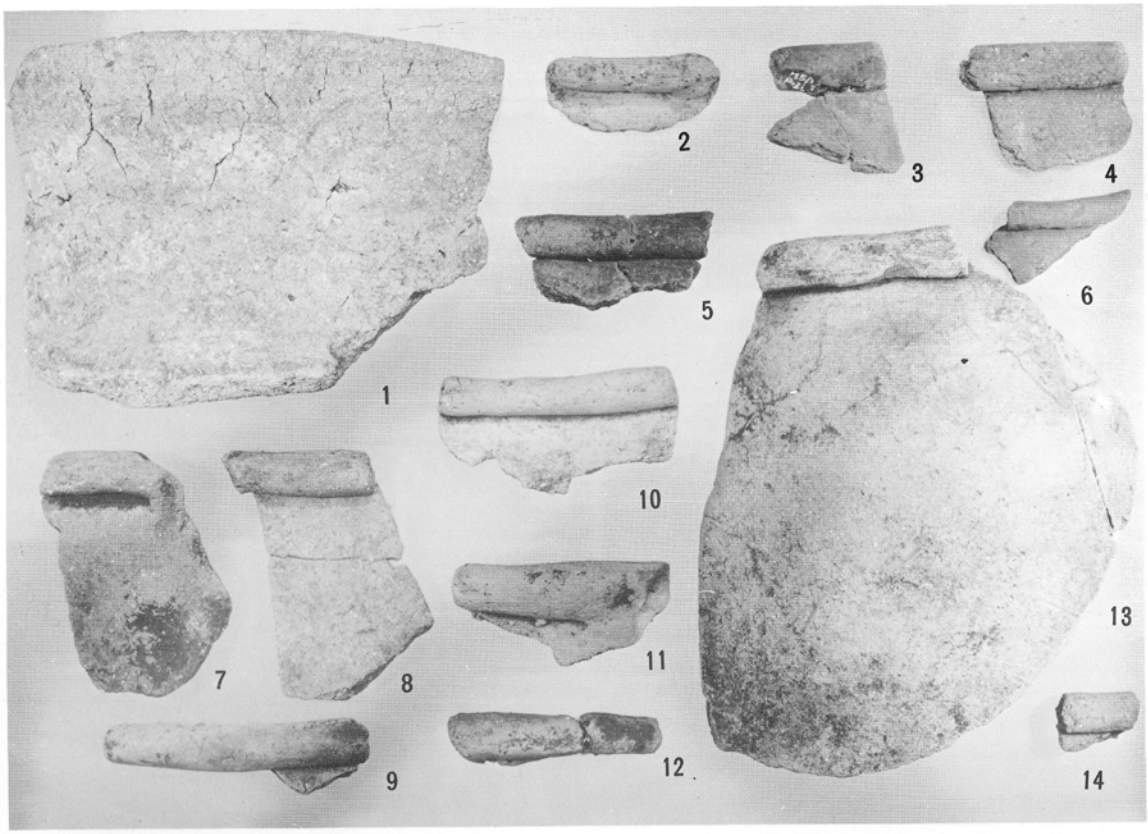
3

4

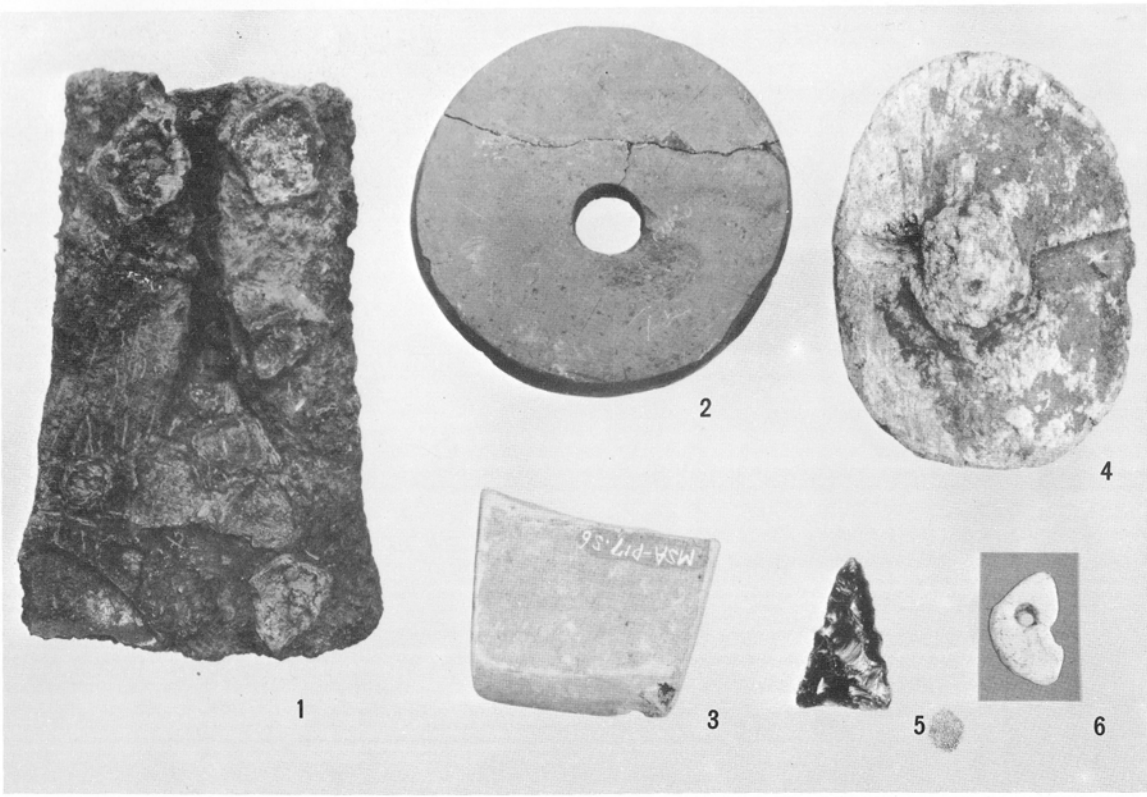
5


6

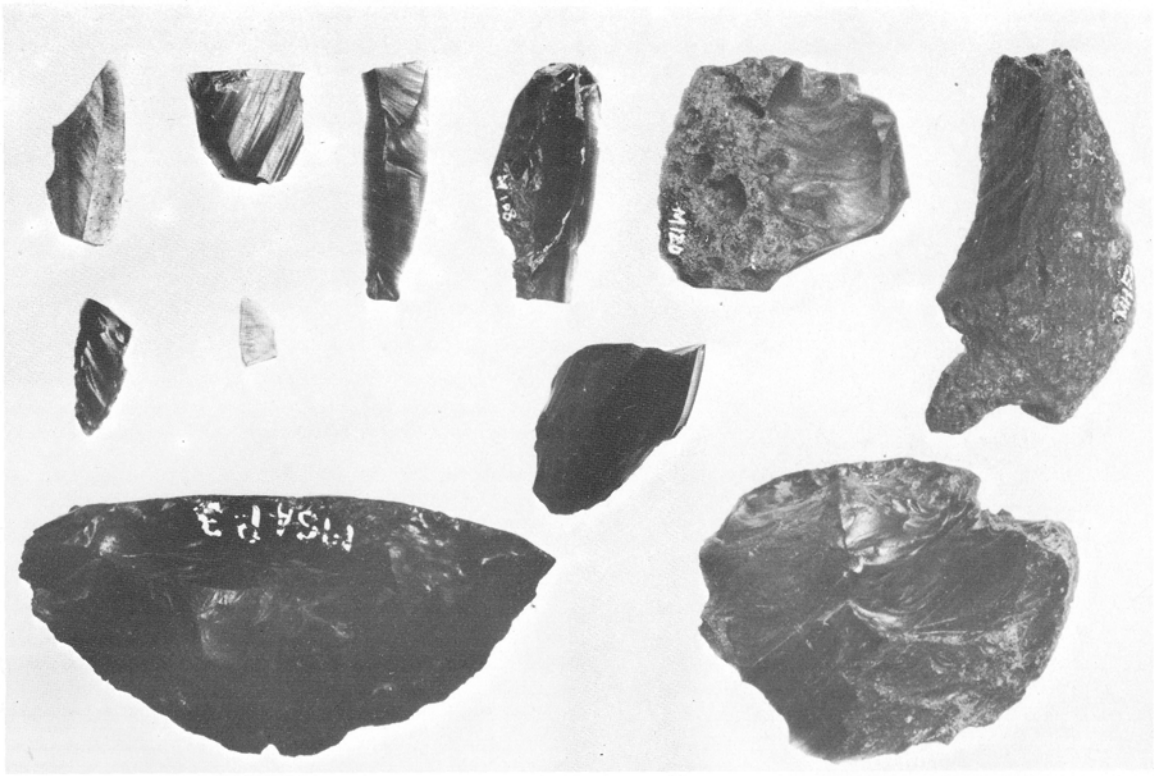
諸岡遺跡出土無文土器　1，2：3号出土(同一土器)　3：17号出土　4：攪乱部出土
5：7a 号出土　6：40号出土

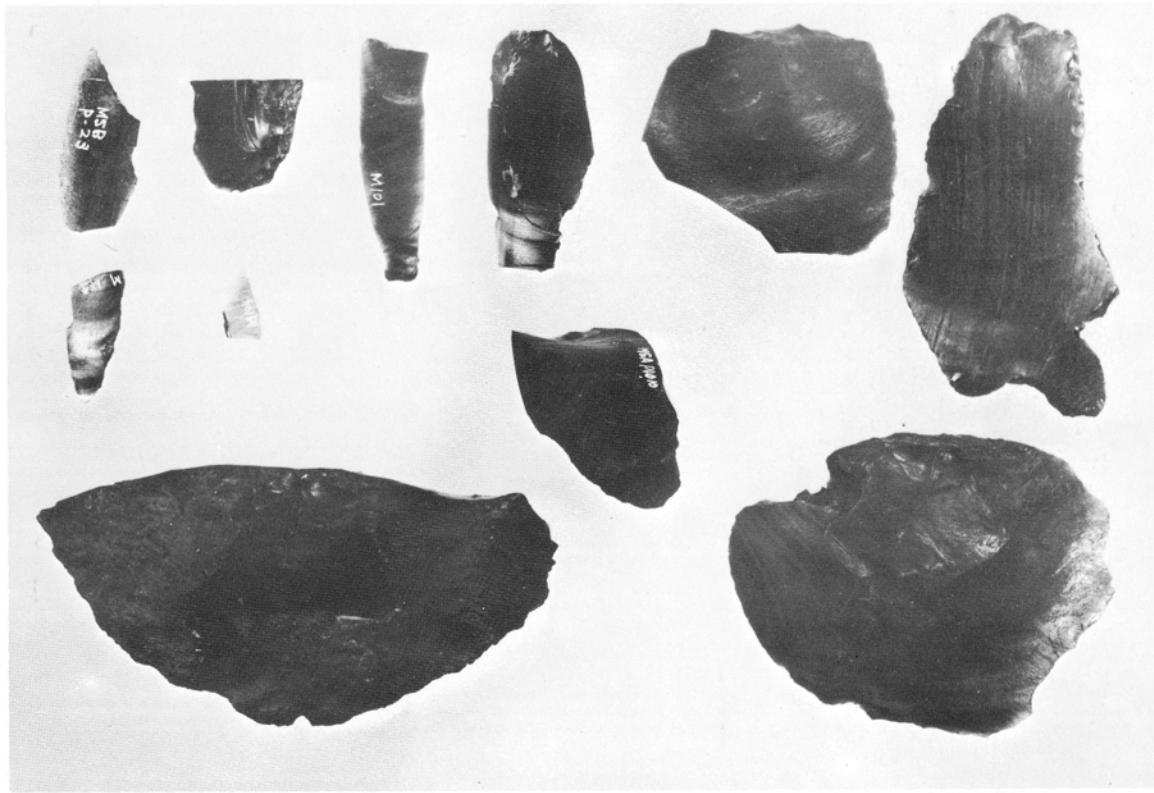


1．諸岡遺跡出土無文土器口縁部片（約½）1，2，4，6，10，11：17号出土、
7，9，12，14：3号出土、　3：21号出土、　5：4号出土、　8：20号出土、13：14号出土



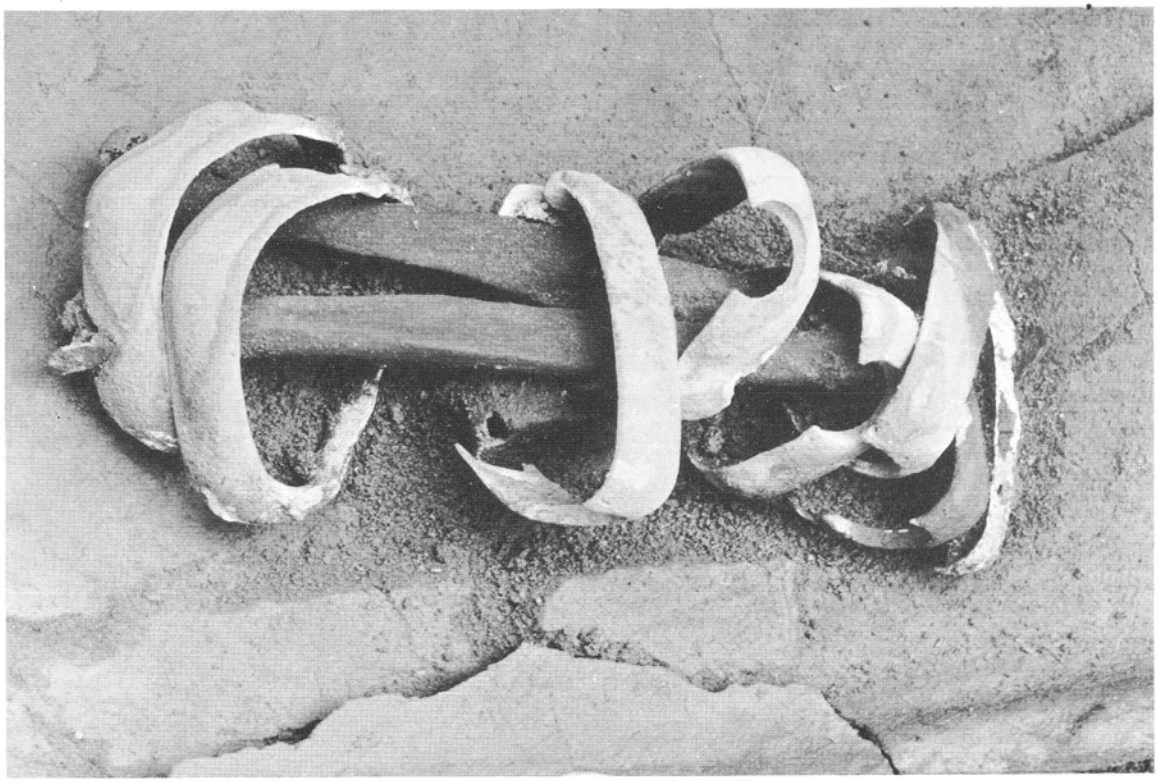
2．諸岡遺跡竪穴出土遺物　1・2：鉄斧と紡錘車（38号出土）、　3：扁平片刃石斧（17号出土）、
4：滑石製模造鏡(住居址？出土)、　5：石鏃(40号出土)、　6：玉(6号出土)





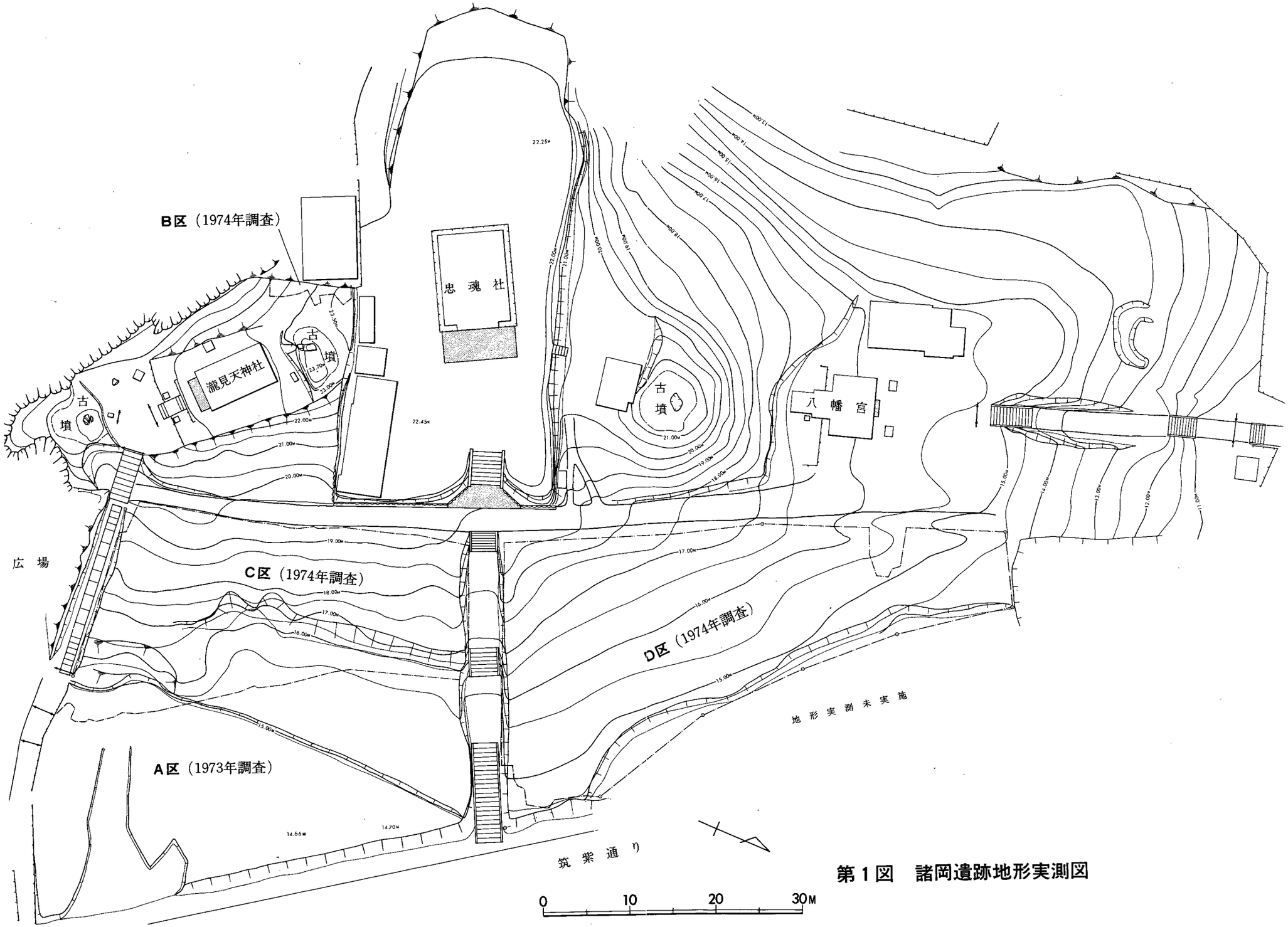
諸岡遺跡出土先土器時代石器(約1/1)

1．諸岡遺跡B区第2号甕棺墓貝輪着装人骨出土状況

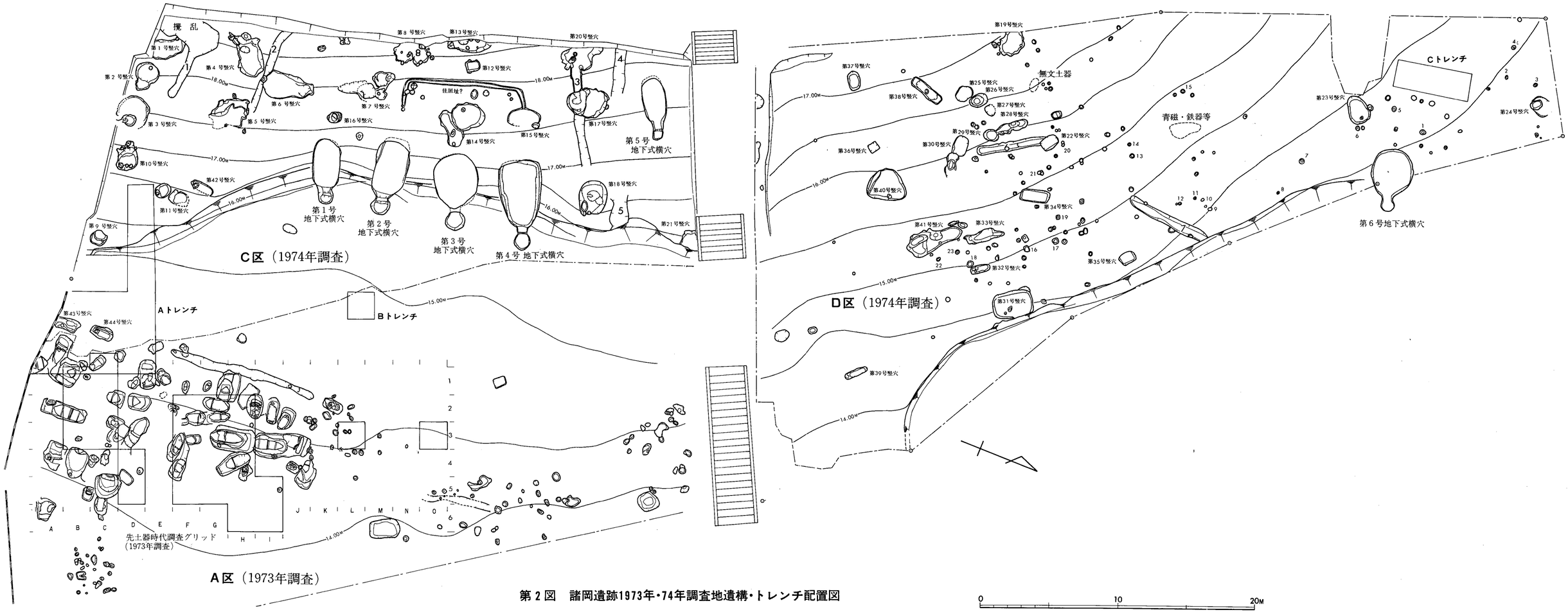


2．貝輪出土状況

階層棚列	桁	段
540	1	6

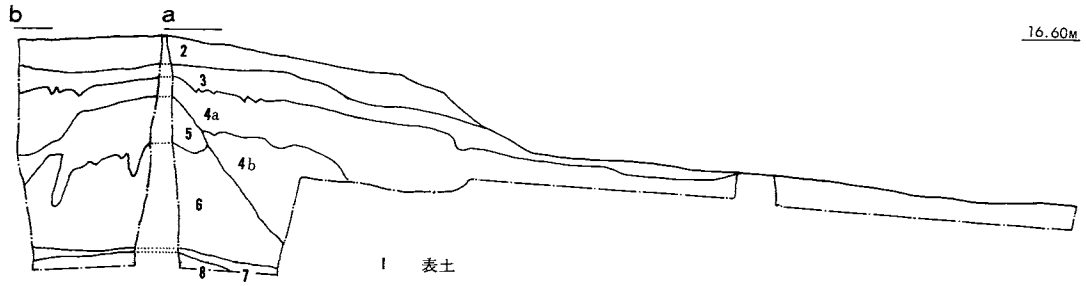


第1図　諸岡遺跡地形実測図



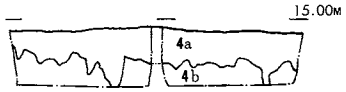
第2図　諸岡遺跡1973年・74年調査地遺構・トレンチ配置図

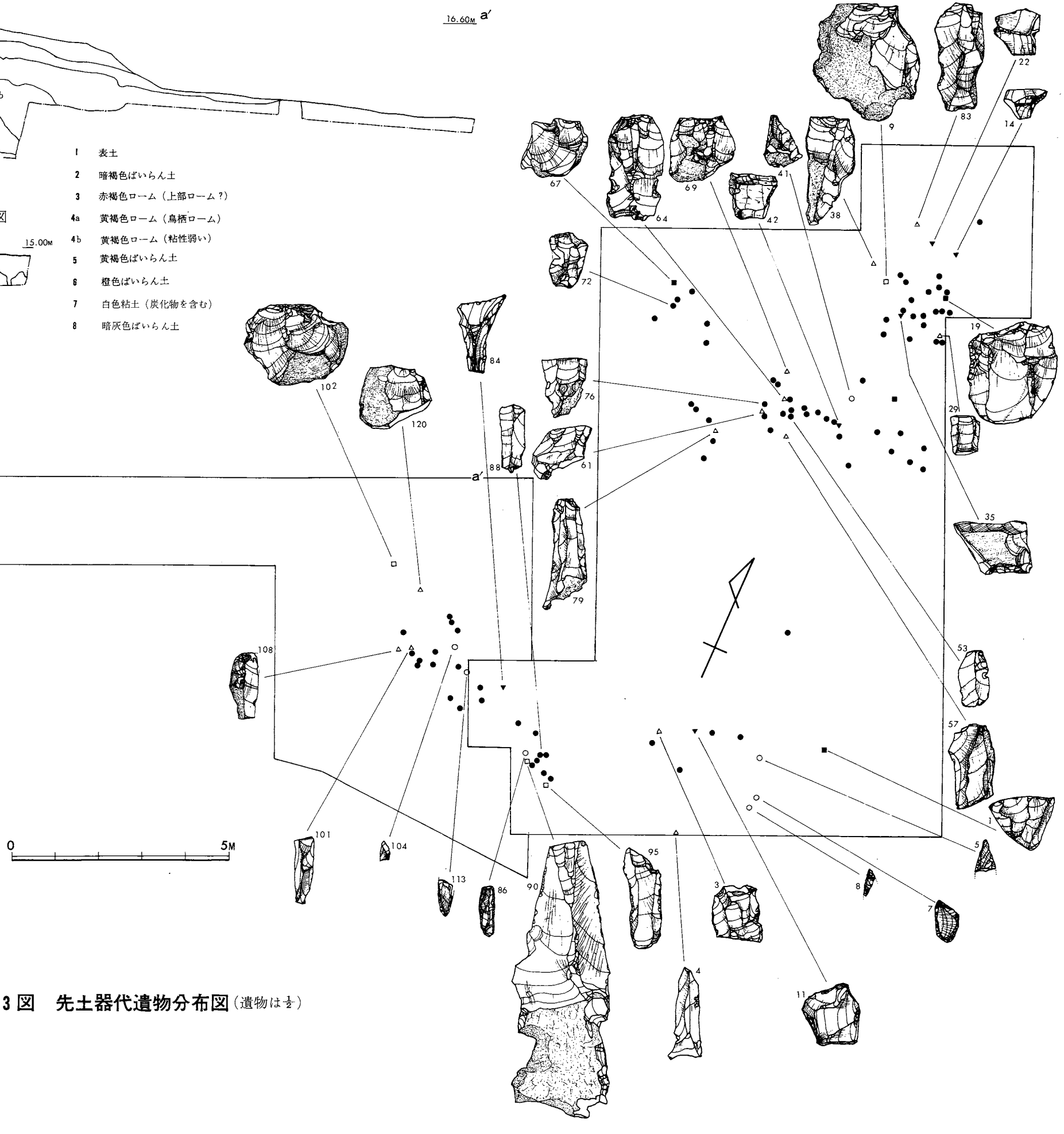
0　10　20M



1 表土
2 暗褐色ばいらん土
3 赤褐色ローム（上部ローム？）
4a 黄褐色ローム（鳥栖ローム）
4b 黄褐色ローム（粘性弱い）
5 黄褐色ばいらん土
6 橙色ばいらん土
7 白色粘土（炭化物を含む）
8 暗灰色ばいらん土

Bトレンチ土層断面図





第 3 図　先土器代遺物分布図（遺物は $\frac{1}{2}$）